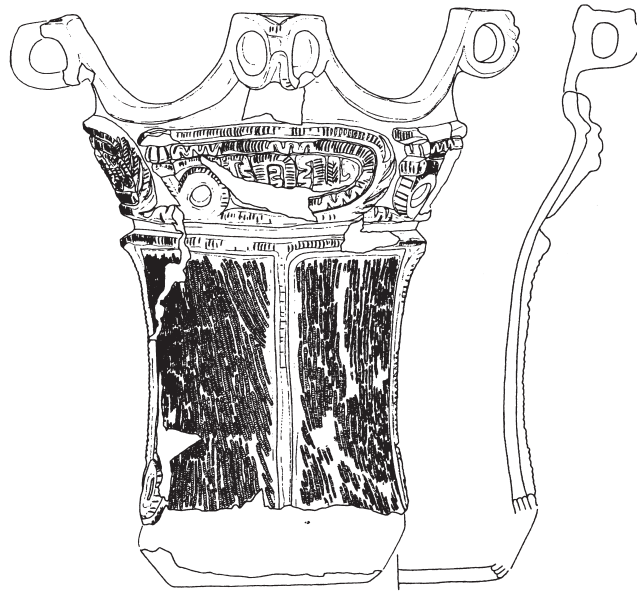


# 酒呑場遺跡 (第1～3次)

SAKENOMIBA SITE

— 酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書 —

(遺物編—本文編)



2005. 3

山梨県教育委員会

# 序

本書は北杜市長坂町に所在する酪農試験場の増・改築に伴う第1次から第3次発掘調査の出土遺物の報告書であります。酒呑場遺跡は、酪農試験場の増・改築に伴い1994年度に第1次調査、1995年度に第2次調査、1996年度に第3次調査を実施し、これらについては遺構編の報告を行なっております。第1次調査では1,500㎡、第2次調査では5,600㎡、第3次調査では3,000㎡を調査し、2001年度に実施し、報告書も刊行した屎尿発酵施設建設に伴う第4次調査の300㎡を含めると、合計10,400㎡を調査いたしました。

酒呑場遺跡が立地する小丘は全体が縄文時代の集落であり、縄文時代前期から中期にわたり集落が若干地点を変えながら営まれている状況が把握されています。第1次調査では縄文前期から後期にかけての住居跡が39軒、土坑などが650基、第2次調査では縄文前期から中期の住居跡124軒、土坑など3,500基、古墳時代前期の住居跡15軒、掘立柱建物跡4棟、近世の溝1条が調査されました。第3次調査では縄文前期から中期の住居跡59軒、土坑など1,700基、古墳時代前期の掘立柱建物跡1棟、中・近世の溝1条を調査しました。第4次調査では、縄文時代前期の住居跡4軒、中期の住居跡3軒を調査しました。これまでに合計で、縄文時代の住居跡229軒、土坑など5,850基、古墳時代前期の住居跡15軒、掘立柱建物跡5棟、中・近世の溝2条となります。これほど大規模な縄文時代を中心とする集落の調査は、本県では釈迦堂遺跡群に匹敵する規模の調査です。

第1次から第3次調査の出土品はコンテナにして2,500箱の膨大な量です。2001年度から2003年度の3カ年間をかけて遺物編発刊にむけての整理作業と編集作業を実施してまいりました。今回報告した資料は完形に近い土器の数だけでも700点にのぼります。このなかには、2000年12月に中華人民共和国の上海博物館で開催された日本文物精華展に出展された、列島の縄文時代を代表するような資料が含まれます。土偶は150点を数え八ヶ岳南麓の中期集落としては最多出土数です。石器や礫についても千点、万点単位の資料を対象に整理作業を進め、このたびようやく報告書の刊行することといたしました。土器や石器についてはその編年的位置や分布論的な分析がなされ成果を上げています。また、黒曜石産地分析、石匙の使用痕分析など自然科学的分析も実施しております。これらの成果を、今後の縄文時代研究におおいに活用いただければ幸いです。

最後に発掘調査から報告書の刊行までの過程で、ご助力いただいた関係機関各位、ならびに発掘調査や整理作業に参加いただいた方々に衷心より御礼申し上げます。

2005年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所 長 渡 辺 誠

# 例 言

- 1 本書は、山梨県北杜市長坂町長坂上条621-2に所在する酪農試験場内の酒呑場（さけのみば）遺跡の発掘調査報告書である。1994年の第1次調査、1995年の第2次調査、1996年の第3次調査の3次にわたる発掘調査報告書の遺物編である。
- 2 本調査は山梨県農務部の依頼を受けて山梨県教育委員会が実施した、酪農試験場の増・改築に伴う発掘調査である。
- 3 発掘調査および整理作業、報告書刊行は、山梨県埋蔵文化財センターが行なった。担当者は以下のとおり。

## 発掘調査

第1次調査	A区	山本 茂樹・野代 幸和
	B区	森原 明廣・宮里 学
第2次調査	C～H区	野代 幸和・村松 佳幸
	C区の一部	山本 茂樹・川手 昌英
第3次調査	I区	保坂 康夫・村松 佳幸

## 遺物編整理作業

2001年度	保坂 和博
2002年度	保坂 康夫・正木 季洋
2003年度	保坂 康夫・竹本健太郎

- 4 遺物編の整理作業員は以下のとおり。

2001年度	梶原 初美、佐野 眞雪、平川 涼子
2002年度	川住たまみ、平順 孝

- 5 本報告書作成のための主な作業分担は下記のとおりである。

土器実測・拓本・トレース	梶原 初美、川住たまみ、佐野 眞雪、平順 孝、平川 涼子
石器実測・トレース	保坂 康夫（I区）、坂本 美夫（石皿実測）
図版作成	笠原みゆき、野代 恵子、田口 明子
表作成	小林 広和（土器観察表）、保坂 康夫（石器他観察表）
データ入力	竹本健太郎

- 6 下記の業務は委託して実施した。

胎土分析；帝京大学山梨文化財研究所、A～H区石器実測および観察表・石器使用痕分析・黒曜石産地分析；株式会社アルカ、炭化材・炭化種実・土偶付着物；パリノ・サーヴェイ株式会社、炭化種実・土偶付着物；株式会社パレオ・ラボ、土器実測用写真；小川忠博

- 7 本書の執筆は、第1・2章、第3章第2・3-1-1・3-2・4節、第4・7章を保坂康夫、第3章第1節第1・2項を正木季洋、第3章第1節第3項を小林広和、第3章第1節第4項を野代幸和、第3章第3節第1項2・3を網倉邦夫、第5章を保坂和博が執筆した。また、第6章第1節の土器胎土分析は帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏、第2節の石匙の使用痕分析は株式会社アルカの高橋哲氏、第3節の黒曜石産地分析は国立沼津高等専門学校望月明彦氏、第6節の炭化種実同定は株式会社パレオ・ラボの新山雅広氏に執筆いただいた。
- 8 本書は本文編と図版編とに分けて提示した。図版編は各区の遺物の実測図（第1～236図）とI区の全体遺物分布図（第237～246図）、I区の遺構写真（写真図版1～35）、各区の土器写真（写真図版36～62）を示し、2004年度に刊行した。本文編では各区出土遺物の記載と図版編で示した実測図の観察表の提示、I区の遺物分布状況の記載を行って、2005年度に刊行した。いずれも編集は保坂が行った。
- 9 本書にかかわる出土品および図面、写真は、山梨県埋蔵文化財センターが保管している。

# 目 次

序		第3節 I区全体の遺物分布……………	66
例言		第4節 各住居跡内の遺物分布……………	67
目次		1. 上層の区分と特徴 2. 下層の区分と特徴	
挿図目次		3. 中層の区分と特徴 4. 住居跡覆土層の形成過程	
第1章 発掘調査・整理作業の経過と方法		第5章 弥生・古墳時代の遺物……………	79
第1節 発掘調査・整理作業の経過……………	1	第6章 自然科学分析……………	80
第2節 遺物整理作業の方法と経過……………	1	第1節 酒呑場遺跡出土の異系統縄文土器の胎土分析 河西 学…	80
第2章 遺跡の概要と周辺の環境		第2節 酒呑場遺跡の使用痕分析 高橋 哲…	87
第1節 遺跡の概要……………	3	第3節 山梨県長坂町酒呑場遺跡出土黒曜石産地推定結果 望月 明彦…	96
第2節 遺跡の立地と土層……………	7	第4節 酒呑場遺跡における自然科学分析報告 パリノ・サーヴェイ…	101
第3節 周辺の遺跡……………	7	第5節 酒呑場遺跡出土土偶の付着物について パレオ・ラボ…	110
第3章 縄文時代の遺物		第6節 酒呑場遺跡出土の炭化種実 パレオ・ラボ…	112
第1節 土器		第7節 彩色土器塗料の蛍光X線分析と土鈴・土偶のX線写真……………	116
第1項 前期の土器……………	8	第7章 まとめ……………	117
第2項 中期初頭の土器……………	12		
第3項 中期中葉から後葉の土器……………	18		
第4項 外来系土器群の様相……………	31		
第2節 土製品			
第1項 土偶……………	40		
第2項 小形土器……………	42		
第3項 台形土器……………	42		
第4項 杓子形土製品……………	42		
第5項 その他の土製品……………	42		
第3節 石器			
第1項 A・B・C・D区の石器……………	43		
1. 石器組成 2. 石匙 3. 磨製石斧			
第2項 I区の石器……………	46		
1. 石鏃 2. 石錐 3. 石匙 4. 打製石斧			
5. 横刃形石器 6. 磨製石斧 7. 石鉢			
8. 礫器 9. タタキ石 10. クボミ石 11. スリ石			
12. 石皿・礫石皿・台石・石棒 13. 黒曜石製楔形石器・二次加工剥片・微細剥離剥片・剥片・原石			
14. 大形剥片・搬入石材・方形分割礫・礫			
第4節 石製品……………	64		
第4章 I区の遺物分布と住居跡帰属時期			
第1節 住居跡帰属時期の判定について……………	65		
第2節 遺物分布図の作成方法……………	66		

## 挿 図 目 次

第1図	調査地点の位置図	2	第26図	土器のクラスター分析樹形図	83
第2図	酪農試験場旧建物配置と調査区の配置図	3	第27図	縦形石匙の使用痕	91
第3図	酒呑場遺跡住居跡分布図	4	第28図	横形石匙の使用痕	92
第4図	遺跡の位置と周辺の遺跡	6	第29図	縦形石匙の使用痕	93
第5図	中期中葉 I-1～Ⅲ-3段階	28	第30図	横形石匙の使用痕	94
第6図	中期中葉 Ⅲ-4～Ⅲ-5段階	29	第31図	横形石匙の使用痕	95
第7図	中期中葉 Ⅲ-5～Ⅸ段階	30	第32図	黒曜石の産地判別1	99
第8図	包含層等出土外来系並びに希少土器破片資料(1)	32	第33図	黒曜石の産地判別2	99
第9図	包含層等出土外来系並びに希少土器破片資料(2)	33	第34図	東日本の黒曜石産地	100
第10図	異系統土器群と在地系土器群伴出状況	34	第35図	C区3住a土偶1の白色物質・胎土の X線回析チャートおよび検出鉱物	107
第11図	異系統土器との折衷タイプ	35	第36図	C区97住P-267の白色物質・胎土の X線回析チャートおよび検出鉱物	107
第12図	平出第三類A土器共伴関係図(猪沢期)	37	第37図	炭化材(1)	108
第13図	平出第三類A土器共伴関係図 (新道～藤内期)	38	第38図	炭化材(2)・種実遺体	109
第14図	I区の石製品(2)	64	第39図	試料No. 1 (白色付着物質) の蛍光X線 スペクトル図	111
第15図	I区3住遺物分布図	71	第40図	試料No. 2 (白色粘土) の蛍光X線 スペクトル図	111
第16図	I区5・12住遺物分布図(1)	72	第41図	試料No. 3 (土偶表面) の蛍光X線 スペクトル図	111
第17図	I区5・12住遺物分布図(2)および 21住遺物分布図	73	第42図	出土した炭化種実	115
第18図	I区16住遺物分布図	74	第43図	出土した炭化種実	115
第19図	I区43・44住遺物分布図	75	第44図	彩色土器塗料の蛍光X線分析スペクトル図	116
第20図	I区49住遺物分布図	76	第45図	土鈴・土偶のレントゲン写真	116
第21図	I区25・32・38住遺物分布図	77	第46図	付表計測位置と図版編実測図凡例	119
第22図	I区11・35住遺物分布図	78			
第23図	分析試料実測図	81			
第24図	土器胎土の岩石鉱物組成	82			
第25図	岩石組成折れ線グラフ	82			

## 表 目 次

第1表	酒呑場遺跡各調査区住居跡番号と帰属時期で	5	第7表	石匙形態別出土数	50
第2表	A～D区の各住居跡出土石器数	43	第8表	石匙石材別出土数	50
第3表	石鏃住居跡別出土数(時期別)	46	第9表	打製石斧住居跡別出土数(時期別)	52
第4表	石鏃長幅比	47	第10表	打製石斧住居内時期別出土数	53
第5表	石鏃住居跡別出土数(中層)	47	第11表	打製石斧住居跡中層出土最大長	53
第6表	石鏃住居跡別出土数(全体)	47	第12表	横刃形石器住居跡内時期別出土数	53

第13表	横刃形石器住居跡別出土数（時期別）	…	54	第27表	礫住居跡別出土数（時期別）	…	63
第14表	磨製打製石斧住居跡別出土数（時期別）	…	54	第28表	礫住居跡中層時期別出土数（完全住居のみ）	…	63
第15表	大形礫器住居跡別出土数（時期別）	…	55	第29表	肉眼観察による土器の胎土分類	…	80
第16表	小形礫器住居跡別出土数（時期別）	…	55	第30表	試料表	…	81
第17表	小形礫器住居跡内時期別出土数	…	56	第31表	土器胎土中の岩石鉱物	…	82
第18表	タタキ石住居跡別出土数（時期別）	…	56	第32表	折れ線グラフによる土器分類	…	83
第19表	タタキ石住居内時期別出土数	…	57	第33表	分析資料属性表	…	90
第20表	クボミ石住居跡別出土数（時期別）	…	57	第34表	酒呑場遺跡出土黒曜石産地推定結果	…	97
第21表	クボミ石住居跡内時期別出土数	…	58	第35表	判別図に用いた産地原石判別群	…	100
第22表	スリ石住居跡別出土数（時期別）	…	59	第36表	酒呑場遺跡出土黒曜石産地推定結果	…	100
第23表	石皿・礫石皿・石棒住居跡別出土数（時期別）	…	60	第37表	炭化材の樹種同定結果	…	102
第24表	黒曜石製楔形石器・二次加工剥片（RF）・微細剥離剥片（MF）・剥片住居跡別出土数（時期別）	…	61	第38表	A・C・D・E区種実遺体の同定結果	…	103
第25表	黒曜石住居内全層時期別出土数	…	61	第39表	I区種実遺体の同定結果	…	104
第26表	大形剥片・搬入石材・方形分割礫住居跡別出土数（時期別）	…	62	第40表	試料の化学組成	…	111
				第41表	出土炭化種実一覧	…	113

## 付表 図版編掲載遺物観察表

土器	A・C・D区の石製品	…	142
A区	C区の石皿	…	142
B区	C区の石棒	…	142
C区	I区の石鏃	…	143
F区	I区の石錐	…	146
I区	I区の石匙	…	147
台形土器	I区の打製石斧	…	149
小形土器	I区の横刃形石器	…	149
土偶	I区その他の石器	…	149
装飾突起・顔面把手	I区の磨製石斧	…	149
土鈴	I区の石鉢	…	149
耳栓	I区の礫器	…	150
杓子形土製品	I区のタタキ石	…	150
焼成粘土塊	I区のクボミ石	…	151
その他の土製品	I区のスリ石	…	151
土製円盤	I区の石皿・台石・石棒	…	152
A～E区の石器	石製装飾品	…	152
C・E区の石匙	本文編掲載石製装飾品	…	152
B・C・D・F区の磨製石斧	弥生・古墳時代出土土器	…	153

# 第1章 発掘調査・整理作業の経過と方法

## 第1節 発掘調査・整理作業の経過

酒呑場遺跡は北杜市長坂町長坂上条の酪農試験場内にある。酪農試験場は、戦後まもなくの昭和25年に建設され、その当時の木造建築が今日まで使用されてきたが、老朽化が激しいため、国庫補助を受けて改築、増築を行なった。この工事に伴い第1～3次におよぶ発掘調査を実施した。第1次調査（A・B区）が1994年9月から1995年1月にかけて、第2次調査（C～H区）が1995年4月から12月にかけて、第3次調査（I区）が1996年4月から11月にかけて発掘調査を実施した。

第1～3次調査については遺構編の報告を行った（山梨県教育委員会・山梨県農務部1997『酒呑場遺跡（第1・2次）－酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書（遺構編）－』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第135集、山梨県教育委員会・山梨県農務部1997『酒呑場遺跡（第3次）－酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書（遺構編－前編）－』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第136集、山梨県教育委員会・山梨県農務部1998『酒呑場遺跡（第3次）－酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書（遺構編－後編）－』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第169集）。

さらに、2001年度に尿尿発酵施設建設に伴う第4次調査（J区）を実施した。第4次調査については報告書を刊行している（山梨県教育委員会・山梨県農務部2003『酒呑場遺跡（第4次）－酪農試験場尿尿発酵施設建設に伴う発掘調査報告書－』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第209集）。

また、長坂町教育委員会は公共下水道事業に伴い1995年7月から10月にかけてG区を発掘調査している（長坂町教育委員会1996『酒呑場遺跡G区』長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集）。

今回の報告書は、山梨県埋蔵文化財センターが実施した第1～3次調査の遺物編である。

遺物の整理作業は2001年度に第1・2次調査分、2002年度に第1・2次調査分の一部と第3次調査分の遺物図化等の作業を行い、2003年度に遺物編の図版編を刊行し、2004年度に担当者による報告書執筆と編集作業を実施し、本編を刊行した。

## 第2節 遺物整理作業の方法と経過

酒呑場遺跡の第1～3次調査（A～I区）で、コンテナにして2,500箱の膨大な遺物が出土している。第1・2次調査では平板と微細図を中心に遺物の取り上げ作業を実施し、住居跡や土坑、配石などの遺構単位での分布図の作成を行った。石器については現地で分別し、礫は取り上げなかった。第3次調査（I区）では、遺構図については平板と微細図を中心とし、遺物の取り上げについては、手のひらサイズ以上の遺物を光波測距儀とコンピュータによるトータルステーションで測点して位置データを記録しており、遺構外の遺物についても遺物分布をある程度検討できる。グリッド単位での取り上げも、グリッドを4分割した単位でまとめ、極力10cm単位のレベル別で一括している。グリッド単位で一括して取り上げた遺物については、小礫も含め、すべての出土遺物を持ち帰り水洗したが、住居跡に関連するグリッドを除いて分別、集計等を行っておらず、グリッド出土の石器・礫について未整理の状況にある。したがって、I区についてはトータルステーションで取り上げた遺物を中心とした記載となる。

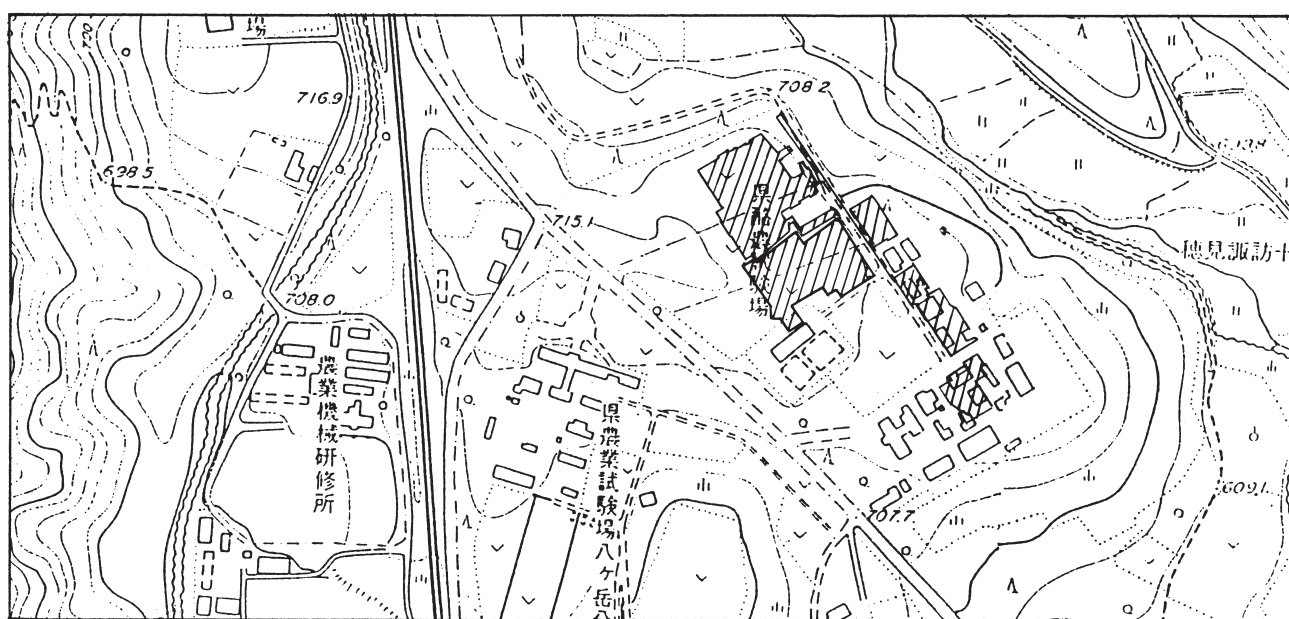
こうした、遺物取り上げ方法や整理法の違いから、調査区によって確認した遺物の種類や量に違いが生じている。A～H区では、石器の内、小形礫器やスリ石・石皿等の一部、搬入石材がほとんど取り上げられていない。I区では、グリッド出土の土器片の検討が不十分なため土製円盤・焼成粘土塊等の把握が徹底していない。

土器の整理作業については、水洗、注記後、遺構単位での接合作業を実施し、全体像が把握できる個体について写

真実測を行った。小川忠博氏に委託して実測用写真を撮影し、1/2の焼き付け写真を鉛筆トレースし原図とした。大形土器片については一部を拓本と断面実測を行ったが、大形破片の大半と全体像が把握できるものでも縄文のみの文様や無文のものなど拓本・実測を行わなかったものが相当量ある。土偶や小形土器などの小形品についてはモニターカメラを用いた実測機による手実測を行った。グリッドも含め土偶や小形土製品については綿密な分別作業を行っており、ほぼ全体を実測図化して報告書に提示している。

石器については、A～H区では遺構単位で分別、集計作業を行った（第2表）。実測図化については、黒曜石・チャート製石器について1,563点を抽出し、(株)アルカに委託して特徴的な石器114点を分類・観察・実測した。この際、石鏃は観察・実測を行わなかった。また、大形石器の内、石匙と磨製石斧については全点を観察し、分類、一部実測図化を行っている。石皿、石棒についても一部を実測図化している。I区については、黒曜石・チャート製遺物について、グリッド一括遺物も含め全点を観察し、剥片も含め住居跡覆土中出土の実数を集計した。住居跡出土遺物については実数を器種ごとに示した。大形石器も含め、全体を観察し分類して、代表的な遺物を実測図化して提示した。なお、石鏃と石匙については実測図化しなかった資料も外形のみを示し、形態組成の全体像が把握できるようにした。

実測図を提示した遺物については注記番号や帰属遺構、基本属性などを観察表として提示した。基本属性の計測法については遺物の種類によって異なるため、それぞれ図示した（第46図）。観察表の「帰属時期」とは出土住居跡の時期である。その判定法については第4章第1項に示した。「出土層」とはI区のみを観察項目で、出土レベルから判断した上層、中層の別を示した。中層出土のものは覆土層中出土のものの中でも出土住居跡の帰属時期所産の遺物である可能性がより高いものである。下層出土のものはないが、住居跡内ピット出土や床面上出土、壁に立て掛けられたものなども極少数存在する。



第1図 調査地点の位置図（1/5,000、斜線が報告調査区）



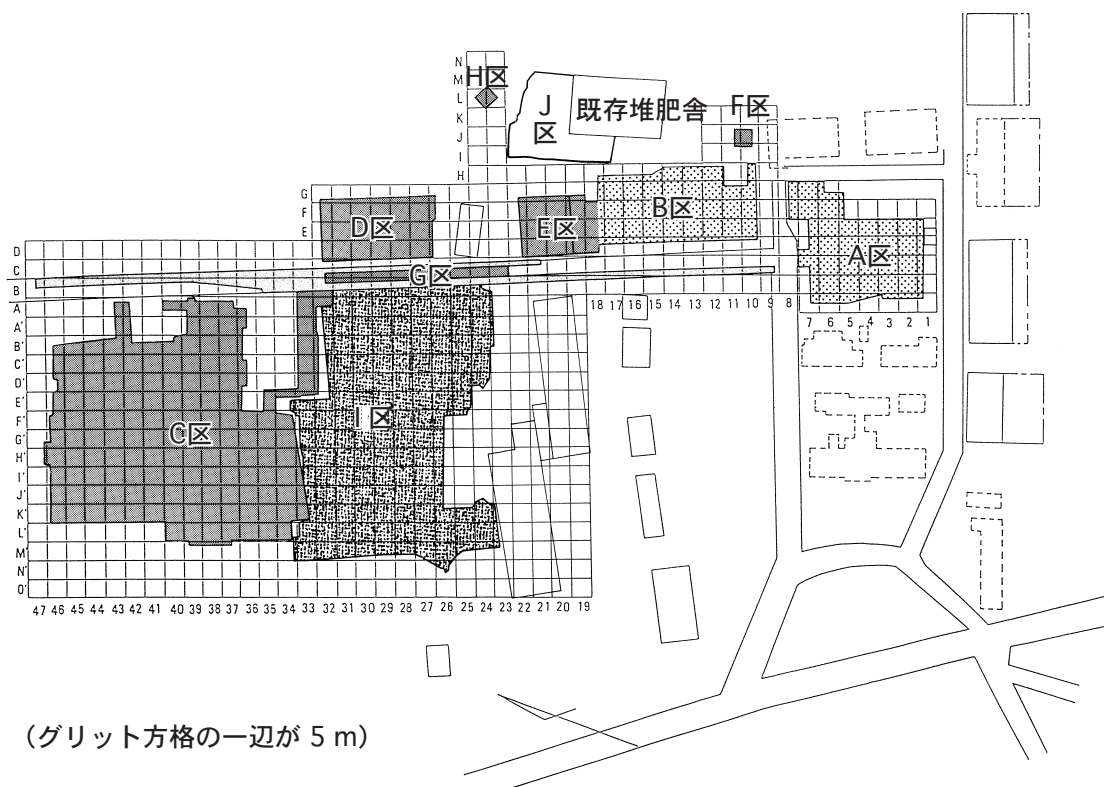
## 第2章 遺跡の概要と周辺環境

### 第1節 遺跡の概要

北杜市長坂町長坂上条にある酒呑場遺跡は、埋蔵文化財センターによりこれまでに4次にわたり10,400㎡が調査されている。第1次調査では1,500㎡、第2次調査では5,600㎡、第3次調査では3,000㎡、第4次調査で300㎡である。また、下水道管理設に伴い長坂町教育委員会により1995年に400㎡が発掘調査されている。

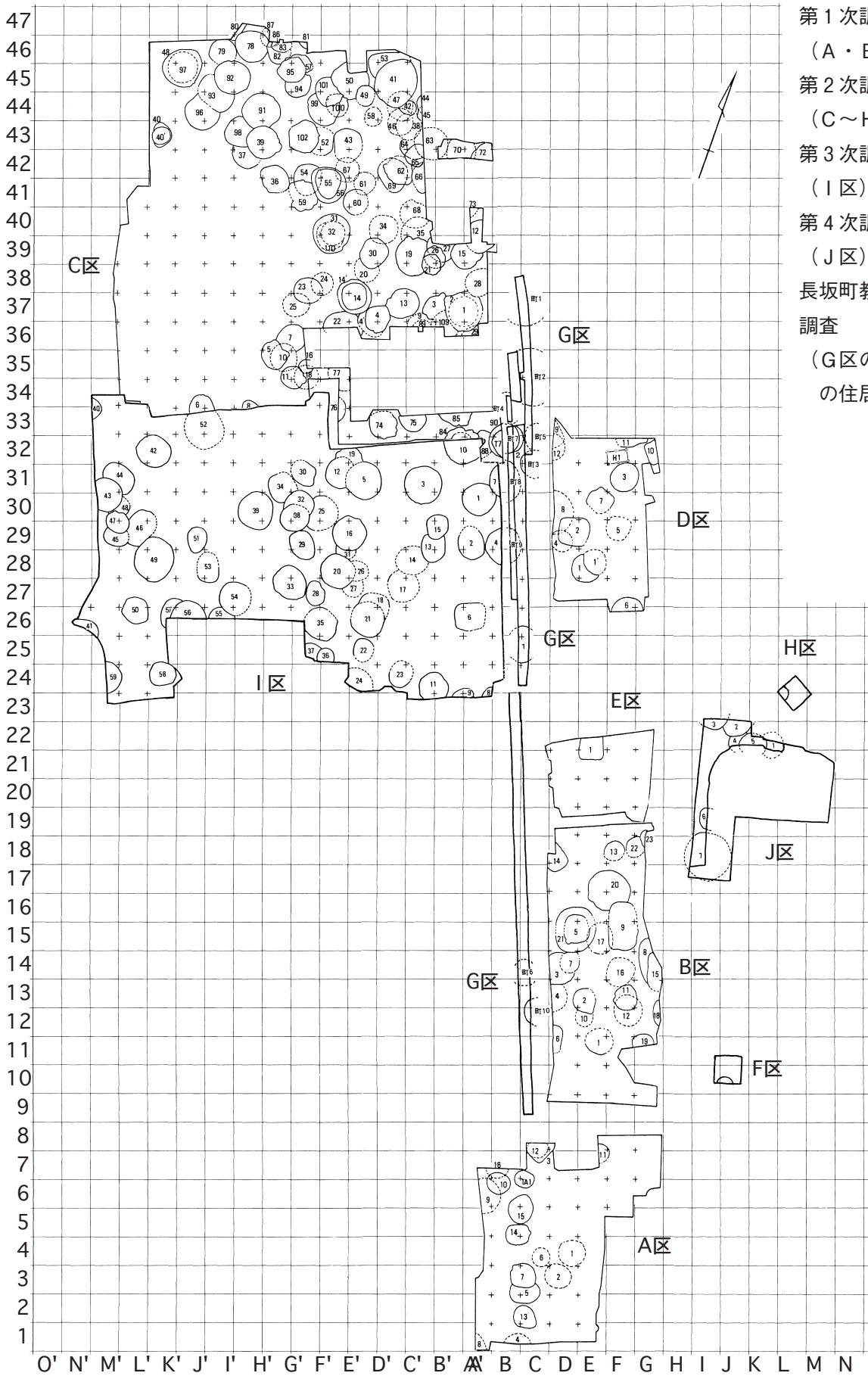
検出された遺構は、第1次調査（A・B区）では縄文前期から後期にかけての住居跡が39軒、土坑などが650基。第2次調査（C～H区）では縄文前期から中期の住居跡124軒、土坑など3,500基、古墳時代前期の住居跡15軒、掘立柱建物跡4棟、近世の溝1条。第3次調査では縄文前期から中期の住居跡59軒、土坑など1,700基、古墳時代前期の掘立柱建物跡1棟、中・近世の溝1条を調査した。第4次調査では縄文時代前期の住居跡4軒、中期の住居跡3軒を調査した。長坂町教育委員会が調査したG区では縄文時代の住居跡10軒を検出している。合計で、縄文時代の住居跡239軒、土坑など5,850基、古墳時代前期の住居跡15軒、掘立柱建物跡5棟、中・近世の溝2条となる。住居跡の分布状況について第3図に、その帰属時期について第1表に示した。帰属時期については、すでに出版されている報告書の記載にしたがった。I区のみ今回再検討しており、遺構編の記載と若干異なっている（第4章第1項参照）。

A～J区の調査の成果からして、最古の住居跡は縄文前期初頭の中越式期である。B区22住とC区88住とである。前期後半の諸磯式期の住居跡がI区東端部・D区からB区にかけてみられることから、酒呑場遺跡の乗る台地の東端部に諸磯式期の集落が占地するものと思われる。遺構編では諸磯a式期が4軒（A区11・12住とB区2・6住）記載されており、第1表もそれに従ってはいるが、土器を見ると主体は諸磯b式初頭段階である。諸磯式期の主体は諸磯b式3段階のものであり、33軒ある。なお、酪農試験場入り口付近での水道管等の埋設に伴う立ち会い調査の折



(グリット方格の一辺が5m)

第2図 酪農試験場旧建物配置と調査区の配置図 (1/2,000)

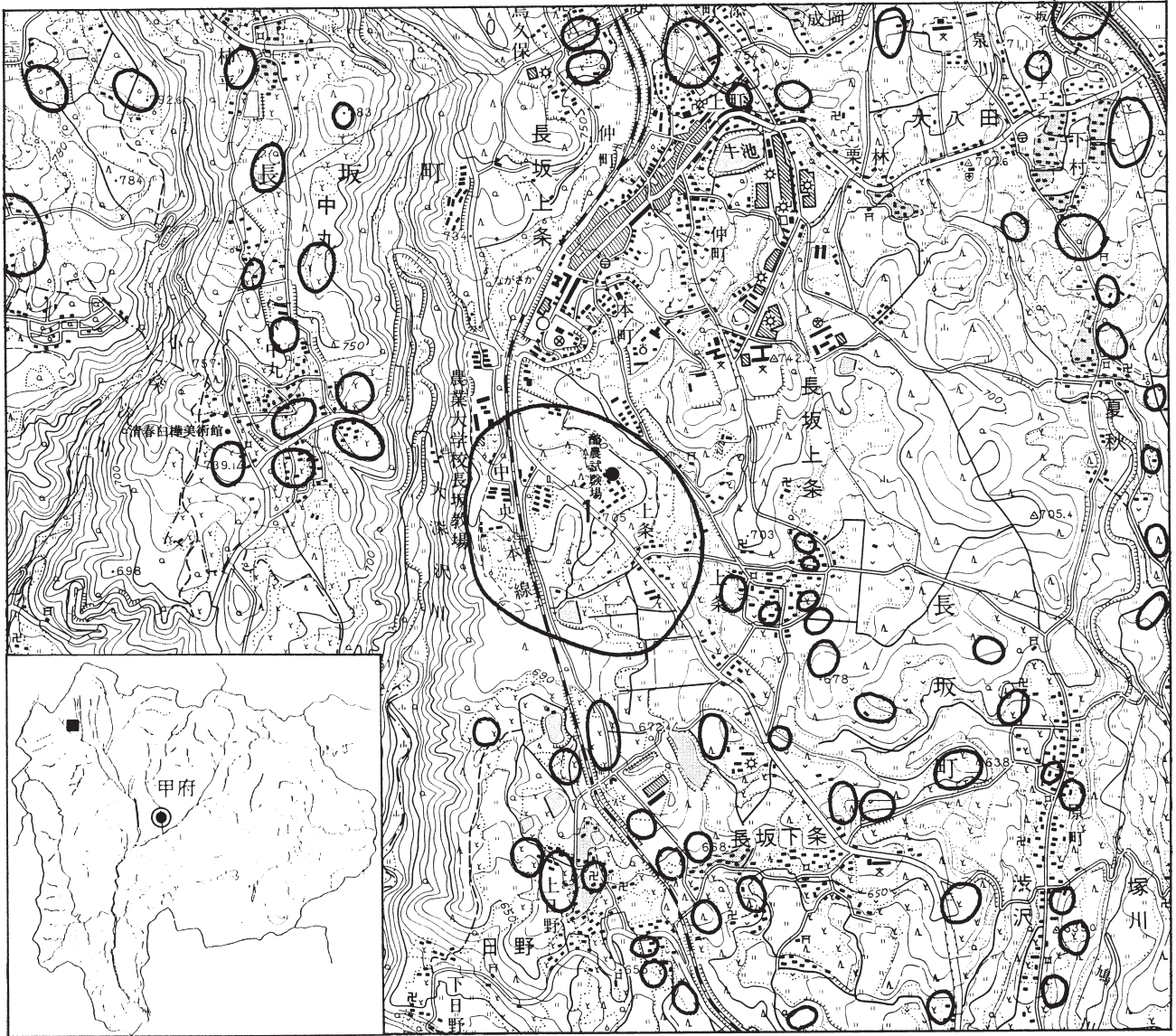


第1次調査  
 (A・B区)  
 第2次調査  
 (C～H区)  
 第3次調査  
 (I区)  
 第4次調査  
 (J区)  
 長坂町教育委員会  
 調査  
 (G区の町ナンバー  
 の住居跡)

第3図 酒呑場遺跡住居跡分布図 (1/1,000)

第1表 酒呑場遺跡各調査区住居跡番号と帰属時期

調査区	住居番号	時期	調査区	住居番号	時期	調査区	住居番号	時期	調査区	住居番号	時期
A	1	曾利Ⅲ	C	24	五領ヶ台Ⅱ	C	82	狛沢	I	4	藤内
A	2	諸磯b	C	25	中期	C	83	藤内Ⅱ	I	5	藤内
A	3	称名寺	C	26	五領ヶ台Ⅱ	C	84	藤内Ⅰ	I	6	五領ヶ台
A	4	曾利Ⅰ	C	27	狛沢	C	84'	藤内Ⅰ	I	7	藤内
A	5	曾利Ⅳ	C	28	五領ヶ台Ⅱ	C	85	曾利Ⅳ	I	8	藤内
A	6	曾利Ⅲ	C	29	五領ヶ台Ⅱ	C	86	狛沢	I	9	諸磯b
A	7	諸磯b	C	30	井戸尻Ⅱ	C	87	狛沢	I	10	藤内
A	8	曾利ⅣかⅤ	C	31	狛沢	C	88	中越	I	11	諸磯b
A	9	曾利Ⅱ	C	32	新道	C	89	井戸尻	I	12	新道
A	10	曾利Ⅳ	C	33	古墳前期	C	90	新道	I	13	曾利
A	11	諸磯a	C	34	井戸尻Ⅲ	C	91	井戸尻Ⅲ	I	14	諸磯b
A	12	諸磯a	C	35	狛沢	C	92	井戸尻Ⅱ～Ⅲ	I	15	諸磯b
A	13	曾利Ⅳ	C	36	井戸尻Ⅲ	C	92'	井戸尻Ⅱ～Ⅲ	I	16	狛沢
A	14	曾利Ⅳ	C	37	井戸尻Ⅲ	C	93	井戸尻Ⅱ	I	17	狛沢
A	15	諸磯	C	37'	井戸尻Ⅲ	C	94	井戸尻Ⅲ	I	18	諸磯b
A	16	曾利Ⅳ	C	38	五領ヶ台Ⅱ	C	95	井戸尻Ⅲ	I	19	狛沢
B	1	曾利Ⅰ	C	39	新道	C	96	井戸尻Ⅱ	I	20	藤内
B	2	諸磯a	C	39'	新道	C	97	井戸尻Ⅲ	I	21	曾利
B	3	曾利Ⅰ	C	40	狛沢	C	98	井戸尻Ⅲ	I	22	諸磯b
B	4	曾利Ⅱ	C	40'	藤内Ⅰ	C	98'	井戸尻Ⅲ	I	23	諸磯b
B	5	諸磯b	C	14-1	藤内Ⅱ	C	99	井戸尻Ⅲ	I	24	諸磯b
B	6	諸磯a	C	14-2	藤内Ⅱ	C	100	井戸尻Ⅰ	I	25	井戸尻
B	7	曾利Ⅰ	C	14-3	藤内Ⅱ	C	101	狛沢	I	26	諸磯b
B	8	曾利Ⅲ	C	14-4	藤内Ⅱ	C	102	狛沢	I	27	諸磯b
B	9	曾利Ⅲ	C	42	狛沢	C	103	古墳前期	I	28	諸磯b
B	10	曾利Ⅴ	C	43	新道	C	104	古墳前期	I	29	新道
B	11	曾利Ⅳ	C	44	井戸尻	C	105	古墳前期	I	30	五領ヶ台
B	12	曾利Ⅲ	C	45	五領ヶ台Ⅱ	C	106	古墳前期	I	31	諸磯b
B	13	諸磯b	C	46	藤内Ⅰ	C	107	古墳前期	I	32	新道
B	14	諸磯b	C	47	藤内Ⅰ	C	108	古墳前期	I	33	藤内
B	15	諸磯b	C	48	井戸尻Ⅲ	C	109	中期	I	34	新道
B	16	曾利Ⅳ	C	49	井戸尻Ⅰ	C	110	狛沢	I	35	藤内
B	17	曾利Ⅲ	C	50	藤内Ⅱ	C	111	古墳前期	I	36	五領ヶ台
B	18	諸磯b	C	51	古墳前期	D	1	諸磯b	I	37	諸磯b
B	19	曾利Ⅱ	C	52	井戸尻Ⅲ	D	1'	諸磯b	I	38	井戸尻
B	20	曾利Ⅱ	C	53	狛沢	D	2	古墳前期	I	39	井戸尻
B	21	曾利Ⅰ	C	54	井戸尻Ⅲ	D	3	五領ヶ台Ⅱ	I	40	藤内
B	22	中越	C	55	井戸尻Ⅰ～Ⅱ	D	4	諸磯b	I	41	藤内
B	23	諸磯b	C	56	井戸尻Ⅰ～Ⅱ	D	5	狛沢	I	42	井戸尻
C	1	藤内Ⅱ	C	57	新道	D	6	諸磯b	I	43	井戸尻
C	2	藤内Ⅰ	C	58	藤内Ⅰ	D	7	五領ヶ台Ⅱ	I	44	狛沢
C	3	狛沢	C	59	井戸尻Ⅲ	D	8	五領ヶ台Ⅱ	I	45	狛沢
C	4	藤内Ⅰ	C	60	藤内Ⅱ	D	9	古墳前期	I	46	五領ヶ台
C	4'	藤内Ⅰ	C	61	新道	D	10	古墳前期	I	47	五領ヶ台
C	5	曾利Ⅳ	C	62	藤内Ⅱ	D	11	五領ヶ台Ⅱ	I	48	五領ヶ台
C	6	曾利Ⅰ	C	63	藤内Ⅰ	D	12	五領ヶ台Ⅱ	I	49	藤内
C	7	曾利Ⅴ	C	64	新道	E	1	古墳前期	I	50	藤内
C	8	藤内	C	65	五領ヶ台Ⅱ	F	住居なし		I	51	五領ヶ台
C	9	藤内Ⅱ	C	66	五領ヶ台Ⅱ	G	1	曾利Ⅴ	I	52	井戸尻
C	10	曾利Ⅴ	C	67	五領ヶ台Ⅱ	G	2	諸磯b	I	53	藤内
C	11	井戸尻Ⅱ	C	68	藤内Ⅰ	G	町1	五領ヶ台Ⅱ	I	54	藤内
C	12	新道	C	69	狛沢	G	町2	中期後葉	I	55	五領ヶ台
C	13	井戸尻Ⅲ	C	70	五領ヶ台Ⅱ	G	町3	縄文	I	56	藤内
C	14	井戸尻Ⅲ	C	71	古墳前期	G	町4	縄文	I	57	五領ヶ台
C	14'	井戸尻Ⅲ	C	72	藤内	G	町5	縄文	I	58	曾利
C	15	五領ヶ台Ⅱ	C	73	中期	G	町6	曾利Ⅳ～Ⅴ	I	59	五領ヶ台
C	16	井戸尻	C	74	狛沢	G	町7	中期前～中葉	J	1	曾利Ⅲ
C	17	古墳前期	C	75	狛沢	G	町8	井戸尻～曾利Ⅰ	J	2	諸磯b
C	18	諸磯b	C	76	狛沢	G	町9	藤内	J	3	五領ヶ台Ⅱ
C	19	井戸尻Ⅲ	C	77	曾利Ⅴ	G	町10	曾利Ⅳ	J	4	諸磯b
C	20	井戸尻Ⅲ	C	78	藤内Ⅰ	H	1	諸磯b	J	5	諸磯b
C	21	狛沢	C	79	新道	I	1	五領ヶ台	J	6	諸磯b
C	22	井戸尻Ⅱ	C	80	井戸尻Ⅱ～Ⅲ	I	2	諸磯b	J	7	曾利Ⅴ
C	23	井戸尻Ⅲ	C	81	藤内Ⅱ	I	3	井戸尻			



第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡（Iが酒香場・長坂上条遺跡、黒丸が調査地点、1/25000）

りに諸磯式期の土器片を確認しているの、台地南半部におよぶ可能性もある。諸磯式についてはc式の土器片を若干確認しているが、遺構は確認できない。また、十三菩提式については遺構がなく、遺物もほとんど見いだせない。

中期では、本格的に集落を構成しはじめるのが五領ヶ台Ⅱ式期からであり、29軒確認できる。五領ヶ台Ⅰ式期は遺構がなく遺物もほとんど見られない。引き続き集落が継続し、時期の明確な住居跡では猪沢式期が24軒、新道式期が14軒、藤内式期が41軒、井戸尻式期が43軒、曾利式期が51軒である。五領ヶ台式から井戸尻式期にかけてC・I区で環状集落を構成し、中心部に土坑群を持つ直径200mほどの規模の環状集落で、面積的にはその1/4ほどを調査したことになる。曾利式期になるとA・B区に主体が移る。I区では、住居跡は少ないものの配石遺構や埋甕が数基ずつ確認できるので、浅い住居跡が耕作等で消失している可能性もあり、I区やC区にも遺構の一部がおよんでいるが、それ以前とは別の集落構造を構成しているものと思われる。後期では称名寺式期が1軒（A区3住）確認されているが、それ以降の時期については長坂町教育委員会の調査で堀之内式期の土偶や土器が若干みられる程度である。

縄文時代以外では、弥生時代前期の条痕土器片が若干見られるが、遺構は確認されていない。古墳時代では、S字状口縁台付甕を主体とする前期の住居跡が15軒、掘立柱建物跡5棟を伴って集落を構成している。八ヶ岳山麓で多数の遺構が確認される平安時代については遺物も遺構も確認できない。中・近世では溝2条が確認され、遺跡南方の斜面には五輪塔群も見られる。

## 第2節 遺跡の立地と土層

遺跡の立地する地点は、八ヶ岳火山が大規模爆発によって山体崩壊し、その折に流下した山体の一部が基盤となつたいわゆる「流れ山」（約30万年前頃形成）と思われる小山の上面に位置する。小山上面の平坦面は非常に広く、西側をJR中央線に南北に立ち割られているものの、大深沢川の崖線まで同一面と思われる。北側はより高い面を持つ別の流れ山の南斜面に接している。南側は縄文晩期の配石が調査された長坂上条遺跡の立地する低湿地面が広く展開するが、そこから小山に向かって入江状に低湿地が入り込んでいて、あたかもUの字状を呈している。

小山の平坦面は広く風成堆積物で礫を含まないローム層に覆われており、地表面から6mほどでPm-1（御岳第1パミス層、8万年前頃降灰）が存在するという。土層について第3次調査の折りに工事中の掘削面で2m弱までが観察できた。20cmほどの耕作土の下に30cmほどの明暗褐色土があり、縄文土器を包含する。その直下に30cmほどのかなりソフト化したローム層がある。明るい褐色で湿気が強く、削るとさらさらとした砂質な質感で乾燥したときの構造が粒状である。その下位にうっすらと暗い暗色帯が40cmほどの厚さで存在することが確認できた。ボコボコした質感の団塊状構造をもつハードローム層で暗褐色を呈し、たまに木炭片を含む。暗色帯はI区の調査地域の最も高い西端のラインで確認できたが、より低い北にいくほど不鮮明になり消滅しており、おそらく保存状況のよい地形の高い部分に部分的に残存しているものと思われる。その下位は明褐色のハードローム層でボコボコした質感はなく非常に硬質で削るとネットリとした粘性がある。J区においても厚いローム層とPm-I層とを確認した。Pm-I層は地表下1.5mほどと浅く、斜面にかかる部分なので浅いものと考えられた。

## 第3節 周辺の遺跡

酒呑場遺跡の乗る小丘の南斜面端部に長坂上条遺跡が立地する。1940年（昭和15）に男爵大山柏氏によって設立された私設の考古学研究機関である大山史前学研究所と、後に県会議員を勤める井出佐重氏とによって発掘調査がなされた。加曾利B式、安行式、清水天王山式、佐野式など縄文時代後期中葉から晩期にかけての土器群とともに、配石遺構が確認されている（大山ほか1941）。1997年には長坂町教育委員会によって個人住宅建設に伴い発掘調査がなされ、同様な時期の土器群と平安時代の住居跡が調査された（小宮山1997）。酒呑場遺跡では後期初頭の称名寺式期の住居跡が1軒確認されているのみであり、中期以前と後期以降の集落立地の違いがここに明瞭に示されている。

遺跡の分布を見ると、酒呑場遺跡から南側の地域は、起伏の激しい地形となり、縄文時代も含め遺跡の分布が密である。逆に、酒呑場遺跡の乗る小丘と連続する北に向う平坦面で、JR長坂駅や長坂町の中心街が乗る平坦面、さらには中央道付近までの高い平坦面地域には遺跡の分布がまばらである。連続する平坦面の南のターミナルとなる酒呑場遺跡で巨大集落が形成されている点に注目する必要がある。

### 引用文献

- 大山柏ほか 1941 「山梨県北巨摩郡日野春村長坂上条発掘調査報告」『史前学雑誌』第13巻第3号  
小宮山 隆 1997 「長坂上条遺跡」『八ヶ岳考古—平成8年度年報—』北巨摩市町村文化財担当者会

# 第3章 縄文時代の遺物

## 第1節 土器

### 第1項 前期の土器

#### 第I群 縄文時代前期前半

中越式土器を一括する。器面の調整が荒く、調整の痕跡が凹凸に残る。器形は外に開く平口縁で頸部がわずかにくびれ、丸底となる。文様は口縁部に限定され、口縁部から垂下する隆帯が4単位貼り付けられる。

A類 細線文を施すもの。

B類 無文。積み上げ痕を残すもの。

#### 第II群 縄文時代前期後半

諸磯a式、諸磯b式、諸磯c式にあたる。A類：諸磯式a式土器、B類：諸磯b式土器、C類：諸磯c式土器に大別した。

##### A類 諸磯a式土器

A類-1 口縁部から胴上部に文様帯を区画し、幅の狭い平行沈線で肋骨文の文様を描く土器。肋骨文の交点には円形の刺突を施し、文様帯の区画には平行沈線間に連続爪形刺突が付加される。

A類-2 平行沈線により木の葉文などのモチーフを描くもの。

A類-3 連続爪形文により、木の葉文を描くもの。

A類-4 縄文地文に連続爪形文による区画文と垂下する円形刺突文のみを施文した深鉢。

A類-5 浅鉢。

##### B類 諸磯b式土器

諸磯b式土器の深鉢は爪形文、浮線文、平行沈線文、縄文が主な文様要素となっている。爪形文、浮線文、平行沈線文を多用する土器については、それぞれが展開をたどることができることから、それぞれに分類項目を設け、縄文のみの深鉢、深鉢以外の器形の土器群を加えて5つの分類項目を基に分類する。

B類-1 爪形文を多用する深鉢。

a 幅広の連続爪形文を数条施文し条間に丸棒状工具による刻みを有するもの。諸磯b式1段階。

b 平行沈線間に連続爪形文を施すもの。口縁部は肥厚のない直線的なものになる。諸磯b式1段階。

B類-2 浮線文を多様する深鉢。

器面に粘土紐を貼付したもの。浮線の加飾から以下のように分類する。

a 浮線に縄文が施されたもの。縄文施文により、浮線は低くなっている。器形は口縁が緩く内湾する。浮線に断面形が丸底を呈する刻みが施されるものと同時期と考えられるが、本遺跡においては出土数が少なく、詳細は不明である。

b 切れ長な刻みを加えたもの、二本以上の平行する浮線を組にする場合がほとんどで、隣接する浮線と刻みの方向を違えて矢羽根状にする。器形は口縁が強く内湾し、内湾部分全面に文様が施文される。諸磯b式2新段階。

c 短い斜めの刻み目を加えたもの。浮線は繊細で低平なものになる。B類-2bと同じく二本以上の平行する浮線で構成され、隣接する浮線と刻みの方向を違える。二本の浮線を浮線で連絡した梯子状のもの、脇に小さな列点を施すものがある。口縁部は大きく張り出し、急角度に屈折する。口縁部文様は口縁部の屈折上部の狭い

範囲に施され、張り出しをまたがらない。波長部の下に縦方向の弧状条線が向かい合うように施される。諸磯b式3段階である。

**B類-3** 平行沈線により文様を描く深鉢。

- a 口縁部が緩く内湾し、渦巻き文が描かれる。平行沈線は半截竹管により個別に施される。諸磯b式2中段階。
- b 口縁部が強く内湾しながら強く張り出す。口縁部文様は強く張り出した部分全面に施される。4単位の波状口縁を主とし、入組渦巻文や斜条線などのモチーフを描く。沈線は半截竹管による平行沈線を3条ほどの組にして施文する。諸磯b式2新段階。
- c 口縁部は大きく張り出し、急角度に屈折する。口縁部文様は口縁部の屈折上部の狭い範囲に施され、張り出しをまたがらない。波長部の下に縦方向の弧状条線が向かい合うように施される。曲線文などの文様モチーフには半截竹管により個別に描き、胴部の横位文様には半截竹管をそろえて一度の動作で数条同時に描くもの、櫛歯状工具による密接した集合沈線を描くものもある。諸磯b式3段階。

**B類-4** 装飾的な文様の施文を欠き、地文が縄文のみ施文されるまたは無文のもの。

A類またはC類のものもある可能性がある。

**B類-5** その他。

縁孔土器・浅鉢・鉢などの土器を一括する。

**C類 諸磯c式土器**

**C類-1** 内湾した口縁形で、口縁部に棒状突起またはボタン状貼付文を2個に並ぶように貼り付けたもの。

胴部文様は縦位の条線で区画した間を鋸歯状や「( )」状の条線でうめる。

**C類-2** 口縁部文様に結節浮線により渦巻文を描く土器。

**第Ⅲ群 十三菩提式土器**

縄文時代前期末葉の十三菩提式を一括する。

**資料説明**

**第Ⅰ群 縄文時代前期前半中越式土器**

**C区**

**88号住 (第33図3)**

丸底で口縁に向かって外に開く器形。器面にはナデ調整による凹凸が残る。

**I区 (第90図1～12)**

第90図1・6は第Ⅰ群A類にあたる。1は外側に肥厚した口唇部下に横位隆帯をめぐらせ、口唇と隆帯上に円形の刺突を施す。口唇から隆帯に縦位の隆帯を張り付ける。横位隆帯下には細線文を施す。1・6ともに器壁は厚い。

第90図2～5・7～12は第Ⅰ群B類にあたる。4・5は無文の器面に隆帯を張り付けたものである。隆帯上には刻みを有する。

**第Ⅱ群 縄文時代前期後半**

**B区**

**2号住 (第4図1～3、5図1～22、6図1～26、7図4)**

4図1はA類-3で大きな波状を呈する口縁部である。口縁にそって条間に斜めの刻みを施した連続爪形文が施される。縄文をモチーフとなる部分だけのこして磨り消し、連続爪形文により入木葉文が描かれる。4図2はA類-2で平行沈線によって入組木葉文が描かれる。口縁は平縁で頸部で外反し、まっすぐ開く器形である。4図3はB類-1であり、幅の広い連続爪形文で横位区画を形成し、口縁部文様には波状となるモチーフを、頸部文様には対弧線のモ

チーフを並べる。5図1～7はA類-4で口縁部に幅狭い連続爪形文で無文帯をつくり、その下部は縄文を施文して2列の円形刺突文による垂下文を描く。2～4は口縁部破片で口唇部が外側に肥厚する。5図10～16はA類-2である。13はモチーフの一番上の部分に連続爪形文が施される。これは5図2～3のように上下2条の連続爪形文によって空白部を形成していたものの下の連続爪形文と木葉文などのモチーフがつながり、モチーフに吸収されていくものである。5図18～20・22、6図2はA類-3である。5図21・23、6図1・3・5～17はA類で幅狭い連続爪形文が施されるものである。6図21・23・24はA類-5の浅鉢で入組木の葉文が描かれる。7図4もA類-5の浅鉢で、胴部の屈折部には連続爪形文が施される。図示されていないが、口縁部の対角線上に孔が2個開けられる。6図4・18はB類-2 a、6図20はB類-2 cである。6図19はB類-3 aで口縁部は口縁部は緩く内湾に、渦巻文が描かれる。6図22はB類-3 cで、胴部には段を有する。胴部の横位区画内には対弧線のモチーフが描かれる。6図25・26はB類-4。

#### 5号住（第7図8、9）

第7図8・9はB類-5にあたる。8は浅鉢で刻みが施された隆帯で器面を区画し、区画内を連続爪形文によりモチーフを描く。9は円孔土器である。

#### 132号土坑（第10図9）

第10図9はB類-1 bである。器形はくびれた頸部から外に直線的に開く。口縁部文様は広く、半月状のモチーフを交互にならべて波状のモチーフに近いものとなる。

#### 164号土坑（第10図13）

B類-3 aである。緩く内湾した波状口縁部の波長下に渦巻文を描き、波長下の渦巻文間にも間を埋めるように渦巻文を施文する。頸部以下は横位沈線で横区画をつくり、区画内に矢羽状のモチーフを描く。

#### 247号土坑（第11図2）

B類-2 cである。口縁部文様は屈折部の上の波頂下の狭い部分に浮線により弧線が施される。

#### グリッド出土土器（第11図6）

B類-1 bにあたる。器形は頸部から外にまっすぐに開く平縁口縁であり、口縁部文様は連続爪形文で上下に区画し、区画内を連続爪形文による斜条線を充填する。

### C区

#### 258号土坑（第47図4）

B類-3 cにあたる。口縁部文様帯は広く、波頂下にボタン状貼付文を1つ付け、その下に縦方向の弧状条線を向かい合うように施す。

### F区

#### 2号土坑（第49図9）

B類-3 cである。口縁部は波頂部部分にボタン状貼付文を1つ付け、横位沈線文を施文する。口縁部下は横位条線により横方向に区画され、胴部の区画内には対弧状と渦巻き文・蕨手文のモチーフが施される。

### I区

#### 2号住（第51図3～14、52図1～14、53図1～10）

第51図5はA類-3にあたる。まっすぐ開く器形で、口縁部に幅の狭い連続爪形文により入組木の葉文を描く。51図6、9はB類-2 bである。51図10～12はB類-2 cで12は内湾する口縁となる。51図13はB類-3 bである。51図4・7・14、52図1～14、53図1・4はB類-3 cにあたる。51図4・7は同一個体で、波頂部下にボタン状貼付文を付け、それを囲むように縦位の弧線が施文される。51図14は平行沈線間に半截竹管で連続刺突を施す。52図13・14、53図1・4は同一個体で、口縁部の屈折上のみ文様が施される。波頂部下に向弧渦巻文が施文される。



第51図3、53図2・3・5～10はB類-4である。51図3は頸部で緩くくびれ、口縁が緩く内湾する器形であり、器面の調整は荒く、荒い縄文を器面に施す。

**6号住** (第54図6～11)

54図9はB類-3b、8はB類-3d、10はB類-4である。6・7・11はC類-1である。

**11号住** (第55図7～15)

第55図7はB類-1である。連続爪形文により横位の区画をつくり、区画内に三角形波状のモチーフを描く。8はB類-2bで、強く屈折する口縁に縦位の弧状のモチーフを描く。9・11はB類-2cである。10・12・14はB類-4で、12の口縁部にはボタン状貼付文が施される。13・15はB類-5の浅鉢である。

**14号住** (第56図5～18)

5～10はB類-3cにあたる。9は胴部の狭い横帯内に向かい合う弧線モチーフを施す。11～13・15～17はB類-4である。18はB類-5である。16はC類-1であり、縦位の条線による区画内に縦位の弧線文が描かれる。

**15号住** (第56図19)

B類-3cにあたる。

**22号住** (第60図9、10)

9はB類-4、10はC類-2にあたる。9は器面全体に羽状縄文が施される。10は地文に横方向の条線が施され、その上に渦巻き文が結節浮線文によって描かれる。

**23号住** (第60図11～15)

14はA類-1で、幅の狭い平行沈線で肋骨文の文様を描き、肋骨文の交点には円形の刺突を施す。13はA類であり、幅の狭い連続爪形文で横位区画を描く。12はB類-1aで爪形文により木の葉文モチーフが描かれる。15はB類-4、11はB類-5である。

**26号住** (第61図7～9、62図1～13)

61図7～9、62図1～10・13はB類-3cである。61図7は口縁が緩く内湾する波状口縁で、波頂部に向弧渦巻文が施文される。62図11・12はB類-4である。

**28号住** (第62図14～20、63図1～14)

62図14・15・17・18、63図3～10はB類-3cである。17は胴部の横帯区画内を弧線によってさらに区画し、その中に縦位の弧線を施文する。63図5・6・8は胴部のくびれ部分に隆帯を貼り付け、隆帯上に半截竹管で刺突する。63図2はB類-3b、63図1はB類-2aにあたる。63図11・14はC類-1で、11は口縁部に2個のボタン状貼付文が水平方向に2個付けられる。62図16・19・20、63図12はB類-4である。62図16は口縁の波頂部下にボタン状貼付文が付けられる。62図19・20は同一個体で縄文は胴下部に施文される。63図12は2個のボタン状貼付文が水平方向に2個付けられ、63図11と共通することから諸磯C式古段階のものと考えられる。

**31号住** (第64図5)

B類-3c。胴部に横位の隆帯が貼り付けられる。条線の幅が広く、B類-3cのなかでも後出的なものと考えられる。

**37号住** (第67図9)

B類-3cで口縁部屈折より上の部分に弧線文が描かれる。

**A' 30口土坑** (第80図6、7、9)

6・7はC類-1、9はB類-3cである。6は口縁部に横位の条線を施し、加飾のないボタン状貼付文を横位条線上に貼り付ける。胴部は縦位条線で区画をする。9は全面に無文地に全面に横位条線を施したものである。B類-3cの中でも新しい。

**B' 34ハ土坑** (第79図2)

B類-4であり、屈折する口縁の波頂部下にボタン状貼付文が付けられる。縄文は器面全面に施文される。

**C' 24ニ土坑** (第79図3)

B類-3cである。口縁部文様は大きく張り出し、強く屈折する口縁の屈折部より上に縦位の向かいあう条線が施され、屈折下には縦位の対弧線が施される。

**C' 26イ土坑** (第79図6)

B類-2bである。強く屈折し、波頂部分が大きく張り出す器形で、波頂下に入組渦巻文、屈折下に渦巻文が施される。

**C' 27イ土坑** (第79図7)

C類-1で縦位の条線間に鋸歯状の条線文が施される。

**C' 28口土坑** (第79図8)

B類-3c。口縁部文様は大きく張り出し、強く屈折する口縁の屈折部の上下に縦位の条線が施される。

**C' 29口土坑** (第81図1)

B類-3cの胴部破片である。くびれ上に縦位の条線・対弧線を施す。

**C' 29リ土坑** (第81図2)

B類-3cである。口縁部の波頂部は渦巻突起がつけられ、その下に渦巻文が描かれる。

**D' 28ト土坑** (第81図8)

C類-1の胴下部である。

**A' 29埋甕** (第85図5)

器面全体に縄文が施されるB類-4である。

### Ⅲ群

#### I区

**11号住pit 6** (第90図13)

口縁部には横方向の結節沈線文が描かれ、その下には縄文が施される。

## 第2項 中期初頭の土器

五領ヶ台式土器にあたる。五領ヶ台式土器は大きく集合沈線系、縄文系の2つにわけられる。ここでは集合沈線系・縄文系を器形や文様モチーフなどから4つに分け、外来系の土器、浅鉢・小型土器のを加えて7の分類をおこなった。

**A類 集合沈線を主文様とする深鉢。**

文様構成は口縁部、頸部、胴部の文様帯からなり、口縁部、頸部の文様帯が省略されるものもある。

**A類-1** 器形は口縁部が「く」字状に内屈し、胴部が筒形になるもの、胴部が膨らむもの、口縁部が省略されるもの、口縁部・頸部を省略してやや開いた器形となるものがある。口縁部文様帯は狭く、「く」字状に屈折した部分に連続爪形文が施され、口唇部と連続爪形文の間には交互刺突がめぐる。頸部文様は縦位条線が施文される。胴部文様は頸部から垂下する隆線、沈線により縦位に4単位に区画され、胴部上半に文様が集中する。胴部上半の文様は斜格子目文、交互刺突、沈線などがある。五領ヶ台Ⅱ式古段階。

**A類-2** 器形は口縁部の「く」字状の屈折部より上が幅広くなるもの、口縁部の屈折が緩くなり、内湾しながら開くもの、胴部が膨らむもの、口縁部が省略されるもの、口縁・頸部が省略されるものがある。「く」字状口縁の屈折上部が幅広くなるものは頸部に文様が施されない。胴部は懸垂文により4単位に区画され、区画内は文様の充填はされない。懸垂文には対向するU字状モチーフ、波状文がある。五領ヶ台Ⅱ式中段階。

**A類-3** 口縁部が張付文により、4単位に分割され、交互刺突とその下に逆U字状モチーフがならび、胴部にはクランク状懸垂文がつく。

**B類** 口縁に沿って縄文帯が施され、平縁口縁で胴部が筒形または胴部が膨らむもの。

**B類-1** 口縁部に縄文帯を持ち、口縁から頸部にかけて橋状柄手が簡略化された縦位の隆帯を付ける。胴部は上部

にV字状のモチーフが並ぶ。五領ヶ台Ⅰ式新段階。

- B類－2** 口縁部には縄文帯がめぐり、その下の無文帯に簡略された橋状柄手が付く。胴部文様は半円弧文が並び、下端部に三角形のモチーフが施される。五領ヶ台Ⅱ式古段階。
- B類－3** 口縁部に縄文帯をもち、口縁形はやや外反する。頸部に横位沈線が数段巡り、Y字状の隆帯懸垂文で胴部が4単位に区画される。胴部の4単位の区画内には大きな半円弧文が施される。五領ヶ台Ⅱ式中段階。
- B類－4** 器形は底部から口縁にかけて外反する器形となる。口縁部には縄文帯をもち、胴部は頸部を巡る隆帯からY字状隆帯懸垂文が垂下し、その間に細かな波状沈線を並べ、沈線を垂下させる。五領ヶ台Ⅱ式新段階。
- C類** 口縁部がほぼ直線的に開き、胴部上半で大きく膨らみ、胴部下半はやや外反する器形となるもの。
- C類－1** 口縁部は内湾し、胴部が筒状の器形となる。口縁部文様は細沈線を地文とし、玉抱き三叉文などが施される。橋状柄手は口縁と胴部を区画する横位隆帯から口唇部にのびるように付けられる。胴部上部には逆U字状のモチーフがならぶ。
- C類－2** 胴上部の膨らんだ部分に半円弧文がならぶ、4単位の垂下する条線が施される、口縁部は波頂部より多本の沈線が垂下する。五領ヶ台Ⅱ式古段階。
- C類－3** 波状口縁が一般的となり、口縁部に文様が集中する。五領ヶ台Ⅱ式中段階。
- C類－4** 器形は波状口縁で胴部が膨らむ器形となる。波頂部から垂下する沈線で口縁部を区切り、間に弧線や玉抱き三叉文状のモチーフが見られる。胴部は頸部を巡る隆帯からY字状の隆帯懸垂文で胴部を区画し、区画内に懸垂波状文を並べ、沈線を垂下させる五領ヶ台Ⅱ式新段階。
- D類** キャリパー形の器形で口縁部に玉抱き三叉文が施されるもの。器面全体に縄文が施される。
- D類－1** 口縁部に沈線による半円弧のモチーフを並べたもの。胴部は頸部からY字状の隆帯が垂下し、4単位に区画する。区画内には大きな半円弧文が施される。五領ヶ台Ⅱ式中段階。
- D類－2** 隆帯により半円弧文が巡る。胴部は頸部を巡る隆帯からY字状隆帯懸垂文が垂下し、その間に細かな波状沈線を並べ、沈線を垂下させる。五領ヶ台Ⅱ式新段階。
- E類** 折衷タイプの土器。
- F類** 異系統の土器。
- G類** 浅鉢、小型土器。

## 資料説明

### C区

#### 15号住（第20図7～9、第21図1～3）

第20図7～9、21図1～3はA類－1にあたる。第20図7は口縁部の屈曲部に隆帯をめぐらして隆帯上に連続爪形文を施す。爪形文と口唇の間には交互刺突文、格子目文を施す。頸部には縦位の条線を施し、胴部は頸部から垂下する条線で4単位に区画し、区画内の胴上部を横位沈線で区画して格子目文を施す。20図9は口縁部文様に「コ」字状の区画を施し、区画内に格子目文を施す。20図7、21図1・2は口縁部文様帯・頸部文様帯を省略したものである。21図1は胴部上部の格子目状の区画の下に円文を2個縦に並べる。21図2は横位の条線を充填する。

#### 28号住（第22図－7）

A類－1。胴部は頸部から垂下する条線が施される以外の文様はない。

#### 29号住（第22図－8）

A類－2。口縁部は屈曲より上の部分が広くなり、立ち上がる器形となる。頸部は口縁の屈折部に付けられた4単位の垂下条線が施される。

#### 35号住（第23図6）

35号住内の土坑から出土している。B類－4にあたる。底部から口縁部へ外反する器形で頸部の波状隆帯からY字状の隆帯を垂下させ、垂下する隆帯の間にY字状の懸垂文を施文する。

**59号住pit (第28図8)**

A類-1にあたる。胴部を縦位の条線で4単位に区画する。条線には交互刺突文、円文などが施される。

**65号住 (第29図7・8)**

A類にあたる。7の口縁部は口唇に交互刺突、屈折部に爪形文、その間に半裁竹管による連続押引文が施される。頸部・胴部文様は境が平行沈線により区画されるほかはなにも施文されない。8は口縁の屈折が丸みを帯びる。頸部には条線が充填され、胴部文様は頸部から胴部中央までの条線が施される。

**70号住 (第29図11)**

C類-2にあたる。口縁には縄文帯があり、口縁部の突起部から垂下する沈線が施される。胴部上部の丸く膨らんだ部分には垂下する条線が施される。

**97号住 (第38図4)**

C類の胴下部である。平行沈線文を垂下させ、その両脇に刻みを施す。最下部は平行沈線で横方向に区画し、区画内を縦位の状線で埋める。

**4号土坑 (第40図3)**

A類-3にあたる。口縁部は内湾し、口縁上部に交互刺突、その下には沈線が垂下する。胴部はクランク状の懸垂文が垂下する。

**35号土坑 (第40図8)**

A類-2。口縁部文様帯が省略された器形。胴部は垂下する条線によって4単位に分割される。

**57号土坑 (第41図1)**

A類-2にあたる。口縁部文様は広く、頸部には格子目文が施される。

**85号土坑 (第41図2)**

B類-3。胴部がふくらむ器形で、胴部は隆帯により大きな半円弧文を描き、4単位に区画される。

**89号土坑 (第41図3)**

A類-3。縄文地文で口縁部には交互刺突とその下に逆U字状文が施文される。胴部は胴上部と下部にわけられ、胴上部は4単位の窓状区画が並び、下部は上部の4単位の区画をさらに分けるように逆U字状の区画が並ぶ。

**117号土坑 (第41図10)**

A類-1。口唇部には縄文が施され、連続爪形文を施した隆帯との間に交互刺突文を施す。頸部は縦の条線が施される。

**116号土坑 (第41図11)**

A類-1。口縁部が緩く内湾し胴部がふくらむ器形。

**135号土坑 (第42図3)**

G類。口縁部が内湾し、胴部が膨らむ器形。口縁部から胴部の最大径となる部分をつなぐように橋状柄手と付ける。地文は縄文であり、口縁部には三角刻印が施される。五領ヶ台I式段階。

**129号土坑 (42図4)**

E類。口縁は内湾し、胴部が膨らむ器形。口縁部はA類-3である。口縁は縦位の隆帯で区画し、交互刺突文の下に垂下する沈線を描く。胴部はB類-3で胴部をY字状の隆帯で区画し、円弧文を横にならべて、円弧文結合部から懸垂文を施文する。

**136号土坑 (第44図10)**

C類。口縁部に縄文帯を有し、頸部にはU字文と逆U字文の間に菱形のモチーフを施すものや向かい合う弧状モチーフを描く。

**213号土坑 (第46図2)**

A類-1である。胴部は筒形で頸部が外反し、口縁部が「く」字状に屈折する器形。

### 215号土坑（第46図3）

A類-2。口縁部文様帯が省略されるもの。口縁部は波状口縁で内湾する。胴部は4単位に区画され、懸垂文には連続爪形文により対向するU字文モチーフが施される。

### 218号土坑（第46図4）

B類-4。底部から外反しながら開く器形。胴部は頸部をめぐる隆帯から垂下する隆帯で区画され、その間に複数の逆U字状の区画を施す。

### 228号土坑（第46図8）

A類-1。胴部が膨らむ器形。胴上部に集合沈線による渦巻きモチーフを施す。

### 245号土坑（第46図9）

B類-3である。口縁部を太い2本の沈線で円弧文を横方向に並べる。胴部は頸部から垂下するY字隆帯によって4単位に区画される。

## D区

### 3号住（第49図1）

A類。口縁部は広く立ち上がる。口縁部は連続爪形文を施した隆帯によって窓枠状に区画される。

### 7号住（第49図2）

A類-2。口縁部文様帯は広くなる。頸部文様帯は文様が施されず、胴部は対向する逆U字モチーフにより区画される。

### 153号土坑（第49図3・4）

3はC類である。器形は胴上部から口縁部にかけてゆるく内湾しながら開く。口縁部に縄文帯その下に空白部を持ち頸部に刻みを施した隆帯を巡らす。4はA類の口縁部文様帯を省略したもので、口縁最上部に連続爪形文を施し、頸部文様帯には文様は施文されない。頸部文様帯と胴部文様帯の境に貼付文を4単位貼り付け、つなぐように連続爪形文を施文した隆帯を施文する。胴部には縄文を施文し、胴上部に頸部の貼付文から垂下する沈線を施文する。

## E区

### 2号土坑（第49図5・6）

5・6ともG類である。5は内湾する口縁の上部に刻みを施し、頸部に横位平行沈線と交互刺突文で口縁と胴部を区画し、頸部から内部に交互刺突を施したU字状モチーフを施す。U字状モチーフの下には「▽」のモチーフが描かれる。

### 168号土坑（第49図7）

A類-1。口縁部には縄文帯を有する。胴部はふくらむ器形で平行沈線により横方向の区画を作り、区画内には縦方向にU字状・菱形状・逆U字状の文様をならべたもの、弧線により縦位の波状文などを施文する。

### 1号埋甕（第49図8）

B類-3。胴部は筒形で外反して「く」字状に屈折し、口唇部が立ち上がる器形。口唇部には縄文帯が施され、縄文帯下部から屈折部にかけて橋状柄手が付けられる。屈折部の上部には玉抱き三叉文が描かれる。胴上部には半円弧文が並ぶ。

## I区

### 6号住（第54図12~16）

12・16はC類、14はA類、13はF類である。12は縄文帯をもつ波状口縁で波長部から垂下する沈線が施される。胴上部の膨らんだ部分には文様は描かれぬ。13は北裏C1式土器の口縁部である。口縁部は平行沈線によって上下2段に区画する。区画内には縄文が施文され、円文や三叉文の刻印を施す。

#### 28号住 (第63図15)

A類-1である。

#### 30号住 (第64図2～4)

3はA類-3である。口縁部に交互刺突を施し、逆U字のモチーフをその下に並べている。2・4はA類である。

#### 34号住 (第66図2・3)

2はA類-1、3はC類である。2は口縁部が欠損しているが、口縁部文様帯に交互刺突文、連続爪形文を施し、頸部には縦位の条線をほどこす。

#### 46号住 (第73図1～3)

1・3はD類-1である。1の口縁部には沈線による半円弧文が並び、胴部には頸部の隆帯から垂下するY字状の隆帯懸垂文により器面を4単位に区画し、区画内に大きな半円弧文を施す。2はD類-3で口縁部を隆帯による半円弧文で4単位に区画し、区画内には円形貼文や三叉文を施す。胴部は隆帯により4単位に区画し、区画上部に弧状文を2条施し3本の沈線を垂下させる。

#### 47号住 (第73図4～12)

4・5・6はA類-1である。4は口縁部に4単位の「の」字の貼付文を施し、口縁部がわずかに波状を呈する。6は口縁部文様帯を省略したもので、内湾する口縁部に連続爪形文を施した隆帯を貼り付ける。7・8はC類-4で波状の口縁部である。7は波頂部下に沈線による渦巻き文が施文される。9・10はB類。10は胴部の破片であり、頸部からY字状の隆帯が垂下し、隆帯によって区画された中に半円弧文をならべる。B類-4である。12はD類の口縁部で沈線により渦巻文が施される。

#### 48住 (第73図13)

C類。口縁部は波状を呈し、波頂部から沈線と交互刺突文が垂下する。頸部は2条の交互刺突文が施され、上部にV字状の貼付文が付けられる。器面は全面に縄文が施文される。

#### 51号住 (第75図14～19、76図1～4)

75図14はB類-4の胴部で隆帯懸垂文で胴部を区画し、区画上部には波状文、下部には波状文から沈線を垂下させる。75図16・18はA類-3の口縁部破片で16は交互刺突の下に逆U字状モチーフを並べる。18は縄文を地文とし、口唇部に連続角押文を施し、口縁部には逆U字状のモチーフを並べる。75図17・19はC類、75図15・76図2はB類である。76図3・4はG類で3浅鉢で口縁部の屈折上部に縄文を施し、交互刺突文を巡らす。

#### B26口土坑 (第80図1)

G類で、口唇部に連続爪形文を施し、波状口縁の波頂部下には孔をうがう。口唇部には連続爪形文を巡らす。

#### B28イ土坑 (第80図2)

G類で口唇部に刻みを施し、器面には全面縄文を施す。口縁部内面にも縄文を施文する。

#### B'25イ土坑 (第79図4)

B類である。口縁部は下に刻みをもつ沈線によって上下に区画され、上部は縄文帯、下部無文帯となる。頸部には隆帯が施され、胴部には上部に波状文が施される。

#### A24へ土坑 (第80図3)

C類。口縁部に刻みを有する沈線を巡らし、縄文帯を形成する。波状口縁で波頂部下にはボタン状貼付文を付ける。口縁部内面にも縄文を施し、波頂部下にボタン状貼付文を付ける。

#### A27口土坑 (第80図5)

A類。胴部が膨らむ器形で、器面に縄文を施文する。胴部は頸部から垂下する懸垂文が施される。

#### C'31ト土坑 (第81図7)

D類-2である。口縁部に隆帯で円弧文を施す。

#### C'32口土坑 (第81図6)

B類-3。底部から口縁部に向かって外反して開く器形。胴上部には隆帯で半月状の区画をつくり、区画内に円形

刺突文、三角刻印文を施す。胴下部はY字状の隆帯懸垂文で区画される。

#### I' 29イ土坑 (第84図2)

B類-4。頸部には格子目文、その下に隆帯を配す。胴部は頸部から胴下部にかけてY字または逆U字状の隆帯が施され、胴上部に円文・渦巻き文が沈線によって描かれ、胴下部には沈線でY字懸垂文が施文される。

#### L' 28イ土坑 (第85図2)

G類の浅鉢である。器形は上面形が楕円形で底部から口縁に向かって緩く内湾する。楕円形の長軸、短軸上にそれぞれ貼付文が付けられ、口縁に沿って長軸上の貼付文をつなぐように刻みを施した沈線を2条施文され、貼付文からは4本の沈線が垂下する。

#### M' 28イ土坑 (第84図1)

C類-1である。口縁部文様帯には玉抱三叉文が施文され、口唇から頸部までの橋状柄手が付けられる。胴上部のふくれた部分には円弧文を並べる。口縁部と胴上部の地文は半裁竹管による条線が施文され、口唇部には細線文が施される。

### グリッド出土土器

#### A' 25 (第86図1)

C類-2に当たる。口縁部は波状を呈し、波頂部から縦位の沈線が垂下する。頸部には刻みが施された隆帯がめぐり、隆帯上にU字状の貼付文が4単位付けられる。胴上部の膨らんだ部分には半円弧のモチーフが並ぶ。

#### A27 (第86図5・87図3)

C類-2である。86図5は口縁部は縄文帯を持ち、波状口縁の波頂部から沈線を垂下させる。口唇部には連続爪形文が施文される。胴部は上部の膨らんだ部分に半円弧文を並べる。87図3は波頂に円状貼付文が付けられる。胴上部にはY字文から変化した半円文が並べられる。

### 参考文献

- 網谷 克彦 1989「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観』1 草創期・早期・前期 小学館
- 石井 寛 1993「堀之内1式土器群に関する問題」『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告』XIV 牛ヶ谷遺跡・華蔵台南遺跡 (財)横浜市ふるさと歴史財団
- 今福 利恵 1999「前期前半(諸磯式土器)」「中期初頭(五領ヶ台式土器)」『山梨県史』資料編2 原始・古代2 山梨県
- 今福 利恵 1999「山梨県内の五領ヶ台式土器」『山梨考古学論集』IV 山梨県考古学協会
- 今福 利恵 2003「勝坂式土器成立に関する一視点」『山梨考古学ノート-田代孝氏退職記念誌-』 田代孝氏退職記念誌刊行会
- (株)四門文化財研究室編 2002『和田西遺跡』多摩市教育委員会
- 谷口 康浩 1989「諸磯式土器様式」『縄文土器大観』1 草創期・早期・前期 小学館
- 谷口 康浩 1999「板橋区域における縄文時代前期中葉から後葉の土器群について」『志村遺跡第6地点発掘調査報告書』凸版印刷工場内遺跡調査会・凸版印刷株式会社
- 宮下 健司 1989「薄手無文土器様式」『縄文土器大観』1 草創期・早期・前期 小学館

### 第3項 中期中葉から後葉の土器

#### 1. 概観

本遺跡における中期中葉の遺構および土器群は、前後の時期に比較して量・内容共に勝っており他の周辺遺跡群の中核を占め際立っていると言えよう。遺跡内での遺構構築の分布状況は重複例が多数認められ、土地に対する密度は極めて濃い検出結果となり、遺跡内における土地利用の密度は高く、周辺の遺跡を圧倒している。これは、集落の長期間に亘る継続的な土地利用が起因となるものであり、この遺構群の密集度、すなわち遺構構築による夥しい重複と土器を含めた大量の遺物からは、広大な生活空間と恵まれた自然環境を背景とした安定した食料獲得活動が跡付られ、そこからは一定の人口の生活許容範囲の中での保証が導き出されるのであり、当時の八ヶ岳南麓地域における中心的な集落の可能性が極めて高いものであると考えられる。ただし、当該期における大量の土器群出土の主要因のひとつには、祭祀・宗教性を色濃く帯びた完形に近い土器群を住居内への大量一括投棄あるいは埋納行為が検出される事例（山本1987）が1遺跡内に1～数軒認められるようになるからであり、本遺跡に限らず土器群の出土量の増減問題を考える際には、単に遺構の密度・継続の長短のみだけでなく上記の点を踏まえ考慮する姿勢が重要であると考えられる。以下、本文編第5～7図の編年図に沿って説明する。

中葉の初期段階（Ⅰ-1段階）は、猪沢期成立直前段階にあたり、在地の五領ヶ台式系の強い影響下に存在する土器群と北信經由の新崎系土器、及び南信を中心とする平出Ⅲ類Aの非在地系土器との共伴関係が明確に捉えられる。続くⅠ-2段階は猪沢期が確立する時期であり、隆線文、角押文を駆使した長楕円・互違多段横帯文を基調とする土器群に斜行沈線土器群と角押文を駆使した長野県大石系統の流入による多系統の土器群の共伴関係が看取される。この様に、Ⅰ段階では八ヶ岳西南麓以北地域文化圏と南麓地域である在地文化圏との交流の結果としての複合的な土器のセット関係が看取され、中期中葉における在地土器群の成立前夜の様相として把握されるのである。また地域間交流の結果としての異系統土器群の搬入のあり方から導き出される遺跡の性格は、遺跡の位置・立地環境によるところが大きいと考えられるが、前記したように周辺集落の中心的としての位置付けと合わせて八ヶ岳西南麓・以北地域文化からの文化流入経路にあたる玄関口的性格を帯びた情報交換、集約的センターとしての一側面を維持する集落としての可能性も指摘されるのである。Ⅱ段階は、新道期並行であり土器群では、半円形状に曲線文を配した大型突起（突起B類-1と仮称）、口縁部・複合三角文、胴部・抽象文の出現が際立っていて、特に複合三角文土器群では施文は隆線文の両脇に角押、幅広キャタピラ、ペン先状工具等による両脇押付・押引文の組み合わせが駆使されて本段階の特徴を示し、以降の土器群に強い影響を及ぼしている。

Ⅲ-1段階の土器群は、口縁部で複合三角文系土器、地文・縦列沈線にノ字突起（44）（突起A類）、胴部で抽象文、楕円横帯文、方形区画文で構成される。特に方形区画文は初源期に当てられ、その内容は半載竹管工具による平行沈線で均一に分割された方形区画文で、横帯区画文の遡源に比定される区画1段が頸部に施される例と縦区画文系の整然2段組み構成で胴部を1周する例と僅かに互い違いに配する2系統が認知される。区画は全て単純方形を呈していて、稀ではあるが方形区画の一部がㄣ状によりカットされる。

Ⅲ-2段階の中部山岳及び関東の土器様相は、小地域、遺跡ごとに個性が際立つ時期であると考えられ、突起に関しては八ヶ岳南麓・甲府盆地東縁部の笛吹川流域を中心とした隣接地域に及ぶ中・地域的な広がりをも認める事が出来、本遺跡においてもこの傾向は例外にもれない。八ヶ岳南麓を中心とした小地域で酒呑遺跡特有な土器様相を呈する例として、Ⅲ-1段階の44の系譜を引く、口縁部の突起A類に口縁部縦列沈線が配する例、独特な形態を呈する筒状突起、さらに胴部においては区画文が、4単位・Y字状懸垂文で区画後、内側にクランク状沈線、方形区画文を配する例があり、小地域（2遺跡あるいは数km以内）あるいは1遺跡に限定され、制約された領域内で局地的な特徴を示す例が顕著である。

次に比較的広範囲に甲府盆地および隣接地域にかけて分布する例では、横帯区画文、複合三角文の変形としてとらえられる波状隆帯文、対抗隆帯文等が際立っている。また、大型突起は円窓と蛇状隆帯を組み合わせた対称を呈す



る突起B類-2に変容して、中期中葉土器群を構成する基盤的モチーフとして浸透している。

前段階に出現した方形縦区画文は、いずれも直線・垂直区画を基調とし、半載竹管工具によって両脇を平行沈線文で内部は低いカマボコ状に施文される。本段階においてもその施文手法や縦区画は継承されるが、区画の内部では前段階までは平行配列を基本に配され、僅かな互い違い文様も認められたが、本段階では2次区画において1段・2段・3段に区切られ、それらは互い違いに交互配列され複雑な区画配列に変化している。また、突起B類-2を付帯する区画文では、主突起および副突起から隆帯・単純J字懸垂文が垂下して、体部の文様は4分割され、さらに懸垂文間の空間には半載竹管工具による平行沈線文の2次区画が施され一連の連続作業による施文活動が看取される。これらの変化から次段階に普遍化して定着する2段階区画工程の初期段階としての認識が可能であると考えられる。

続くⅢ-3段階では、区画文土器と突起B類-2が確実に定型化して定着・安定する。

また、特記される事項として本段階に認められる区画文は、土器体部を隆帯・隆線文による懸垂文で4単位あるいは2単位の縦位・大分割を目的とした1次区画を施し、区画された空白部には、懸垂文に沿って小区画（半載竹管工具による2次区画）が施され、最終作業として2次区画内部に細部文様を充填するという一連の施文作業、すなわち2段階区画工程が確立されたことである。

この、2段階区画工程の1次区画は、大分割の区画帯には隆帯によるJ字、I字、またはJ+h字を1単位とした組み合わせ文等による懸垂文をほぼ等間隔に配置し4分割あるいは2分割にする。2次区画は、懸垂文に沿って2次区画を半載竹管文工具により施すがJ、I、J+h字懸垂文を線対称とする為、垂直・直線区画が崩壊して曲線的要素を含んだ複雑で幾何学的な小区画が急激に展開して曲線的要素を含むことによって、方形縦区画が大幅に変容する事実である。さらに、最終作業として2次区画内には、区画隆線に沿って、蓮華文、キャタピラ文、斜行集合沈線等が充填され一連の2段階区画工程による施文作業は完了する。以後この2段階区画工程は、Ⅲ-5段階まで継続して普遍化する。

Ⅲ-4段階では、2段階区画工程の定着は確実なものとなるが区画隆帯文および区画内部での、蓮華文、キャタピラ文は省略され、前段階のような華やかさを兼ね備えた力強い装飾性は消失するが、土器群の中における区画文の構成比率は増加して普遍的で安定した位置付けが確定される。

突起類は、A類、B類-2にバリエーションが際立ってくる。A類では、突起端部が大型装飾化して円形突起に変容するものや、突起形状が双環状に変容するものが増大する。また、他形態の突起と交互に配列されるものや、B類-2・1個（大突起）+A類・3個（小突起）に配列される例が定式化され、副突起として多用されて、以後中期中葉における土器群の口縁部装飾の基盤モチーフとして固定化して継承される。

突起B類-2では、突起上部の隆帯文は円窓対称に蛇状隆帯文と円窓に沿った隆線文とに分かれ本流となるが、その片方の部分が省略されるケース等が増加してバリエーションが豊かになる。

口縁部では複合三角文から玉葱文への発展解消、突起B類-2とキャタピラ隆帯文系との組み合わせ併用が固定化する。胴部文様では、縦区画文系とキャタピラ両脇押し付け隆帯文系が主流となっており、楕円横帯文も量的には多くはないが顕著である。また、特筆すべき事項として縦区画文土器での口縁部直下に施された隆帯が本段階では肥大化して断面が三角形を呈する鐔状隆帯に変容し、さらに区画文とのセット関係が確立定着して鐔付土器の成立を見ることにより、本段階の位置を特徴付ける決定要因となる事である。

Ⅲ-5段階は、前段階の製作技法を継承するものとして、突起A類・B類-2、鐔付土器（縦区画文）等が上げられる。新要素としては器形の変化と4本三角小突起、および突起装飾の左右対象化に伴う円窓の突起本体・中央部への移行、区画文内における文様の半肉状化への流れ等が上げられる。器形では前段階までが、直線的に開くバケツ形が基本形であったものが、本段階では口縁部が大きく内湾する通称キャリパー形、胴部中央が大きく括れる形態、口縁部直下が膨らむ体部3段深鉢形等が加わる。また本段階では、出産状況等を反映させたと考えられている人面付装飾文が突起部に導入され普遍化するが、酒呑場遺跡では、突起が打欠により消失され、胴部中央よりやや上位に施された、双環突起直下に人面装飾が配された大型破片（177）が検出されている。八ヶ岳南麓を含む甲府盆地では、この種の土器は通称、出産土器、誕生土器と愛称されていたものであり、本稿ではそれらの経緯を尊重して、以後、当該

モチーフについては出産文、土器総体を出産土器と認識し呼称することとする。

2段階区画工程では、1次区画懸垂文の間をU字隆帯文により区画隆帯文が接合される手法が加わり、さらにはJ・I字懸垂より派生した隆帯が区画内部に入り込み、2次区画が施されない例が増加する。替わって1次区画内部は大柄な三叉文、渦巻文が直接、筥状工具等により印・描刻され2次区画工程の崩壊が急速に進行する過程が認められる。

突起は、B類-2とA類の組み合わせがⅡ段階から継続して共に装飾・大型化して存続するが、新たな意匠としては円形文の頂部が小型三角形を呈する突起や双環突起のI対2単位、が加わり全体の様相としては、より装飾効果を意識した大型化への流れが進み、小型三角突起の中には、突起下部に双環突起を取り込むタイプの形状も認められ、次段階のメルクマールとなる塔状突起に代表される4本大型突起の遡源形態(61, 78)を示す例も看取される。

以上、本段階は中部山岳・勝坂土器群における井戸尻I式並行期とされるが、B類-2突起、鏝付縦区画文土器の終末的要素が残存する様相からは、中期中葉第Ⅲ段階(藤内式系統)からの変遷過程のスムーズな流れの中での延長上に位置付けがなされる。このような現状においては、本段階に画期を求めず、Ⅲ段階終末期の範疇の中で捉えたほうがより合理的と考えⅢ-5段階と解釈した。

つづく第Ⅳ段階の土器文様および突起装飾において重大な変革が認められる。すなわち中期中葉に創出され、中期中葉土器群の基盤モチーフとして展開してきた縦区画文系土器、突起B類-2系が完全に消失する事実であり、替わって継続期間の短命な、4本(1対2単位)塔状突起の体現を観ることである。これらの事由からⅢ段階の土器群の影響を僅かに残すものの、土器様相に限って見る限り重大な変革と認められるため、Ⅲ-5段階との間に画期を設けることが可能と判断した。

この他の、新たな文様要素としては、口縁部は褶曲文、胴部は無文地への連鎖状隆帯文、隆帯文による施文が主流となり、文様の簡素化が進行する。

尚、該期の遺物群の問題は4本塔状突起の存在により派手な一面が強調されるが、その反面、本段階の土器群の組成の内容は、本遺跡を含めた八ヶ岳南麓や甲府盆地東縁部での、住居内一括廃棄行為と認められる出土例が少なくなり土器が1～2個埋納される土坑内出土の検出例や単独出土等が多数認められるなど、宗教・祭祀形態の変革等の諸条件が起因となり一括資料が不足し、土器群の組成に関わる実態について不明瞭な点が多いのもこの段階である。この為、該期を代表する遺物群としては甲府盆地東縁部に位置する一の沢遺跡4号住居址・56・57号土坑における一括遺物に依存するところが多く、それも全器種をカバーしたとは考えがたく、Ⅳ段階土器群の同時性の把握への確実な方法を用いた基礎的作業への取り組みが急務と考えられる。

中期後葉Ⅴ段階以降では、土器の出土量は激減する。各段階での内的要因は一樣ではないが、出土土器の減少の要因として、再三触れている祭祀形態の変容に伴う一括廃棄行為の隠退が主要因として上げられる。また中期終末段階では生活面が中葉期全般と比較して数十cm上位に位置し、確認面や包含層、遺構上面が後世に削平により消失している事例が多く看取され、住居確認の際においても床面、炉体のみを検出例が多く床面密着または土坑以外の遺物は消失する事例も確認され立地条件・遺構等の保存状態などの条件をも考慮する必要がある。

## 2. 出土土器・中期中葉

I段階(猪沢期併行)本遺跡では初源期・成立期の2段階の認識が可能である。

### I-1段階

五領ヶ台式期の様相を継承する一群を中心に、新埼式系、平出ⅢA類で構成される。1は、口縁部に沿って、幅広角押文と角押文が施され、それらから等間隔に沈線が垂下し括れ部まで達する。この垂下する沈線の施文法は一揆に線刻するものでなく、1～2cmで留め押す方法で沈線と角押文との中間的性格を有している。このあり方は、本例のものから本格的な角押文すなわち小刻みな押しによる角押文に移行する過程が読み取れる。胴部は無文地に粘土紐がクランク状に貼付される。2は、細長深鉢形を呈する北信経由の新埼式系統の深鉢土器である。口縁部が緩やかに外反し、頸部で僅かに括れ、胴部上位で膨らむ深鉢の形態である。施文部位は口縁部文様帯、胴部文様態に分かれて、

口縁部文様態では3条一束の平行隆線により3段構成される。また、口縁部下部に縄文帯を挟んで、口縁部及び括れ部上部に、半裁竹管を押し当て半円形状の上部をつくり、外側2本と中央1本の直線による印刻で疑似蓮華状文帯が作出され一周する。胴部は半裁竹管工具と削り出しの手法による擬隆帯で縦区画状文を基本としており、懸垂文の先端には継手文も看取される。口縁部は小突起を有し、そこから(し)字状文が頸部まで垂下する。3は平出Ⅲ類Aである。口縁部は、大きく外反した後、僅かに、く字状に屈折する。口縁部には、口縁部上端から派生したように4単位・粘土貼付文が看取され、押引文が充填する。括部上位は、細線による不規則な格子目文帯が施される。

#### I-2 段階

隆帯文に沿って幅角押文、角押文が施文されるものが主流となるが角押文のみのものも存在する。文様帯は多段化する。口縁部は、4単位区画が定着し文様帯を形成する。区画内に角押文によるコ字状文を連続配置するもの(6, 17)、角押文が全面に充填されるもの(8, 11, 20)がある。

長楕円を4単位・3段に配置する16は、突起状に途切れた口縁部を有する。胴部は楕円区画文と重複するようにクランク状隆線文が垂下する。非在地系では、斜行沈線文系(22, 23)や胴部に北陸系の懸垂文が認められるもの(24)が看取される。22は、4単位の突起A類で区画され、区画内は斜行沈線文で充填される。胴部上半には貼り付け文による楕円区画が、下半は無文地にクランク懸垂文が施される。

23は、口縁部に交互刻み目文を施した後、さらに沈線文を配し、括れ部及び胴部上端に楕円区画文帯が施文される。口縁部への装飾意匠は北信地域に認められ、甲府盆地では時間的にやや遅れ、盆地東縁部に出土の類例がある。24は地文縄文の胴部に擬隆線文が施されている。

#### II 段階

幅角押文を主にペン先状工具による連続刺突文が施されるが角押文は隠退の傾向を示す。本遺跡の住居発見数は多くないが56号住居に土器群がまとまって検出された。基本器形は底部から胴下半まで直立した後直下まで急外反し、口縁部は天に向かって垂直に伸びる形態と底部より直線的に外反し口縁部に至る深鉢形の二種が認められる。口縁部突起装飾は、I段階からの突起A類の確実な定着が認められ主突起に用いられている(30, 34, 29)。また、新たに加わる半円形、裏面皿状の大型突起B類-1の外側は、隆線文の先端あるいは途中部位に小ラップ状を呈する半渦巻文、曲線文が貼付される(26, 27, 28, 37)。文様は、口縁部の隆帯の両脇に連続爪形文で押し引きによる複合三角文の横帯文が新たに加わりかつ盛行する。三角文の内側には玉抱三叉文が施文される。胴部以下は、角押文による波状沈線を中央に配した無文帯と三角横帯文が交互に積み上げられ多段となり(26, 28, 34, 39, 42)、特に26, 42は胴部文様帯が中帯状となる。29, 37の抽象文土器は、粘土貼り付けで施飾される。

#### III-1 段階

本段階は、方形区画文土器の初源期にあたり、この区画文土器を考える上で重要な位置を占め、類例は近年少数ではあるものの増加する傾向にある

C区11号住居址一括と1号住居出土土器が充てられる。口縁部は、半載竹管工具、棒状工具による集合縦列沈線(44, 45)、口唇部に一周する粘土紐からの突起A類(44)、複合三角文(47)、等が際立っている。主な文様は、縦区画文系(44)、楕円横帯区画文(45)、両脇キャタピラ押し付け隆帯文系(45, 46, 47, 48, 51)、抽象文系(52, 53)、平出Ⅲ類A系(50)である。縦区画文は半載竹管工具のみで施文されもので、口縁部では縦列沈線で充填されそれ以下に縦区画が2段構成で整然と全周する(44)や、複合三角文、方形区画文も認められる。横帯区画系は、口縁部に縦列沈線を配し、頸部に1段の楕円区画文が1周する。また胴部は、同一施文具により隆帯文が擬隆帯状に配される。いずれも古式段階の様相を呈する半載竹管工具のみによる擬隆帯区画文土器として捉えられる。抽象文系土器は、全面縄文で、粘土貼付文である。文様は、I-3段階に認められた23の様にリング付き楕円文は4単位でそれぞれが離れて配置されていた。しかし本段階にいたると4単位に変化はないが、楕円区画文が接して横帯文を構成する。また、小型樽形土器では、楕円横帯文が多段に認められる(49)。

#### III-2 段階

口縁部は、縦列沈線文系、横区画文系、波状隆帯文系、複合三角文系の4系統、胴部は両脇キャタピラ押し付け・隆帯

文系と、区画文系の2系統で構成される。複合三角文系では、前段階の形態を保持しているがその頻度は低くなり、波状隆帯文への変化が捉えられ(61)、さらに波状文の確立へと連なる(66)。また、波状文の原形あるいは複合三角文の変形とみなされる対抗波状隆帯文(59)が認知されるが、これはⅡ段階・横帯文の区画内(37)にモチーフの源流が求められる。

2段階区画文は縦区画、横区画の2種が認知される。縦区画文は、新たに隆帯によるJ字懸垂文、Y字懸垂文により1次区画される。2次区画は、1・2・3段、斜位1段、クランク状・方形区画文等に分割され、多様となる。Ⅲ-1段階に続き区画文の発展形態として2段階区画文土器のⅡ段階として把握される。

ここでの2次区画隆帯文の渦巻文の使用頻度は高いとはいえないが確実に定着している(62, 64)。口縁部は、半載竹管工具による縦列沈線による例が特徴的であり(64, 65, 69)、さらにこの縦列沈線は胴部下位にも施され(65, 66)、酒呑場遺跡での本段階の特徴を示す一要素となっている。

横区画文は1例(54)が検出される。突起A類と対応するように区画文は口縁部に認められ、括れ部から胴部にかけては、キャタピラ文・両脇押付隆帯文で楕円横帯文が施文される。区画文と隆帯文との合体が体现された一例である。

突起B類-2は2例が確認される。下部は隆帯文によるJ字懸垂文となる。口縁部は4単位に分割される(62)。筒状把手(58)との組み合わせによるもので共に特異な形態を呈している。

突起A類は44の伝統を強く残した、口縁部上縁の隆線から口縁部にノ字に連続して施されⅡ-2段階からの連続性を強調する64も存在する一方、突起の捻りの末端処理は円形文に処理されモチーフ化された54, 70が出現して在地化への進行が加速される。このように本段階のあり方は、広く他地域と共通性が認められ比較検討可能な広域的モチーフと、限定された地域的特色を有する2面性が他の段階に比較して強調され、際立つのも事実である。

広域的モチーフとしては、口縁部・対向波状隆帯文(58)、複合三角文の退化形態として本段階より普遍的に検出される波状隆帯文(66)、さらに突起A類が上げられる。

対抗波状文は前述したⅡ-1段階のモチーフ群中に遡源が求められ、笛吹川上流部の町田遺跡に類例が検出され、伴出遺物からも時間的に併行関係が確認される。

突起A類は、前段の施文法(44)を踏襲する64と、モチーフ・装飾化(54, 62, 70)が進行して、その突起の保有は以後Ⅳ-1段階まで中期中葉土器群の内において基盤要素となる。

地域限定モチーフとしては、縦列沈線(65, 66, 69)と三角・小突起(57)が上げられる。半載竹管工具による平行縦列沈線は、Ⅲ-1段階からの継続であり、本段階では口縁部、胴部下位に多用され、今日までのところ、この種の施文法は酒呑場遺跡に限定されている。今後、周辺地域で類例が増加するものと考えられるが、八ヶ岳南麓地域の中で局地的に限定された特徴を示す類系としてとらえられる。

逆三角・小突起は、Y字状懸垂文の頭部の内側に三叉文、集合沈線を施文した例で、今日までのところ、公表された報文中には見出せない。本例も周辺地域での類例の増加が予測されるところであるが、やはり限定された八ヶ岳南麓の地域的特徴を示す例として上げられる。

この地域限定モチーフの2例は、八ヶ岳南麓において独特な意匠として捉えることが可能であり、その系譜は同一遺跡内より検出されたⅢ-2段階に求められ、その発展型式として体现したと考えられそして、当然そこからは独自性の強い集団の存在が想定される。

又、本段階は、中部山岳地域の所謂猪沢・新道段階に次ぐ移行期に該当して、藤内期初頭に並行すると考えられるが、本遺跡の土器群文様・意匠のあり方からは、従来の藤内式初頭の特徴は希薄であり型式帰属については甲府盆地の関連遺跡との比較検討の中で論議されるべきであると考えられる。

### Ⅲ-3段階

本段階での縦区画文は、隆帯のJ字懸垂文と直線懸垂文とを組み合わせた1次区画と、1次区画に沿って半載竹管工具により平行沈線文で2次区画される2段階区画工程の確立と普遍性が特徴となる。また、懸垂文の頭部に小型双環突起(76, 81, 82)が付着するのも本段階からである。79は、隆帯文系としてはデフォルメされ原型をとどめな

いものの複合三角系が際立っていて、隆帯による船状の区画と縦列沈線が交互に配され、口縁部文様帯の直下に波状隆帯文を配し、その上下に三叉文で充填してその残影を残している。さらにその下部には区画文による横帯文、底部は縦列沈線で構成され、古式と新式の様相を併せ持つ固体である。

縦区画文の71、72は、J字隆帯懸垂文と直線を組み合わせ、区画懸垂文で4分割した後、1次区画隆帯に沿って半載竹管工具による平行沈線で幾何学あるいは曲線文を施し、さらにその先端部は渦巻文が多用される。これは、従来の細長縦区画文に、J字・I字・h字文との組み合わせた懸垂文の導入による影響が大きく、均一的な方形区画の一部が必然的に崩壊するとともに、横・斜位の空間的広がりを意識した区画文が発達する。

突起では、突起B類-2が縦区画文土器に付き、背面は双環を形成せず皿状となる。この形態は、八ヶ岳南麓に多く認められるが、甲府盆地東縁部ではⅢ-2段階にわずかに認められるものの類例は少ない。77は、隆帯で4区画にされた後、1段構成の縦区画が横帯文で施されている。

特殊な形態を示す、口縁部としては、77の様に4単位の懸垂文で区画された口縁部上端をを等間隔にU字に切り取った形態を呈する例。80の様に半円でボール状に膨らむ波状口縁部を有する例が看取される。この2形態は本遺跡87や周辺遺跡の次段階の土器群に継続する。

### Ⅲ-4段階

本段階は両脇キャタピラ付複合三角系、縦区画・横帯区画文系に平井出3類A系統が伴う。形態は、口縁部が丸みを呈する例と、直線的に開く細長いバケツ状を呈する2種が主体である。後者は、口縁部付近に取り付けられた隆帯文が極端に肥大化して鏝状隆帯文付土器（鏝付土器）となる。この鏝付土器の胴部文様は縦区画が施文されセット関係が確立し慣習となって定着し、釣手土器、脚付土器等が共伴する。

突起形態は、突起B類-2（84, 97, 98, 120, 128, 141, 150）、突起A類（85, 86, 138）、三角状突起（89, 112, 113, 125, 151）、円形状突起（106, 109, 128, 141）、双環状突起（101, 104）等が認定され多種となる。A類突起は更に装飾化が進み先端部分は渦巻円形（85, 86, 138）もしくは、双環状把手（134）に近い形態も出現する。また、突起単位では、1大・3小突起（84, 100, 150）、単独（88, 89, 92, 95, 97, 98, 109, 110, 112, 113, 141）、2対式（101, 104, 130, 138, 139, 148）がある。1大・3小突起は、大突起がB類、小突起がA類となり、単独では三角突起が多く、B類もわずかに検出される。2対式はA類が基調となっている。

突起B類-2は、円窓対称に片方に蛇状隆帯文と円窓に沿った隆線との組み合わせ（84, 150）、円窓対称の片方が省略され蛇状隆帯文が残ったもの（97, 98）、円窓に沿った隆帯のみもの（106, 120, 128, 141）、デフォルメされたもの（110）等に細分されバリエーションが豊かである。

突起A類では、突起が大型化して円形に変容するものや（86, 138）、突起形状が「J」字から双環状に変容するものが（130, 134）際立つ。

複合三角文（111）は僅かに残るが、大部分は変容もしくは退化する。変容例としては4単位小突起の下位に、キャタピラ隆帯文によって玉葱状に区画され、その区画された中には縦列沈線が充填された例が多く認められる（130, 134, 138）。又、これらを形成する両脇キャタピラ押し付け隆帯文は、胴部で、三角区画・先端蕨状懸垂文を形成し、土器構成の中で重要な位置を占め基盤モチーフとなっている。

区画文は、縦区画文を基調とするものが主体を占めるが、横帯文も顕著である。縦区画文での2次区画内は、1～2本引による集合沈線を充填されるものが多用され、区画自体も2段から3段構成まれに4段に分割され、それらは交互配列される。

このように、縦4区画、2段階区画工程が安定・定着化して、J字・I字・B字懸垂文による1次区画がされるが（106, 112, 132, 136）、まれにU字隆帯文に区画され、三角区画、楕円区画等が加わり区画文の全体的流れの傾向としては簡略化と施文単位が大柄な半肉系文様形態に移行する。横帯文は、主に口縁部、括れ部、底部付近に施され、121では器面全体に及ぶ互い違い多段楕円・横帯文が認められる。口縁部に横帯区画される91は、半載竹管工具により区画隆線が突起A類に対応する方形区画が看取され、波状隆帯文・三角区画（107）で、楕円横帯文は括れ部（124, 126）、底部（134）に認められる。

### Ⅲ-5 段階（井戸尻Ⅰ段階並行）

本段階は、前段階から形態、文様を引き継ぐものと新たに創出されたものが加わり器種構成は中期段階において、最も複雑な様相を呈する時期であると言える。新たな形態としては、以下に述べる5形態が看取される。

1. 口縁部が大きな無文帯を有し内湾するキャリパー形を呈する。胴部は大きく屈折する底から、口縁部まで緩やかな曲線を描く。口縁部下位には前段階の影響を強く残す鏝状隆帯文が一周し、胴部は中帯状の区画文を施す。口縁は、無文化、大形化したキャリパー形となるが、前段階から続く鏝付区画文土器の最終形態と考えられる（155, 158）。
2. 最短径の底部から括れ部までは緩やかに膨らみ、括れ部は、く字状に外反し口縁部まで直線的に開き、肩部径と口縁径がほぼ同一で最大径を測る（154）。
3. 口縁部下位が膨らむ（169, 181）。
4. 口縁部は大きく内湾するキャリパー形で、体部中央で括れる背の低い達磨状を呈する（176, 192）。
5. 大きな屈折底と口縁部で極端にく字状に内折し広い平坦面を形成し、突起を乗せる（173）がある。

以上、1～5形態がⅢ段階の形態の新要素であり、前段階からの、系統を引く複合三角文系統の意匠を施文する例（174, 203）、体部バケツに鏝状隆帯文を配したのもの等で構成される（161）。

文様を形成する全体的傾向として、隆帯文は、刻み、綾杉刺突、交互刺突が加えられ、さらには幅広半肉状への傾向が急激に進行する。又、区画文は、胴部下半部に空白帯を残し、中帯文（藤森1965）と呼称される区画が新たに胴部中央部に施文される。区画文では、J字・I字懸垂文により1次区画され2段階区画工程は踏襲されているが、懸垂文に沿った2次区画は隠退傾向に向う。それに変わり区画内ではJ字・I字懸垂文を単に隆帯文で連結させ（155）内部に半肉文を施文したものや、さらに懸垂文より枝状に派生した隆帯が区画内に入り込み施文効果を決定付け、2次区画が省略されるものが主流となる（154, 214）。以上のように区画内部は前段階まで顕著あった2字区画文が省略され退化傾向を示し、器面へ直接、印刻描きが施される半肉系の三叉文、渦巻沈線文の大柄な施文が主流となり2段階区画工程の崩壊が観て取れる。そして、新たな文様要素として、粘土紐貼り付けによる対抗U字文が加わる。

突起・把手での大きな特徴として、突起形態が正面・対称形に限りなく近い形態に整備されて、僅かに左右を変形させた擬対称となることである。さらに、中央に円窓を有する突起（154, 215）、三角突起（155）では、この傾向が顕著となり突起両端部には小リングが付帯してその効果を向上させている。

小リングの付帯は、左右非対称形が基本である突起B類-2にも及び（220）の例、非対称形突起（160, 173, 206）、においても突起両端部には、小リングが付帯する。このように、本段階の突起の大きな流れは、正面对称形に伴う円窓の突起中心部への移行と、小リングの付帯の条件が付け加えられるという傾向を示す。

さらに、突起B類-2系の影響が強く、デフォルメされた類が多く認められるが、その代表として（159, 160, 193, 203, 215）が上げられ捉えることができる。この中で特に注目されるものとして、円窓を中央に配置し突起両端に小リングを配置し対称形・突起を有する（154）がある。

154は土器の形態・突起形態、施文法等が海道前C遺跡、須玉・御所の前遺跡で検出されている人面付装飾土器と同タイプに属するもので、突起中央に位置する円窓は海道前、御所の前では人面が入れ替わった様態となっており、この事項を重要視して考慮するならば、人面装飾付突起は、形態に限って観れば、突起B類-2の亜種または発展形態としての認識にむけての検討も可能となってくると思われる。また、173の突起は獣面把手の一種として考えられた経緯があるが、やはり、突起B類の変形として捉えておく必要がある。また、出産状態を示唆すると云われる人面装飾が胴部に施文される177が検出されているが、文様として動態が盛り込まれている事項を重視して出産文様として認識する。

三角状突起は、細く背が高くなり、ラッパ状突起の捻りは消失し、板状となる（155, 191, 214）。

4本・突起系では、2対4本型式が多く小さい三角状突起を有する（183, 184, 208, 209）。塔状突起の遡源形態を示す（176, 179）は、キャリパー形口縁部上端に配置する。突起下部に双環を施して中空とし、その上部に僅かに形状を整えた造形が認められる。

Ⅳ段階は、大型で中空を呈する4本・大型塔状突起の出現とそれに合わせるかのように突起A類、突起B類-2、2段階区画文系土器が消滅する事実を重要視し画期を求めた。本段階の塔状突起の下部の双環部は前段に比較して突起本体と一体化する為、正面は狭まり側面では双環形から円窓形への移行が際立ったものとなる。

出土資料のうち、4本・塔状突起(232, 234)以外の組成は、粘土紐貼付文土器(236, 240)、褶曲文土器(233, 235)、大型深鉢土器(242)、非在地系土器(238)があげられる。本遺跡での遺物の出土量は極端に減少し、土器が2固体以上出土した住居はB区13住居(229, 230) 98住居(226, 229)にすぎない。

塔状突起は以下に記す3例がある。232は頭部がやや尖り裾部が広がる。大型化した箱状の4本・中空突起であり、下部では双環突起からの系譜であると考えられる円窓が双方に開き突起に組み込まれた形を呈する。突起から半肉隆帯文がキャリパー形口縁部に及び重厚なものとなっている。土器本体は、底部が大きな屈折底となって特徴付けている。甲府盆地には類例はなく、本遺跡を含む、八ヶ岳南麓以北に中心が求められる。234は、立面では三角状を呈する大型中空突起を有し、上端正面には粘土貼り付けによる蛇状隆帯文がW字文の突起になっている。その両側には鋭角な波状隆帯が巡る。W字文の直下には双環の変形が配される。側面中央には、円窓が空けられ、頂部両端の内面にはデフォルメされた蛇状頭部装飾が配置され、やはり、八ヶ岳南麓が中心に求められよう。

229は、口縁部が極端に屈折する形態で、口縁部無文、胴部が縄文である。

246は頭部に横向きのデフォルメされた通称、蛇頭文を配置し両脇45°に傾斜する肩部を有する。その構造は蛇頭の直下から粘土紐による頭部・渦巻懸垂+双環突起+粘土紐渦巻懸垂からなり、口縁部上端部は、突起下端部と蛇頭下端で途切れる形態となる。

233の褶曲文土器は、把手を有した痕跡がうかがえる、6単位の櫛歯文が配された土器である。

238は、非在地系とした。その事由は口唇部上を、薄麺状隆帯文が全周する様相を根拠とするが、北信地域を経由した火炎系土器口縁部の影響を想定したものであると考える。

本段階は、甲府盆地東縁部の笛吹川東岸に位置する一の沢遺跡4号住居一括及び、56号土坑の検出から、その組成がより明確となったものの、該期では甲府盆地周辺の資料を観ても一括検出の資料には恵まれず、一の沢4号住居の出土状況の特殊性と土器組成がより際立ったものとなっている。本遺跡を含めた八ヶ岳南麓地域における塔状突起の出土例は少なく、共伴関係も不明な点が多い。この点についてはすでに述べてあるが祭祀形態における要因が大きく影響しているものと考えられる。加えて、甲府盆地東縁部と八ヶ岳南麓地域における地域的差異が明瞭となってくるのも要因のひとつであろう。今後、当該期における出土状況の詳細な把握とともに正確な共伴関係の判別作業が最重要課題とされる。

### 3. 出土土器・中期後葉

#### V-1 段階

井戸尻期から曾利期への移行過程に当たり、多摩丘陵・武蔵野台地における縄文・中期9C期(黒尾・小林・中山1995)に並行する。本遺跡での遺物出土量は僅少である。

本遺跡で出土した土器は底部から直線的に開くバケツ形を呈する(244, 246-2, 247, 248, 250)と大型で括れ部付近が膨らみ胴部は緩やかな曲線で底部にいたる深鉢形態(245)が認められる。

口縁部は、無文帯を有し、4単位W字状突起(247, 248, 250)と3単位渦巻突起(246)が粘貼される。施文は、刻み隆帯文のみで区画され内部には集合沈線が充填され(244, 245)、頭部に粘土紐による渦巻文を有する懸垂文で対抗U字文を配される。また、括部の楕円区画横帯文を配する例では(247, 248)が際立ち、楕円の区画内では渦巻文を基調とした偽反射鏡文が配される。さらに、器面全体に半肉状に先端渦巻文、三叉文が施文される例も認知される。

#### V-2 段階(曾利I式古段階)

本段階の土器検出量はさらに激減する。また、以下の土器型式は、(櫛原1997)の分類基準による。

252は比較的大型の深鉢で、打欠行為を伴う破片埋納土坑内より検出された、口縁部、胴部下位を欠損する破片で

ある。これから推測すると、括部に頭部渦巻懸垂文で4分割した後、内側に対抗U字文を施し、内側に半肉状の偽対象渦巻懸垂文を充填する。地文は、棒状工具による1本引きである。本例の、対抗U字文・深鉢土器は、周辺遺跡では、甲ツ原遺跡に出土例があり、類例は多いとはいえないが甲府盆地全域に広く分布が認められる。また、対抗U字文により区画された内側には、半肉状に施文された偽反射の懸垂文、渦巻文が看取され古相を呈するが、ここでは曾利段階としての基礎的モチーフである対抗U字文の成立を重視し、曾利Ⅰ古並行段階とした。

#### V-3 段階（曾利Ⅰ式新段階）

土器形態は、深鉢土器AⅠ型式、AⅡ型式、B型式、渦巻把手状装飾土器で構成される。地文は基本的に集合条線を多用する。

253深鉢は、V-1段階からの継承として捉えられ、胴部上部の懸垂文頭部に粘土紐による瘤状・渦巻文を有しそれ以下は蛇状懸垂となる。

渦巻把手状装飾土器は、円錐形の体部と双環状突起を合体させた形態であり、口縁部への装着単位は、1対2単位と1対式の2種が認められ、突起の間は、突起に隣接する隆線文が、U字状に連絡して内部は無文帯となる。

突起の意匠は、丁寧に整形された3条前後の粘土紐で重圏文が施され、下部の双環状突起との間に曾利期特有の蛇状隆線を粘貼する例も看取される。

1対式（256）の連結帯は、対称となる双環突起の両端双方の下部から伸び、8字を形成して側面中央で接して僅かに三角状に突出し頭部に有孔を有する。

2対式・4本（254）での、把手間はそれに隣接するU字文と双環突起下部から伸びる隆帯連結帯が平行に施される。

これらの土器の連結帯の位置は頸部に下降し、中空状あるいは隆带状に施されるが、この中空・連結帯の系譜はすでに渦巻把手状装飾土器の変遷過程で触れており、（小林2003, 2004）すでに突起間の小突起と連結帯が頸部へ下降する過程を明らかにするとともに、笛吹川流域を中心に展開したことを説いたが、本段階のあり方から観ると、それらの突起連結土器の一連の動きが八ヶ岳南麓地域にまで波及していたことになる。口縁部無文地にU字文を配する例は、甲ツ原遺跡第156号土坑出土例に見ることができる。また類例として、本地域以外では甲府盆地東縁部の一の沢遺跡・第5号住居に出土が認められる

#### Ⅵ段階（曾利Ⅱ式段階）

A4、B型式で構成される。262は、口縁部・重弧文で頸部に粘土紐による格子状の文様帯を配し、胴部は地文条線に粘土紐による懸垂文が施文される。263は、胴部に地文縄文を施し、頸部に4単位・対称X字状把手を配する。把手下部はそのままU字懸垂文となり次のX字状把手に連続する。

#### Ⅶ段階（曾利Ⅲ式段階）

B、C、F型式で構成される。口縁部は、276の斜行条線、271の重弧文、266のつなぎ文が際立つが、口縁文様帯を形成しない例が存在する（269）。271は、地文条線に大柄渦巻文が施される。

#### Ⅷ段階（曾利Ⅳ式段階）

A4、D、F型式と壺型で構成される。D型式（278, 280, 283, 286）の口縁部文様帯は衰退する例が大半を占める。文様帯が残るもの（283）は、横組楕円区画となるが先端渦巻は認められない。A4は、S字系4単位X字把手（276）がある。胴部は地文条線に大柄な渦巻懸垂文が展開する（237）。

#### Ⅸ段階（曾利Ⅴ式段階）

A4、D型式が認められる。口縁部に平行する1本の沈線を施し、その下にも沈線によるコ字・棒状区画を配する。内側はハ字状沈線が充填される（296～299）。301は、棒状区画が衰退し、細条線が施される。

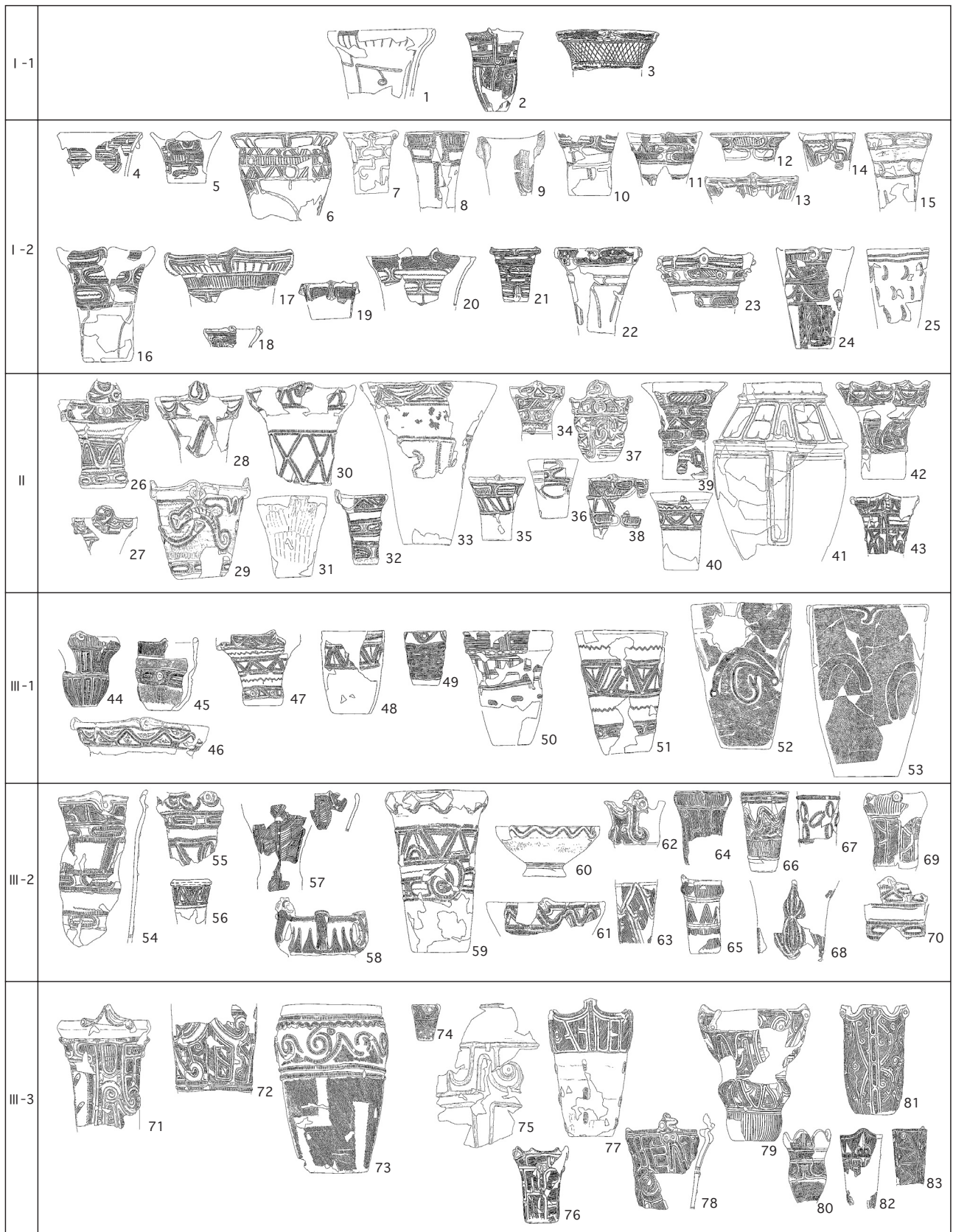
#### 参考文献

藤森栄一編 1965『井戸尻』中央公論美術出版社

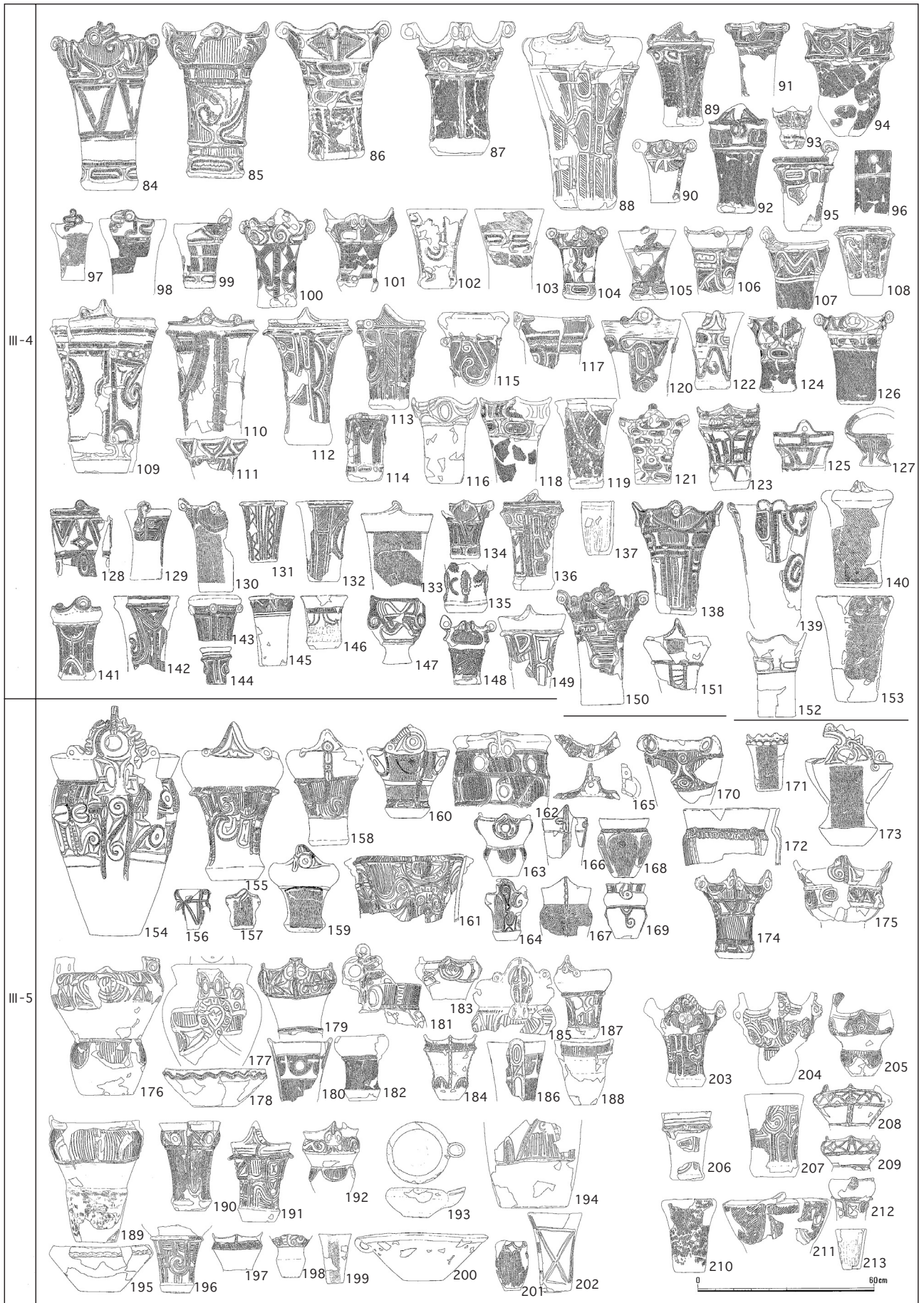
山本 輝久 1987「縄文中期における一括遺存土器群の性格」『神奈川考古』3



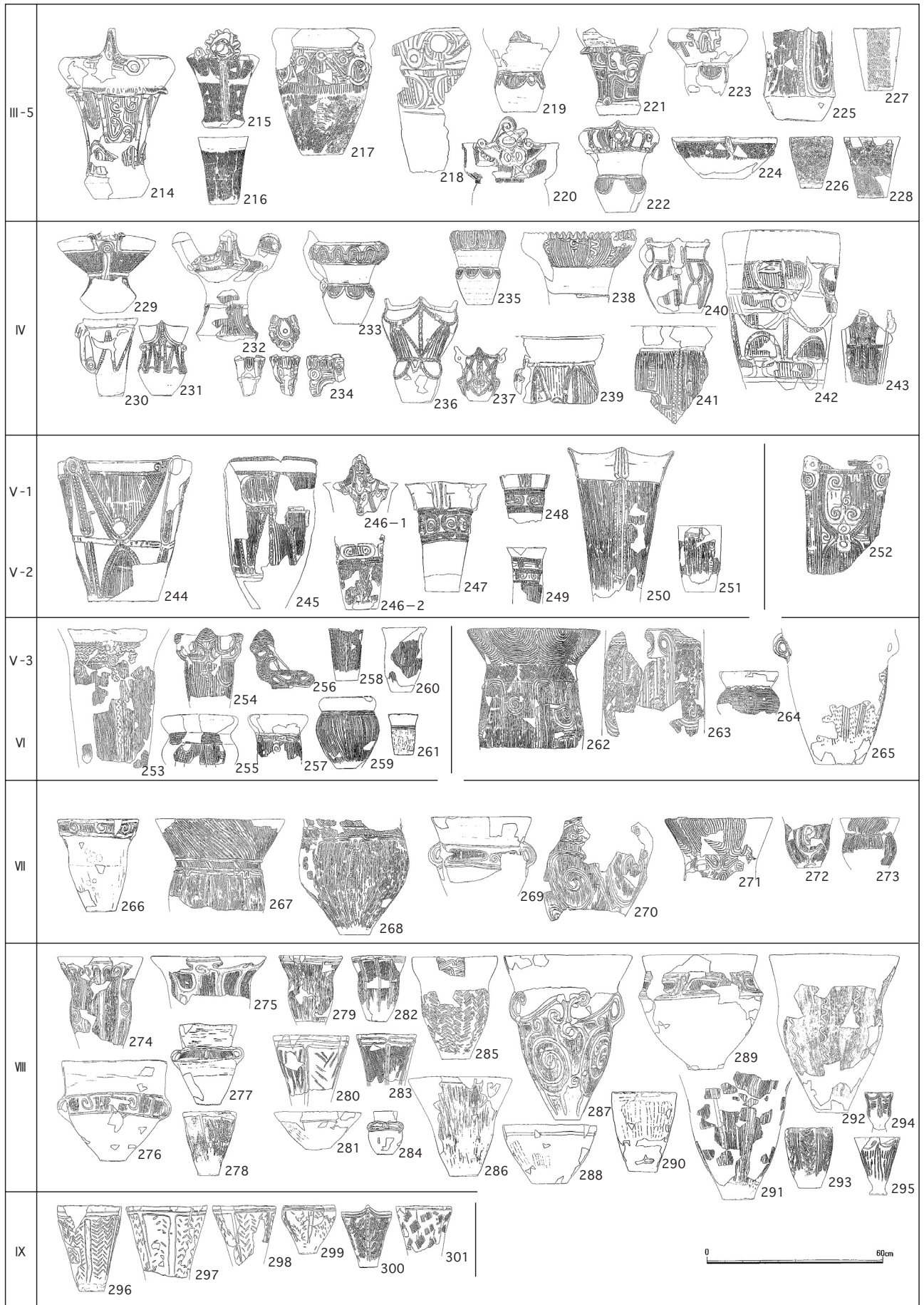
- 末木 健 1981 「曾利式土器」『縄文文化の研究』 4
- 末木 健 1988 「曾利式土器様式」『縄文土器大観』 3
- 米田 明 1978 「曾利式土器の基礎的研究」『長野県考古学会誌』 30
- 能登 健 1980 「重孤文土器の系譜」『信濃』 32- 4
- 谷井 虎 1977 「勝坂土器の変遷と性格についての若干の考察（前・後）」『信濃』 29- 4・6
- 谷井 虎 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』 埼玉県埋蔵文化財事業団
- 小林 謙一 1984 「中部・関東地方における勝坂阿玉台土器成立期の様相」『神奈川考古』 19
- 小林 謙一 1993 「多摩地域における勝坂成立期における土器様相」『東京考古』 11
- 寺内 隆夫 1984 「角押文を多用する土器群について」『下総考古学』 8
- 鈴木 保彦 1985 「勝坂土器の展開」『日本大学芸術学部紀要』 第15号
- 戸田 哲也 1986 「縄文土器型式学的研究と編年」『神奈川考古』 22
- 長沢 宏昌 1986 『一の沢西遺跡』 山梨県教育委員会
- 長沢 宏昌 1986 「曾利Ⅰ式大渦巻把手状土器成立の一要因」『山梨考古学論集』Ⅰ
- 三上 哲也 1986 「中部・西関東地方における状文中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』 51
- 小野 正文 1987 『釈迦堂遺跡群』 山梨県教育委員会
- 山形真理子 1989 「曾利式土器における施文順序の意義」『甲斐の成立と地方的展開』 角川書店
- 下総考古学研究会 1985 「勝坂式土器の研究」『下総考古学』 8
- 吉本 洋子・渡辺 誠 1994 「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』 1号 日本考古学協会  
1999 「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』 8号 日本考古学協会  
2004 「目鼻口を欠く人面装飾付深鉢形土器」『山梨考古学論集』Ⅴ
- 黒尾 和久 1995 「縄文中期集落の基礎的研究」『論集 宇津木台考古』 第1集
- 黒尾 和久・小林 謙一・中山 真治 1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」  
『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』 発表要旨
- 寺崎 裕介 1996 「火炎土器の成立・展開・終焉」『火炎土器研究の新視点』
- 山形真理子 1996 「曾利式土器の研究」『東京大学文学部考古学研究室紀要』 14
- 櫛原 功一 1993 「曾利Ⅰ式土器の再検討」『縄文時代』 4
- 佐野 隆 1997 「曾利式土器集末期の編年について」『八ヶ岳考古・平成8年度年報』
- 櫛原 功一 1999 「曾利式土器の編年私案」『山梨考古学論集』Ⅳ
- 伊藤 公明 1998 「把手付X字状大深鉢土器の展開」『八ヶ岳考古・平成9年度年報』
- 伊藤 公明 2001 「縄文時代中期後半の地域性」『山梨県考古学協会誌』 12
- 小林 広和・里村 晃一 1989 『一の沢遺跡調査報告書』 山梨県教育委員会
- 小林 広和 2003 「渦巻把手状装飾土器の展開」『研究紀要』 19 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 小林 広和 2004 「渦巻把手状装飾土器の末裔」『研究紀要』 20 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター



第5図 酒呑場遺跡、縄文中期中葉 I-1～III-3段階



第6図 酒呑場遺跡、縄文中期中葉 III-4～III-5段階



第7図 酒呑場遺跡、縄文中期中葉 III-5～IX段階

## 第4項 外来系土器群の様相

### 1. 異系統土器と希少土器について

在地に広く認められる土器群とは別に、他地域に見られる土器を搬入もしくは模倣した所謂外来系と考えられる土器破片資料については、第8・9図に示したとおりである。図中にも記しておいたが、1～4は早期終末から前期中葉の指頭圧痕を有する所謂オセンベイ土器の類である木島式、5・6は前期初頭で丸底が特徴で口縁部に垂紐貼付文を有する中越式、7～28は前期前半で繊維を含む羽状縄文系土器群である関山・黒浜式系統類、29～34は前期後半で灰白色系を基調とし大型の爪形文を持つ北白川下層Ⅱa式、35～38は同じく前期後半で灰白色系を基調とし浮線上を押圧ないし刻み目を付ける北白川下層Ⅱa式、39～41は中期初頭から中葉に見られる並行沈線を主文様とする平出第三類A土器で、その特徴から中期初頭段階に位置づけられるもの、42～44中期初頭の爪形文や円形刺突文を施す船元Ⅰ式、45・46は中期後半で曾利期と併行関係があり並行沈線による連弧・波状文を持つ里木Ⅱ式（船元Ⅳ式）、47～52は中期後半の刺突による多彩な文様表現がされる唐草文系土器、53は内面が漆のパレットに再利用された晩期の大洞CⅠ式土器である。上記のような多彩な資料が認められ、関西、東海、信濃、関東、東北地方といった広範囲な地域からの人の動きないしモノの流れを窺い知ることができる。

### 2. 異系統土器群と在地系土器群の伴出関係について

次に、所謂外来系の異系統土器群と在地系土器群の伴出関係が明確な資料について見てみることにする。伴出関係図を第10図に示した。従来この類の資料については、前述のような破片資料が主体であることや個体資料として発見されても土坑などから単独での出土例が多く、中部高地の土器群（在地系土器群）との編年的な関係について理解することが難しかったが、本遺跡において遺構に伴った形で共伴関係が明らかとなった例が散見できたため抽出してここに記すことにした。なお、ここでは単独で出土した異系統土器の個体資料についても、数が少ないのでここで扱うことにした。

B区第5号住居跡：本遺構の上部は曾利期の住居に切られていたため、下部に残された諸磯b式期の住居跡の床面直上に残された資料のみを検出することができた。灰白色の基調で北白川下層Ⅱb式の浅鉢（1）と諸磯b式の浅鉢（2）の伴出が認められた。

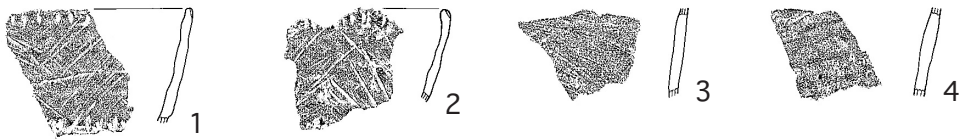
C区第135号土坑：灰白色の基調で四単位の橋状把手を持つ北裏CⅠ式の浅鉢（3）で、北裏CⅠ式段階でもやや新しい段階に位置するものであり、外見上の特徴から東海地域からの搬入が濃厚な資料である。該期の単独出土事例としては、宮地第3遺跡、駒平遺跡の2例があるので、異系統土器に対する意図した埋設である可能性が示唆される。

E区第2号土坑：五領ヶ台Ⅱ式に並行する東関東系の土器が出土している。交互刺突文を有する小型の鉢と口唇部に刺突を有する浅鉢が伴出している（4・5）。

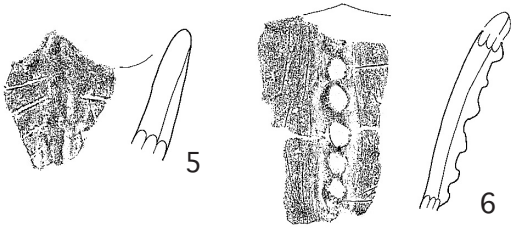
C区第41号住居跡：第10図6は北屋敷式の前段階で増子康真氏のいう山田平式に比定される深鉢であり、山梨県下では初めて発見された資料である。これは岐阜県・門野遺跡の土器群よりもやや古い様相を示すものと考えられる。これは、藤内Ⅱ式の在地系の土器（7～11）20個体などと共に出土しており、遺物の出土状況については井戸尻パターンを示している。遺物の表面も風化・摩耗しているものが少なく、底部を失った土器が多数認められことから、当時なんらかの作業を行った後に意図して底部を破壊したものを極短期間のうちに一括廃棄した可能性のあるもので、時間とモノとの関係を考える上で興味深い資料である。東海系土器群と中部高地系土器群の編年を考える上で好資料である<sup>1)</sup>。

C区第9号住居跡：12は赤っぽい色調で環状突起や曲隆線文を持つ焼町類型土器である。藤内Ⅱ式でも最終末段階に位置づけられる土器群（13～17）と共に出土している。

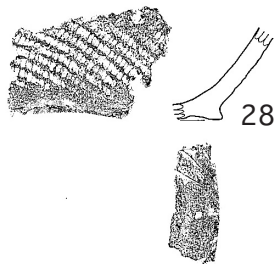
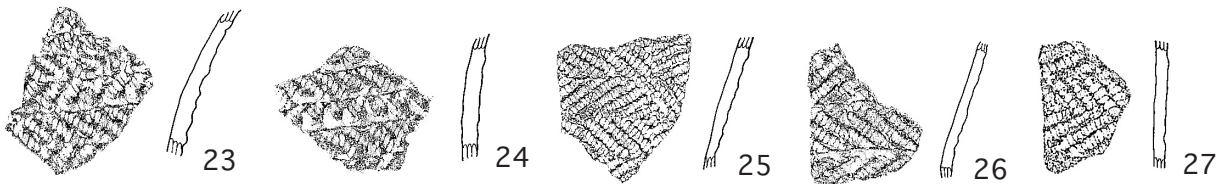
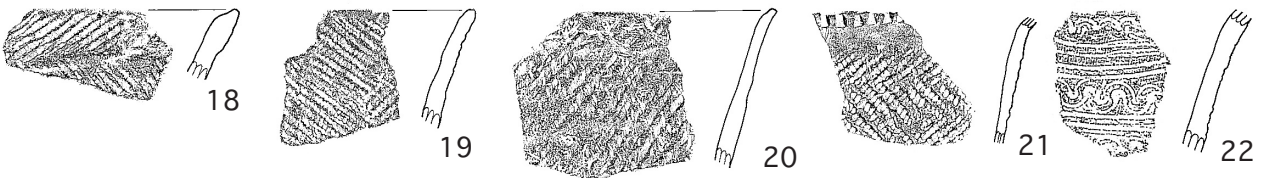
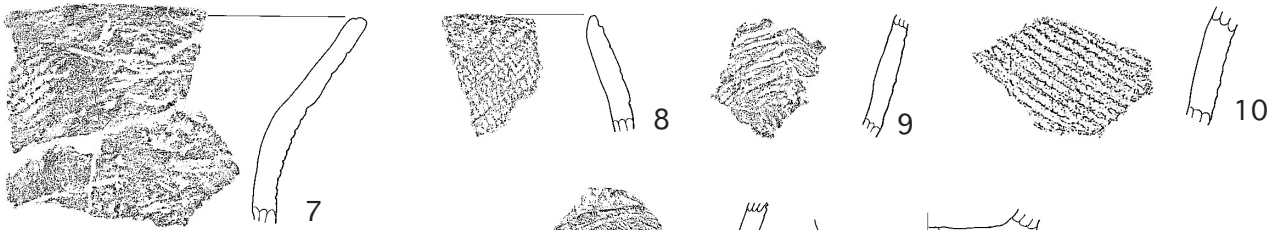
B区第3号住居跡：18・19は山梨県下で初めて発見された里木Ⅱ式の破片資料で、半裁竹管状の工具による細目の



1~4 早期終末~前期中葉 木島式



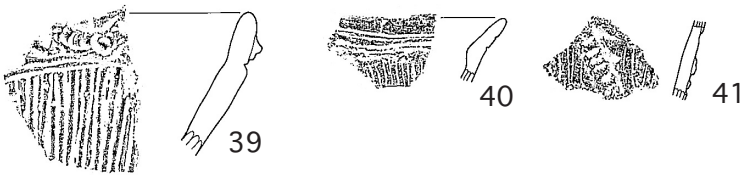
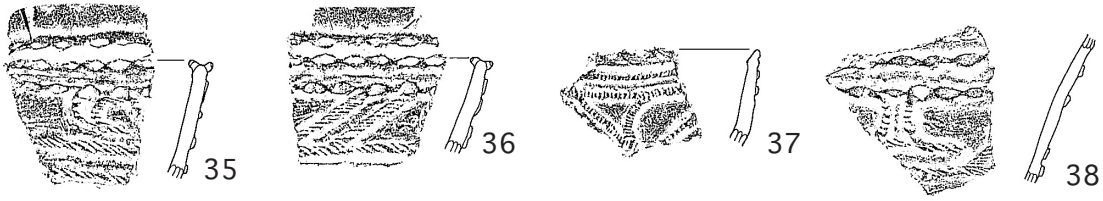
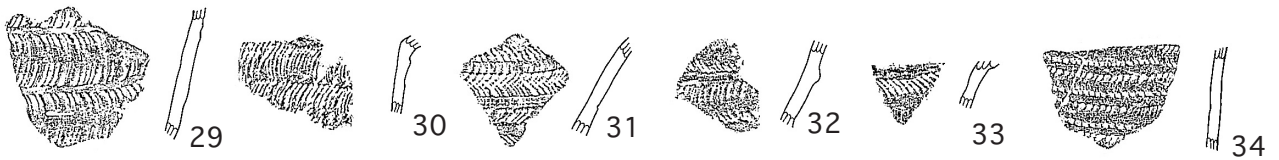
5・6 前期初頭 中越式



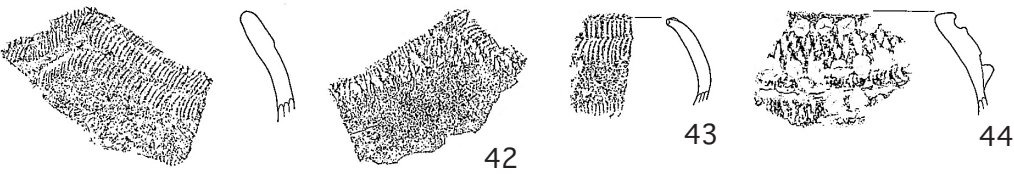
7~28 前期前半 羽状縄文系土器

0 10cm

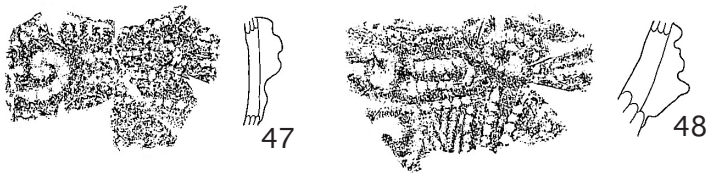
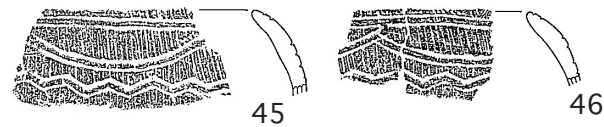
第8図 包含層等出土外来系並びに希少土器破片資料(1)



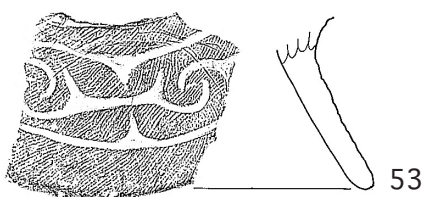
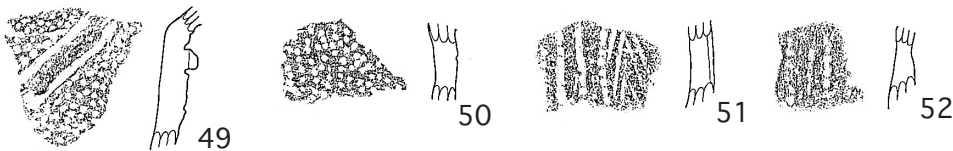
29~34 前期後半 北白川下層II a式  
 35~38 前期後半 北白川下層II b式  
 39~41 中期初頭~中葉  
 平出第III類A土器



42~44 中期初頭 船元I式  
 45・46 中期後半 里木II式  
 (船元IV式)



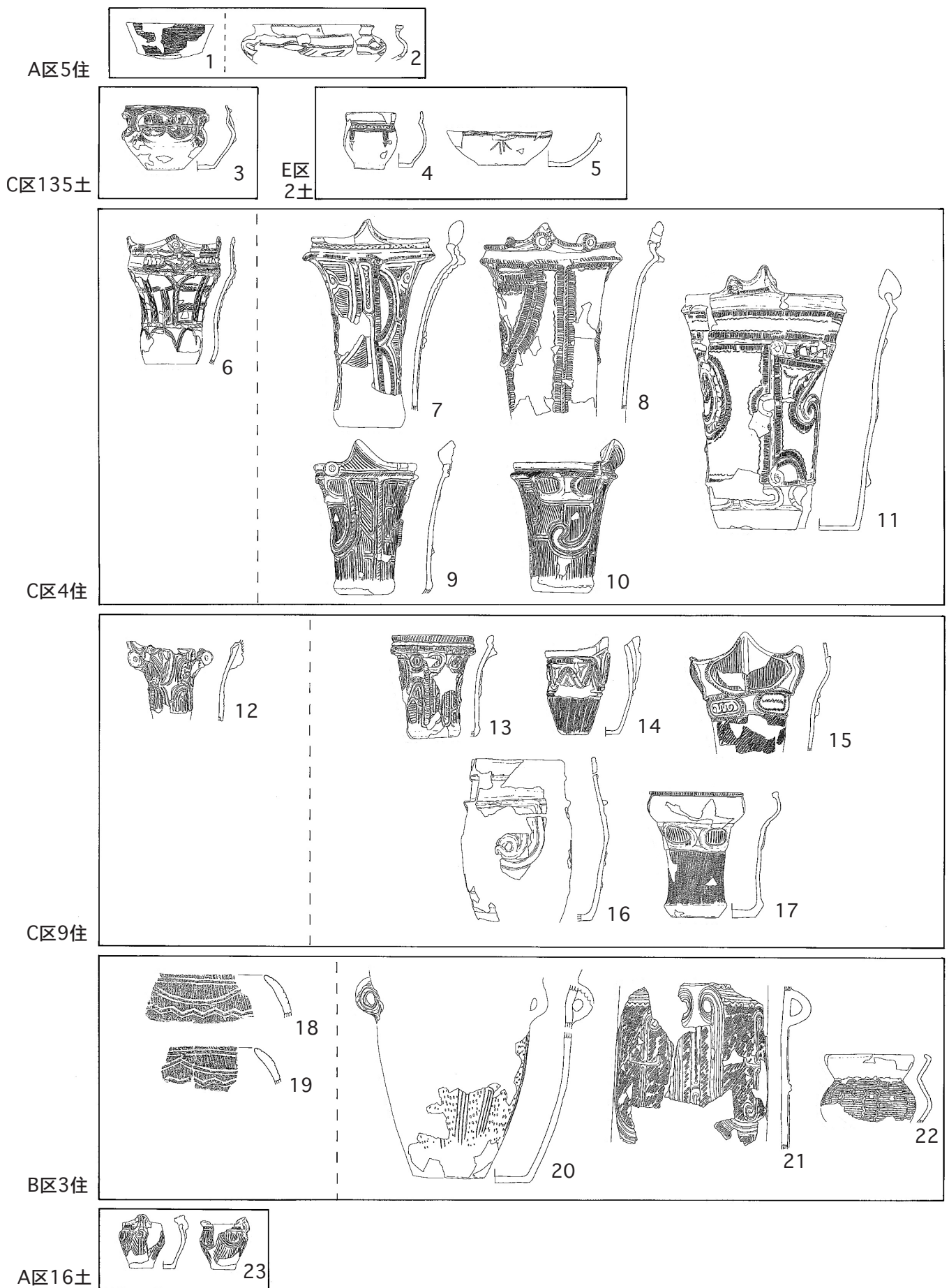
47~52 中期後半 唐草文系土器



53 晩期 大洞CI式

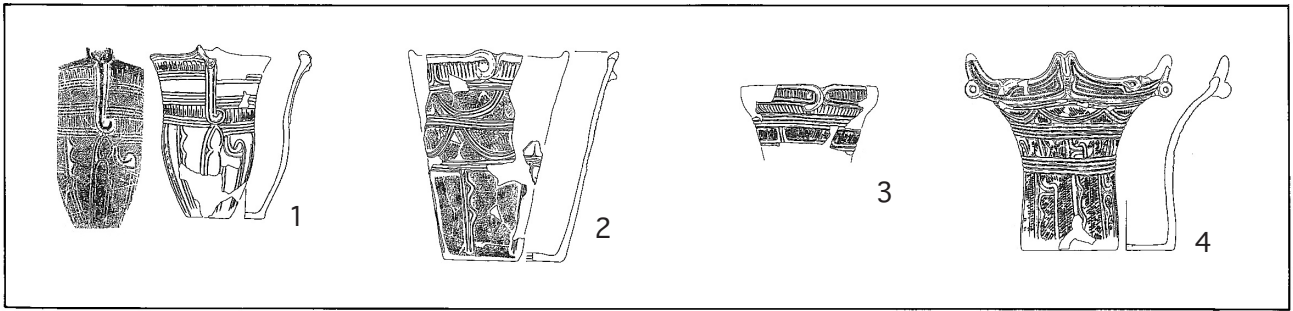
0 10cm

第9図 包含層等出土外来系並びに希少土器破片資料(2)

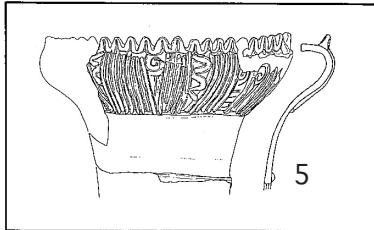


第10図 異系統土器群と在地系土器群伴出状況





猪沢・新道式と新崎式の折衷タイプ



井戸尻式と火焰型土器（馬高式）の折衷タイプ

第11図 異系統土器との折衷タイプ

並行沈線で地文に縦位の連続沈線、地文上に連弧文と波状文を施しており、西日本地域に見られる地文に燃糸文を用いるケースと異なるが、滋賀県の醍醐遺跡などに類似資料が見られる。これらは、曾利Ⅰ式末葉～Ⅱ式期の土器（20～22）と共に出土しており、従来唱えられている編年感とほぼ一致するものである<sup>2)</sup>。

A区第16号土坑：23は隆帯や沈線による唐草文を施した小型の唐草文系土器で、松本平から伊那谷を中心に分布するものである。異系統ということもあり土坑からの単独出土である。

### 3. 異系統土器との折衷・模倣タイプの土器群について

次に、異系統土器との折衷・模倣タイプについて触れることにする。第11図に示したものがそれであるが、1～4は一見北陸地方の土器群を想起させるが、胎土や色調は在地のものに近い。1はⅠ区第45住居跡から出土したもので、猪沢式の古段階の土器群と共に出土している。口縁部や胴部に見られる蓮華文は、まさに新崎式そのものであるが、胎土・色調共にご当地で言われている所謂新崎式とはどこことなく異なるようである<sup>3)</sup>。2はⅠ区第32号住居跡から出土したもので、猪沢式の中段階に位置する土器群と共に出土している。口縁部に蓮華文が施されているが、器形・胎土・色調共に在地がかっている。3はC区L'-40グリッド第7号土坑から新道式土器と共に出土したもので、口縁部に蓮華文が施されているが、器形・胎土・色調共に在地がかっている。4はC区第247号土坑から出土したもので、口縁部の区画文に三角押文を施した新道式と新崎式の折衷タイプと考えられるものである。5はC区第185号土坑から出土したもので井戸尻Ⅲ式の特徴をよく示したものに、口縁部のモチーフに波状文を施す馬高式の火焰型土器のモチーフが施されており、折衷タイプと考えられるものである。

### 4. 異系統土器群の様相

県内においては近年、縄文時代前期から中期にかけての異系統土器の出土例が増加している。本遺跡においてもその一端を見ることが前述のような結果からわかるが、これほど多種多様なものが出土した遺跡はあまり類例がない。今回、こうした土器群の胎土分析も合わせて実施していき、人の動きとモノの移動を考えることができたと思うが、実際に分析を行った資料はその中でも極一部のものにすぎず、全体的な情報量としては極めて限られたものであるため、まだまだ不明な点が多い。現状では異系統の判断の大部分については肉眼観察にたよっており、異系統といっても在地で模倣されたものなのか、他の近隣製作地より搬入されたものなのか、それとも本場の製作地より直接もたらされたのか判断に迷うものである。以前、北白川下層式・大歳山式の流入ルートについて触れたこともあるが、その中でワンステップないしトゥーステップにおいて中間地域からの流入について外見上の特徴から想定したが、胎土分

析などを踏まえた科学的な根拠と共に今後考えていく必要がある。この関係で資料調査を行いながら相互に搬入品ないし模倣品とされる資料を見聞したこともあるが、他地域における中部高地系土器はかなりそれとは胎土・色調や特徴などが異なり、むしろその地域に根ざした土器に近い特徴を持っていることがある。こういった特徴が認められるのは、本遺跡の資料では前期の北白川下層式系の土器と中期の新崎式系と考えられるものに見られる。ちなみに境川村諏訪尻遺跡から出土した北白川下層式系の土器の破片資料の分析では岐阜や愛知県の鉱物組成と一致する結果が見出されており、京都などの本場の地域からの流入ではなく、隣接地域からの二次的、三次的な段階を経た地域流入した結果が示されており、このことが外見上の特徴が若干異なる結果を産むこととなるようであり、従って本場の地域のものと比較しても類似性にかけてくる結果となるのである。今回の科学分析の結果でも、他の地域からの流入を示すことが分かったが、本場の製作地域からの搬入ではなく、中間の第三地域からの搬入を示す状況が確認できた。これとは別に、中期でも東海系土器群である船元式、北裏C I式、山田平式については、器形・文様・外見的な特徴・胎土・色調などから純粋に東海地域からもたらされた可能性が考えられ、模倣品と想定されるものは認められない。以前、やはり外来系土器群の科学的な分析を行なった御坂町桂野遺跡の北裏C I式の土器破片資料の例でも、甲府盆地内の特徴とは全く異なった鉱物組成をしており、その特徴は三河地域や伊勢地域で産出されるこれらの土器と同様の在り方を示していることから、直接もたらされた可能性が科学的にも証明されつつある。この他にも、科学分析の結果、木島式、平出第三類A土器、唐草文系土器、里木Ⅱ式の破片資料についても、生産地までの推定には至らなかったが外部からの搬入を示す結果が見出されており、肉眼観察による異系統としての分類と科学的な分析の結果が一致することが明らかとなった。

このように、異系統土器群の伴出関係ならびに模倣品を集成し示してきた訳であるが、このことから編年的な並行関係や移動に関する特徴が見えてきたことにより、本遺跡で生活を営んでいた人々の移動と土器の移動に関する実態が各時期において少しずつ明らかとなった。

#### 参考文献

静岡県考古学会 1998 「縄文時代中期前半の東海系土器群－北屋敷式の成立と展開－予稿集」

第5回東海考古学フォーラム

野代 幸和 1999 「縄文時代前期後半から中期初頭段階における異系統土器群の流入について－山梨県にみた出土事例を中心に－」『研究紀要15』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

野代 幸和 1999 「山梨県における縄文時代前期末葉から中期初頭段階の異系統土器を巡って－所謂関西・東海系土器群を中心に－」『山梨考古学論集Ⅳ』

野代 恵子・野代 幸和 1999 「山梨県における縄文時代中期の東海系土器の流入について」

『静岡県考古学研究』No. 31

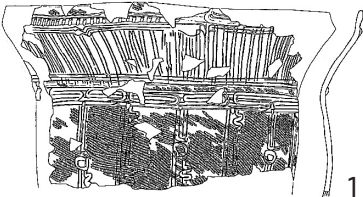
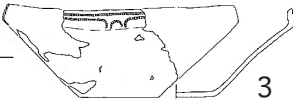
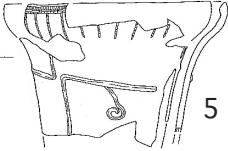
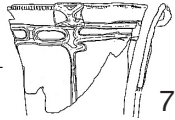

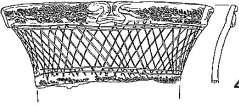
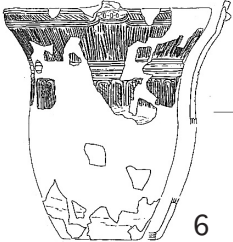
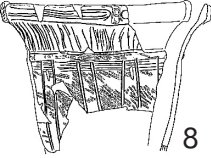




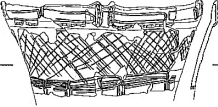

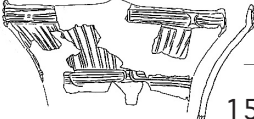
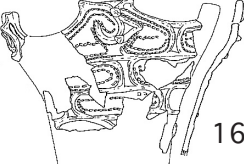


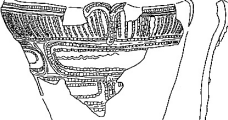
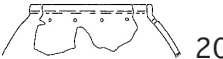
山梨県教育委員会 2000 『桂野遺跡（第1～3次）・西馬鞭遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書

第172集

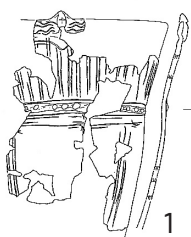
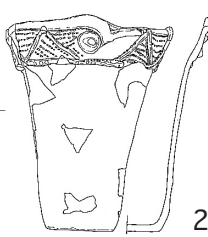

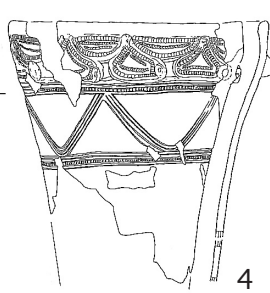
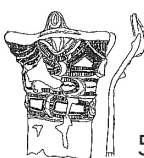



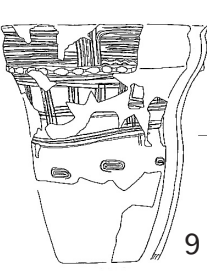
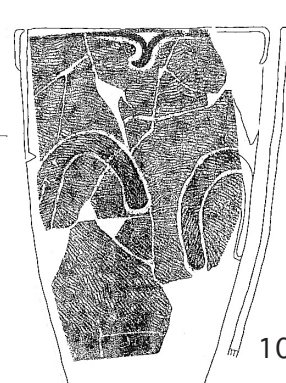
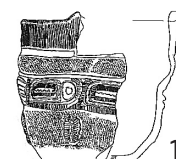
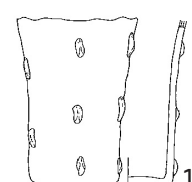
山梨県教育委員会 2000 『諏訪尻遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第180集

#### 註

- (1) 資料の評価にあたっては、沼津市教育委員会の池谷信之氏に御教示いただいた。
- (2) 資料の評価にあたっては、京都大学の泉拓良氏に御教示いただいた。
- (3) 真脇遺跡縄文館の加藤三千雄氏に御教示いただいた。

	平出第三類 A 土器	伴出土器
I	 1 C区27住	  
	 2 C区91住	
	 4 C区45住	
	 6 C区74住	
II	 8 C区75住	 10
	 9 C区75住	 11  12
III	 13 C区102住	 14
	 15 C区200土	 16
	 17 I区44住	 18
		 19  20

第12図 平出第三類A土器共伴関係図（貉沢期）

	平出第三類 A 土器	伴出土器
新 道 期	 1 C区32住	 2
	 3 I区16住	 4  5  6  7  8
藤 内 期	 9 I区56住	 10  11  12

第13図 平出第三類A土器供伴関係図（新道～藤内期）

## 5. 在地系土器群と平出第三類A土器の共伴関係について

平出第三類A土器は中期初頭から中葉にかけて主に伊那谷地域（上伊那地方）を中心に分布することが知られている。その特徴は中期初頭の土器群を想起する文様モチーフと彫りの弱い簡素な施文、色調は白色系で薄手の作りである。出身元である長野県内でもあまり主体的な分布を持たず、梨久保式や猪沢式、新道式や藤内式などの中部高地に分布する土器と共に伴出する傾向がある。山梨県内では最近までほとんどその出土事例が知られていなかったが、中道町上の平遺跡、南アルプス市（旧櫛形町）鋳物師屋遺跡などの盆地地域でも個体が確認されている。このような状況の中で、これほど多くの個体が検出された酒呑場遺跡は、ある意味特殊な位置づけがされるものと考えられる。鶴飼氏によって指摘されている諏訪湖周辺の分布域が山梨県側の八ヶ岳南麓地域を越えて盆地部まで広がる様相がわかってきた。在地系土器群のその特徴も諏訪湖周辺地域のものに類似することから、極めてその関係の深さがこうした異系統グループの土器の分布の中でも見え隠れしているようだ。

第12・13図は遺構に伴って出土した共伴関係図である。第12図は猪沢期のものであるが、第I期とした古段階の

ものは、C区の第27号住居跡（1）、第91号住居跡（2・3）、第45号住居跡（4・5）、第74号住居跡（6・7）から認められた。1と4は口縁部分と胴部の地文に縄文が、2と6は無文地である。1は「く」の字の頂部に隆帯が巡りその上を縦位に押圧している。口辺部の文様帯には縦位ならびに格子目状の沈線を充填する。胴部には並行沈線による逆U字文等がみられ、この段階のものは比較的しっかりと規則正しく施文されているのが特徴である。第Ⅱ期とした中段階のものは、C区第75号住居跡（8～12）と第Ⅲ期との過渡期段階と考えられるC区第102号住居跡（13・14）である。地文に縄文地と無文地があり、口縁部の文様帯は「コ」の字状の区画文が、口辺部の文様帯には規則性のない沈線が縦位ならびに格子目状に充填する。胴部には縦位の並行沈線が間隔をあけて垂下する。この段階から施文が甘くいい加減さが目立ち始める。第Ⅲ期の新段階のものは、C区第200号土坑（15・16）、I区第44号住居跡（17～20）がある。口縁部の文様帯は（ ）ないし□状の区画文があり、口辺部には並行沈線によって縦位に充填される。この時点で格子目状の文様は施されなくなる。胴部文様帯も簡素化が進み、従来から施される（ ）状ないし横位の並行沈線が施されるが、平行沈線文が垂下する程度となり無文化が加速する。第13図は新道式から藤内Ⅱ式期のものである。まず新道式期ではC区第32号住居跡（1・2）は古段階、I区第16号住居跡（3～8）は新段階である。古段階（1）では、強調されていた口縁部文様帯が弱くなると共に、区画文が無くなり、波状の並行沈線が表現されるようになる。口辺部は従来の外反より弱くなり立ち上がりが急になる。文様表現は力の弱い並行沈線により縦位と横位に充填される。新段階のものでは、器面のほぼ全てに縄文が施され、外見上の特徴は貉沢期の様相に近いようであり、該期のものとして認識してよいものか考えさせられる資料であるが、住居跡より検出されたため表示した。藤内Ⅱ式期はI区第56号住居跡（9～12）であり、口縁部文様帯が前段階に比べて広がりを見せ、口唇部が外反するのが特徴である。口縁部下部には押圧隆帯が施され、その下の胴上部には縦位と横位に並行沈線が施されている。胴部半ばには並行沈線による渦巻状の文様も認められる。

破片資料も含めるとかなりの量になるが、山梨県におけるこれらの土器の特徴は、隣県の諏訪市荒神山遺跡で見られるものとは器形は類似するが、文様構成は異なっている。また松本市平出遺跡のものとは比べると器形などの特徴がかなり異なっていることがわかり、これらの土器の起源をどこに求めてよいのか未だ解明できないが、八ヶ岳南麓地域における分布の増加がいずれ解き明かしてくれるものと思われる。酒呑場遺跡において、山梨県では始めて平出第三類A土器を編年的な位置づけの中で相対的にみることができたことは大変有意義なことであると思う。この土器について言えることは、これが酒呑場遺跡で作られたものではないということ、長野県の在り方と同様に、単独では使用せずに在地の土器と併用していること、在地の土器に対してその数は少ないこと、山田平式などの東海系土器群と色調・器厚などの外的特徴が類似すること、胎土分析の結果からも在地において製作されたものではなく、隣接する本場長野県からの搬入が考えられること等、単純に土器の特徴から「煮炊き用の土器」としての機能だけで解決できない、謎の多い上伊那人の思考と動きがそこに見え隠れしている。

#### 参考文献

- 林 茂樹 1976「縄文中期土器<平出三A>の系譜」『長野県考古学会誌』27  
鶴飼 幸雄 1977「平出第三類A土器の編年的位置付けとその社会的背景」『信濃』29-4  
神村 透 1986「下伊那型櫛型文土器」『長野県考古学会誌』51

## 第2節 土製品

### 第1項 土偶

酒呑場遺跡出土の土偶152点について、部位ごとに分類し時期判定を行う。また、有脚立像以外のポーズ土偶は別に分類する。なお、分類や時期判断については、小野（1986）、今福（1998）、櫛原（1998）を参考とした。

#### 頭部

I類 頭部端が平坦ないわゆる河童形で、上に開く小形品（第104図1、第105図3・5、第106図4・6・7）。目・口が刺突等で簡略に表現されている。特に、眉と鼻について、その表現がないもの（第104図1、第106図7）、沈線で表現されているもの（第105図5、第106図4）、粘土紐を貼付して表現しているもの（第105図3、第106図6）の三者がある。五領ヶ台式段階と思われる。

なお、第106図6は側頭部に粘土紐を半周させて頭髪を表現している。第106図4・6には頭部端平坦面の周辺部から側頭部に小さな貫通孔が開けられている。第105図3には頭部端平坦面の顔面よりから胴部にむかって孔が見られるが、これは粘土塊を保持するための棒の跡である可能性がある。

II類 頭部端が平坦ないわゆる河童形であるが、円盤状のもの（第105図4・6・7、第106図1・2・3、第118図3）。顔面部分について、仮面を付けたように円形に盛り上がっているもの（第106図1）、円盤の一端に平坦面を作り眉や鼻を粘土紐を貼付して表現しているもの（第105図4・7、第106図2、第118図3）、円盤の一端に平坦面を作り眉を沈線で鼻を粘土粒貼付で表現したもの（第106図3）がある。五領ヶ台式期から貉沢式期にかけてのものと思われる。なお、第105図4の口唇両端部に三角文状の文様が見られる。第105図6と第118図3の側頭部には押し引き沈線文がめぐる。円盤の一端に平坦面を作り顔を表現するものには、頭部端平坦面の周辺部から側頭部に小さな貫通孔が開けられており（第105図4・7、第106図2・3、第118図3）、顔面部分を欠損する第105図6も同類の可能性はある。

III類 球状の頭部の一端に仮面状に盛り上げた顔面を付け、頭髪部分に渦巻き状の文様が見られるもの（第105図1、第115図7）。第115図7には側頭部に貫通孔が3ヶ所見られる。貉沢式段階と思われる。

IV類 小形球状の頭部で、粘土紐を渦巻きや環状に貼付して頭髪を表現しているもの（第104図2、第116図2）。貉沢式段階から新道式段階の可能性はある。

V類 顔面が正面全体を占め、側面観が顔面から顎、頸と連続する一平面となっているもの。目、口、眉が沈線で表現されている（第105図2、第106図5・8）。頭頂部が窪み貫通孔がみられるもの（第105図2）、耳の穴が孔で表現され後頭部にも把手状に横方向から孔が穿たれているもの（第106図5）、後頭部が半球状で頭髪が沈線の渦巻き文で表現されているもの（第106図8）とバラエティーがある。貉沢式段階から新道式段階と思われるが、第106図8は曾利式段階の可能性はある。

VI類 顔面の正面観が三角形で頭頂部と両頬が尖るが、VII・VIII類に見られる顔面上部の縁が未発達である。隆線の渦巻き文で頭髪が表現されている（第104図4）。全体に三角押文が施文されており、新道式段階のものと思われる。

VII類 両頬が突出して顔面の正面観が半円形か丸みを持つ三角形で、顔面上部の縁が発達したもの（第104図3、第116図3、第118図1、第119図1、第123図3・4）。後頭部の文様にバラエティーがあるが渦巻き文は第118図1のみである。貫通孔が第104図3、第116図3、第123図3に見られる。第116図3には本遺跡唯一ダブル「ハ」の字文と三ツ口表現が見られる資料である。第104図3は三角押文で施文されており新道式段階と思われる。他は沈線を基調とし藤内式段階と思われるが、細い沈線の第116図3、第119図1、第123図4が古く、太い沈線の第104図3、第118図1が新しい可能性が考えられる。

VIII類 顔面が円形で頬の突出がないが頭頂部が尖り、顔面上部の縁が極度に発達している（第122図1）。太い沈線を基調とし、井戸尻式段階と思われる。

IX類 顔面が頬が張り出す楕円形で、眉が強調されて隆帯で表現され、後頭部の突出が弱く側面観が薄い（第116図

5、第122図2)。井戸尻式段階と思われる。

#### 腹部・臀部

I類 腹部・臀部ともに豊満に大きく表現されており、側面観が非常に厚い。角押文ないしは三角押文で腹部・臀部が縁取られ、側面に玉抱き三叉文状の円文ないし渦巻き文が施文される（第108図6・7、第109図1・5、第117図2、第118図4、第119図2、第121図1・2、第123図2）。角押文が施文された第108図6・7、第109図5、第119図2、第121図1・2、第123図2は貉沢式段階、三角押文が施文された第109図1、第117図2、第118図4は新道式段階と考えられる。

II類 正面観が円形で、腰の張りだしが強調されているが、側面観がI類と比べて薄い。文様もないか弱い（第108図1、第110図3・5、第120図1）。貉沢式段階から新道式段階と思われる。第108図4や第109図3もこれに含まれる可能性が高い。

III類 II類と比べて腰の張りだしが弱いもの（第103図10、第109図2、第110図1、第111図2、第121図7、第123図7）。第111図2、第121図7は三角押文で施文されており新道式段階と思われる。第103図10は腹部が隆帯で表現され藤内式段階と思われる。第123図7は太い沈線で施文され正中線と腹部が隆線で表現されており井戸尻式段階と思われる。

#### 腕部

I類 断面円形の細長い棒状のもの。

II類 断面が板状で幅広長方形のもの。

いずれも指の表現のないものをA類、指表現のあるものをB類とする。

胸部から腕部にかけてが残存するものは、腕の付き方が分かる。腕が上方を向くもの、水平のもの、下方を向くものの三者がある。上方を向くものはいわゆる「ばんざい」土偶で曾利式段階に見られる。本遺跡では第103図2がその可能性のある唯一の資料である。下方も少なく第104図2と第107図17がその可能性が高い。

#### 脚部

I類 断面円形で寸胴、大型のもの。

II類 断面円形で寸胴、小形のもの。

III類 楕円形でつま先とかかと両端が突出するもの。

IV類 楕円形でつま先側のみ突出するもの。

V類 両脚が内側で接合しているもの。

いずれの分類も指の表現のないものをA類、指表現のあるものをB類とする。

#### 腹部中空土偶（第110図6）

腹部・臀部が球形で、中が空洞となっている。太い沈線文で施文され、井戸尻式段階と思われる。

#### ポーズ土偶

##### 円錐形土偶（楯原型）（第109図6）

円錐形中空で、頭部・腕部を欠損する。また底部は内面の一部が残存するものの外面は欠損し形態が不明。乳房・正中線・対称弧刻文などが見られる。施文は三角押文で、新道式段階と思われる。なお、第107図9と第113図6は腕部分であるが、南アルプス市（旧櫛形町）鋳物師屋遺跡の円錐形土偶腕部に近似する。

##### 正座位土偶（海道前型・酒呑場型）（第111図1・3・4・5・6、第116図5、第122図1、第122図2＋第123図1）

立像土偶の脚部の表現がなく、正座した状態を表現したと想像される土偶である。3類型が見られる。

I類 脚部表現が全く見られないもの（第111図1・3）。

II類 脚部部分が前後に突出するもの（第122図1、第122図2＋第123図1－両者は接合する）。

III類 前方のみに突出するもの（第111図4・5、第116図5）。

第111図3は三角押文で施文されており新道式段階、第111図1は藤内式段階でI類は新道と藤内と古い段階。II

類は頭部類型からも井戸尻式段階と思われる。Ⅲ類は第111図5が曾利Ⅰ式新段階から曾利Ⅱ式段階と評価されている（新津1998）。

#### 座位土偶（広畑型）（第112図1）

脚部のみだが、向こうずねを立てて座った状態を表現している。

#### 酒呑場遺跡出土の土偶の特徴

総体的に曾利式段階の土偶は僅少で、五領ヶ台式段階から井戸尻式段階であるが、特に貉沢式から新道式段階のものが豊富である。頭部に玉抱き三叉文の表現が見られない点や、つり目でアーモンド形の目が少なく目の表現が貧弱である点、正座形のポーズ土偶が目立つ点など、本遺跡の土偶の特徴としてあげられる。しかし、総数152点はハヶ岳山麓の遺跡としては特に多く注目される点である。

### 第2項 小形土器

小形土器については、74点について1／2図を示した（第94～100図）。この他、第2図6、第3図1、第16図6、第23図11、第24図3、第27図7、第28図13、第33図6、第38図17、第39図3～6、第75図5の14点も小形土器の範疇で捉えられる。

### 第3項 台形土器

台形土器は、第50図と第91・92図に7点と土器底部転用品を3点示した。この他にも破片が数点あるが、図化して示さなかった。第91図3は、10住の南壁に立てかけられた状態で粘土塊と並んで出土した（図版編写真図版5）。また、同じ10住の住居内ピット23から第92図6が粘土塊と並んで出土した（図版編写真図版6）。第92図6は底部を打欠いて整形しているが、第92図5のように胴部との接点である部分の割れ面が擦られておらず、底部内面を上にしてその面を使用面としたものと考えられる。第92図7も6と同様に底部内面側を使用面としたと考えられる。台形土器は第93図に示したように特殊なヒビが観察される。同図3ではB面の側面に同心円状のヒビが集中し、粘土をこねるような動作で疲労したことで生じたヒビである可能性が考えられる。同様な形態の4にも観察できる。

### 第4項 杓子形土製品

杓子形土製品は19点と数が多い。渡辺誠氏により粥状の食品の消長と対応関係にあるものとして注目され総合的な研究がなされているが（渡辺1985）、それによると、頭部の断面形態が「凹みが浅く皿状を呈するものから半球状に近いもの」として一括されたⅡ類の範疇で捉えられ、柄の付き方（頭部に対する柄の角度）や柄の長さによる分類では、水平で短いもの（ⅡA b類；第128図12、第129図2・3・6、第131図1・2・5）がほとんどである。このあり方は、渡辺氏の縄文系列の形態組成に符合する。杓子形土製品は縄文時代前期から中部・関東地域で出現するが、酒呑場遺跡がその中核的地域の中にあり出土数も多い点から、粥状食物の利用が高度になされていた状況を示すと考えられ注目に値する。

### 第5項 その他の土製品

装飾突起・顔面把手・土鈴・耳栓・棒状土製品・蓋・土製円盤・不明土製品・焼成粘土塊については、付表のとおりである。装飾突起・顔面把手・土鈴・耳栓・棒状土製品・蓋・不明土製品については全点図示した（第124～141図）。特に、棒状土製品（第132図4）は男根形の土製品で、表面が焼けているものの、中は生の粘土の状態であり、非常にもろい。諸磯b式期の2住炉跡近くの床面直上出土である（図版編写真図版4）。蓋（第133図13）はグリッド出土であり帰属時期は不明であるが、把手が曾利式期のものに近似する。土製円盤については、Ⅰ区について一括取り上げの土器片について十分に検討していないため、かなりの数が見落とされている可能性が高い。焼成粘土塊については、Ⅰ区出土のものについては数点把握されているものの図示していない。



引用文献

- 渡辺 誠 1985「杓子形土製品の研究」『日高見の考古学』  
 小野 正文 1986「土偶」『釈迦堂遺跡』Ⅵ  
 今福 利恵 1998「中部高地の縄文中期前半における土偶の基礎的把握」『土偶研究の地平』（2）「土偶とその情報」研究会  
 楠原 功一 1998「山梨県の縄文時代中期土偶一有脚立像土偶の出現をめぐる一」『土偶研究の地平』（2）「土偶とその情報」研究会  
 新津 健 1998「曾利土偶の発生と展開」『土偶研究の地平』（2）「土偶とその情報」研究会

第3節 石器

第1項 A・B・C・D区の石器

1. 石器組成

A・B・C・D区の各住居跡出土石器について、第2表に組成を示した。表の中で数字が示されていない欄は整

第2表 A～D区の各住居跡出土石器数

地区	住居番号	石鏝	石鏝	石匙	楔	削器	掻器	RF	MF	磨製石斧	打製石斧	横刃形石鏢	クボミ石	スリ石	スリタタキ	タタキ石	大形剥片	接スリ石	石皿	石棒
A区	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0								
A区	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
A区	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
A区	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
A区	5	0	1	3	0	2	0	2	0	0	0	0								
A区	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
A区	7	3	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0								
A区	8	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1								
A区	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
A区	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
A区	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
A区	12	3	2	0	0	1	1	2	0	3	0	0								
A区	13	3	0	2	0	0	0	0	0	3	0	0								
A区	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
A区	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
A区	16	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0								
B区	1	2	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0								
B区	2	4	0	3	0	5	0	3	0	2	0	0								
B区	3	3	1	0	1	0	7	1	0	0	0	0								
B区	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
B区	5	6	1	8	1	1	1	13	9	1	0	0								
B区	6	7	0	1	0	0	0	3	0	1	0	0								
B区	7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0								
B区	8	5	3	4	2	1	0	9	2	1	0	0								
B区	9	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0								
B区	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
B区	11	0	0	0	0	0	1	0	3	2	0	0								
B区	12	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0								
B区	13	1	2	2	0	0	0	4	0	0	0	0								
B区	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
B区	15	0	1	2	0	0	0	1	0	0	0	0								
B区	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
B区	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
B区	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
B区	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
B区	20	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0								
B区	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
B区	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
B区	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
C区	1	12	2	7	0	2	0	9	2	2	59	24	5	0	7	0	188	0	3	1
C区	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	79	22	13	0	0	0	105	0	0	0
C区	3	4	0	0	0	2	0	2	0	2	41	4	6	2	2	0	108	0	1	0
C区	4	5	6	1	0	0	1	7	1	4	37	16	1	12	0	10	122	0	10	0
C区	5	2	0	1	0	0	0	0	0	38	8	0	4	0	4	0	35	5	3	0
C区	6	1	0	0	0	0	0	0	0	43	4	4	5	1	0	3	74	6	3	0
C区	7	5	0	(町7住)1	0	0	0	(町7住)5	2	1	93	4	12	10	9	0	54	1	0	0
C区	8	1	0	0	0	0	0	0	0	19	7	12	0	0	0	0	70	0	0	0
C区	9	0	0	2	0	0	0	1	0	4	31	14	4	0	6	0	32	4	2	0
C区	10	0	0	0	0	0	0	1	0	0	5	0	4	1	0	1	0	0	0	0
C区	11	1	0	0	0	0	0	0	2	29	10	6	0	0	0	0	53	3	0	0
C区	12	5	0	1	1	2	0	3	0	58	6	8	5	13	0	69	0	4	0	0
C区	13	3	1	0	0	0	0	0	0	17	0	3	6	4	0	21	1	4	0	0
C区	14	4	0	3	0	0	0	5	0	30	20	7	4	0	0	79	0	0	0	0
C区	15	2	2	3	0	0	0	6	3	1	42	8	4	0	13	11	86	2	1	0
C区	16	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	3	0	0	0	0	0	0
C区	17	1	0	0	0	0	0	0	0	13	0	0	0	0	0	0	16	0	0	0
C区	18	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C区	19	1	2	13	7	0	0	11	5	7	54	11	4	7	12	8	136	1	0	2
C区	20	6	0	1	0	1	0	1	0	1	24	2	0	0	5	0	27	1	0	0
C区	21	0	2	1	0	1	0	3	2	0	19	2	0	0	5	0	59	0	0	0
C区	22	6	1	0	0	1	0	3	1	1	18	1	1	0	2	0	15	0	0	0
C区	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0
C区	24	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C区	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
C区	26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C区	27	0	1	0	0	0	0	3	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C区	28	2	1	0	0	0	0	2	0	0	3	0	0	0	0	0	11	0	0	0
C区	29	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C区	30	0	1	1	0	0	0	1	0	1	15	6	0	0	0	0	26	0	0	0
C区	31	1	0	0	0	0	0	3	2	0	2	1	0	0	1	0	11	0	0	0
C区	32	12	2	4	2	0	0	6	0	1	50	8	2	0	0	0	204	0	2	0
C区	33	0	0	2	0	1	0	0	0	0	12	5	0	0	0	0	48	0	0	0
C区	34	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	10	0	0	0
C区	35	3	0	0	1	0	0	4	1	0	22	0	0	0	0	0	14	0	0	0
C区	36	3	0	0	0	0	0	4	0	2	23	5	1	2	0	0	51	0	0	0
C区	37	2	0	0	0	0	0	6	1	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C区	38	3	0	0	0	0	0	1	0	0	20	0	0	3	1	1	39	0	0	0
C区	39	2	1	0	2	0	0	12	2	2	49	5	2	4	5	2	102	0	0	0
C区	40	1	0	0	0	0	0	0	0	18	6	0	0	0	0	0	29	0	0	0
C区	41	7	0	4	2	0	0	15	0	5	255	26	13	10	1	0	46	0	0	0
C区	42	0	0	0	0	0	0	3	0	0	13	1	0	2	0	2	34	0	0	0
C区	43	3	3	1	0	0	0	9	5	0	29	4	0	3	6	0	53	0	0	0
C区	44	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C区	45	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C区	46	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C区	47	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C区	48	2	0	0	0	0	0	1	0	2	21	0	0	0	0	0	46	0	0	0
C区	49	2	0	0	1	0	0	1	0	0	5	2	0	0	0	0	15	0	0	0
C区	50	2	1	0	2	0	0	2	1	1	1	4	0	0	10	0	58	0	0	0
C区	51	0	0	0	0	0	0	0	0	0	36	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C区	52	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	1	0	33	0	0	0
C区	53	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	10	2	0	1	0	24	0	0	0
C																				



### 3. 磨製石斧

磨製石斧は一般的に乳棒型と定角式に大別されるが、本遺跡の遺物は必ずしも典型的な形態は少ない。乳棒型と定角式に類似したバリエーションの豊かな形態が認められ、石材と石器形態が緩やかに結びついている。緑色凝灰岩系の細粒で密な石材を素材とした乳棒型的な形態を有するものと、蛇紋岩系の細粒で緻密な石材を元に定角式的な形態を有するものがある。

#### A類 緑色凝灰岩系・乳棒型

- － 1 基部がすぼまるタイプ (第163図1～13・第162図1～13)
- － 2 基部と刃部がほぼ平行するタイプ (第162図14～20・第161図1～11)

#### B類 蛇紋岩系・定角式的 (第161図12～23)

上記の番号に該当しないものは、破損等によって元の形態が不明なものである。これらの他にも石斧以外の機能に用いているもの(転用)、折損などにより元の大きさより減じた石斧を再調整―敲打―研磨しているもの(再加工)がある。また、各分類項目毎に類似した形態を有するまとまりもある。例えば、第163図1・2はサイズの違いはあるが、撥形を呈する点で共通している。第162図2・3・4・5は中形であり、再加工が想定される。第162図14～16は棒状の磨製石斧である。製作技術の痕跡としては、敲打痕を顕著に残置しているもの、刃部を中心に部分的に研磨するものなどが認められ、必ずしも全面研磨しているものばかりではないことが分かる。

第163図(以下の記述は第163図)1・2の平面形状は非常に近似する。2の基側部は黒色を呈する。着柄形状を残置している。3は折れ面から調整している。4は刃部の偏りが生じている。6は器体の全面に敲打痕を有する。7の裏面には剥離痕を打面とした調整が加えられている。8の器体上半は敲打のみであり、下半は研磨が加えられている。9は縁辺から細かい連続した調整が加えられている。10の刃部・右側縁は大きく折損している。

第162図(以下の記述は第162図)1は器体の全面に敲打痕を有している。2は基部側のみ敲打痕を有している。2は刃部角が鈍角を呈していることから、再利用の最終形態である可能性を有している。3は器体の中央に敲打痕を有しており、刃部側の剥離痕上にも敲打痕を有す。4は刃部よりの両側縁に打痕を有している。5は全面に敲打痕を有しており、刃部だけが研磨されている。6は剥離された磨製石斧片を研磨して再利用している。8・9は全面に敲打痕を有している。10・11の基部には剥離痕がある。12・13は磨製石斧の破片であり、使用時の事故が想定されたと考えられる。14～16は棒状の磨製石斧である。14は一部に剥離痕を残置しており、15は表面に数単位の敲打痕を有している。17は全面に剥離痕を残しており、刃部のみ研磨している。18の折れ面上には敲打痕を有しており、裏面は剥離痕によって大きく失われている。また、刃部側の縁辺も磨耗が著しい。19は折れ面縁辺部が磨られており、転用されたと考えられる。また、使用時の事故割れと考えられる剥離痕をさらに磨っており、再利用している状況が窺える。20は表面は敲打痕のみであり、裏面は研磨が加えられている。21は折れ面を打面とした剥離痕を有し、折れ面の全面が磨られている。転用が想定される。

第161図(以下の記述は第161図)1は折れ面から調整が加えられ、2は剥離痕が磨られていることから、再加工だと捉えられる。3は器体の全面に敲打痕を有し、刃部側のみ研磨されている。折れ面から細かい調整が加えられていることから、再加工されたものであるかもしれない。4の裏面には剥離痕が大きく占めている。5は原石の形状を留めており、不定形な形態を呈している。7・8は棒状の転礫を素材とし、一部を研磨することによって磨製石斧としている。9は表面中央に3単位の凹部を有している。凹部は磨製石斧の機能とは関係ないため、破碎後に転用されたと推察される。10・11は破碎した磨製石斧の小片を小形の磨製石斧として再利用している。

B類では典型的な定角式は存在しないが、石材は蛇紋岩を用いている(12を除く)。12だけは砂岩製であり、基部側の磨面のみ粗く磨かれている。折れ面を打面に剥離を加えている。平面形態も必ずしも斉一的ではなく、原石の形状を残しているため、形態が歪んでいるものがある(16・17・20)。22・23は平面形態が楕円形を呈しており、縁辺に顕著な敲打痕を有している。これらは、磨製石斧としての機能がなくなったものを叩き石として転用したものであろう。また、15は縁辺の全周に、20は基部側だけに敲打痕を残している。

## 第2項 Ⅰ区の石器

Ⅰ区については大形石器については、位置を測定したものについて石器ごとに住居跡出土数等を示し、一部を実測して提示した。石鏃・石錐などの黒曜石製石器については出土全点を観察分類し、一部を実測して提示した（第168～232図）。その際、遺物の出土状況の項で示した出土層別の出土数を提示した。以下、記載するとおり、中層出土の資料群は、住居帰属時期の様相を示す一括性のある遺物群である可能性が高い。

### 1. 石鏃

住居跡内や土坑内出土の石鏃の一部について、片面の剥離面の状況を図示した（第168～172図）。石鏃は両側縁と基部の3辺を平坦剥離で整形している。大半が凹基無茎鏃であるが、円基石鏃が11住に1点、凹基有茎鏃が1点27住に見られる。有茎鏃は山梨県内では晩期中葉になって見られるようになるものであり、この資料は混入と考えられる。先端部に接する両側縁は剥離面が器体の中央で止まるものがほとんどであるが、たびたび反対縁までおよび、刃縁や端部を剥ぎ取ってしまうものも見られる。こうした特長は押圧剥離によるものと思われる。

石鏃は縄文時代石器の中で、石匙とともに特に形が意識的に整えられていると認識される石器である。そこで、遺構出土のもので形態が明瞭なものを対象に、外郭線のみを図化し、資料提示した（第173～178図）。

ここでは、図示した資料の属性表（附表）の長さとの幅の数値から長幅比を算出し、時期別の状況を検討した（第4表）。住居跡中層出土のみの資料で検討すると明瞭な変遷状況が把握できる。諸磯b式期では129%から50%と広い範囲の分布を示す。五領ヶ台式期では119%から90%と分布範囲が限定され、猪沢式期では99%から80%、新道式期と藤内式期では99%から60%、井戸尻式期では89%から50%と、五領ヶ台式期から井戸尻式期にかけて徐々に長さに対して幅が狭くなる方向に分布範囲が遷移してゆく。住居跡上層出土資料は、五領ヶ台式期以降で大きな違いが見出せず、各時期の石鏃が混在する状況が見取れるが、120%以上の石鏃は中層、上層いずれも諸磯b式期の住居跡にしか見られない。110%以上の石鏃も中層、上層いずれも五領ヶ台式期か諸磯b式期にしか見られない。こうした流れから判断すると、曾利式期で110～119%に1点見られるが、これは諸磯b式期か五領ヶ台式期の石鏃が混入した可能性が高い。

### 2. 石錐

石錐は「交差する二辺を比較的急角度の剥離で調整し、厚手の先端部を作り出した石器」とし、「三辺を平坦剥離によって整形し、一端を比較的薄く尖らした石器」である石鏃と区別する。基部が大きくなる「つまみ部」を持つものが多く、石鏃と同様に三辺を調整したものもあるが、基部側の調整は荒く整形

第3表 石鏃住居跡別出土数（時期別）

住居	中層	上層	ピット内	破損中層	破損上層	合計	帰属時期
02住	1	6			3	10	諸磯b
09住		1				1	諸磯b
11住	8	9			4	21	諸磯b
14住		9			3	12	諸磯b
15住		1				1	諸磯b
18住	3	1				4	諸磯b
22住	2					2	諸磯b
23住	11		1	5		17	諸磯b
24住	3			1		4	諸磯b
26住		4				4	諸磯b
27住		3		2		5	諸磯b
28住	1	5		1		7	諸磯b
31住						0	諸磯b
37住		1				1	諸磯b
01住	1	12			1	14	五領ヶ台
06住	2	4			2	8	五領ヶ台
30住		7				7	五領ヶ台
36住						0	五領ヶ台
46住		1				1	五領ヶ台
47住						0	五領ヶ台
48住						0	五領ヶ台
51住		2				2	五領ヶ台
55住		2				2	五領ヶ台
57住						0	五領ヶ台
59住						0	五領ヶ台
16住	2	23		4	4	33	猪沢
17住		3				3	猪沢
19住	3	2		1	2	8	猪沢
44住						0	猪沢
45住						0	猪沢
12住		17		1	3	21	新道
29住	5			3		8	新道
32住	5			1		6	新道
34住		1		1		2	新道
04住		3				3	藤内
05住	10	4		1	1	16	藤内
07住	3					3	藤内
08住						0	藤内
10住	2	1			2	5	藤内
20住	9	1	1			11	藤内
33住	1	4				5	藤内
35住		1				1	藤内
40住						0	藤内
41住						0	藤内
49住						0	藤内
50住		1				1	藤内
53住		1				1	藤内
54住		4				4	藤内
56住						0	藤内
03住	2	11		3	3	19	井戸尻
25住	6			4		10	井戸尻
38住		1				1	井戸尻
39住		1			2	3	井戸尻
42住						0	井戸尻
43住						0	井戸尻
52住				1		1	井戸尻
13住	6		1			7	曾利
21住	2					2	曾利
58住						0	曾利

第4表 石鍬長幅比

住居跡中層											
時 期	130~139%	120~129%	110~119%	100~109%	90~99%	80~89%	70~79%	60~69%	50~59%	40~49%	資料総数
諸磯b		1		3	1	2	3	1	1		12
五領ヶ台			1	2	1						4
狝沢					2	2					4
新道					1	2	1	2			6
藤内					3	5	2	9			19
井戸尻						1	1	3	1		6
曽利			1			2	3				6

住居跡上層											
時 期	130~139%	120~129%	110~119%	100~109%	90~99%	80~89%	70~79%	60~69%	50~59%	40~49%	資料総数
諸磯b	2	1	1	7	2	10	5	5	4	3	40
五領ヶ台					1	3	6	8	3		21
狝沢				3	2	3	8	4	2		22
新道				1	2	4	2	2	1		12
藤内				1	1		3	4		1	10
井戸尻				1	1	1	3	3	2		11
曽利											

中層のみ

第5表 石鍬住居跡別出土数 (中層)

住居	IA	IB	IC	IIA	IIB	IIC	IIIA	IIIB	IIIC	IV	総数	帰属時期
02住		1			1						2	諸磯b
09住											0	諸磯b
11住	2										2	諸磯b
14住											0	諸磯b
15住											0	諸磯b
18住											0	諸磯b
22住											0	諸磯b
23住											0	諸磯b
24住											0	諸磯b
26住											0	諸磯b
27住											0	諸磯b
28住		3			1			1			5	諸磯b
31住											0	諸磯b
37住											0	諸磯b
01住				1							1	五領ヶ台
06住	1										1	五領ヶ台
30住		4	1								5	五領ヶ台
36住											0	五領ヶ台
46住											0	五領ヶ台
47住											0	五領ヶ台
48住											0	五領ヶ台
51住								1			1	五領ヶ台
55住											0	五領ヶ台
57住											0	五領ヶ台
59住		1									1	五領ヶ台
16住											0	狝沢
17住											0	狝沢
19住		1									1	狝沢
44住								1			1	狝沢
45住											0	狝沢
12住											0	新道
29住			2								2	新道
32住								1			1	新道
34住											0	新道
04住											0	藤内
05住		1			1					1	3	藤内
07住											0	藤内
08住											0	藤内
10住	1	1									2	藤内
20住		2			1					1	4	藤内
33住								3			3	藤内
35住											0	藤内
40住											0	藤内
41住											0	藤内
49住											0	藤内
50住											0	藤内
53住											0	藤内
54住											0	藤内
56住											0	藤内
03住			1								1	井戸尻
25住					1					1	2	井戸尻
38住											0	井戸尻
39住											0	井戸尻
42住											0	井戸尻
43住											0	井戸尻
52住											0	井戸尻
13住		1									1	曽利
21住		1			1						2	曽利
58住											0	曽利

41

第6表 石鍬住居跡別出土数 (全体)

住居	IA	IB	IC	IIA	IIB	IIC	IIIA	IIIB	IIIC	IV	総数	帰属時期
02住	1	3	1		1		1				7	諸磯b
09住		1									1	諸磯b
11住	2	2	1			2					7	諸磯b
14住	1	2	1		1		1				6	諸磯b
15住		2								1	3	諸磯b
18住	1	2				1				1	5	諸磯b
22住											0	諸磯b
23住	1	1	2								4	諸磯b
24住											0	諸磯b
26住											0	諸磯b
27住											0	諸磯b
28住		2				1			2		5	諸磯b
31住											0	諸磯b
37住											0	諸磯b
01住		3	2		1				1		7	五領ヶ台
06住	1	1									2	五領ヶ台
30住		4	1								5	五領ヶ台
36住											0	五領ヶ台
46住					1						1	五領ヶ台
47住											0	五領ヶ台
48住											0	五領ヶ台
51住	1								1		2	五領ヶ台
55住											0	五領ヶ台
57住											0	五領ヶ台
59住		1									1	五領ヶ台
16住	2	3	2			3			2		12	狝沢
17住			2								2	狝沢
19住		1									1	狝沢
44住									1		1	狝沢
45住	1					1					2	狝沢
12住			2								2	新道
29住						2				1	3	新道
32住									1		1	新道
34住											0	新道
04住											1	藤内
05住		2			1	1			1	1	6	藤内
07住						1					1	藤内
08住											0	藤内
10住	1	2				1				1	5	藤内
20住		2			1				1		4	藤内
33住		1							3		4	藤内
35住											0	藤内
40住											0	藤内
41住											0	藤内
49住											0	藤内
50住											0	藤内
53住						1					1	藤内
54住		1									1	藤内
56住		1									1	藤内
03住		3	1			2			1		7	井戸尻
25住						1				1	2	井戸尻
38住		1	1								2	井戸尻
39住		3	1			1					5	井戸尻
42住											0	井戸尻
43住											0	井戸尻
52住											0	井戸尻
13住		1									1	曽利
21住		1			1						2	曽利
58住											0	曽利

123

の意図が見られないので石鏃と違い不整形の場合が多く、先端部側に対して特に厚手に作られている。ここでは次のように分類した。

まず、錐部の断面形で4種類に分類する。Ⅰ類：錐部の断面が三角形のもの。Ⅱ類：錐部の断面がレンズ状（幅が厚さの2倍以上で両辺からの剥離の交差する部分が稜を形成しない）のもの。Ⅲ類：錐部の断面が四角形（幅が厚さの2倍未満で両辺からの剥離の交差する部分が稜を形成する）のもの。Ⅳ類：錐部の断面が台形・五角形などの矩形のもの。

次に、錐部の形態で3種類に分類する。A類：錐部を形成する二辺が平行するもの。B類：錐部を形成する二辺が交差しV字状のもの。C類：錐部を形成する二辺が平行し、つまみ部がない棒状のもの。

さらに、つまみ部に調整があるものを1類、ないものを2類とした。

実際の分類はⅠA1類、ⅡB2類、ⅢC類などと表記した。

出土数は、住居跡出土が123点、土坑17点である。第5・6表に住居跡別に各類型の出土数を示した。全体と中層出土のものとを別に示した。中層出土は41点と全体の1/3でしかなく、傾向を読み取ることができない。各時期ともⅠB類が主体とし、各類型が少数ずつみられる状況である。

### 3. 石匙

#### 石匙の定義

本報告での石匙は以下の定義による。「素材の一端に2方向から両面に抉り加工を施し、つまみ部を作出した石器」とする。抉り加工は敲打によるものも含まれる。素材は剥片の場合が多い。

横型の定義は、「形を構成する辺が、つまみ部を除き3辺以上あるもの。また、つまみ部を通る線分が最大長となるものについては、その線分に直行する最大幅が最大長の1/2以上のもの」とする。

縦型の定義は、「形を構成する辺が、つまみ部を除き2辺のもの。また3辺以上のもので、つまみ部を通る線分が最大長となるものについては、その線分に直交する最大幅が最大長の1/2未満のもの」とする。

#### 横型石匙

以上の定義で横型石匙に分類した石器は、94点ある。これを以下のように分類する。つまみ部の対極側にある辺を刃部と呼ぶとすると、刃部が両面加工で作られているもの（両刃）。これをⅠ群とする。刃部が片面加工のもの（片刃）。これをⅡ群とする。刃部が非加工で、素材刃縁をそのまま残しているもの。これをⅢ群とする。

さらに、表裏両面のいずれかの加工の程度を見た場合、二次加工による剥離面が全体の1/2以上のものをA群、1/2未満のものをB群とする。また、つまみ端部の加工について、表裏いずれかの面を加工したものをa群、素材剥離面、打面、折り取り面などで二次加工がなされていない非加工のものをb群とする。

なお、まったくの欠損品で分類不能のもの3点を除いた。

ⅠA a群（両刃・調整剥離面被覆率50%以上・つまみ端部加工あり）

10点ある。時期別には、住居跡出土のものは諸磯b式期1点、猪沢式期1点、藤内式期2点、井戸尻式期1点、曾利Ⅱ式期1点である。時期不明のものは、土坑内出土1点、グリッド出土3点である。石材は、黒曜石4点、下呂石1点、灰色チャート、赤色チャート、白色珪質頁岩、黒灰色珪質頁岩各1点である。

形態は、①つまみ部以外の形を構成する辺（構成辺）が3辺が大半で4辺が1点ある。②刃部形はすべて凸刃である。③つまみ部に接する側辺は凸・直・凹の三者が見られる。④つまみ部の抉り加工部分と側辺とが作り出す肩が存在するものは5点ある。⑤刃部端形が両方が尖るもの5点、片方が尖るもの1点、両端が丸いもの1点で、欠損のため不明のもの3点である。また、端部に刃部軸に平行する方向に剥離が見られる端部加撃が1点で観察できる。つまみ部傾斜角度（刃部端を結ぶ線（刃部端結線）の中央と、つまみ部の最短幅を示す線の中央とを結ぶ線の、刃部端結線との成す角度）は、86~89度と90度に近いものが7点、78度、66度、54度が各1点である。最大長が5.3cmから1.7cmと大きさにばらつきがある。

ⅠA b群（両刃・調整剥離面被覆率50%以上・つまみ端部加工なし）

9点ある。住居跡出土で時期別には、諸磯b式期3点、井戸尻式期1点である。時期不明のものは、土坑出土1点、

グリッド出土3点、表採1点である。石材は黒曜石5点、下呂石1点、灰色チャート1点、濃緑色チャート1点、黄白色風化泥岩1点である。

形態は、①構成辺は大半が3辺で、4辺が1点、5辺が1点ある。②刃部形は大半が凸刃であるが、凹刃が1点ある。③側辺は、両側辺とも凹形のものが1点、両側辺とも凸形のもの3点、両側辺とも直形のもの5点である。④肩を持つものは4点ある。⑤刃部端形が両端とも尖るもの4点、片方のみ尖るもの1点、両端とも丸いもの2点で、欠損のため不明なもの2点である。端部加撃が3点で観察でき、さらにこの他に尖った端部から槌状の小剥離が見られるものが1点ある。つまみ部傾斜角度は、85～87度が4点、70度台が2点、60度台が2点、50度台が1点である。最大長は、5.3cmから2.2cmとばらつきがある。

I B a 群 (両刃・調整剥離面被覆率50%未満・つまみ端部加工あり)

22点ある。住居跡出土は時期別では、五領ヶ台式期3点、猪沢式期1点、新道式期3点、藤内式期4点、井戸尻式期8点で、時期不明のものはグリッド出土2点、表採1点である。出土位置を見ると、諸磯b式期の住居跡が分布する区域には非常に少ない状況が見て取れる。所属遺構の明確なものは中期のもので五領ヶ台式期から井戸尻式期にかけて見られ、井戸尻式期が最も多い状況である。諸磯b式期の遺構が多い区域には曾利式期の住居跡や埋甕、配石といった遺構が重なっており、曾利式期に帰属するものも少ないものと考えられる。石材は、黒曜石製で長さ2.2cmの小型品が1点、赤色チャートで長さ2.6cmの小型品が1点あるが、I A 群で主体を成す石材はこれだけである。他の石材は、黄白色風化泥岩が8点、粘板岩が6点、粘板岩ホルンフェルスが2点、泥岩ホルンフェルスが1点、灰色砂岩が1点、緑色粘板岩が1点、珪質粘板岩が1点である。

形態は、①構成辺は大半が3辺で、4辺が2点、欠損のため不明のものが1点ある。②刃部形は直刃が2点、凹刃が1点、他はすべて凸刃である。③側辺形は凸凸が5点、凸直が5点、直直が7点、凸凹が2点、凹直が1点、欠損で不明のものが2点である。④肩は15点に観察できる。⑤つまみ部傾斜角度は、80度台が9点、70度台が6点、60度台が4点、50度台が1点と、80度台が最も多く、50度台に向かって漸移的に変化している。最大長は11.1cmから2.2cm。

I B b 群 (両刃・調整剥離面被覆率50%未満・つまみ端部加工なし)

22点ある。時期の明確な住居跡・土坑出土では時期別に、諸磯b式期は黒曜石製の最大長2.8cmの小型品が1点、五領ヶ台式期2点、土坑中から1点、猪沢式期2点、新道式期2点、藤内式期2点、井戸尻式期4点、曾利式期1点、曾利V式期の土坑出土1点、時期不明のものは土坑出土1点、グリッド出土5点である。I B a 群同様、諸磯b式期の遺構出土のものは少ない傾向であるが、確実な曾利式期のものが含まれる点やある時期のものが突出して多いという傾向がない点の特徴である。諸磯b式・曾利遺構分布領域には黒曜石製などI A 群で主体を成す石材や小型品が分布し、他の石器はI B a 群同様この領域には少ない平面分布上の偏在傾向を示す。

石材は、黒曜石が3点、最大長2.8cmの小型品が2点ある。白灰色珪質頁岩1点、黒灰色珪質頁岩1点、黄白色シルト岩1点と、I A 群で主体を成す石材は6点で小型品が多い。黄白色泥岩8点、砂岩7点、泥岩ホルンフェルス1点である。I B a 群同様に黄白色泥岩が最も多いが、I B a 群で一定量見られた粘板岩が全くないのが特徴である。

形態は、①構成辺が3辺が14点、4辺が5点、5辺が2点、欠損で不明のもの1点である。②刃形は凹刃が3点、直刃が1点、他は凸刃である。③側辺形は、凸凸が6点、直直が9点、凹凸が2点、凸直が4点、欠損のため不明が1点である。④肩が観察できるものは17点である。⑤刃部端形は、尖尖が4点、尖角が5点、尖丸が1点、角角が7点、角丸が3点、丸丸が1点、欠損のため不明が1点である。⑥つまみ部傾斜角度は、80度台8点、70度台7点、60度台4点、50度台2点、欠損で計測不能のもの1点である。

最大長は9.7cmから1.8cm。

II A a 群 (片刃・調整剥離面被覆率50%以上・つまみ端部加工あり)

6点ある。住居跡出土の時期別では、諸磯b式期1点、藤内式期1点、他はグリッド出土で時期不明。石材は、黒曜石2点、赤色チャート1点、赤白色チャート1点、黄白色風化泥岩2点である。石材はI A 群と共通する。

形態は、①構成辺数は、3辺が4点、4辺1点、5辺1点である。②刃形は凸刃が5点、直刃が1点である。③側

辺形は凸凸が2点、凸直が1点、直直が3点である。④肩は4点で観察できる。⑤刃部端形は、角角が3点、尖角が2点、角丸が1点である。⑥つまみ部傾斜角度は、90度1点、80度台2点、70度台2点、45度が1点である。最大長が5.2cmから3.0cmで中・小型品に限られる。

II A b 群 (片刃・調整剥離面被覆率50%以上・つまみ端部加工なし)

4点ある。住居跡出土の時期別では、諸磯b式期1点、井戸尻式期1点で、所属時期不明のグリッド出土2点である。石材は、黒曜石1点、黒灰色シルト質チャート1点、灰色チャート1点、黄白色風化泥岩1点である。

形態は、①構成辺数がすべて3辺、②刃形が凸3点、凹1点、③側辺形が凸凸2点、直直1点、凹直1点、④肩は1点で観察できる。⑤刃部端形は凸凸2点、丸丸1点、角角1点。⑥つまみ部傾斜角度は、80度台2点、70度台2点。最大長は、4.5cmから2.7cmで中・小型品のみである。

II B a 群 (片刃・調整剥離面被覆率50%未満・つまみ端部加工あり)

6点ある。住居跡・土坑出土の時期別では、五領ヶ台式期2点、五領ヶ台式期の可能性がある土坑出土1点、藤内式期1点、所属時期不明のグリッド出土2点である。石材は、赤色チャート1点、緑灰色茶色スジ入りチャート1点、濃緑色白シマ入りチャート1点、白灰色珪質頁岩2点、黄白色風化泥岩1点である。I A 群やII A 群に利用されている黒曜石がみられず、チャートや珪質頁岩が多用されている。

形態は、①構成辺数は、3辺が2点、4辺が2点、不明が2点、②刃形は凸刃が5点、直刃が1点、③側辺形は、凸凸が2点、直直が1点、不明が2点、④肩が観察できるもの3点、⑤刃部端形は、角角が3点、尖角が1点、不明が2点、⑥つまみ部傾斜角度は80度台1点、70度台1点、60度台1点、49度が1点、欠損のため計測不能が2点である。最大長が、5.3cmから4.1cmと欠損品も含めて中型品ばかりである。

II B b 群 (片刃・調整剥離面被覆率50%未満・つまみ端部加工なし)

5点ある。住居跡出土の時期別では諸磯b式期1点、新道式期1点、藤内式期1点、井戸尻式期1点、時期不明のグリッド出土が1点である。

形態は、①構成辺数が3辺4点、4辺1点、②刃形が凸刃3点、直刃2点、③側辺形が凸直3点、直直2点、④肩が観察できるのは3点、⑤刃部端形が角角2点、尖角2点、丸丸1点、⑥つまみ部傾斜角度は、80度台1点、60度台3点、50度台1点である。最大長は、7.2cmから2.0cmで中・小型品である。

なお、II 群の片刃石匙は両刃と違いソーイングの動作は想定しておらず、スクレーピングないしはホイットリングの動作を意識した刃部整形である可能性が考えられる。特に、II B 群の中に刃部角度が60度程度と急角度のものが多く含まれ、石材もチャートや珪質頁岩などの限定されるので、I 群とは違った限定的な機能が想定可能と思われる。

III 群 (非加工刃部)

本地区では調整剥離面被覆率50%未満で、つまみ端部加工のあるIII B a 群のみが確認できる。7点ある。住居跡出土の時期別では、諸磯b式期1点、五領ヶ台式期1点、新道式期2点、井戸尻式期2点、時期不明ながら土坑内出土1点である。石材は灰色チャート1点、黒灰色珪質頁岩1点、黄白色風化泥岩1点、粘板

第7表 石匙形態別出土数

形態(中層・土坑一横形のみ)

時期	I Aa	I Ab	II Aa	II Ab	I Ba	I Bb	II Ba	II Bb	III Ba
諸磯b	1	1		1			1	1	
五領ヶ台					1	1	1		
狹沢						1			
新道					4	2		1	1
藤内					4	2	1		
井戸尻	1			1	2	3			2
曾利	2	1				2			

形態(上層一横形のみ)

時期	I Aa	I Ab	II Aa	II Ab	I Ba	I Bb	II Ba	II Bb	III Ba
諸磯b			2	2				1	
五領ヶ台					1	1			1
狹沢	1				1	1			
新道									
藤内	2		1		1	1	1	1	
井戸尻					3	1			
曾利									

第8表 石匙石材別出土数

石材(中層・土坑一縦・横)

時期	黒曜石	チャート	白色頁岩	珪質頁岩	黄白色泥岩	泥岩ホルンフェルス	砂岩	粘板岩
諸磯b	2	4						
五領ヶ台	1	2	1				1	1
狹沢					1	1		
新道					2	4		2
藤内	1	1			1		2	3
井戸尻	1	1		2	2	1	1	4
曾利		3			1		1	

石材(上層一縦・横)

時期	黒曜石	チャート	白色頁岩	珪質頁岩	黄白色泥岩	泥岩ホルンフェルス	砂岩	粘板岩
諸磯b	2	2	1		1			
五領ヶ台	1					1	1	
狹沢				2	1			1
新道								
藤内		2	1	2	1			1
井戸尻					3	1		
曾利								



岩1点、泥岩ホルンフェルス3点である。

形態は、①構成辺数が3辺が6点、4辺が1点、②刃形が、凸刃が6点、直刃が1点、③側辺形が、凸凸が2点、凸直が4点、直直が1点、④肩が観察できるものは5点、⑤刃部端形は、角角5点、丸丸が1点、丸尖が1点、⑥つまみ部傾斜角度が80度台3点、60土台2点、50度台2点である。最大長は、9.0cmから4.8cmで大・中型品である。

#### 縦形石匙

縦形石匙と分類したものは14点ある。横形石匙同様に分類するにあたり、つまみ部挟り加工に接する辺を刃部とするとI・I(両刃・両刃)といった具合に分類すると、I・IAa群2点、I・IAb群2点、I・IBa群2点、I・IBb群1点、I・IIBb群2点、II・IIBb群1点、I・IIIBa群2点、I・IIIBb群2点である。I・IA群とII・IIB群とは黒曜石を石材としているのに対し、I・IB群とI・III群は粘板岩3点、黄白色風化泥岩1点、黒灰色珪質頁岩2点、白灰色シルト岩1点と横形の同群と同様な石材構成である。

所属時期は、I・IIIAa群の1点が諸磯b式期住居跡出土、II・IIBb群の1点が諸磯b式期住居跡出土。I・IAb群の1点は五領ヶ台式期土坑内出土である。一方、I・IIIBa群は1点が井戸尻式期住居跡出土、I・IIBb群では猪沢式期住居跡内ピット出土1点(泥岩ホルンフェルス)、I・IIIBa群が土坑内出土1点、I・IIIBb群の1点が藤内式期住居跡出土、同群の1点が井戸尻式期住居跡出土である。I・IA群とII・IIB群が諸磯b式期、五領ヶ台式期であるのに対し、I・IB群とIII群がらみは五領ヶ台式期から井戸尻式期にかけてに帰属する。平面分布を見ても、I・IA群とII・IIB群が諸磯b式期遺構分布区域に分布するのに対し、I・IB群とIII群がらみは調査区西側にかたよった分布状況を示している。

形態は、①構成辺数はI・IA群とII・IIB群が2辺1点、3辺3点、4辺1点。I・IB群とIII群がらみは2辺が3点、3辺が3点、4辺が1点である。②刃形はつまみ部挟り加工に接する辺を刃部とすると凸刃のみである。ただし、I・III群の中に片側の辺が折り取り面のもの2点、自然面のもの1点で、片側辺のみが刃部であるものが3点ある。④肩については、すべてに観察できる。⑤刃部端形については、角、尖、丸のいずれも確認できる。⑥つまみ部傾斜角度については2つの刃部の内、角度の大きい方を取った場合、10度台2点、20度台2点、30度台4点、40度台4点で、50度台は51度が1点ある。横形は80度台から50度台までであり、縦形との違いは見て取れるが、数値の上では連続的である。

#### 酒呑場遺跡の石匙の特徴

各時期の住居跡と土坑出土の石匙について時期別に形態組成の状況を第7表に示した。住居跡中層・土坑出土のものについては、調整剥離面被覆率50%以上のもの(A類)が諸磯b式期と井戸尻式期、曾利式期に見られるものの、五領ヶ台式期から藤内式期には見られない。住居跡上層出土のものも、五領ヶ台式期・新道式期・井戸尻式期・曾利式期には見られない状況である。調整剥離面被覆率50%未満のもの(B類)はすべての時期に見られ、大半の時期でA類を凌駕するが、諸磯b式期のみA類がB類を上回っている。

住居跡・土坑出土の石匙の石材を見ると、A類は黒曜石・チャートを主体とし、珪質頁岩と黄白色風化泥岩、珪質頁岩が見られ、珪質度の高い石材のみで構成されている。黒曜石製のA類は諸磯b式期と井戸尻式期、曾利式期にあり、曾利式期のものは2点が土坑出土である。B類は諸磯b式期でチャート、白色頁岩と珪質度の高い石材のみで構成され、A類の石材構成と近似するが、五領ヶ台式期では黒曜石・チャート・白色頁岩といった珪質度の高い石材と、泥岩ホルンフェルス・砂岩といった珪質度の低い石材が加わる。猪沢式期では黄白色風化泥岩や珪質頁岩と比較的珪質度が高い石材のみであるが、新道式期から曾利式期にかけて粘板岩・砂岩・泥岩ホルンフェルスといった珪質度の低い石材が主体となる。いずれにせよ、実に多様な石材が使用されている点に注目すべきである。

A類は2cmから5cm程度と中・小形品、B類は片刃のII・IIBa類が4cmから5cmの中形のみであるが、他は2cm程度から大きいものは11cmと小形から大形まで見られる。刃部非加工のIII類は4cmから8cmと中・大形品のみである。この大きさの違いは、刃部の再加工といった過程で小型化した可能性もあるが、表裏に素材面を残す石匙の厚さ(素材厚)と長さとの正比例関係がみられることから、製作当初から大小の違いが作り分けられていたと考えられる。大きいものには厚い素材が選ばれ、これは再加工されても小型化するのに限度があるし、小形のものには薄い素材が選ばれ

て、大形には選ばれない素材である。

機能的にある特定の使用目的に限定されていた可能性があるⅡB類を除いて、他の石匙については違いがあったかどうか疑問である。A類は諸磯b式期で卓越するが五領ヶ台式期から新道式期で希薄になるものの、藤内式期から曾利式期にかけて使用されている可能性が高い。A類は五領ヶ台式期から新道式期にかけて消滅するのではなく、B類が同一機能に充当されていたと考えたい。この間、B類の石材が珪質度の高いものから低いもの主体へと漸移的に変化している。こうした事情をふまえると、石匙の精製・粗製の違いは機能の違いというよりもより大形の石匙が求められたため、珪質度の高い黒曜石やチャートなどの石材では対応できなかった可能性がある。B類の石匙の製作手法の中に打製石斧に用いられる手法が見られる。抉り部分には敲打、刃部には鋸歯状剥離である。こうした点から打製石斧と同様な機能も想定可能ではあるが、打製石斧と同様な石材を使用したため（粘板岩・砂岩など）その加工に適した加工手法が導入されたとも考えられる。大形化の要因については、石匙の象徴的意義を考えたい。

#### 4. 打製石斧

打製石斧は短冊形と刃部側が若干開いた撥形とが主体であり、分銅形と思われるものは2点見られるのみである。住居跡出土数を時期別に見てみると（第9・10表）、中層出土のものは、諸磯b式期で3点以下の出土数である。五領ヶ台式期では13点まで分布範囲が広がり、猪沢式期で35点もの多量出土住居が見られるようになる。猪沢式期から井戸尻式期までの住居では24点以下のグループと30点以上のグループとに2分するように見える。

中層出土の資料のうち、各住居跡で長さが最大なものを集計してみると（第11表）、諸磯b式期では8cm台から13cm台で10cm台が最も多い。五領ヶ台式期では10cm台から14cm台、猪沢式期では12cm台から14cm台、新道式期では13cm台から16cm台、藤内式期では12cm台から20cm台とより大形のものへと変遷している。井戸尻式期では10cm台から18cm台と藤内式期と比較して小形化の方向に分布範囲が変化するが、藤内式期でも新道式期に見られない12cm台が最も多くなっている点、小形化の傾向が出現しているように見える。曾利式期では9cm台から12cm台とさらに小形化する。

#### 5. 横刃形石器

ここで示す横刃形石器は、「砂岩・粘板岩・石英斑岩などの珪質度の低い石材の大形剥片を素材とし、粗い加工で両刃の刃部を作出した石器」とした。打製石斧は刃部や基部も含めて4辺が調整され深い調整剥離が成されるが、横刃形石器は調整が浅く非加工の辺が必ず残されている。刃部の数で3種類に分類した。Ⅰ類：刃部が一辺のもの（第205図1・2）。Ⅱ類：刃部が2辺以上で交差しているもの（第205図3・4）。Ⅲ類：刃部が2辺で交差しないもの。さらにⅢ類を調整のありかたで3種類に分類した。Ⅲa類：2辺とも浅い粗い加工のもの（第206図1・2）。Ⅲb類：1辺の調整が比較的深いもの（第206図3）。Ⅲc類：1辺の調整が素材打面や打瘤を除去するように深く施されたもの（第205図4）。

各時期別に住居跡中層出土数を見てみると（第12・13表）、諸磯

第9表 打製石斧住居跡別出土数（時期別）

住居	全体打製石斧数	中層出土	上層出土	最大長	帰属時期
02住	3	1	2	8	諸磯b
09住	1	0	1	0	諸磯b
11住	16	2	14	10	諸磯b
14住	12	2	10	10	諸磯b
15住	5	3	2	12	諸磯b
18住	6	1	5	13	諸磯b
22住	1	1	0	10	諸磯b
23住	3	2	1	11	諸磯b
24住	2	2	0	12	諸磯b
26住	1	1	0	8	諸磯b
27住	3	3	0	10	諸磯b
28住	1	1	0	10	諸磯b
31住	2	2	0	11	諸磯b
37住	1	0	1	0	諸磯b
01住	34	12	22	14	五領ヶ台
06住	3	0	3	0	五領ヶ台
30住	12	4	8	11	五領ヶ台
36住	5	5	0	12	五領ヶ台
46住	36	10	26	12	五領ヶ台
47住	13	13	0	13	五領ヶ台
48住	8	8	0	14	五領ヶ台
51住	14	5	9	14	五領ヶ台
55住	3	1	2	13	五領ヶ台
57住	4	1	3	10	五領ヶ台
59住	0	0	0	0	五領ヶ台
16住	73	35	38	14	猪沢
17住	26	8	18	14	猪沢
19住	7	1	6	14	猪沢
44住	25	12	13	13	猪沢
45住	16	10	6	12	猪沢
12住	41	37	4	16	新道
29住	23	23	0	14	新道
32住	49	41	8	14	新道
34住	9	3	6	13	新道
04住	12	7	5	14	藤内
05住	39	34	5	16	藤内
07住	10	10	0	12	藤内
08住	2	2	0	13	藤内
10住	38	19	19	12	藤内
20住	54	49	5	16	藤内
33住	28	24	4	12	藤内
35住	12	11	1	12	藤内
40住	2	2	0	12	藤内
41住	0	0	0	0	藤内
49住	57	39	18	13	藤内
50住	10	7	3	18	藤内
53住	17	7	10	20	藤内
54住	36	10	26	15	藤内
56住	26	13	13	16	藤内
03住	28	3	25	10	井戸尻
25住	18	18	0	13	井戸尻
38住	41	31	10	18	井戸尻
39住	14	6	8	16	井戸尻
42住	22	10	12	14	井戸尻
43住	46	45	1	14	井戸尻
52住	15	15	0	12	井戸尻
13住	1	1	0	9	曾利
21住	9	9	0	11	曾利
58住	1	1	0	12	曾利

第10表 打製石斧住居跡内時期別出土数

中層											
時期	0	1~4点	5~9点	10~14点	15~19点	20~24点	25~29点	30~34点	35~39点	40~44点	45~49点
諸磯b	2	12									
五領ヶ台	2	3	3	3							
猪沢		1	1	2					1		
新道		1				1			1	1	
藤内	1	2	3	4	1	1			1		1
井戸尻		1	1	1	2			1			1
曾利		2	1								

上層											
時期	0	1~4点	5~9点	10~14点	15~19点	20~24点	25~29点	30~34点	35~39点	40~44点	45~49点
諸磯b	6	5	1	2							
五領ヶ台	4	3	2			1	1				
猪沢			2	1	1				1		
新道	1	1	2								
藤内	4	3	3	2	2		1				
井戸尻	2	1	1	2			1				
曾利	3										

第11表 打製石斧住居跡中層出土最大長

時期	8cm	9cm	10cm	11cm	12cm	13cm	14cm	15cm	16cm	17cm	18cm	19cm	20cm
諸磯b	2		5	2	2	1							
五領ヶ台			1	1	2	2	3						
猪沢					1	1	3						
新道						1	2		1				
藤内					5	2	1	1	3		1		1
井戸尻			1		1	1	2		1		1		
曾利		1		1	1								

b式期が1点以下、五領ヶ台式期も1点以下であるが、猪沢式期で7点と最多出土が見られ、新道式期では6点、藤内・井戸尻・曾利式期では5点が最も多い点数となる。諸磯b・五領ヶ台式期よりも猪沢式期以降のほうがより活発に横刃形石器を使用していると言える。

## 6. 磨製石斧

磨製石斧は、「研磨によって刃部が形成され表面が整形された石器」とし、成型手法で7種類に分類する。

I類：器体全体の敲打により乳棒状に成型されたもの（第208図1～4・第209図1）。断面が円形から楕円形。II類：器体のほぼ全面を敲打し、一部に剥離することで成型したもの（第209図2・3）。断面が比較的扁平な楕円形

となる。III類：一部を

敲打するものの大部分

に素材の自然面を残す

もの（第210図1）。断面

面が不整楕円形となる。

IV類：主に剥離によって

成型したもの（第210図

2・3）。断面が打製石

斧同様な扁平なものとなる。

V類：おそらく擦切

り法で成型された、いわ

ゆる定角式磨製石斧（第

211図1～6）。大きさに

バラエティがある。VI

類：おそらく素材が剥片

第12表 横刃形石器住居跡内時期別出土数

中層								
時期	0	1・2点	3・4点	5・6点	7・8点	9・10点	11・12点	13・14点
諸磯b	7	7						
五領ヶ台	8	3						
猪沢	2	1	1			1		
新道	2				2			
藤内	7	4	2	2				
井戸尻	3	3			1			
曾利	1	1			1			

上層								
時期	0	1・2点	3・4点	5・6点	7・8点	9・10点	11・12点	13・14点
諸磯b	11	3						
五領ヶ台	8	1	1	1				
猪沢	2	2	1					
新道			3	1				
藤内	8	5	2					
井戸尻	4	1	1	1				
曾利	3							

第13表 横刃形石器住居跡別出土数 (時期別)

住居	横刃中層	横刃上層	合計	帰属時期
02住	1	1	2	諸磯b
09住			0	諸磯b
11住	1	2	3	諸磯b
14住	1		1	諸磯b
15住	1		1	諸磯b
18住		1	1	諸磯b
22住			0	諸磯b
23住	1		1	諸磯b
24住			0	諸磯b
26住			0	諸磯b
27住	1		1	諸磯b
28住			0	諸磯b
31住	1		1	諸磯b
37住			0	諸磯b
01住		3	3	五領ヶ台
06住		2	2	五領ヶ台
30住			0	五領ヶ台
36住			0	五領ヶ台
46住	1	5	6	五領ヶ台
47住	1		1	五領ヶ台
48住			0	五領ヶ台
51住	1		1	五領ヶ台
55住			0	五領ヶ台
57住			0	五領ヶ台
59住			0	五領ヶ台
16住	7	4	11	猪沢
17住		1	1	猪沢
19住	1		1	猪沢
44住	4		4	猪沢
45住		1	1	猪沢
12住	6	3	9	新道
29住		1	1	新道
32住	6	1	7	新道
34住		2	2	新道
04住		1	1	藤内
05住	1	2	3	藤内
07住		4	4	藤内
08住			0	藤内
10住	4		4	藤内
20住	5		5	藤内
33住	2	1	3	藤内
35住		1	1	藤内
40住			0	藤内
41住			0	藤内
49住	5		5	藤内
50住	2	3	5	藤内
53住	3		3	藤内
54住	1	1	2	藤内
56住			0	藤内
03住	1	3	4	井戸尻
25住		5	5	井戸尻
38住	2		2	井戸尻
39住		2	2	井戸尻
42住			0	井戸尻
43住	2		2	井戸尻
52住	5		5	井戸尻
13住	1		1	曾利
21住	5		5	曾利
58住			0	曾利

第14表 磨製石斧住居跡別出土数 (時期別)

住居	磨製石斧全体	中層出土							上層出土	帰属時期
		I類	II類	III類	IV類	V類	VI類	VII類		
02住	0									諸磯b
09住	1								1	諸磯b
11住	3								3	諸磯b
14住	3	1							2	諸磯b
15住	0									諸磯b
18住	0									諸磯b
22住	0									諸磯b
23住	0									諸磯b
24住	0									諸磯b
26住	0									諸磯b
27住	1			1						諸磯b
28住	0									諸磯b
31住	0									諸磯b
37住	0									諸磯b
01住	3								3	五領ヶ台
06住	2	1	1							五領ヶ台
30住	4								4	五領ヶ台
36住	0									五領ヶ台
46住	0									五領ヶ台
47住	0									五領ヶ台
48住	0									五領ヶ台
51住	3			1					2	五領ヶ台
55住	0									五領ヶ台
57住	0									五領ヶ台
59住	0									五領ヶ台
16住	3	2	1							猪沢
17住	1								1	猪沢
19住	1						1			猪沢
44住	0									猪沢
45住	2								2	猪沢
12住	1			1						新道
29住	2		1		1					新道
32住	4	1	1		2					新道
34住	1								1	新道
04住	1				1					藤内
05住	1		1							藤内
07住	0									藤内
08住	0									藤内
10住	5		2			1			2	藤内
20住	3	2	1							藤内
33住	3	1			2					藤内
35住	0									藤内
40住	1				1					藤内
41住	0									藤内
49住	4	1	2						1	藤内
50住	0									藤内
53住	1	1								藤内
54住	1								1	藤内
56住	1								1	藤内
03住	3	1							2	井戸尻
25住	3	2	1							井戸尻
38住	1								1	井戸尻
39住	2								2	井戸尻
42住	0									井戸尻
43住	0									井戸尻
52住	1			1						井戸尻
13住	0									曾利
21住	0									曾利
58住	0									曾利

と思われる非常に薄いつくりで、石材もピッチストーンと思われる特殊なもの(第211図7)。Ⅶ類：乳棒状石斧(I類)の破片を利用して再加工した磨製石斧(第212図1)。なお、磨製石斧を斧以外の目的に再利用したと思われるものをⅡ類とした。第212図2が乳棒状石斧の刃部側をすり石として再利用したもの。第212図3は刃部側を折り取りタキ石として再利用したと思われるものである。

### 7. 石鉢

グリッド出土のため帰属時期が不明(第212図4)。軟質の凝灰岩ないしはデイサイトを素材とし、敲打によって成型したもので、3つの破片が一括出土した。推定径16.0cm、推定高8.5cmで、丸底と思われる。口縁部が外側に突出するもので、土器には似た形態が見られない。内面は黒く変色しており、火を使用した用途、たとえば灯明などに使用された可能性が考えられる。

## 8. 礫器

大きく2種類に分けられる。比較的大きく深い剥離により刃部を形成したもので、大形のものを中心とする大形礫器。比較的小さく浅い剥離により刃部を形成したもので、扁平な小礫、礫片、板状礫を分割したのなどを素材とする小形礫器。小形礫器は使用する素材によって分類できる。A類：小形扁平礫の比較的鋭利な縁辺を刃部としたもの（第216図1～12）。B類：小形扁平礫の厚みのある縁部を刃部としたもの（第217図1～3）。C類：小形の礫片の刃縁部を刃部としたもの（第217図8～11）、D類：薄い板状礫を分割した素材の分割面や厚みのある縁部を刃部としたもの（第217図4・5）、E類：薄い板状礫を分割した素材の比較的鋭利な縁辺を刃部としたもの（第217図12・13）。さらに、敲打痕が刃部の広範囲に見られるものをH類とした（第217図6・7）。なお、B類とD類は片刃のみであるが、他は片刃・両刃の両者がみられる。

大形礫器は109点を確認した。小形礫器は894点で、A類が303点、B類が44点、C類が327点、D類が47点、E類が68点、H類が105点である。

大形礫器は、住居跡出土の各時期別の出土数を見ると（第15表）、諸磯b式期では14軒中8軒と約6割の住居の中層中から出土しており、出土数は1点から3点である。五領ヶ台式期では中層、上層含めて11軒中1軒から

しか出土がなく、出土数も1点のみである。五領ヶ台式期では大形礫の使用がほとんど見られないと言える。猪沢式期では、4軒中2軒の中層で出土し、出土数はいずれも1点であるが上層から5点が出土している。出土位置から整理段階で井戸尻式期の住居の存在が推定された場所である。新道式期では4軒中1軒で出土数1点、藤内式期は15軒中5軒で、3点出土した20住以外は1点である。井戸尻式期では7軒中4軒と諸磯b式期同様約6割の住居跡の中層から出土し、出土数は1点か2点である。曾利式期では3軒中1軒で出土数2点である。大形礫器の利用が多いのは諸磯b式期と井戸尻式期である。

小形礫器全体について、住居跡出土の各時期別の出土数を見ると（第16・17表）、中層出土のものでは諸磯b式期では1～4点が最も多く0点から7点。五領ヶ台式期では0点から5点と諸磯b式期同様少ないが、猪沢式期になる

第15表 大形礫器住居跡別出土数  
(時期別)

住居	全体 礫器数	中層 出土数	上層 出土数	帰属時期
02住	0	0	0	諸磯b
09住	1	0	1	諸磯b
11住	1	1	0	諸磯b
14住	2	0	2	諸磯b
15住	3	2	1	諸磯b
18住	2	0	2	諸磯b
22住	1	1	0	諸磯b
23住	1	1	0	諸磯b
24住	0	0	0	諸磯b
26住	3	3	0	諸磯b
27住	1	1	0	諸磯b
28住	3	3	0	諸磯b
31住	0	0	0	諸磯b
37住	2	2	0	諸磯b
01住	0	0	0	五領ヶ台
06住	0	0	0	五領ヶ台
30住	0	0	0	五領ヶ台
36住	0	0	0	五領ヶ台
46住	0	0	0	五領ヶ台
47住	0	0	0	五領ヶ台
48住	0	0	0	五領ヶ台
51住	1	1	0	五領ヶ台
55住	0	0	0	五領ヶ台
57住	0	0	0	五領ヶ台
59住	0	0	0	五領ヶ台
16住	5	1	4	猪沢
17住	6	1	5	猪沢
19住	0	0	0	猪沢
44住	0	0	0	猪沢
45住	1	1	0	猪沢
12住	1	1	0	新道
29住	0	0	0	新道
32住	0	0	0	新道
34住	0	0	0	新道
04住	0	0	0	藤内
05住	1	1	0	藤内
07住	0	0	0	藤内
08住	0	0	0	藤内
10住	1	1	0	藤内
20住	3	3	0	藤内
33住	0	0	0	藤内
35住	0	0	0	藤内
40住	0	0	0	藤内
41住	0	0	0	藤内
49住	2	0	2	藤内
50住	0	0	0	藤内
53住	1	0	1	藤内
54住	2	1	1	藤内
56住	2	1	1	藤内
03住	0	0	0	井戸尻
25住	0	0	0	井戸尻
38住	2	2	0	井戸尻
39住	3	1	2	井戸尻
42住	3	2	1	井戸尻
43住	2	2	0	井戸尻
52住	0	0	0	井戸尻
13住	0	0	0	曾利
21住	2	2	0	曾利
58住	0	0	0	曾利

第16表 小形礫器住居跡別出土数  
(時期別)

住居	全体 礫器数	中層 出土数	上層 出土数	帰属時期
02住	2	1	1	諸磯b
09住	2	0	2	諸磯b
11住	11	4	7	諸磯b
14住	9	2	7	諸磯b
15住	2	1	1	諸磯b
18住	2	1	1	諸磯b
22住	1	1	0	諸磯b
23住	1	1	0	諸磯b
24住	0	0	0	諸磯b
26住	7	7	0	諸磯b
27住	1	1	0	諸磯b
28住	0	0	0	諸磯b
31住	2	2	0	諸磯b
37住	1	0	1	諸磯b
01住	5	0	5	五領ヶ台
06住	0	0	0	五領ヶ台
30住	5	5	0	五領ヶ台
36住	1	0	1	五領ヶ台
46住	5	1	4	五領ヶ台
47住	0	0	0	五領ヶ台
48住	1	1	0	五領ヶ台
51住	4	1	3	五領ヶ台
55住	3	3	0	五領ヶ台
57住	1	1	0	五領ヶ台
59住	0	0	0	五領ヶ台
16住	42	20	22	猪沢
17住	14	6	8	猪沢
19住	2	1	1	猪沢
44住	17	9	8	猪沢
45住	3	1	2	猪沢
12住	9	6	3	新道
29住	8	8	0	新道
32住	22	22	0	新道
34住	7	0	7	新道
04住	3	0	3	藤内
05住	64	53	11	藤内
07住	24	24	0	藤内
08住	0	0	0	藤内
10住	32	13	19	藤内
20住	34	32	2	藤内
33住	34	29	5	藤内
35住	19	18	1	藤内
40住	2	2	0	藤内
41住	1	1	0	藤内
49住	43	30	13	藤内
50住	2	2	0	藤内
53住	27	5	22	藤内
54住	5	1	4	藤内
56住	15	6	9	藤内
03住	28	3	25	井戸尻
25住	21	21	0	井戸尻
38住	34	21	13	井戸尻
39住	16	6	10	井戸尻
42住	8	3	5	井戸尻
43住	17	17	0	井戸尻
52住	9	9	0	井戸尻
13住	4	4	0	曾利
21住	11	11	0	曾利
58住	0	0	0	曾利

第17表 小形礫器住居跡内時期別出土数

中層												
時期	0	1~4点	5~9点	10~14点	15~19点	20~24点	25~29点	30~34点	35~39点	40~44点	45~49点	50~54点
諸磯b	4	9	1									
五領ヶ台	5	5	1									
猪沢		2	2									
新道	1		2			1						
藤内	2	4	2	1	1	1	1	2			1	1
井戸尻		2	2		1	2						
曾利	1	1		1								
上層												
時期	0	1~4点	5~9点	10~14点	15~19点	20~24点	25~29点	30~34点	35~39点	40~44点	45~49点	50~54点
諸磯b	7	5	2									
五領ヶ台	7	3	1									
猪沢		2	2			1						
新道	2	1	1									
藤内	5	4	2	2	1	1						
井戸尻	3		1	2				1				
曾利	3											

と20点出土した住居（16住）が見られる。新道式期では5~9点が最も多く、最大22点である。藤内式期ではさらに増加し、25点以上出土した住居が5軒あり最大53点（5住）である。井戸尻式期では最大が22点となる。曾利式期ではさらに少なくなり最大が11点である。小形礫器は藤内式期で最も多用される石器といえることができる。先にみた大形礫器は、諸磯b式期と井戸尻式期に多く利用されており、小形礫器とは利用状況が異なることが把握できる。これは両者の用途の違いを反映している可能性が高い。

9. タタキ石

タタキ石は礫の一端に敲打痕の認められる石器で、I区で294点を確認した。素材の形態で3種類に分類できる。I類：棒状ないしは楕円形等の円礫を素材としたもの（整理段階でタタキAと表記。第218図1・2）。186点。さまざまな大きさがあり、1kgを超えるものがある。最大2091g。II類：小形扁平礫を素材としたもの（整理段階でH2類と表記）。69点。重量がおおむね300g台以下。小形礫器と素材が共通し、機能上の違いが問題となる。III類：方形分割礫素材（整理段階で方形A・Bなどと表記）。39点。さまざまな大きさがあり、最大1400g。なお、第218図3~6は大形礫器であるが、刃部に敲打痕が広範に見られるものである。タタキ石も第218図1・2のように、剥離痕が見られるものも多く、タタキ石・礫器の多くはタタキ切のような動作で使用された可能性が考えられる。

各時期別に住居跡中層出土数を見てみると（18・19表）、諸磯b式期では2点以下で、0点が多い。五領ヶ台式期は3点以下で0点が過半数を占める。猪沢式期では5点出土した住居跡があり、0点の住居跡がごく少なくなる。新道式期では5点出土した住居跡が2軒あり、1・2点と少数出土の住居跡が見られない。藤内式期になると他の時期には見られない7点以上の住居跡が4軒あり、最大出土数14点（5住）で井戸尻式期では最大6点である。3・4点出土の住居跡が最も多い。曾利式期も最大5点である。藤内式期が最も

第18表 タタキ石住居跡別出土数（時期別）

住居	全体 タタキ石	中層 出土数	上層 出土数	帰属時期
02住	5	2	3	諸磯b
09住	0	0	0	諸磯b
11住	0	0	0	諸磯b
14住	1	1	0	諸磯b
15住	3	1	2	諸磯b
18住	1	1	0	諸磯b
22住	0	0	0	諸磯b
23住	1	0	1	諸磯b
24住	1	1	0	諸磯b
26住	0	0	0	諸磯b
27住	2	2	0	諸磯b
28住	0	0	0	諸磯b
31住	0	0	0	諸磯b
37住	2	1	1	諸磯b
01住	4	3	1	五領ヶ台
06住	1	1	0	五領ヶ台
30住	1	1	0	五領ヶ台
36住	1	0	1	五領ヶ台
46住	3	1	2	五領ヶ台
47住	0	0	0	五領ヶ台
48住	0	0	0	五領ヶ台
51住	4	3	1	五領ヶ台
55住	0	0	0	五領ヶ台
57住	0	0	0	五領ヶ台
59住	0	0	0	五領ヶ台
16住	9	5	4	猪沢
17住	6	2	4	猪沢
19住	0	0	0	猪沢
44住	6	3	3	猪沢
45住	4	4	0	猪沢
12住	11	5	6	新道
29住	5	5	0	新道
32住	4	4	0	新道
34住	0	0	0	新道
04住	2	1	1	藤内
05住	18	14	4	藤内
07住	8	8	0	藤内
08住	0	0	0	藤内
10住	14	11	3	藤内
20住	9	9	0	藤内
33住	5	5	0	藤内
35住	3	3	0	藤内
40住	0	0	0	藤内
41住	0	0	0	藤内
49住	7	4	3	藤内
50住	3	1	2	藤内
53住	3	0	3	藤内
54住	3	3	0	藤内
56住	5	1	4	藤内
03住	7	3	4	井戸尻
25住	6	6	0	井戸尻
38住	5	1	4	井戸尻
39住	4	1	3	井戸尻
42住	5	0	5	井戸尻
43住	4	4	0	井戸尻
52住	3	3	0	井戸尻
13住	2	2	0	曾利
21住	5	5	0	曾利
58住	0	0	0	曾利

第19表 タタキ石住居跡内時期別出土数

中層								
時期	0	1・2点	3・4点	5・6点	7・8点	9・10点	11・12点	13・14点
諸磯b	7	7						
五領ヶ台	6	3	2					
猪沢	1	1	2	1				
新道	1		1	2				
藤内	4	3	3	1	1	1	1	1
井戸尻	1	2	3	1				
曾利	1	1		1				

上層								
時期	0	1・2点	3・4点	5・6点	7・8点	9・10点	11・12点	13・14点
諸磯b	10	3	1					
五領ヶ台	7	4						
猪沢	2		3					
新道	3			1				
藤内	8	2	5					
井戸尻	3		3	1				
曾利	3							

第20表 クボミ石住居跡別出土数（時期別）

住居	全体 礫器数	中層出土							上層 出土数	帰属時期
		中・小ク ボミのみ	大クボミ のみ	広口スリ	横口スリ	小口 タタキ	特殊 クボミ	総数		
02住	13	5		2	1			8	5	諸磯b
09住	3	0	0	0	0	0	0	0	0	諸磯b
11住	23	8	2		2			13	10	諸磯b
14住	11				1			1	10	諸磯b
15住	8	2		1	1			4	4	諸磯b
18住	2							0	2	諸磯b
22住	3				3			3	0	諸磯b
23住	13	3				1		4	9	諸磯b
24住	5	2	1	1			1	5	0	諸磯b
26住	5	3			1	1		5	0	諸磯b
27住	7	4			3			7	0	諸磯b
28住	4	1			3			4	0	諸磯b
31住	4	2			1	1		4	0	諸磯b
37住	5	3	1					4	1	諸磯b
01住	16	2	2		1			5	11	五領ヶ台
06住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	五領ヶ台
30住	5							0	5	五領ヶ台
36住	3	1						1	2	五領ヶ台
46住	9	2			1			3	6	五領ヶ台
47住	8	5	1			1	1	8	0	五領ヶ台
48住								0	0	五領ヶ台
51住	3	1						1	2	五領ヶ台
55住	6	5		1				6	0	五領ヶ台
57住	6	4	1		1			6	0	五領ヶ台
59住	2	1				1		2	0	五領ヶ台
16住	37	11	1			2	1	15	22	猪沢
17住	19	3			3	1		7	12	猪沢
19住	11	6			1		1	8	3	猪沢
44住	14	5					1	6	8	猪沢
45住	9	2	1		2			5	4	猪沢
12住	16	10			1	1	1	13	3	新道
29住	11	8	1				2	11	0	新道
32住	10	9				1		10	0	新道
34住	5	1	1					2	3	新道
04住	9	3	1					4	5	藤内
05住	21	9	1	1	3		2	16	5	藤内
07住	3	3						3	0	藤内
08住	1					1		1	0	藤内
10住	12	5					1	6	6	藤内
20住	24	9	2	3	5	1	2	22	2	藤内
33住	10	6				1	1	8	2	藤内
35住	12	2	1	2		1	1	7	5	藤内
40住								0	0	藤内
41住	1						1	1	0	藤内
49住	36	20	3	2	2	1	1	29	7	藤内
50住	9	4						4	5	藤内
53住	17	2		1	1			4	13	藤内
54住	11	1	1		1			3	8	藤内
56住	13	5		1	1			7	6	藤内
03住	16	3	1	1		1		6	10	井戸尻
25住	11	6	3	1	1			11	0	井戸尻
38住	15	5			3			8	7	井戸尻
39住	10	5				1	1	7	3	井戸尻
42住	18	7	1	1	1			10	8	井戸尻
43住	18	14	1	1	1		1	18	0	井戸尻
52住	7	5		2				7	0	井戸尻
13住	19	11	1		2	1	4	19	0	曾利
21住	10	6	1		2	1		10	0	曾利
58住	1	1						1	0	曾利

活発な利用状況を示し、小形礫器の状況と近似する。

分類別ではⅠ・Ⅲ類が諸磯b式期の住居跡中層にはまったく見られない。Ⅰ・Ⅲ類とも藤内式期が最も多くなる状況である。小形礫器と状況が似ており、素材が共通する点からして、小形礫器と一連の作業に用いられた石器である可能性を指摘したい。両者とも線的にある長さを持つ機能部で比較的鋭角の断面を持っており、素材は周辺の河川で採取可能な比較的軟質の安山岩であり、台石の上に置いた比較的軟質な対象（植物性のものか）をたたき切るような作業を推定したい。

## 10. クボミ石

クボミ石は、礫を構成する面の中央付近に掘り窪められた小穴（クボミ）が見られる石器で、Ⅰ区で総数1035点を確認した。大きくはクボミのみのもの718点、スリ面やタタキ面を伴うもの273点、クボミの形態が特異なもの（大きい、浅い、弱いなど）44点である。クボミのみのものは、円礫素材（クボミA、第219図1～6）293点、角礫素材（クボミB、第219図7～9・第220図1～2）306点、礫片素材（クボミE）42点、方形分割礫素材（クボミQ）5点、大形礫素材（クボミC、第220図3）75点、大形扁平礫素材（クボミD）2点に分けられる。スリ面やタタキ面を伴うものについては、広口スリ面（最も広い面に見られる鏡面スリ面ないしはそれに近い平滑なスリ面。曲面で片面のみのものが大半）のみのもの（クボミH、第220図4～7・クボミL、第221図1～2）54点、横口スリ面（稜ズリ石のような素材の横口に粗ズリ面をもつもの）のみの

第21表 クボミ石住居跡内時期別出土数

中層							
時期	0	1～4点	5～9点	10～14点	15～19点	20～24点	25～29点
諸磯b	2	7	4	1			
五領ヶ台	3	4	4				
猪沢			4	1			
新道		1		3			
藤内	1	7	4		1	1	1
井戸尻			4	2	1		
曾利		1		1	1		

上層							
時期	0	1～4点	5～9点	10～14点	15～19点	20～24点	25～29点
諸磯b	6	4	2	2			
五領ヶ台	6	2	2	1			
猪沢		2	1	1		1	
新道	2	2					
藤内	4	2	8	1			
井戸尻	3	1	2	1			
曾利	3						

もの（クボミF、第221図4～7・クボミM）54点、素材小口のタタキないしは粗ズリ面のみもの（クボミG、第222図6～7・クボミJ）78点、横口スリ面と広口スリ面が共存するもの（クボミI、第221図3・クボミO）27点、広口スリ面と小口タタキ面が共存するもの（クボミP）6点、横口スリ面と小口タタキ面が共存するもの（クボミN、第222図1～5）25点、広口スリ面・横口スリ面・小口タタキ面の三者が共存するもの（クボミK、第223図1～5）37点である。

酒呑場遺跡のクボミ石の凹痕（クボミ）について石器使用痕研究の立場からの観察と分類をすでに報告している（池谷2003）。4種類に分類した。凹痕1類：敲打による使用痕の集積の結果で、1. 主面部に一つか二つの集中箇所が見られる、2. 敲打痕の集中は、石器の中央部ではなく長軸方向の上下どちらかにわずかに偏る傾向がある、3. 敲打痕は石器長軸に対して横方向に広がる傾向がある、といった特徴がある。ほとんどがこの凹痕である。凹痕2類：主面部の7割以上が凹痕で覆われ、すり鉢状にくぼんでいるもの。凹痕3類：主面部の中央部に逆円錐形の深い凹痕を形成したもの。第220図1・2・6などは深い凹痕を持つが、凹痕1類が集中したものである可能性もある。凹痕4類：主面部に見られるものとは違い、側面に長軸に対して直交するように窪みが形成されたもので、凹痕の横軸は完結せずに開放されているのが特徴である。第224図1・2の側面に見られる凹痕である。これは、御堂島氏の実験により、石器製作時に生じたものである可能性が指摘されている（御堂島2003）。なお、凹痕2～4類は数点程度しか見られなかった。

全体の出土数を住居跡中層で時期別に見てみると（第20・21表）、諸磯b式期では最大13点で、1～4点が最も多い。五領ヶ台式期では8点が最大であるが、5～9点の出土数が1～4点と同数で最も多い。猪沢式期では最大15点で5～9点が最も多い。新道式期では10～14点が最も多くなる。藤内式期では1～4点が最も多いが、これまで見られなかった15点以上が3軒あり、最大29点である。井戸尻式期では最大18点で5～9点が最も多い。曾利式期も比較的多く、最大19点である。藤内式期以降の時期がそれより前の時期に比べて出土量が多い傾向が見て取れる。

種類別には広口スリ面のみをもつもの（クボミH・L）が諸磯b式期では3軒に4点、五領ヶ台式期で1軒に1点しかなく、猪沢式期、新道式期には見られないが、藤内式期では6軒に10点、井戸尻式期で5軒に6点と比較的多く見られるが、曾利式期には再び見られなくなる。横口スリ面をもつもの（クボミF・I・K・M・N・O）は各時期に見られるものの諸磯b式期に16点あり、次いで多い藤内式期13点を上回る。広口スリ面のみものクボミ石と横口スリ面のあるクボミ石では多用される時期が異なると思われ、機能の違いが反映している可能性が高い。

## 11. スリ石

スリ石には大きく4種類がある。礫の横口に粗ズリ面をもつ稜ズリ石が90点。粗ズリ面とは、池谷（2003）によ



第22表 スリ石住居跡別出土数（時期別）

住居	全体 スリ石数	中層出土					総数	上層 出土数	帰属時期
		稜ズリ石	角礫スリ石	割面スリ石	円礫スリ石	スリ石割			
02住							0	0	諸磯b
09住							0	0	諸磯b
11住	16		6	3			9	7	諸磯b
14住	3						0	3	諸磯b
15住	5		1	1			2	3	諸磯b
18住							0	0	諸磯b
22住	2	2					2	0	諸磯b
23住	6	2	1				3	3	諸磯b
24住	3	1	1	1			3	0	諸磯b
26住	3	1	2				3	0	諸磯b
27住							0	0	諸磯b
28住	1	1					1	0	諸磯b
31住							0	0	諸磯b
37住	1						0	1	諸磯b
01住	7						0	7	五領ヶ台
06住	2					1	1	1	五領ヶ台
30住	4	1	2			1	4	0	五領ヶ台
36住							0	0	五領ヶ台
46住	3		1				1	2	五領ヶ台
47住	3		2			1	3	0	五領ヶ台
48住							0	0	五領ヶ台
51住	3	1	1	1			3	0	五領ヶ台
55住							0	0	五領ヶ台
57住							0	0	五領ヶ台
59住							0	0	五領ヶ台
16住	19		3	2	2		7	12	猪沢
17住	4						0	4	猪沢
19住	3		1				1	2	猪沢
44住	4		2	1			3	1	猪沢
45住	6		2	1		1	4	2	猪沢
12住	13	1	7	2		1	11	2	新道
29住	1	1					1	0	新道
32住	2		1			1	2	0	新道
34住	2			1			1	1	新道
04住	5	1				1	2	3	藤内
05住	9		3				3	6	藤内
07住	5		1	3		1	5	0	藤内
08住							0	0	藤内
10住	5	2	2				4	1	藤内
20住	6	2	1	1			4	2	藤内
33住	3		1	1		1	3	0	藤内
35住	4	1	2			1	4	0	藤内
40住							0	0	藤内
41住							0	0	藤内
49住	9	3	1			1	5	4	藤内
50住	2	2					2	0	藤内
53住	3		1				1	2	藤内
54住	3		1				1	2	藤内
56住	8	2	4			1	7	1	藤内
03住	10		3				3	7	井戸尻
25住	5		4			1	5	0	井戸尻
38住	3	1	2				3	0	井戸尻
39住	4	1	2				3	1	井戸尻
42住	8	1	4			1	6	2	井戸尻
43住	4		3			1	4	0	井戸尻
52住	7	1	6				7	0	井戸尻
13住	9	4	3	1			8	1	曾利
21住	5	1	4				5	0	曾利
58住							0	0	曾利

るスリ面2類で、側面に見られる表面がザラザラしたスリ面である。円礫の曲面に平滑なスリ面のみをもつ円礫スリ石が17点。平滑なスリ面とは、池谷氏によるスリ面1類で、主面を覆うスリ面で、石材に含まれる鉱物斑晶が見えるくらいに摩滅したもの。角礫ないしは方形分割礫の平坦な面に平滑なスリ面をもつ角礫スリ石が189点。池谷氏のスリ面1類だが、弱いスリ面が多い。割礫の割面を利用した割面スリ石が58点。池谷氏のスリ面1類の範疇に入るが、割面の凹凸に沿って島状に分布する。その他、形態不明のスリ石破損品が35点がある。

稜ズリ石は横口粗ズリ面のみのも（稜ズリ石A、第226図1・2・5・6）が47点、広口の平滑スリ面を伴うもの（スリ石G・H・I・J・L、第226図4）が23点、小口タタキ面のみを伴うもの（稜ズリ石B、第226図3）が16点、小形円礫素材を中心とし小口に傾斜する粗ズリ面をもつ特殊なもの（稜ズリ石C、第224図3～6）が4点である。こうした形態のス

リ面は、打製石斧の製作時のハンマーに出現する打撃面に近似するという。

角礫スリ石は、角礫素材のもの（スリ石B、第225図1・2・擦痕礫A。なお、第221図1・2も角礫スリ石を素材としたクボミ石）が164点、方形分割礫素材（方形分割礫A d・B d・C d・スリ石C）が26点、割面スリ石は安山岩礫片素材（スリ石D・擦痕礫F、第225図3～5・擦痕礫G）が34点、花崗岩礫片素材（第225図6～8）が24点である。

各住居跡中層出土数を時期別に見てみると（第22表）、稜ズリ石は猪沢式期には見られないものの、他の時期には見られ、藤内式期が比較的多い。角礫スリ石はすべての時期に見られるが、井戸尻式期が特に多い。割面スリ石は井戸尻式期以外に見られ、各時期とも出土数が少ない。円礫スリ石は全体数そのものが少ないが、曲面の平滑スリ面自体はクボミや横口粗ズリ、小口タタキなどと共存して存在しており、単独で出現することがごく少ないことを示して

第23表 石皿・礫石皿・石棒住居跡別（時期別）

住居	石皿数	礫石皿数	台石数	石棒数	帰属時期
02住	1	2			諸磯b
09住					諸磯b
11住	5	6	1		諸磯b
14住	1				諸磯b
15住	4		1		諸磯b
18住		1			諸磯b
22住		2			諸磯b
23住	1				諸磯b
24住	1				諸磯b
26住	2	2	1		諸磯b
27住					諸磯b
28住	4	1			諸磯b
31住					諸磯b
37住		1			諸磯b
01住	3	2	1		五領ヶ台
06住		1			五領ヶ台
30住					五領ヶ台
36住					五領ヶ台
46住	1	1			五領ヶ台
47住	5	1			五領ヶ台
48住					五領ヶ台
51住	1	1			五領ヶ台
55住	3				五領ヶ台
57住	1	1			五領ヶ台
59住	1				五領ヶ台
16住	5	3	1	2	猪沢
17住			2		猪沢
19住		1			猪沢
44住	1				猪沢
45住	1				猪沢
12住	3	2	1		新道
29住		1			新道
32住	2	2			新道
34住		1			新道
04住		1			藤内
05住	4	3		1	藤内
07住	1	3			藤内
08住					藤内
10住	2	1		1	藤内
20住	6	5		1	藤内
33住		1		1	藤内
35住	1	1			藤内
40住		1			藤内
41住					藤内
49住	5	2	1	3	藤内
50住	1		1		藤内
53住	1				藤内
54住	3	2		1	藤内
56住	6				藤内
03住		1			井戸尻
25住				5	井戸尻
38住	6	2			井戸尻
39住	3	1	1		井戸尻
42住		2			井戸尻
43住	4	3	1	1	井戸尻
52住	1	2			井戸尻
13住	2	3			曾利
21住	5	1		1	曾利
58住	3				曾利

にかけてみられる。

### 13. 黒曜石製楔形石器・二次加工剥片・微細剥離剥片・剥片・原石

黒曜石製の楔形石器・二次加工剥片・微細剥離剥片・剥片・原石について、住居跡出土のものについて出土数を集計した（第24表）。楔形石器は剥片ないしは原石を両極打撃した石器で、住居跡出土のものは1,637点を確認した。二次加工剥片は比較的規模の大きな剥離が連続し石器の辺を構成するもので、いくつか分類可能である。剥離の種類では、3種がみられる。急角度（おおむね60度以上）の刃部を作り出したもの、素材面にほぼ平行に剥離した平坦剥離によるもの、前二者のように素材刃部に剥離するのではなく自然面や折れ面を打面として平坦剥離を行ったものである。また前二者は、背面側に剥離したものと腹面側に剥離したものとがある。これらの剥離が組み合わせられてひとつの石器を構成する。組み合わせり方いくつかが見られる。単刃のもの、ふたつの刃部が平行する複刃のもの、

いる。曲面の平滑スリ面を出現させる作業は、ほとんどがクボミや横口粗ズリ、小口タタキを出現させる作業と一連の工程を成していたと考えられる。

### 12. 石皿・礫石皿・台石・石棒

石皿は299点を確認した。石皿の多さが本遺跡の特徴のひとつである。ほとんどが破損品であり、形態が推定できないほどの小片もかなりある。形態が復原できるものを観察すると、安山岩の大形円礫を素材とし、敲打により素材の形態を大きく変えたものが少数ながらあり、石皿上面を平坦に加工したもの（第227図1）や文様を刻んだもの（第227図2）がある。他のものは、敲打により素材礫の凹凸を多少調整したもので、全体が敲打されたもの（第228図1・2、第229図1）、部分的に自然面を残すもの（第229図2、第230図1）、機能部の窪み部のみを敲打したもの（第230図2）がある。第230図2は窪み部が非常に浅く、加工の初期段階を示すものである可能性があり、他にも若干みられる。第231図1は完形品ながら直径20cmほどであり、第231図2は完形品で直径10cm弱の小形品である。前者はある程度機能したと思われるが、後者は石皿の模造品と思われる。こうした例も数少ない。なお、第229図1や第231図1のように、裏面にクボミ石のようなクボミ痕をもつものがある。

礫石皿は扁平な安山岩円礫の一面に平坦なスリ面をもつもので、敲打等で整形したものではない（第231図3）。186点を確認した。

台石としたものは、厚みのある安山岩大形礫の1面ないし2面に、クボミ石にみられるクボミ痕が多数みられるものである（第233図1・2）。37点を確認した。

石棒は棒状のデイサイト大形礫を敲打により整形したもの（第233図3・4）と、石英斑岩の棒状角礫とがある。後者は炉の石材としても利用されている。炉の石材8点を除くと、26点を確認できる。

これらは住居跡内覆土中出土のものも多くある（第23表）。石棒は猪沢式期以降にみられるが、他は諸磯式期から曾利式期

第24表 黒曜石製楔形石器・二次加工別片(RF)・微細別片(MF)・剥片住居跡別出土数(時期別)

住居	楔	RF	MF	剥片	黒曜石数	属時期
02住	18	9	34	0	61	諸磯b
09住	12	0	2	0	14	諸磯b
11住	36	14	34	334	418	諸磯b
14住	32	4	27	545	608	諸磯b
15住	21	1	10	20	52	諸磯b
18住	10	2	5	66	83	諸磯b
22住	14	2	9	75	100	諸磯b
23住	38	1	29	141	209	諸磯b
24住	11	0	8	111	130	諸磯b
26住	12	0	5	69	86	諸磯b
27住	14	0	4	5	23	諸磯b
28住	4	4	5	129	142	諸磯b
31住	0	0	0	1	1	諸磯b
37住	0	0	0	2	2	諸磯b
01住	97	28	60	0	185	五領ヶ台
06住	29	8	19	0	56	五領ヶ台
30住	61	8	10	328	407	五領ヶ台
36住	0	0	1	4	5	五領ヶ台
46住	1	1	1	5	8	五領ヶ台
47住	0	0	0	0	0	五領ヶ台
48住	0	0	0	0	0	五領ヶ台
51住	33	9	11	123	176	五領ヶ台
55住	0	1	0	30	31	五領ヶ台
57住	0	0	1	0	1	五領ヶ台
59住	6	0	2	16	24	五領ヶ台
16住	83	72	25	1360	1540	狹沢
17住	69	3	14	336	422	狹沢
19住	0	1	0	0	1	狹沢
44住	2	0	0	8	10	狹沢
45住	0	0	0	0	0	狹沢
12住	76	7	18	479	580	新道
29住	51	8	15	195	269	新道
32住	16	2	7	187	212	新道
34住	17	3	6	92	118	新道
04住	28	3	5	0	36	藤内
05住	109	2	40	479	630	藤内
07住	17	0	3	73	93	藤内
08住	1	0	2	0	3	藤内
10住	87	11	20	0	118	藤内
20住	109	4	15	352	480	藤内
33住	94	7	16	189	306	藤内
35住	34	3	7	101	145	藤内
40住	2	0	3	2	7	藤内
41住	0	1	1	2	4	藤内
49住	0	1	0	70	71	藤内
50住	3	1	0	4	8	藤内
53住	34	3	5	115	157	藤内
54住	21	2	6	99	128	藤内
56住	5	1	4	13	23	藤内
03住	144	10	28	720	902	井戸尻
25住	41	2	5	160	208	井戸尻
38住	2	0	0	22	24	井戸尻
39住	93	11	17	266	387	井戸尻
42住	9	0	1	29	39	井戸尻
43住	0	0	0	20	20	井戸尻
52住	13	1	1	41	56	井戸尻
13住	2	4	7	13	26	曾利
21住	26	3	7	182	218	曾利
58住	0	0	0	0	0	曾利

二辺が交差し尖った刃部を構成するもの、円形に一周するものなどである。また、若干ではあるが挟り状のものや、一回の大きな剥離で挟り加工を行うクラクトンノッチと思われるものもあった。また、加工が三辺におよぶものも少ないながらみられるが、石鏃とは分類せずに二次加工剥片としたものもある。これらの住居跡出土数は258点を確認した。微細剥離剥片は極微細な剥離が連続するもので、住居跡出土のものは555点を確認した。

黒曜石製剥片は住居跡出土のものを7,613点確認した。表の中に剥片0点の住居跡があるが集計上の不手際で集計していないものであり、実際は剥片が出土している。たいていは住居跡覆土中に分散して出土するが、1カ所だけ特異な出土状況を示すものがある。諸磯式期の2住に伴うと思われるA28ニ土坑出土の黒曜石剥片・碎片塊である(図版編写真図版27、遺構編第54図)。長さ1cm程度の剥片からフケのような大きさの極微細石片が土壌を交えない純粋な塊(直径5cm程度)として出土した。土坑の東側中央部に底面から5?ほど浮いて出土した。土坑西側には焼土が直径50cmほどの範囲にやはり5cmほど浮いて分布していた。黒曜石剥片・碎片塊と焼土の出土レベルは、2住の床面からやや下がったレベルとなる。土層断面を見ても2住覆土中に掘り込みを確認することはできず、2住床面から20cmほど掘り込んで土坑を構築したものと思われる。A28ニ土坑は長さ164cm、幅112cm、深さ21cmの長楕円形の浅い土坑で、2住廃絶時に構築された、焼土や黒曜石剥片・碎片塊を伴う墓坑と考えられる。

楔形石器、二次加工剥片、微細剥離剥片、剥片の四者の合計を黒曜石数として示したが、その時期別の状況を第25表でみると、各時期とも住居によって出土数の違いが大きいことが分かる。特に300点以上を出土した住居跡は調査区中央のH'ラインより東側の区域にあり、500点以上になるとB'からE'、28

第25表 黒曜石住居内全層時期別出土数

時期	0~49点	50~99点	100~199点	200~299点	300~399点	400~499点	500~599点	600~699点	700~799点	800~899点	900~999点	1000点以上
諸磯b	4	4	3		1					1		
五領ヶ台	7	1	2				1					
狹沢	3						1					1
新道			1	2				1				
藤内	6	2	4		1	1			1			
井戸尻	3	1			1	1						1
曾利	2				1							

第26表 大形剥片・搬入石材・方形分割礫住居跡別出土数（時期別）

住居	大形剥片		搬入石材								方形分割礫		帰属時期		
	中層	全体	砂岩	HF	閃緑岩	石英斑岩	花崗岩	デイサイト	その他	備考	中層出土総数	全体数		中層出土	全体数
02住	1	0					2		1	堆積岩	3	5	1	1	諸磯b
09住		0									0	0		0	諸磯b
11住	4	19	6	1			1				8	16	2	3	諸磯b
14住	2	10	1								1	15			諸磯b
15住	1	12	1				1	1			3	7			諸磯b
18住	1	6							1		1	4	2	3	諸磯b
22住	1	2		1							1	0		0	諸磯b
23住	2	4	2						1	礫岩	3	11	1	4	諸磯b
24住	1	1									0	0		0	諸磯b
26住	1	2			1	1	1				3	3			諸磯b
27住	8	8	1		1	1	1				4	4			諸磯b
28住	6	6									0	0		0	諸磯b
31住	3						1		2	安山岩	3	0		0	諸磯b
37住		0									0	7			諸磯b
01住	4	30						1			1	10	1	3	五領ヶ台
06住		1									0	0		0	五領ヶ台
30住	9	9	1	2							3	3	1	1	五領ヶ台
36住		2									0	2			五領ヶ台
46住	1	16					2		1	粘板岩	3	8			五領ヶ台
47住	6	7	1								1	0		0	五領ヶ台
48住	4	4									0	0		0	五領ヶ台
51住	3	8	1				1				2	5		1	五領ヶ台
55住	4	4									0	0		0	五領ヶ台
57住		2		1			1				2	0		0	五領ヶ台
59住	3	3									0	0		0	五領ヶ台
16住	8	48	3	2	1		8	1	1	海石	16	32	6	8	猪沢
17住	1	17							2	特石	2	9			猪沢
19住	1	1					1				1	6	1	1	猪沢
44住	8	17					1				1	5	1	2	猪沢
45住	1	4	2	1			3		1	特石	7	9			猪沢
12住	12	20	1	2			2	5	1	安山岩	11	23	2	2	新道
29住	12	12	5	1			3				9	9	1	1	新道
32住	15	24	1	1			1				4	10			新道
34住	4	10	1								1	6			新道
04住	2	5									0	5	1	1	藤内
05住	16	27	3		1	1	8		2	頁岩・堆積	15	18	3	5	藤内
07住	2	8		1					1		2	5	1	2	藤内
08住		0									0	0		0	藤内
10住	14	33	1			1	1		1	緑色凝灰	4	11	1	1	藤内
20住	30	51	5	3		1	3	1	2	頁岩・堆積ア・特	15	0	4	6	藤内
33住	12	37	3				4		4	安	11	0	4	4	藤内
35住	16	16	2	1			1		1	特石	5	7	3	6	藤内
40住	1	1									0	1			藤内
41住	2	4									0	0		0	藤内
49住	14	33	6				6		1	チャート	13	18	4	5	藤内
50住	8	13	14	7		1	1		1	特石	24	29		1	藤内
53住	4	19	1				1				2	12	2	2	藤内
54住	6	11	1				5			安山岩	6	13	1	1	藤内
56住	2	5	1		1		6				8	15	1	2	藤内
03住	4	32	1	1			2				4	9		7	井戸尻
25住	9	16	4				3				7	0	2	2	井戸尻
38住	11	20	2		1		3				6	14			井戸尻
39住	4	23					2				2	9	2	2	井戸尻
42住	4	7	1	1			2				4	8	1	2	井戸尻
43住	31	32	8		1		7				16	16			井戸尻
52住	8	8	2	2			4				8	8	1	1	井戸尻
13住	2	3									0	2			曾利
21住	12	8	3	1		1	4		2		11	14	3	3	曾利
58住		0									0	0		0	曾利

から31の区域（3・5・12・14・16住）に限定される。しかし、ある特定の時期に限定されることはなく五領ヶ台式期と曾利式期を除く各時期に分散している。こうしたことから、各時期で特に多くの黒曜石を取り扱える住居（家族か）があり、そうした関係を世代を越えて踏襲していた可能性も考え得る。

黒曜石原石は全体で841点を確認した。集計上の不手際で住居跡別には示していないが、各住居内で中層や上層に特別な出土状態ではなく、一般的に黒曜石原石相当数出土している。これらはほとんどいわゆるズリ石で、原産地で自然にできた風化剥離面（ズリ面）によって構成される原石である。168gが最大で大半が30g以下である。特殊な出土状況を示すものが若干あり、16住で覆土中出土ながらまとまって出土したもの（図版編写真図版8）、35住でピット脇にまとまって出土したもの（図版編写真図版15）、小形土器内に格納されていたもの（図版編写真図版24）がある。なお、黒曜石石核も相当数出土しているが、整理段階の不手間で数を集計していない。おそらく、原石数以上の出土数と思われる。

14. 大形剥片・搬入石材・方形分割礫・礫

大形剥片は砂岩やホルンフェルスなどを打撃して得た剥片である。位置を測定したものは、970点を確認した（第26表）。

搬入石材は八ヶ岳山麓で一般的にみられる石材である安山岩以外の石材で、折り取りていどはされているものの、敲打等の加工痕や使用痕がみられないものである。位置を測定して取り上げたものは789点確認した。砂岩、ホルンフェルス、閃緑岩、石英斑岩、花崗岩、デイサイト、礫岩、頁岩、緑色凝灰岩、アパタイト、チャートや八ヶ岳以外の産と思われる安山岩もある。

方形分割礫は、板状の安山岩（鉄平石）を分割したもので、小形礫器やタタキ石などの素材としても使用されてい

第27表 礫住居跡別出土数（時期別）

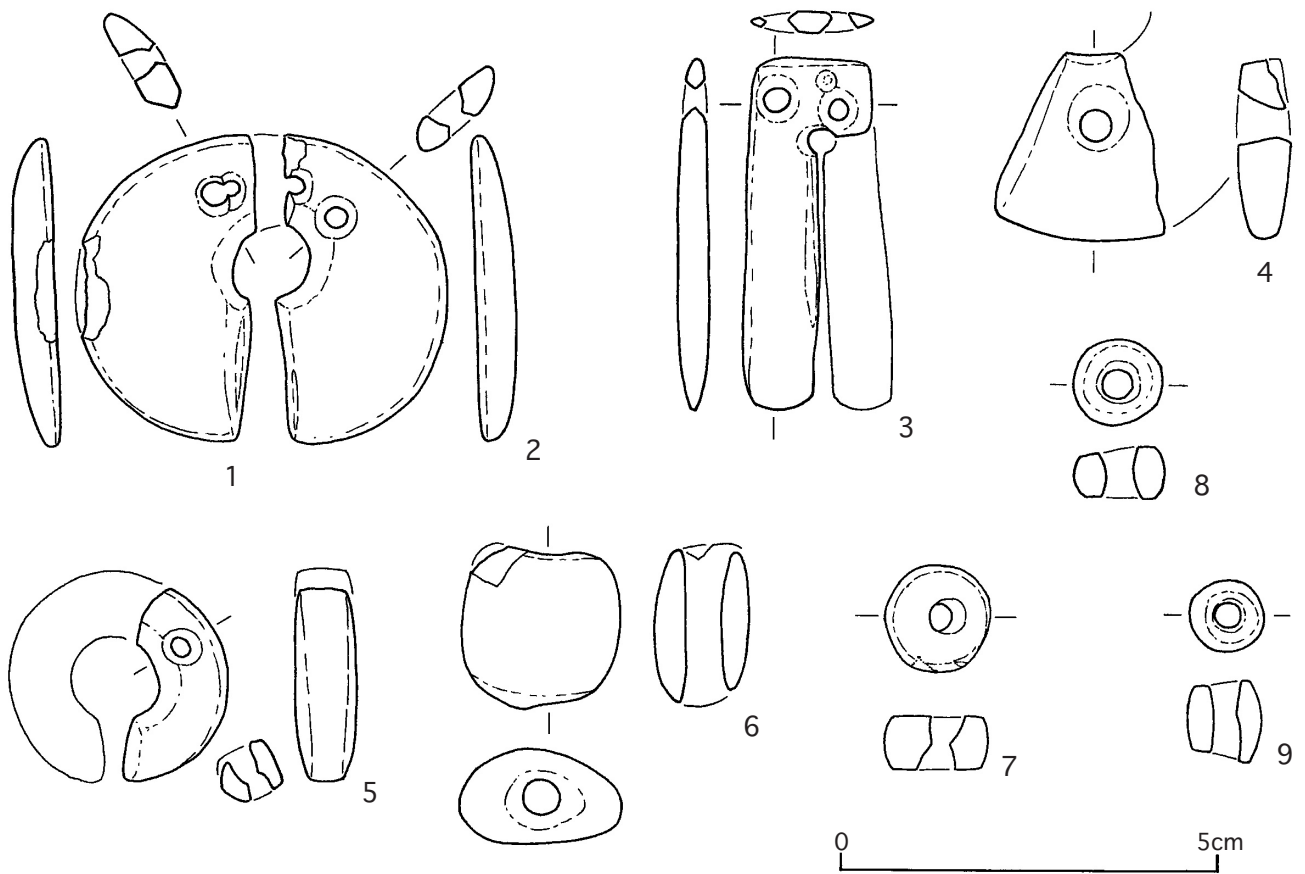
住居	礫 総数	中層					全体					中層 比率	帰属時期
		小	中	大	巨大	合計	小	中	大	巨大			
02住	157	60	6	6		72	130	16	11		46	諸磯b	
09住	26	2				2	23	2	1		8	諸磯b	
11住	31	4	4	5	2	15	17	6	8	2	48	諸磯b	
14住	44	10	2	3		15	28	6	10		34	諸磯b	
15住	193	23	1	5	3	32	153	23	17	3	17	諸磯b	
18住	42	7	2	1		10	34	5	3		24	諸磯b	
22住	38	28				28	28	4	6		74	諸磯b	
23住	351	13		5		18	297	24	30		5	諸磯b	
24住	31	26				26	26	1	4		84	諸磯b	
26住	72	66	5	1		72	66	5	1		100	諸磯b	
27住	33	31	2			33	31	2			100	諸磯b	
28住	41	32	8	1		41	32	8	1		100	諸磯b	
31住	19	15	2	1	1	19	16	2	1	1	100	諸磯b	
37住	103	36	14	1		51	81	17	5		50	諸磯b	
01住	138	25	6	5		36	105	20	13		26	五領ヶ台	
06住	24	6				6	19	3	2		25	五領ヶ台	
30住	57	10	3	1		14	47	6	4		25	五領ヶ台	
36住	11	3				3	8	3			27	五領ヶ台	
46住	78	3	4	3	1	11	58	9	11	1	14	五領ヶ台	
47住	24	17	4	3		24	17	4	3		100	五領ヶ台	
48住	7	5		2		7	5		2		100	五領ヶ台	
51住	46	17	8	3	1	29	33	9	4	1	63	五領ヶ台	
55住	19	12	3	4		19	12	3	4		100	五領ヶ台	
57住	21	12	4	5		21	12	4	5		100	五領ヶ台	
59住	1		1			1	0	1			100	五領ヶ台	
16住	336	33	7	8		48	262	33	41	2	14	猪沢	
17住	126	17	1	2		20	105	9	12		16	猪沢	
19住	36	21	1	3		25	31	1	4		69	猪沢	
44住	253	121	7	3		131	238	10	5		52	猪沢	
45住	49	25	4	2		31	41	5	3		63	猪沢	
12住	144	47	1	5		53	127	7	10		37	新道	
29住	86	72	7	7		86	72	7	7		100	新道	
32住	83	52	1			53	79	1	3		64	新道	
34住	37	6	1	2		9	25	3	9		24	新道	
04住	92	26	8	1		35	67	15	10	2	38	藤内	
05住	190	116	13	7		136	159	16	15		72	藤内	
07住	45		5	1		6	39	5	1		13	藤内	
08住	21	6	1	1		8	19	1	1		38	藤内	
10住	62	18	2	2		22	51	7	4		35	藤内	
20住	185	134	9	6		149	163	13	9		81	藤内	
33住	152	99	4	8	1	112	133	10	9	1	74	藤内	
35住	118	79	9	7		95	99	11	8		81	藤内	
40住	4	1		3		4	1		3		100	藤内	
41住	11	2	1			3	10	1			27	藤内	
49住	197	94	15	17		126	142	27	28	2	64	藤内	
50住	42	12		2		14	34	5	3		33	藤内	
53住	91	21	1	2		24	78	7	6		26	藤内	
54住	77	23	3	6		32	51	13	13	1	42	藤内	
56住	88	21	9	16		46	57	12	19		52	藤内	
03住	119	8	2	2	1	13	104	8	7	1	11	井戸尻	
25住	124	106	9	9		124	106	9	9		100	井戸尻	
38住	156	89	8	7	1	105	137	8	11	1	67	井戸尻	
39住	119	31	8	7		46	85	15	19	1	39	井戸尻	
42住	148	90	8	7		105	119	15	14	2	71	井戸尻	
43住	143	117	13	13	2	145	117	13	13	2	101	井戸尻	
52住	79	62	6	9	2	79	64	6	9	2	100	井戸尻	
13住	81	50	12	19		81	50	12	19		100	曾利	
21住	196	162				162	162	20	14		83	曾利	
58住	3	2				2	3				67	曾利	

る。位置を記録したものは196点を確認した。各住居跡中層出土のもの時期別出土状況をみると、諸磯式期、五領ヶ台式期には比較的少なく、藤内式期に多い傾向が読み取れ、その素材となる小形礫器の出土傾向に近似する。

礫は位置を測定したものの9,285点を確認した（第27・28表）。500g未満を小、500g以上1000g未満を中、1000g以上10kg未満を大、10kg以上を巨大とした。巨大礫で最も大形のは、49200gである。住居跡内出土礫について、分類別、出土層別に出土数を集計した。中層の出土数を時期別に集計してみると、諸磯式期、五領ヶ台式期が80点未満で40点未満が大半だが、猪沢式期以降100点を越える住居が見られるようになり大半が40点以上である。両者の時期変化は、住居構造の変化と対応する。諸磯式期、五領ヶ台式期は主柱穴が不明瞭で、住居プランの不整形であり、上屋構造がぎゃしゃであった可能性がある。礫は上屋構造の一部を構成する土葺きに混和されていたとすると、混和量の違いという認識が可能となる。

第28表 礫住居跡中層時期別出土数（完全住居のみ）

時期	1～19点	20～39点	40～59点	60～79点	80～99点	100～119点	120～139点	140～159点	160～179点
諸磯b	4	3	1	1					
五領ヶ台	4	3							
猪沢			2	1				1	
新道	1			2		1			
藤内	1		2			1	1	2	1
井戸尻	1			1	1		2	1	1
曾利	1					1			1



第14図 I区の石製品(2) (1/1)

## 第4節 石製品

石製品については網羅的に図示した(第233~236図、本文編第14図)。I状耳飾、管玉、丸玉などの装飾品37点である。I状耳飾は、住居跡覆土中が多く、供伴関係の明確な土坑出土のものは、諸磯b式期である。また、多くは欠損品で、欠損後と思われる穿孔があり、欠損部が研磨され再加工されたものもあることから、垂飾品として再利用されたものと思われる。翡翠製の垂飾品は曾利式期と思われる土坑出土で、曾利式期である可能性がある。特殊なものでは、「の」字形石製品(第236図1)、コハク玉(第236図6)があるが、グリッド出土で時期不明。

### 引用文献

池谷 勝典 2003「酒呑場遺跡の凹石、敲石、磨石の使用痕について」『酒呑場遺跡(第4次)』

御堂島 正 2003「石器製作の使用痕—トラセオロジーの視点から—」『考古学ジャーナル』No. 499

## 第4章 I区の遺物分布と住居跡帰属時期

### 第1節 住居跡帰属時期の判定について

1997年に刊行したI区の遺構編の住居跡の記載段階で判断された各住居跡の帰属時期について、その後の整理段階で変更の必要があるものが出てきた。整理段階では、埋甕炉のあるものについては、その土器の時期とし、その他は覆土中の土器から判断した。覆土中の土器群は平面的には各時期のものが複合的に分布するものでも、垂直分布を確認することで新しい時期の土器が上層へ浮き出しているものが見られ、分離が可能となる。また、新しい時期のものが覆土深くに分布するものでも、平面分布上点的な分布で、土坑等が覆土中掘り込まれ、結果的に覆土中に混在するように見えるものもある。

そこで、①遺構の形態（炉址の状況、柱穴・周溝等の状況）、②土器の平面分布、③土器の垂直分布の3つの要素を総合して帰属時期を判定することとした。

住居跡の形態を見ると、諸磯b式段階では、プランが不整形で、周溝・支柱穴がなく、地床炉である。五領ヶ台式段階では、プランが不整形を主体とするが隅丸方形や楕円形が見られる。周溝はないが、支柱穴が4本のものが見られるようになる。炉址も埋甕炉と地床炉とが半数ずつ見られる。猪沢式段階では、プランも楕円形を中心に隅丸方形や不整形が見られ、周溝はないものの支柱穴は4本が主体である。炉址もすべて埋甕炉である。新道式段階ではプランが楕円形か隅丸長方形である。周溝を持つものが現われる点が大きな特徴である。支柱穴は4本で、埋甕炉を持つ。藤内式段階になるとプランが円形を主体とするようになり、楕円形が次いで多い。周溝はほとんどに見られ、支柱穴も6本を中心に4本、5本、8本が見られる。炉址は埋甕炉がなくなり、地床炉を主体とし、石囲炉が見られるようになる。井戸尻式段階ではプランは円形主体で、しっかりした周溝があり、支柱穴も6本を中心に5～8本が見られる。炉址も石囲炉のみとなる。曾利式段階では、プランが円、楕円、隅丸長方形と一定せず、周溝はあるものの、支柱穴が明確なものは4本で他は不明確である。炉址は石囲炉であるが、曾利V式期の58住が床炉である。

こうした点を踏まえ、遺構編報告書段階とは時期判定を変更した住居は以下のごとくである。

1号住居跡は遺構編段階で新道式期と記載されたが、五領ヶ台式期に変更する。支柱穴が4本で、地床炉である。土器の平面分布は藤内式を中心とするが、垂直分布を見ると厚さが45cmほどある覆土のうち床上15cmほどの範囲に五領ヶ台式と諸磯b式のみ土層が確認できた。

4号住居跡は遺構編段階で諸磯式期と記載されたが、藤内式期に変更する。炉址は地床炉としたが住居跡の半分以上は調査区外にあり、形態は不明である。周溝がしっかりとしており、支柱穴も深く明確な配置状況を示す。遺物分布では藤内式期の土器が深いレベルから全体に分散し、井戸尻式期の土器も深いレベルにあるものの、量が少なく点的な在り方で、大半は上層20cmほどの範囲に浮いて分布している。

18号住居跡は遺構編段階で藤内式期と記載されたが、諸磯式期に変更する。土器の垂直分布を見ると、藤内式期や曾利式期の土器が上層40cmほどの範囲に浮き、下層30cmの範囲は諸磯式期の土器のみとなる。

24号住居跡は遺構編段階で五領ヶ台式期と記載されたが、諸磯式期に変更する。垂直分布を見ると、五領ヶ台式期や曾利式期の土器は少量しかない上、上層に浮いている。

26・27号住居跡は新道式期とされたが、諸磯式期に変更する。新道式期の土器はほとんどなく、藤内式期の土器が若干分布するものの、量的に諸磯式期の土器が多い。遺構も支柱穴が不明確で、周溝もなく、地床炉である。

28号住居跡は遺構編段階で藤内式期と記載されたが、諸磯式期に変更する。藤内式期の土器はほとんどなく、五領ヶ台式期の土器が若干見られる程度で、諸磯式期の土器が主体である。

36号住居跡は遺構編段階で諸磯式期と記載されたが、五領ヶ台式期に変更する。埋甕炉であり、覆土中の土器も五領ヶ台式期が主体を占める。

41号住居跡は遺構編段階で井戸尻式期と記載されたが、藤内式期に変更する。垂直分布を見ると、井戸尻式期の土器は上層20cmほどの範囲に浮いており、藤内式期の土器が深く分布する。

51号住居跡は遺構編段階で藤内式期と記載されたが、五領ヶ台式期に変更する。埋甕炉であり、覆土中の土器も五領ヶ台式期が広く分布する。

## 第2節 遺物分布図の作成方法

遺物は、現場では手のひらサイズ以上（5 cm角以上）のものを光波測距儀とコンピュータによるトータルステーションで取り上げ、今回提示した遺物分布図に反映している。結果的にこの基準より小さな遺物も取り上げられているが、小形遺物のほとんどは一括遺物として取り上げられた。さらに、石器の内、石鏃や石錐はほとんどが一括遺物として取り上げられたため、今回提示した分布図には反映されていない。なお、土器のデータ取り作業の不手際で、土坑出土を中心とする土器の一部が全体分布図に反映していないものがある。土器の全体分布図（図版編第237図）にはこうした事情が反映している可能性がある。遺物観察を行い、分布図に反映したものは、土器が11,171点、石器が8,002点、礫が9,309点である。

土器では、土器片をすべて観察し、文様の次のような要素に着目して時期別に分類し分布図に反映した。諸磯式は縄文地文で横位の集合沈線文がみられる諸磯b式を主体としており、縦位斜位の集合沈線文にボタン状貼付文などがみられる諸磯c式を若干含む。五領ヶ台式はⅡ式を主体とし、縄文地文に比較的幅広の数条の平行した沈線が丁寧に施文され直線や曲線を描くもので、雲母片が多くみられる胎土も特徴として取り上げた。猪沢式は隆帯にそって幅狭の角押文が施文されたものを取り上げた。新道式は隆帯にそって三角押文が施文されたものを取り上げた。藤内式は隆帯に幅広角押文（キャタピラ文）が施文されたものと、隆線によって区画されたパネル文を特徴として取り上げた。なお、キャタピラ文に三角押文が伴うものをここでは藤内式に分類したが、この文様は藤内式初頭ばかりではなく猪沢式の後半、新道式にもみられるため、猪沢式（16住）や新道式（12住）の分布の中にならば藤内式が混在する分布図になっているがこの辺の事情が反映している可能性が高い。井戸尻式は反肉彫状の文様を主体としたものを主に取り上げた。なお、藤内式後半から井戸尻式前半にかけては両型式に共通する文様が多く、所属時期不明として扱ったものも多い。曾利式では二条程度の粗く浅い沈線文やハの字文、粘土紐の波状貼付文などを取り上げた。

石器では大形の石器を中心にした分布図である。黒曜石の剥片や原石、石鏃、石錐などはほとんどトータルステーションで取り上げられていないので、分布図には反映していない。石匙は各遺構での出土数が少ないため記号を示さなかった。また、磨製石斧は整理作業上の不手際でデータ取りが遅れ、分布図に反映できなかった。

礫では、重量別に記号化し、分布状況を示した。手のひらサイズの礫とはおおむね200 g程度のものであるが、これより小さい礫もかなり取り上げられており、整理作業でデータを採取し分布図に反映させた9,309点の内、過半数の4,998点が200 g未滿の礫であった。200 g未滿の小形礫の大半が一括遺物として取り上げられ、分布図に反映していない点は留意する必要があるが、ある程度の分布状況は把握できる可能性がある。

## 第3節 I区全体の遺物分布

まず、発掘範囲全体の分布図を図版編第237～246図に示した。土器、石器、礫ともに住居跡内への集中分布状況が確認できるとともに、その集中域と住居跡の外郭との間にドーナツ状に空白の空間が観察できる住居跡が多いことに気がつく。これについては、各住居跡での垂直分布も含めた検討で後述する。また、土器ではG'～J'の30～33グリッドにかけて分布がほとんどないが、この地域は環状集落の中央部にある土坑主体の部分であり、土器の整理過程でデータ取り出来なかった土坑を中心とする土器のデータ採取の不手際が反映している可能性がある。しかし、土器、石器、礫ともに住居跡主体の環状部地域では住居跡間の空間には分布が希薄である。この部分にも中央部同様に土坑が密に分布するが、土坑内への埋納も含めて土器・石器・礫の分布が排除されていた地域である可能性が考えられる。この地域は住居からの出入りなど人間の移動が激しい部分と考えられ、移動の障害となる遺物の分布が排除されていた可能性がある（第237図）。

土器の平面分布では、時期別に分布状況を示した（第238～239図）。諸磯式段階では調査域の東半部に土器片がたよって分布する状況が把握できる。五領ヶ台式から井戸尻式段階にかけては調査域全体に分布するが、曾利式段階



になると諸磯式段階ほどに強度ではないものの再び東半部分に分布がかたよる状況が見て取れる。ところで、住居跡に分布する土器群は後述するように覆土中出土であるが、これらは廃絶した竪穴住居跡の窪地に廃棄されたものとする考え方が支配的である。こうした考え方からすると、ある時期の土器群はそれ以前の時期の住居跡覆土に分布するものが多いはずである。ところが、第238～239図の各時期の図に当該期以前の時期の住居跡をマークしてみると意外なことに、その住居内での土器の分布が非常に少ないのである。いくつかの例外として、五領ヶ台式では覆土に猪沢式期の土器片が集中する1住、猪沢式では新道式から藤内式期の土器片が集中する16住、新道式期では12・29・32住の3軒とも藤内式期の土器片が集中する。藤内式期では、33・53住に井戸尻式期の土器片が集中する。大半の土器片は当該期の住居跡覆土に分布する傾向が強い。土器分類の時間幅が粗いため、各住居跡の厳密な意味での直前期ではないので、当該期の中に直前期のものが含まれ、当然の結果かもしれない。また、新道式期の住居はいずれも藤内式期に非常に近い段階のために覆土中への廃棄がなされていると考えられるかもしれない。しかし、新道式期の場合、先述のとおり土器分類上の不手際によるものである可能性も高い。遺物の廃棄を考えた場合、直近の窪地がまずは廃棄場所の候補となろうが、そうした目で分布図を見た場合、当該期以前の住居跡が周辺にあって当該期の土器片の濃密な分布は必ずしもみられないのである。まずは、ここでは大半の土器片は当該期の住居跡に廃棄されるという点を確認しておきたい。

第240～244図では石器の分布を示した。打製石斧は、諸磯式土器片の濃密な分布域では分布が希薄である。小形礫器は藤内式期の住居跡を中心に集中分布する傾向を示すが、クボミ石は住居跡ばかりでなくそれ以外の地域にも多く分布し、比較的分散傾向の強い分布状況を示している。小形礫器894点に対しクボミ石1,035点とクボミ石の方が小形礫器よりも多いにもかかわらず分散傾向が認識できるのは、両者の使用後の扱われ方の違いを物語っている可能性が指摘できる。クボミ石は作業場所近くに遺棄されたり、土坑などに埋納される機会が多いのに対し、小形礫器は作業場所には遺棄されず住居跡覆土中に廃棄される傾向が強いと言えるかもしれない。これは、さらに想像をすれば小形礫器が作業ご清掃されるような場所、たとえば竪穴住居内での作業に供されるのに対し、クボミ石は竪穴外のオープンスペースで使用されていたといったことも想定可能である。

礫については（第246図）、500g未満の礫の住居跡内での集中性の高さが見て取れる。500g以上の礫は住居内にもそれ以外の空間にも分散分布するが、10kg以上の礫については環状集落中央部の土坑を主体とした地域に比較的多い状況が見て取れる。これに対して、石棒の分布は環状集落中央部にはみられず（第241図）、それを取り囲む住居跡に分布している点が注目されよう。

## 第4節 各住居跡内の遺物分布

ここでは各時期の住居跡の内、遺物量が比較的豊富な住居や切り合い関係のある住居のいくつかを例示し、特に垂直分布のあり方について報告する（第15～22図）。分布図は、土器、石器、礫の別に作図し、土器は時期別、石器は器種別、礫は重量分類別に記号で示した。記号の凡例は第16図に示した。平面図は1/120、垂直分布図の平面方向は1/120であるが、垂直方向については4倍の1/30で示してある。垂直分布図のエレベション図は遺構編の断面位置に合致する。平面図にエレベーション図作成位置のポイントを示したが、垂直分布図は平面図下方向から投影した図となっている。土器は全体分布を示したが、石器、礫についてはエレベーション図作成位置の両側約50cmの幅がおおむね1mの範囲について投影したものである。こうして示した分布図をみると、特に土器全体の垂直分布図で、時期別に分布を検討すると上・中・下の3層区分が可能である。

### 1 上層の区分と特徴

第15図に示した3住は井戸尻式期の住居形態を示し、覆土中から井戸尻式期を中心とした土器片が出土している。垂直分布をみると、曾利式期の土器片が分布する範囲が把握できる。曾利式期の土器片の分布がみられないレベルとの境界に線を入れると、住居跡中央部でやや窪む層状の遺物分布部分を区切ることができる。これを「上層」とする。上層には曾利式期を含め、各時期の土器片が混在し、厚さはおおむね20～30cmである。他に上層がみられる住居跡は、図示した住居跡の内、5・12・11・16・35・38・44・49住でみられる。層状に全体を覆うもの（3・5・11・

12住)と、住居跡中央に窪地状に分布するもの(16・35・38・49住)とがある。11住では当該期である諸磯式期の土器の分布の上を、厚さ20cmほどの五領ヶ台式期から曾利式期にかけての土器片の層が覆うが、平面分布では11住内に限定されており、これも窪地状の部分への遺物の集中である可能性がある。なお、44住では貉沢式期の覆土中に井戸尻式期の土器片が1点分布するのみであり、土坑などのピンスポット的な攪乱である可能性がある。

## 2 下層の区分と特徴

これより下位では土器片の分布が濃密な住居跡中央部分と、土器片の分布が希薄な住居跡周辺部分とに分けられる。濃密分布部分を「中層」、希薄部分を「下層」とする。まず、下層について平面分布をみると、土器・石器・礫とも住居跡の外郭線のすぐ内側に遺物の希薄な空間がドーナツ状にあり、住居中央部に遺物が集中する。垂直分布図をみると、この部分は遺物分布の希薄な下層部分であり、下層が平面分布図では環状に分布することが分かる(「下層の環状分布」と呼ぶ)。こうした状況は、ほとんどすべての住居跡で確認できる(第1～8図)。上層が層状に覆う3・5・11・12住でも平面分布図で下層の環状分布が確認でき、上層の遺物が中層から浮き上がったものを中心とし、若干の後世の遺物がこれに混在しているとみることも可能であり、上層の形成過程を考える上で示唆的である。

また、下層は切り合い関係を示す住居跡においても確認できる。5・12住では、藤内式期(5住)と新道式期(12住)の切り合いである(第2・3図)。12住の中層に藤内式のマークが目立つが、先述のとおり幅広角押文をすべて藤内式としたため齟齬が生じたものと考えられる。ここで注目されるのは、切り合う2軒の住居跡でも、切り込んだ住居跡(時期の新しい住居跡、この場合5住)に遺物分布の環状構造がみられる点である。垂直分布図をみると、切り合う部分の5住側に、土器・石器・礫いずれにおいても分布の希薄な下層が形成されていて、下層の環状分布が確認できる。こうした状況は、25・32・38住(第21図)、43・44住(第19図)でも確認できる。

なお、5住の場合、東北部に曾利式期の4号配石に伴う遺物分布がみられるが、上層の一部として下層の環状分布の上に乗りにかかっている状況が垂直分布図から確認できる。こうした状況は、16住(貉沢式期)西側の新確認住居(井戸尻式期)でも確認できる(第18図)。この場合、16住側が最大20cmほど落ち込み、生活時の重圧によって16住の覆土が窪んだものと思われる。逆に、16住の覆土が新住居形成段階(2型式の時間幅の後)にはこの程度の硬度をもっていたことの証となるかもしれない。

## 3 中層の区分と特徴

中層は、20～30cmの厚さで住居跡中央部に層状に分布している。中層には住居跡の当該期の遺物が分布し、図版編に示した土器の多くは中層出土である。3住の中層の平面分布をみると、特に土器の分布が均一な分布ではなく、中央部分に分布の希薄な空間が存在している。石器・礫でもやや不鮮明ではあるが希薄な空間を認識できる。垂直分布図では、土器の場合、中層の中央部分が希薄で、周囲の分布が濃い状況が見て取れる(「中層遺物分布の環状構造」と呼ぶ)。こうした状況は、5住(第16・17図)、38住(第21図)、43住(第19図)でも確認できる。中層が直接床面に接する場合(3・5・11・12・16・49住)と、中層の下に10cm程度の薄い下層を形成している場合(21・23・25・32・38・35・43・44住)とがみられる。

また、中層は周囲(住居跡壁に近い位置)ほど遺物の分布が薄くなる状況を示すものがある(5・12・16・21・35・49住)。さらに、43住では当該時期である井戸尻式期よりも後の土器の分布はみられないが、垂直分布図をみると遺物分布の希薄な空間が中層を覆うように分布している。平面分布では下層の環状分布が確認できるので、垂直分布図では遺物の希薄な層が、下層から上層に連続するようにも見受けられる。43住は平面分布図では、上層の環状分布と中層の環状構造の両者がみられる。中層全体の分布位置が住居跡の南側にかたよって分布している点と、中層の垂直分布が住居跡の壁側に高く、中央側に低く、傾いて分布する点とが見て取れる。つまり、中層全体が一体として傾きをもっているのである。その一体となった中層に無遺物の土層が覆い被さるように分布しているとみることもでき、無遺物の上層の存在も推定可能と思われる(第19図では破線よって上層と下層の想定境界を示した)。中層が平面分布図である方向にかたよって位置する状況は、38住でも観察できる。ここでは、中層の周囲に遺物の希薄な部分が周囲から挟み込むように分布している(中層内の破線が両者の境界)。これらの例から、住居跡の窪地中央部に一体となって分布する中層に対して、周囲から遺物の希薄な層がのしかかるように分布するようになるのかもしれ

ない。中層の形成過程を考えるのに示唆的である。

ところで、3住の場合、出土土器の3が中層の三カ所にブロック状に分散して分布している。この内、一部のブロックが上層中に浮き出ていることが分かる。垂直分布図をみると、この部分より右側では曾利式期の土器片の分布がみられない。あるいは、この部分は中層に含まれる部分で、曾利式期の土器片は土坑などで中層に掘り込まれたものかもしれない。いずれにしても、同一土器個体が遺物分布の環状構造の中に分散して分布することは注目すべき事象である。中層の形成が住居跡周辺からの廃棄行為（投棄行為）と仮定した場合、ひとつの土器個体が数ブロックに分割され、さらに別方向からそれぞれ投棄されたことになる。なお、3は一部の土器片が二次的に火を受け黒色化しており、割れた後に一部の土器片が他とは別の扱いを受けたことになり、分割廃棄には有利な材料である。こうした、中層における同一土器個体の分散分布は、12住の8（第16図）、43住の6（第19図）、44住の16（第19図）、49住の11（第20図）などにもみられるが、3住の3ほど広範囲ではない。

#### 4 住居跡覆土層の形成過程

住居跡覆土層と出土遺物群について、住居跡のライフサイクルという視点から精緻な分析が小林謙一氏（小林1995ほか）や黒尾和久氏（黒尾1988ほか）によってなされ、縄文時代集落研究の基盤が形成されつつある。こうした研究動向に対して、今回の報告は十分に答え得るものではないが、集落研究の前提となる住居跡覆土層の形成過程について若干の所見を提示したい。

住居跡覆土層の内、下層の形成については、すでに「第一次堆積層」と呼ばれ、住居廃絶後、竪穴内に周囲から流れ込んだ土層とする説が提示されて久しい。この説では、切り合い関係を示す住居においても下層の環状分布が形成される過程については説明できない。切り込んだ住居の構築によって掘り上げられ遺物を多量に含む覆土が、その住居の廃絶後に第一次堆積層のもとになるとすると、相当量の遺物が第一次堆積層に混入するはずである。また、酒呑場集落は継続的に形成されており、廃絶後に竪穴を裸地にした場合、継続居住する住人がそこにまったく廃棄物を投棄しなかったとする無理な想定も必要である。今回提示した下層の環状分布は、廃絶住居の周囲の遺物分布状況にかかわらず形成されており（今回提示した平面分布図は、住居跡周辺の遺物分布も図化している）、遺物の分布を排除し土壌のみを形成させるフルイのような「仕掛け」の想定が必要である。

そこで想起されるのが住居上屋構造の屋根材の存在である。武藤康弘氏は北米先住民族の民族誌研究から「竪穴の廃絶後、屋根の覆い土が腐朽した屋根材の隙間から竪穴内に流入して堆積する可能性が高い」ことをすでに指摘している（武藤康弘1995）。住居廃絶時に屋根材を竪穴に覆い被すようにしたならば、屋根材やそれより下位の空間では土壌生物等の活動によって土壌形成がなされるが、その上に遺物を含む土層が形成されても、屋根材にはばまれて下層には到達しない。屋根材は竪穴窪地内に侵入する遺物を排除しながら下層を形成することになると想定できる。屋根材によって住居の床面や壁が保護され、床の硬化面や壁の立ち上がりが発掘できることにもなる（まったく裸地として竪穴が放置された場合、一冬超すだけで床の硬化面、壁の立ち上がりなどは消滅する可能性は実験的に確認している（保坂康夫1997）。なお、屋根材として茅を想定することが多いが、榊原氏は鋭利な鎌のような道具のない縄文時代では茅を多量に刈り取ることは不可能とし、「木材を並べ隙間を草等でふさいで土で覆う」と想定している（榊原功一1994）。屋根材を透過して土壌が落ちることを考えると、打製石斧などで打ち払われた木の枝を重ねて葺いた可能性をここでは指摘しておきたい。

次に、中層の形成過程であるが、これまで第一次堆積層の上に土器が一括廃棄された事例を「吹き上げパターン」と呼び、住居廃絶以降、窪地となった竪穴内への季節的な土器廃棄行動が想定（小林達雄1974）され、集団移動の証拠とされた（末木1975）。一括廃棄は43住で観察できる（図版編写真図版19）。一括廃棄ではないが完形に近い土器が単体で中層中に点在する状況もいくつかの住居で観察できる（図版編写真図版参照）。しかし、43住のように完形に近い土器群が団塊状にまとまる状況は非常にまれな出土状況である。一般的には大小の土器片が石器や礫と混在し土壌の中に点在するといった状況である。生活廃棄物は、おそらくさまざまな生活活動の中で、時それぞれに違った内容を持っていたはずである。ところが、中層の遺物分布を検討してみると、土器・石器・礫、さらには種類別、時期別、重量別といった分類形態もが、それぞれほぼ同一の分布状況を示しており、三者が混在しているのである。廃棄行為を考えた場合、さまざまな種類の土器・石器・礫が、ほどよく混在する廃棄物を常に投棄し続けるという想

定をしなければならない。中層の遺物群が周囲からの投棄だとした場合、どこかで廃棄物を混ぜるという行為を想定しなければならない。

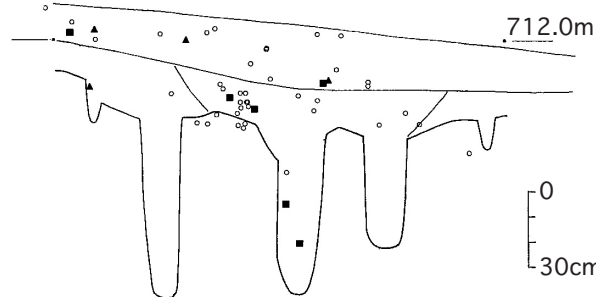
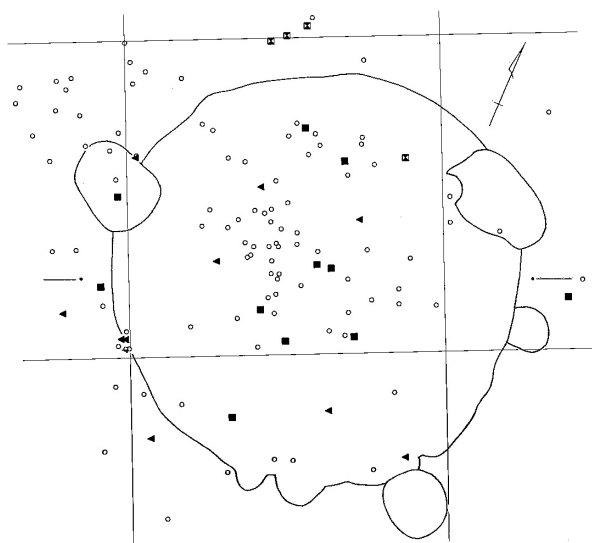
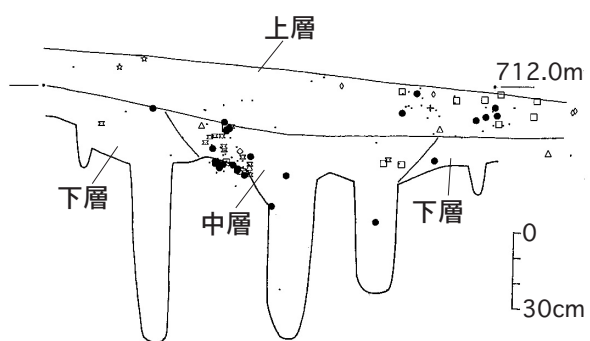
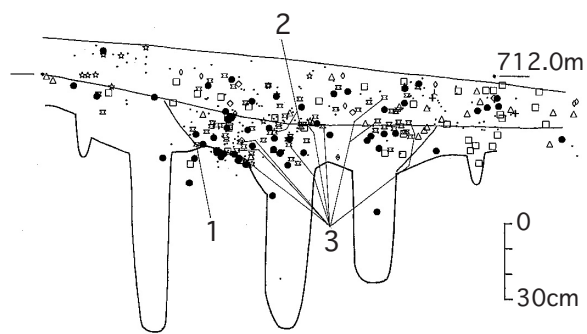
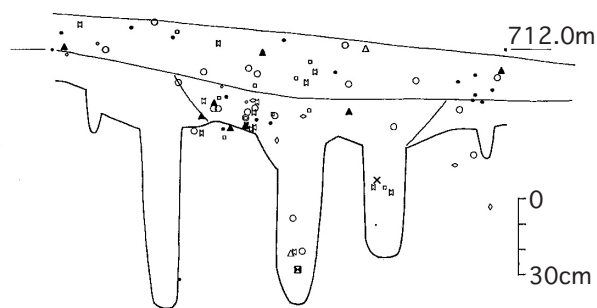
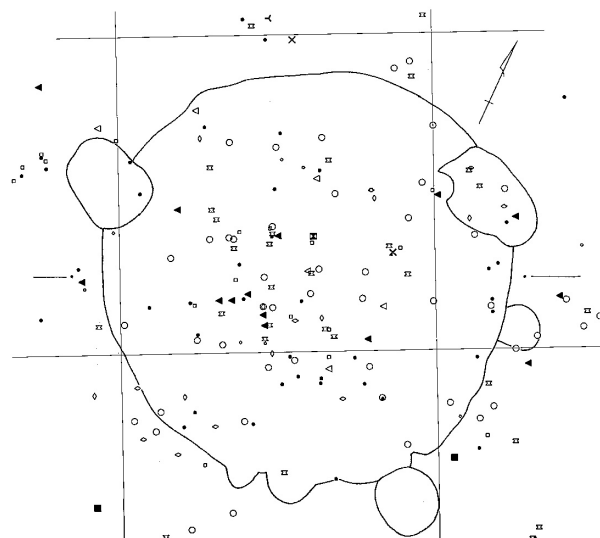
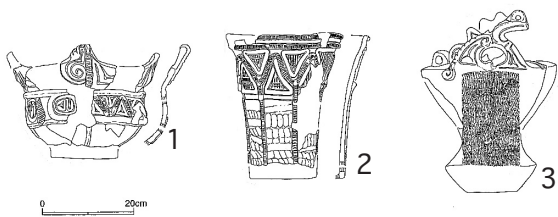
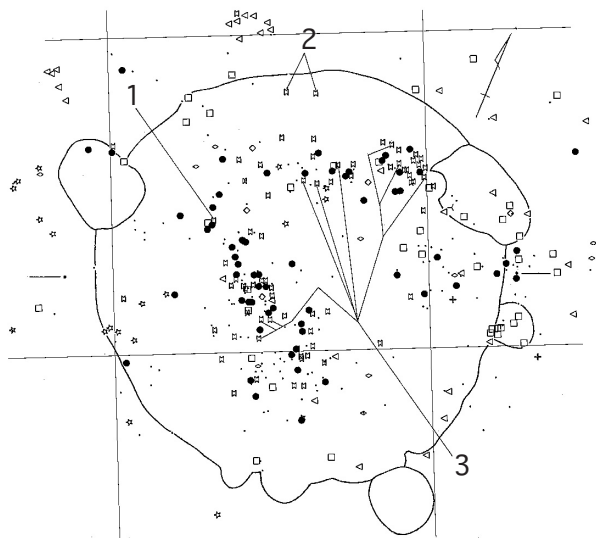
そこで、この混ぜるという行為を屋根材の上で実施することを考えたい。それは、屋根材の上に葺かれる土葺きの存在である。すでに、土葺き住居の存在が提示されている（榎原功一1994、武藤康弘1995など）が、これまでの論議では土葺きの土層は「第一次堆積層」とされるあまり遺物を含まない下層であるという論議であった。ここでは、その土葺き材に遺物を含む土層を想定したい。住居形成時には周辺遺物を含む土層が屋根材の上に形成されるが、長期間居住を考えると、定期的に屋根材を取り替え、土葺きを吹き替える作業が想定される。この時に新たな生活廃棄物が混在することになると考えたい。中層の遺物をみると、礫の出土量については、上屋構造の変化に対応して諸磯式期・五領ヶ台式期から猪沢式期～曾利式期の段階に増加することを示した。礫は非常に小形の礫も多くみられる。酒呑場遺跡は風成堆積物を主体とするローム層を基盤としており、礫を基盤から得ることができない。したがって、小形礫についても河川等からわざわざ持ち込まれているのである。数少ない例ではあるが、本遺跡で小礫集積が確認されており（I区50住：図版編図版24、J区3住3住ピット充填小礫）、小礫をまとめて採取し保管しておく行為の存在が指摘できる。44住の覆土内集石も、300g未満の小形礫で完形の非焼け礫を中心にしたもので、これもその可能性がある。これらの用途を考えた場合、屋根の土葺きへの混和材との想定が可能となる。また、礫のなかにはかなりの高温で焼かれたものも存在している。焼け礫は集石としてまとまって存在することが通例であるが、酒呑場遺跡では焼け礫の集石がみられない。集石活動は行ったが、使用した礫はほとんど土葺きの中に混和されたとの想定も可能となる。中層を土器・石器・礫などが混和された土葺き層であると考えれば、中層の一体的なあり方や土器個体の分散分布も理解できる。また、中層出土遺物群が上層出土遺物群にくらべ、ある時期の形態的特徴を強く示す状況がある点を石器や土器の検討の中で示してきたが、この遺物群の一括性の由来も理解することができる。

団塊状にまとまった土器群は一括廃棄と認識できるが、その時期は最後の土葺き葺替え作業の直後から廃絶までの期間に土葺きの上に廃棄された場合や、廃絶直後に竪穴内に落ち込んだ土葺きの上に廃棄された場合も想定可能であり、周辺住居からの廃棄とする従来の考え方以外に、当該住居の居住者による廃棄行為も想定可能となる。完形土器の覆土中での点在分布についても同様な想定が可能である。

また、中層の環状構造については、土葺き土層を屋根に乗せる関係上、その構造が屋根の形態に影響されることになる。竪穴中央に倒れ込んだ土葺き中央に空間があるということは、屋根の頂上に穴があいていて、この部分に土葺きがなされていなかったことを示す可能性がある。武藤氏はアメリカ先住民の民族例から、屋根の頂上部に入り口を設けた竪穴住居の可能性を指摘している（武藤康弘1995）。また別の考え方として、家屋頂上部に煙出しを想定し、この部分に土葺きがなされていなかった状態も指摘できる。床面上に一次堆積層を介さずに中層が分布する状況は、住居廃絶段階で上屋をたたむ時にこの空間に土葺きの一部が流れ込んだり、廃絶後に徐々に流れ込んだものである可能性が指摘できる。

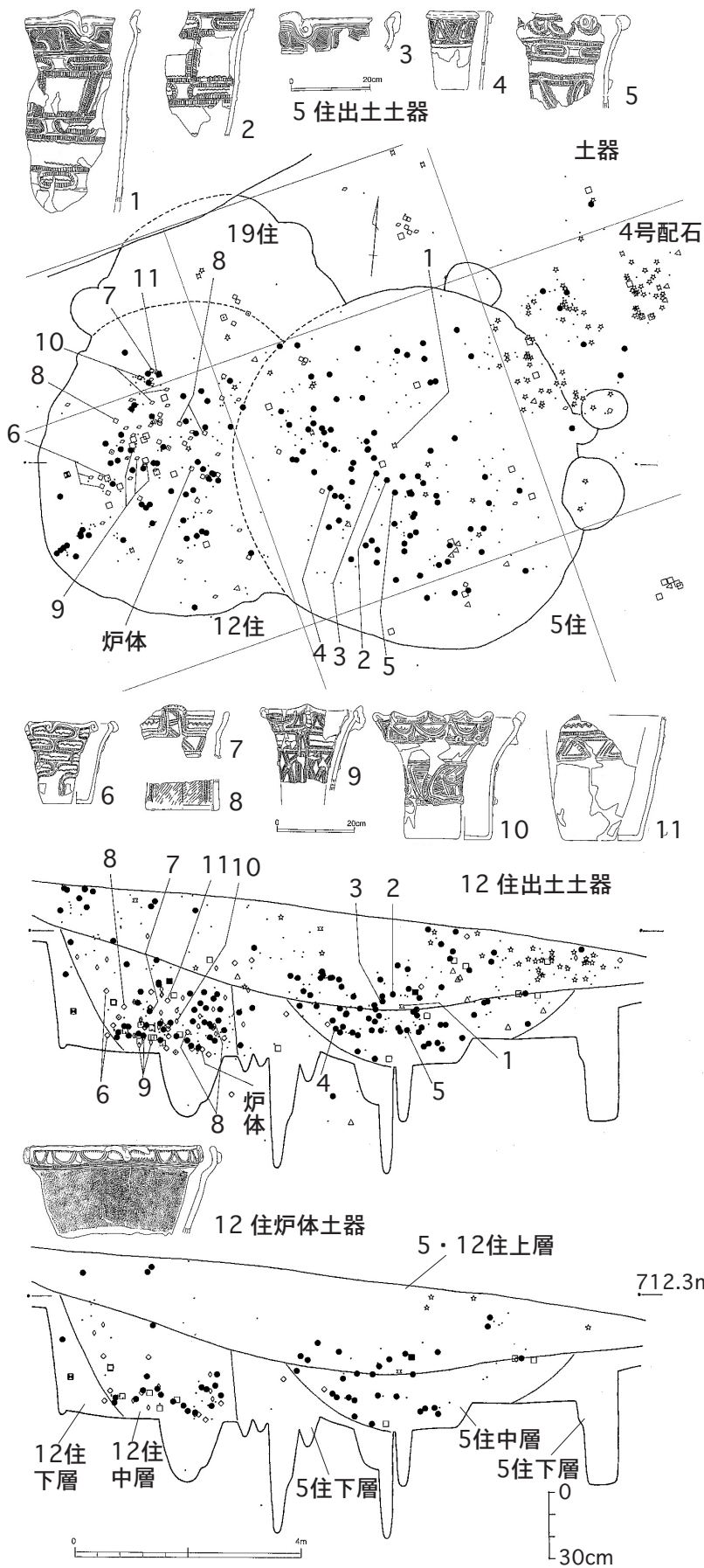
#### 引用文献

- 小林 達雄 1974 「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』93
- 末木 健 1975 「移動としての吹上パターン」『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡長坂・明野・葎崎地内—』
- 黒尾 和久 1988 「竪穴住居出土遺物の一般的なあり方について—「吹上パターン」の資料的検討を中心に—」『古代集落の諸問題』
- 榎原 功一 1994 「縄文中期の環状集落と住居形態」『山梨考古学論集』Ⅱ
- 小林 謙一 1995 「住居跡のライフサイクルと一時的集落景観の復元」『シンポジウム縄文中期集落研究の新天地』
- 武藤 康弘 1995 「民族誌からみた縄文時代の竪穴住居」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集
- 保坂 康夫 1997 「竪穴住居址の掘削痕への着目—なぜ残らないかを考える—」『山梨県考古学協会誌』第9号



(記号の凡例は第16図)

第15図 I区3住遺物分布図 (平面は1/120, 断面垂直方向は1/30)



遺物分布図の記号凡例

土器

- △ 諸磯 b・c 式
- 五領ヶ台式
- ◇ 角押文のある土器 (猪沢式)
- ◇ 三角押文のある土器 (新道式)
- 幅広押文のある土器 (藤内式)
- 半肉彫文のある土器 (井戸尻式)
- \* 曾利式
- ・ 時期不明

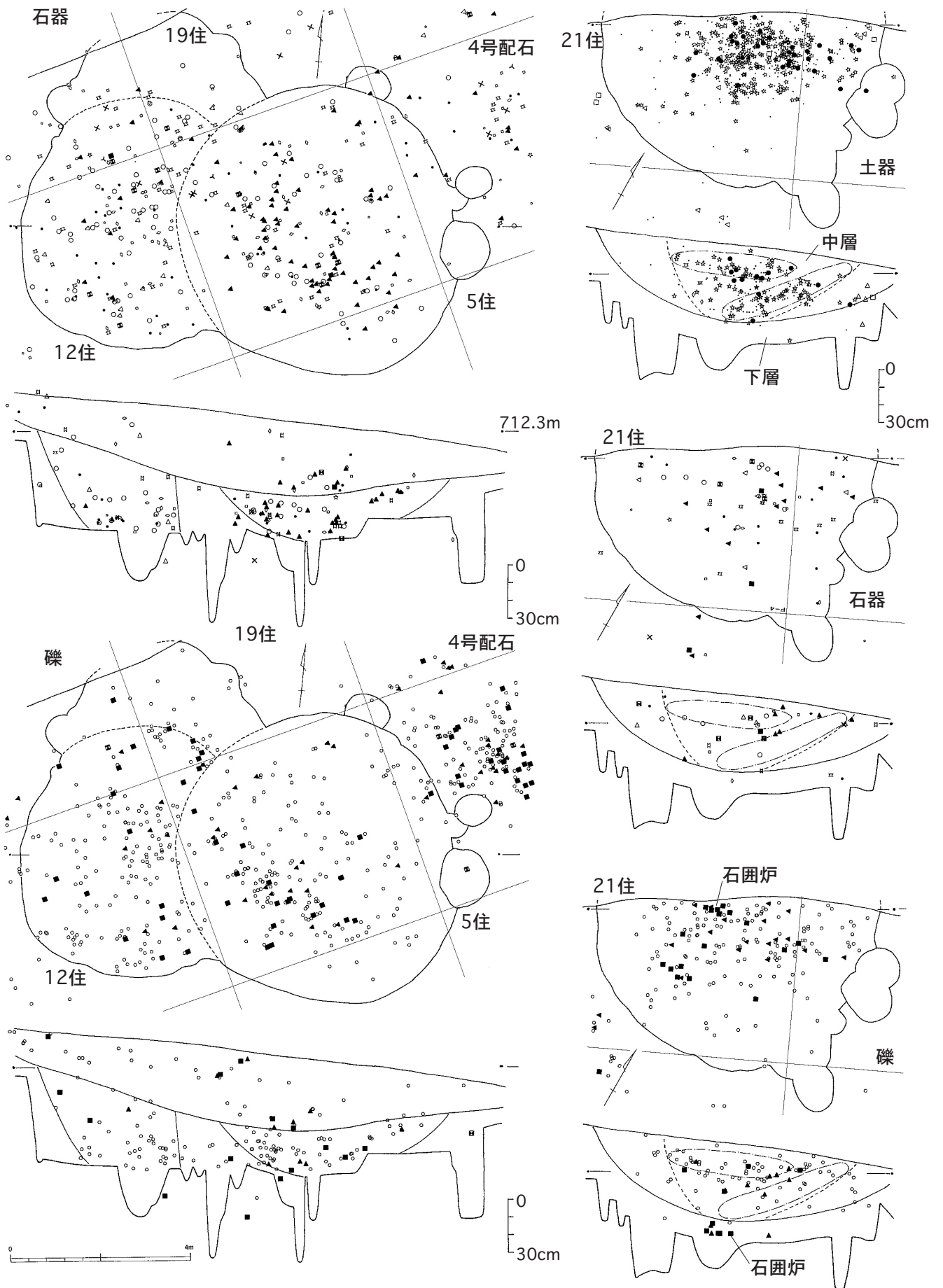
石器

- 打製石斧
- △ 横刃形石器
- 大形礫器
- ▲ 小形礫器
- ◇ タタキ石 (平面図では南北方向に立っているマーク)
- クボミ石 (平面図では南北方向に立っているマーク)
- ◇ スリ石 (平面図では南北方向に対して寝ているマーク)
- 稜ズリ石 (平面図では南北方向に対して寝ているマーク)
- 石皿
- × 礫石皿
- ▲ 台石
- \* 石棒
- ・ 大形剥片

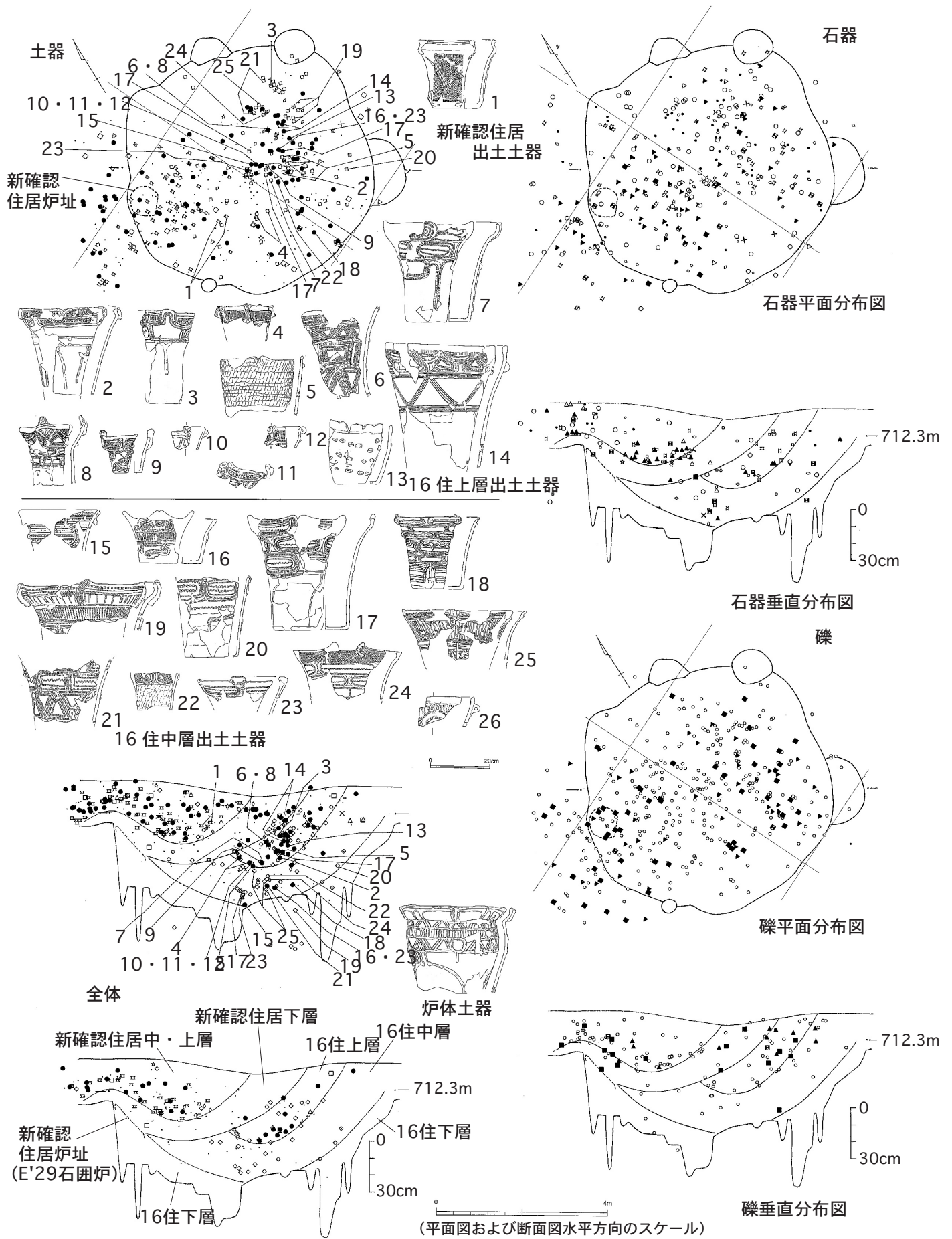
礫

- 1～499 g
- ▲ 500～999 g
- 1000～9999 g
- 10kg以上

第16図 I区5・12住遺物分布図(1) (平面は1/120, 断面垂直方向は1/30)

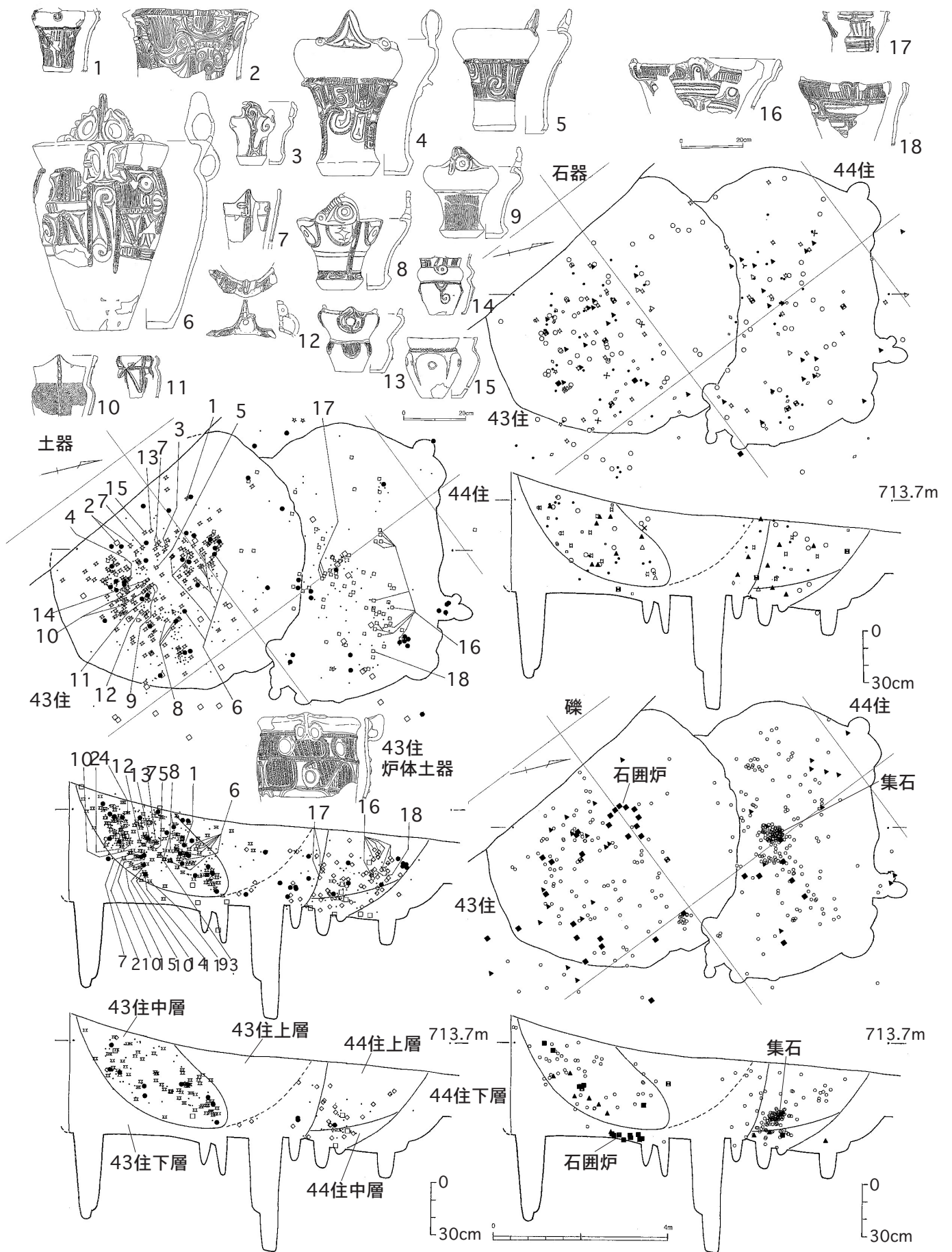


第17図 I区5・12住遺物分布図(2)および21住遺物分布図(平面は1/120, 断面垂直方向は1/30)

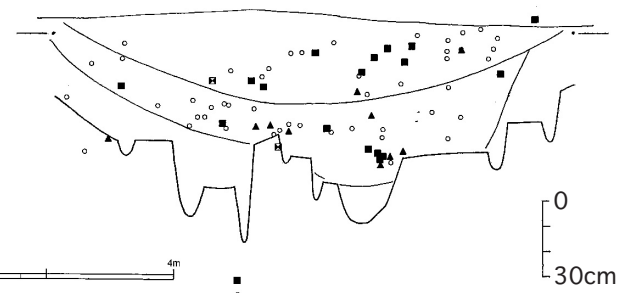
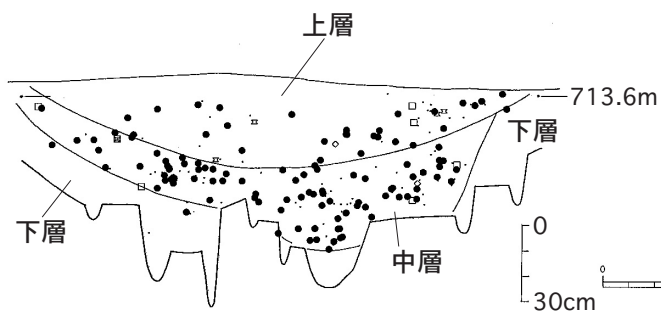
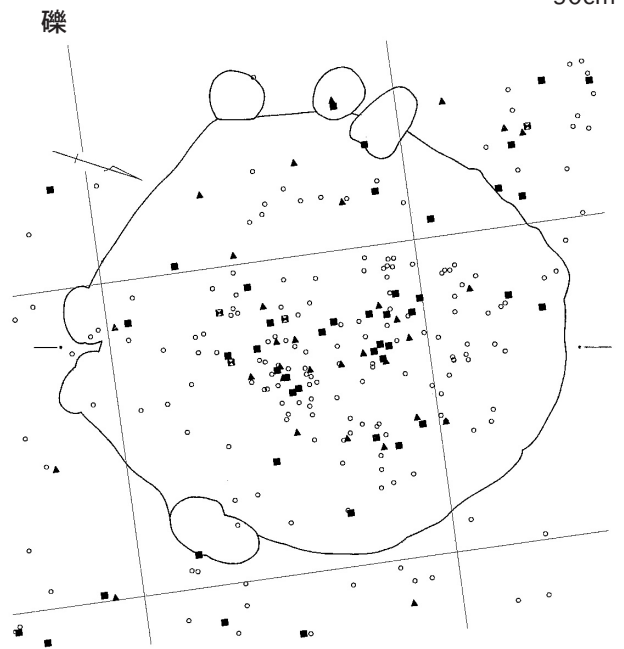
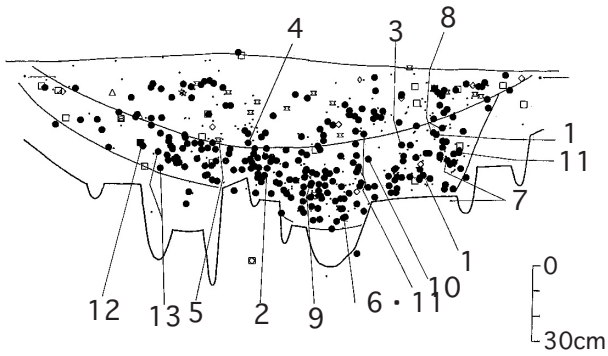
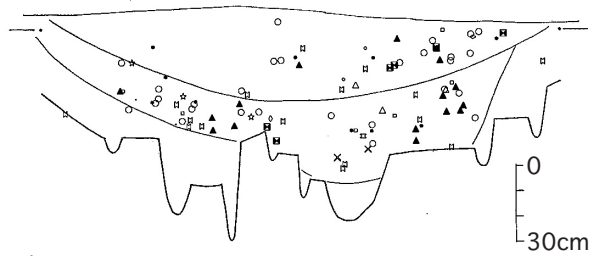
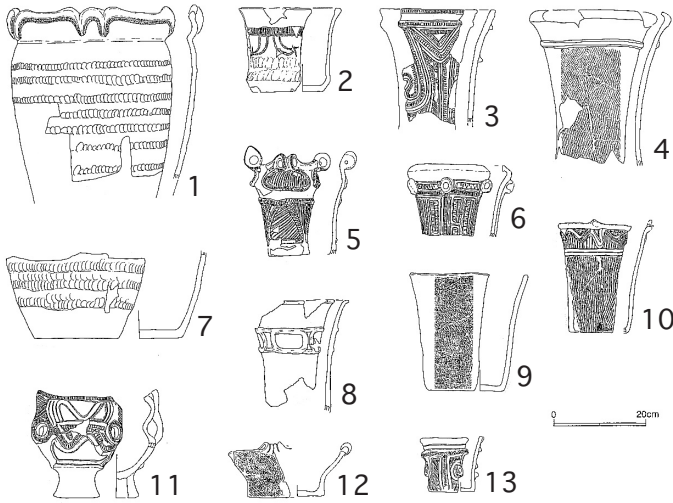
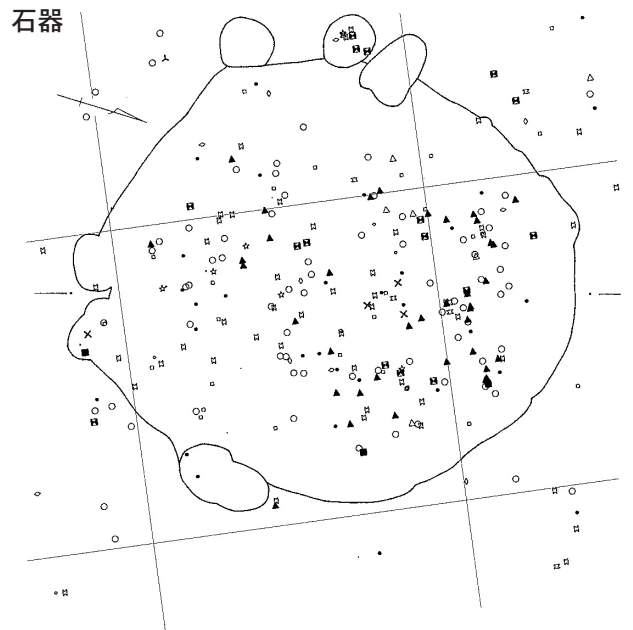
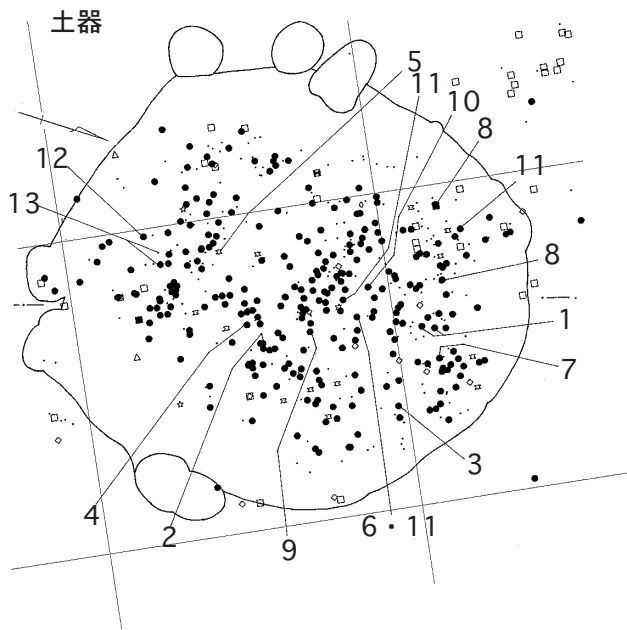


第18図 Ⅰ区16住遺物分布図 (平面は1/120, 断面垂直方向は1/30)

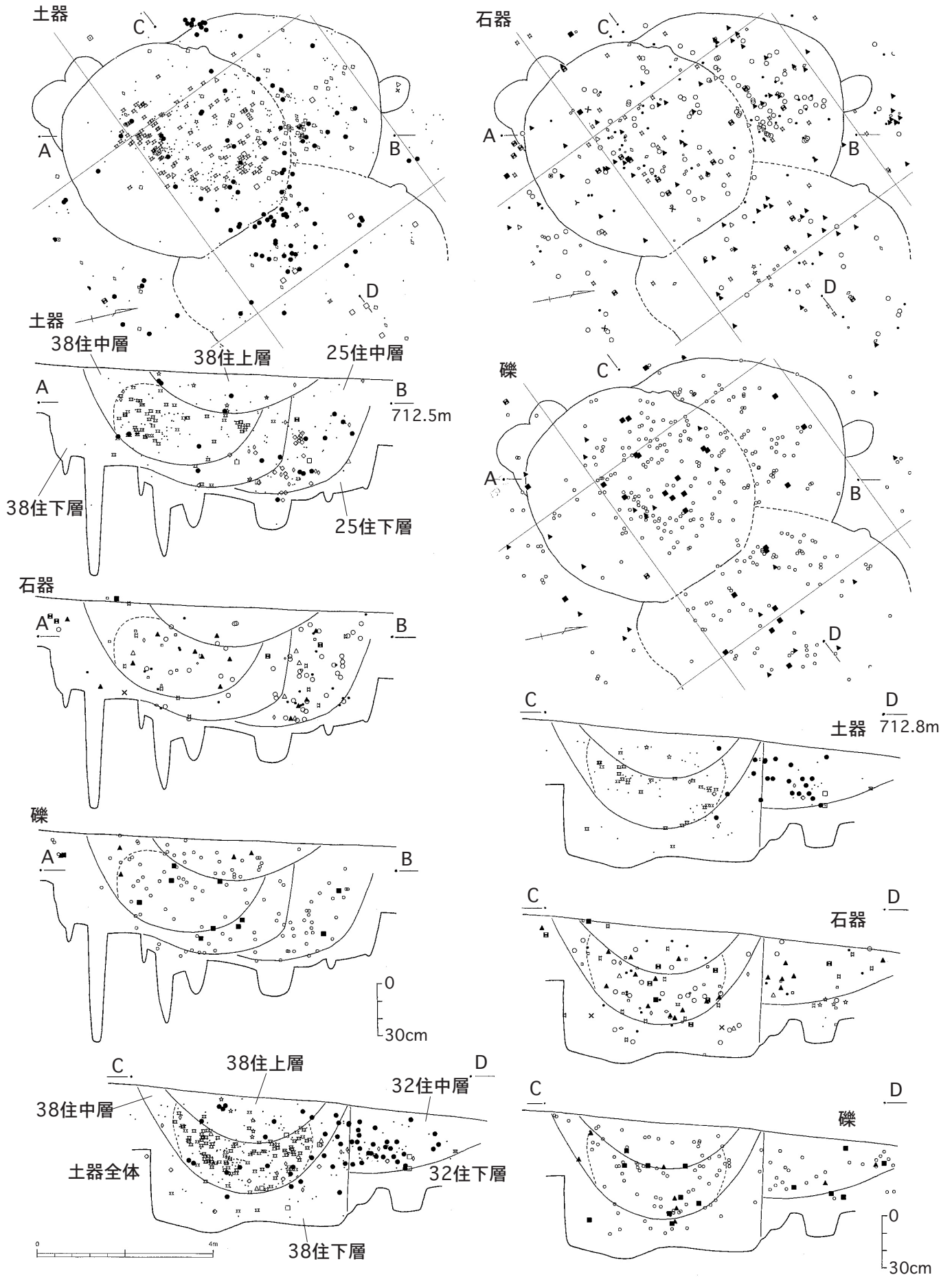




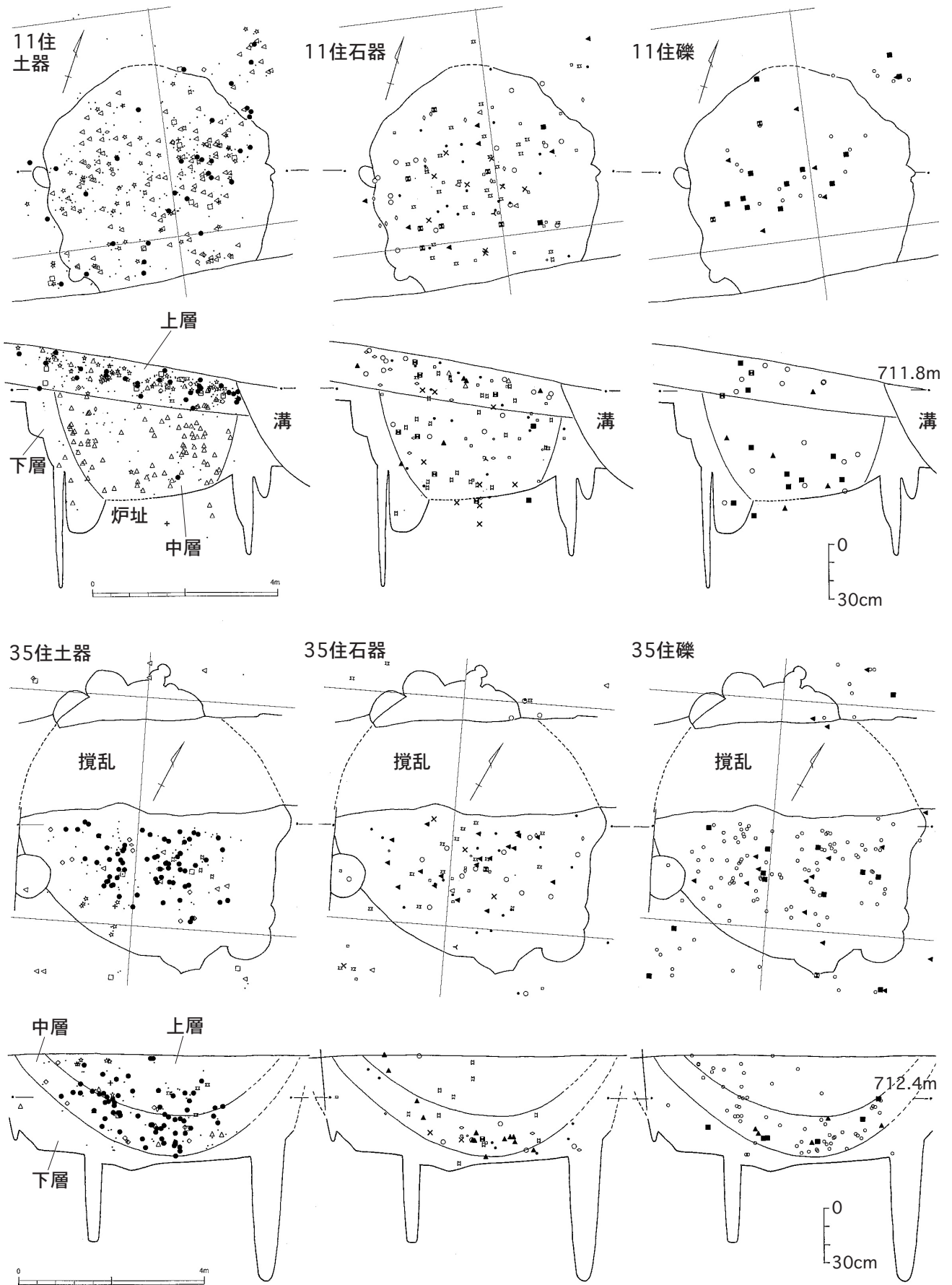
第19図 I区43・44住遺物分布図 (平面は1/120, 断面垂直方向は1/30)



第20図 I区49住遺物分布図 (平面は1/120, 断面垂直方向は1/30)



第21図 I区25・32・38住遺物分布図 (平面は1/120, 断面垂直方向は1/30)



第22図 I区11・35住遺物分布図（平面は1/120，断面垂直方向は1/30）

## 第5章 弥生・古墳時代の遺物

### 第1節 弥生時代について

僅かながら壺および甕（第101図1～5）が遺構外より出土している。いずれも小破片のため全体の形態は不明であるが、頸部や胴部の外面全面に縦羽状あるいは斜めの条痕文を施しており、それらの特徴から中期初頭に属するものと考えられる。

該期の資料は、近年八ヶ岳南麓地域においても検出事例が増えてきており、今後は縄文時代晩期からの系譜や土器の交流等、中部高地における弥生文化伝播のあり方について明らかにされることを期待したい。

### 第2節 古墳時代について

第1次から第4次にわたる酒呑場遺跡の調査で確認された古墳時代の主な遺構は、竪穴住居跡16軒（C区-17・33・51・71・101・103～108号、D区-2・9・10号、E区-1号、J区-3号）、掘立柱建物跡5棟（C区-1～3号、D区-1号、I区-1号）などであり、C・D・E・I区の北側台地縁辺部から東部にかけて分布している。また、竪穴住居跡16軒中7軒（17・33・103・105～108号）が焼失家屋と考えられる。これらの遺構からは、大半を占める土器のほか、鉄製品（鉄鏃など）や石製品（砥石など）が僅かに出土している。本項では、住居跡出土土器を中心に記載を行うこととしたい。

#### 1) 器種構成

住居跡出土土器には、基本器種として壺・甕・高坏があり、坏・器台・鉢・甑・ミニチュア品が少量含まれている。以下、主要器種の形態や器形などの特徴を述べる。

##### a. 壺

壺は形態から広口壺（第102図56）・直口壺（第102図58）・小型壺（第101図7・17・20・28、第102図55）に大別でき、文様を持つ加飾壺や有段口縁壺は見られない。器形的には胴部中央に最大径を有し、頸部が屈曲するものが主体となる。

##### b. 甕

甕はハケ調整のS字状口縁台付甕（第101図9・18・30～33、第102図38・45～49・53・57など）が主体となり、単純口縁のもの（第101図8など）は僅かに出土している。S字状口縁台付甕は、肩部に横走るハケ目の見られないD類（小林健二1991）のみとなる。また、甕の口縁部に刻目を施すものは見られない。

##### c. 高坏

高坏は坏部に稜を持つもの（第101図22・23など）と持たないもの（第102図42など）が見られる。また、脚部では3カ所の穿孔が見られるものが主体的であるが、棒状に近い形態のもの（第102図54）も存在する。

#### 2) 時期的な位置づけ

住居跡出土土器は、壺・甕・高坏など主要器種の形態や器形などの特徴からS字状口縁台付甕D類の存在を指標とする山梨県史Ⅲ期「古墳時代前期」にいずれも比定されるものと考えられる。

なお、住居跡の主軸方向からC区では4グループ（17・51・103・106～108号、33号、71・105号、104・111号）に分類されることから時期細分の可能性もあり、今後改めて検討していきたい。

#### 3) 今後の課題

八ヶ岳南麓の古墳時代前期において本遺跡をはじめとする各集落跡の形成・変遷過程、集落相互の関連、さらに葦崎市坂井南遺跡や北杜市北村遺跡の方形周溝墓群など墓域との関わりについても今後具体的に解明していきたい。

#### 参考文献

小林 健二 1991 「甲府盆地におけるS字甕の定着について」『古文化談叢』第26集 九州古文化研究会

# 第6章 自然科学分析

## 第1節 酒呑場遺跡出土の異系統縄文土器の胎土分析

山梨文化財研究所 河西 学

### はじめに

本遺跡では既に縄文前期後半の諸磯b式土器についての胎土分析を行っている(河西、2003)。その結果ほとんどの諸磯b式土器は、花崗岩類を主体とする組成の原料を用いていることが明らかになった。さらに肉眼観察の結果、縄文中期勝坂期の台形土器では、安山岩を主体とする在地的組成の胎土が顕著であった。このように、同一地域においても異なる時期の土器型式間では胎土組成が大きく変化する現象が認められた。

今回は、縄文早期終末から中期後半にかけての異系統土器の胎土組成を明らかにすることを目的として、胎土分析を行ったので、以下に報告する。

### 分析試料

試料は、発掘調査担当者によって型式分類された異系統土器25点を肉眼観察し、傾向を把握した(第29表)。木島

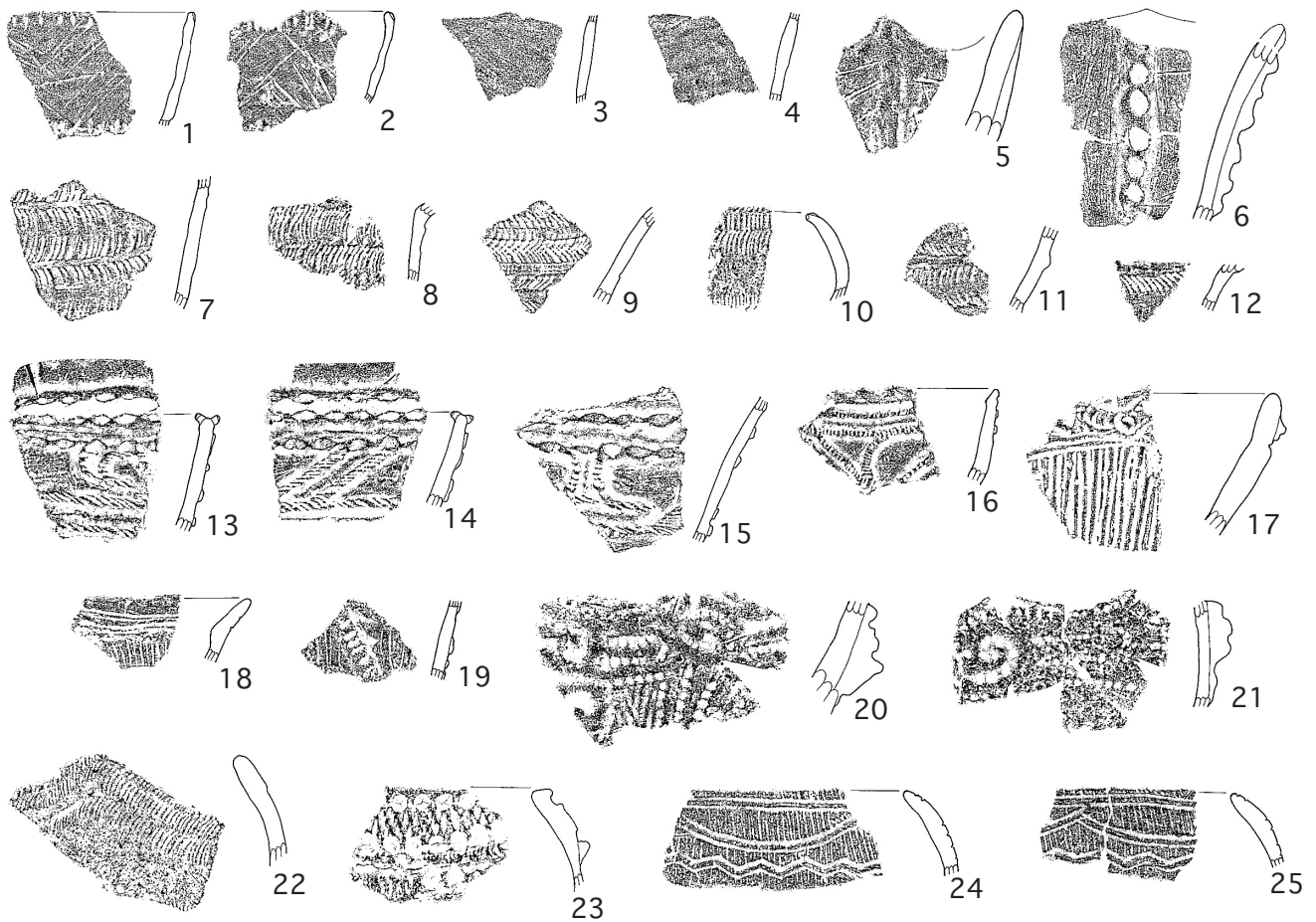
第29表 肉眼観察による土器の胎土分類

番号	出土地点	ラベル/注記	時期	型式	花崗岩類	石英	長石	雲母	角閃石	輝石	火山岩	玄武岩	安山岩	デイサイト	変質火山岩	緑色変質火山岩	泥岩	珪質岩	砂岩	黒色粒子	推定産地	備考	
1	B区	94サケB	早期終末～前期中葉	木島式	?	◎	○	○細粒													花崗岩類地域か。	硬質の胎土	
2	B区	95サケB F-19グリッド	早期終末～前期中葉	木島式	△?	○		△金色細粒													花崗岩類地域か。	1とほとんど同様の胎土。	
3	B区	94サケB 3住	早期終末～前期中葉	木島式	?	◎		△細粒													花崗岩類地域か。	黒褐色だが表面付近の胎土は、1、2に比較してやや軽い傾向がある。硬質、黒褐色、1,2より表面が軽い傾向。3と似るが、砂分が多い。円磨された粒子(qtなど)も存在	
4	B区	94サケB 8住	早期終末～前期中葉	木島式	?	◎		○大粒も													花崗岩類地域か。		
5	B区	サケB 3住	前期初頭	中越式			○		○	○			◎							opq	安山岩地域。		
6	B区	94サケB	前期初頭	中越式	△	○	○	○表面に多い		○			△?	○? 白色軽石様							opq	雑なもの混入。沖積低地などか?	
7	B区	94サケB P-2	前期後半	北白川下層IIa式	○1~2mm大	◎	○	○	○												opq	花崗岩類地域か。	黒い胎土。やや角張った～角張った粒子、表面は黄褐色、内部は暗灰～黒褐色
8	C区	95サケC D'-39	前期後半	北白川下層IIa式	○?	○	○	○														花崗岩類地域か。	黒い胎土。表面黄褐色、内部黒色。
9	B区	94サケB F-13グリッド	前期後半	北白川下層IIa式	○?	○	○	○細粒														花崗岩類地域か。	黒い胎土
10	C区	95サケC J'-44	前期後半	北白川下層IIa式	○	◎			△?	○											opq	花崗岩類地域か。	白い胎土。表面赤褐色、内部褐色。
11	B区	94サケB D-10グリッド	前期後半	北白川下層IIa式	○	◎	○															花崗岩類地域か。	白い胎土
12	A区	94サケA F-6グリッド	前期後半	北白川下層IIb式	○	○	○	○	△?													花崗岩類地域か。	白い胎土。内外面とも褐色。11と類似するが粗粒。
13	B区	94サケB 18住	前期後半	北白川下層IIb式	○	○	○	○新鮮も														花崗岩類地域か。	サンドウィッチ構造、硬質。
14	B区	94サケB 15住P-30	前期後半	北白川下層IIb式	○	◎	○	○														花崗岩類地域か。	13と同様。
15	B区	94サケB 2住P-20	前期後半	北白川下層IIb式	?	○	○	○														花崗岩類地域か。	13,14と同様。
16	B区	94サケB 2住	前期後半	北白川下層IIb式	?	◎	○	○														花崗岩類地域か。	胎土は13～15よりやや疎。
17	C区	95サケC E'-45	中期初頭～中葉	平出3類A	◎	○	○	○														花崗岩類地域。	表面に細粒の黒雲母片が多く見られる。
18	C区	95サケC E'-37	中期初頭～中葉	平出3類A	◎	○	○	◎							?							花崗岩類地域。	表面の黒雲母が目立つ。
19	C区	95サケC C'-41	中期初頭～中葉	平出3類A	○	○	○	○細粒														花崗岩類地域。	
20	B区	94サケB 1685	中期後半	唐草文系	◎	○	○	○				○	○	△?								花崗岩類>>火山岩なので、火山岩が混入する花崗岩類地域か。	
21	B区	94サケB D-11	中期後半	唐草文系	○	○	○	○					○		○							火山岩類を伴う花崗岩類を主体とする地域か。	20と同様。
22	C区	95サケC F-44	中期前半	船元I式	○	○			○opxか	?							?		?			主として花崗岩類からなるがその他の岩石を含む複合タイプの地域。	細粒で緑灰色の粒子は火山岩か泥岩か不明。丸みのある粒子を含む。φ=3~4mm程度の粒子も。角張っている～やや丸み。φ=2~3mm。表面黄褐色、中央部は黒色。全体に粗粒。
23	C区	サケC A'-38	中期前半	船元I式	◎	○	?	△					?	白色不明				△赤～ピンク				花崗岩類主体だが雑多な粒子が混じる地域。	円磨された粒子φ=1mmを含む。
24	B区	94サケB P-67か87	中期後半	里木II式	○			◎細粒										○円磨	△ピンク			雲母や堆積岩を主体とする地域。	円磨された粒子φ=1mmを含む。
25	B区	94サケB 3住 P-162	中期後半	里木II式	○			◎細粒										◎円磨	△暗灰色			雲母や堆積岩を主体とする地域。	24と同様(同一団体の可能性もある)

◎多い、○普通、△少ない、opx斜方輝石、opq不透明鉱物

第30表 試料表

試料番号	地区	時期	型式	実測図	注記	備考
No. 1	B区	早期終末～前期中葉	木島式	94サケB		
No. 3	B区	早期終末～前期中葉	木島式	94サケB	3住	
No. 5	B区	前期初頭	中越式	サケB	3住	
No. 6	B区	前期初頭	中越式	94サケB		
No. 8	C区	前期後半	北白川下層Ⅱa式	95サケC	D' - 39	黒い胎土
No. 10	C区	前期後半	北白川下層Ⅱa式	95サケC	J' - 44	白い胎土
No. 14	B区	前期後半	北白川下層Ⅱb式	94サケB	15住P-30	
No. 16	B区	前期後半	北白川下層Ⅱb式	94サケB	2住	
No. 17	C区	中期初頭～中葉	平出3類A	95サケC	E' - 45	
No. 19	C区	中期初頭～中葉	平出3類A	95サケC	C' - 41	
No. 21	B区	中期後半	唐草文系土器	94サケB	D-11	
No. 25	B区	中期後半	里木Ⅱ式	94サケB	3住 P-162	



第23図 分析試料実測図 (1 / 2) (図中番号は、第29・30表の試料番号と一致する)

式・北白川下層式・平出3類A土器などは花崗岩類地域に産地が推定されるものがほとんどである。中越式は火山岩類が伴う点で特徴がある。唐草文系土器では、花崗岩類が主体で火山岩を伴う。船元Ⅰ式は、花崗岩類が主体であるがその他多様な岩石を含む。里木Ⅱ式は、雲母や泥岩などで特徴づけられる。肉眼観察結果を踏まえ分析試料12点を選定した(第30表、第23図)。

### 分析方法

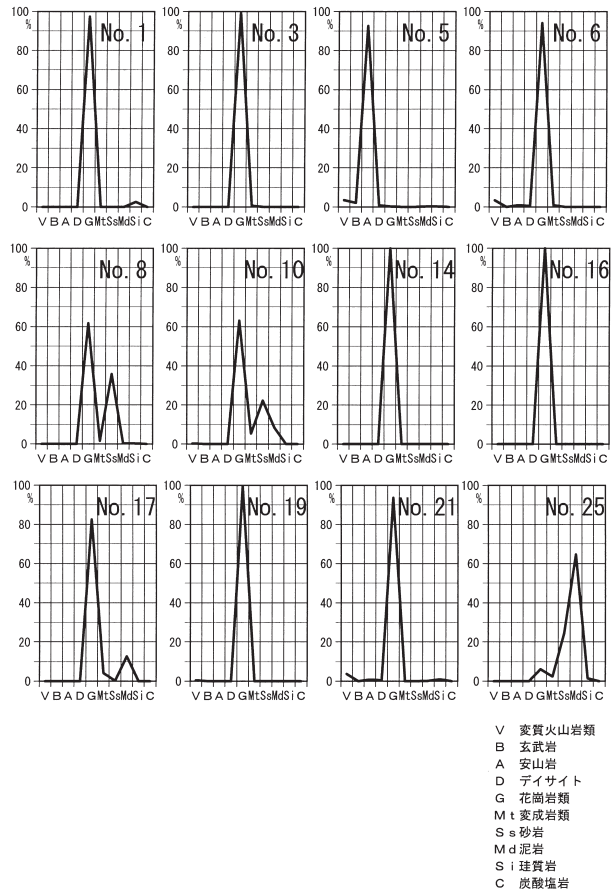
土器試料は、切断機で3×2.5cm程度の大きさに切断し、残りの試料は保存した。土器片試料はエポキシ樹脂を含

第31表 土器胎土中の岩石鉱物

(数字はポイント数を、+は計数以外の検出を示す)

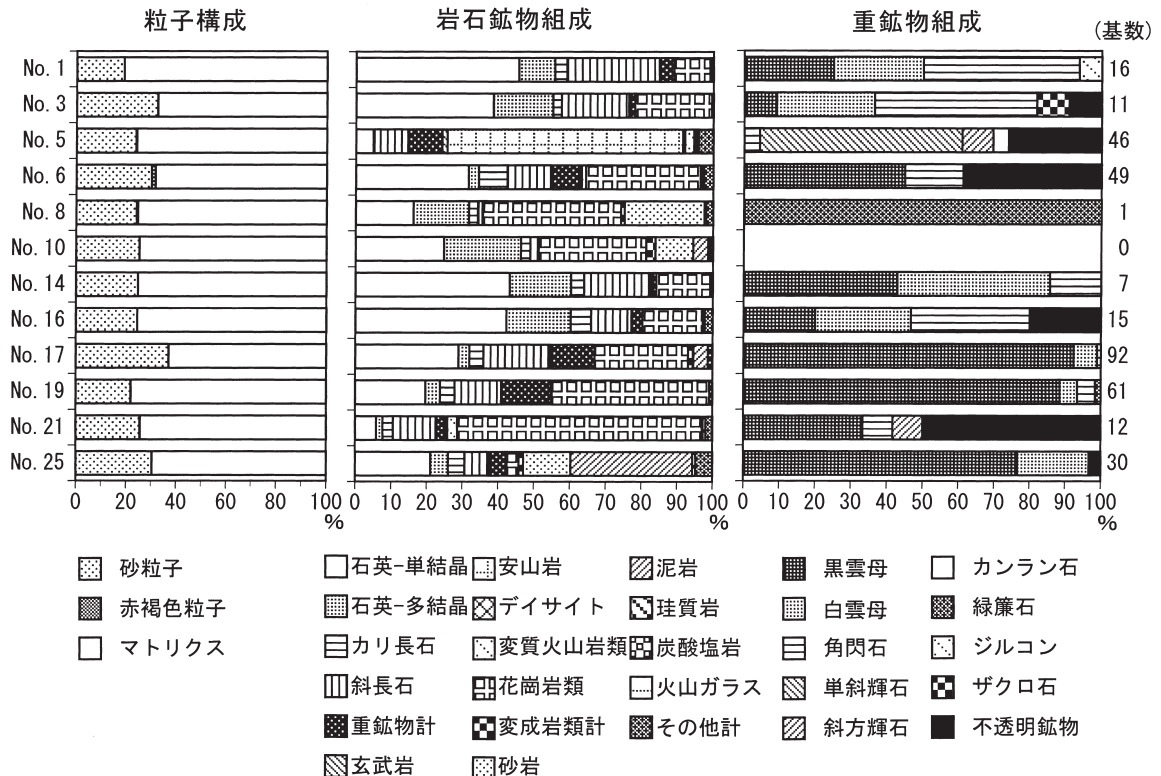
試料番号	No. 1	No. 3	No. 5	No. 6	No. 8	No. 10	No. 14	No. 16	No. 17	No. 19	No. 21	No. 25
石英-単結晶	173	249	23	190	78	125	214	207	214	86	30	128
石英-β型	38	108	1	17	75	109	85	88	23	18	9	30
石英-多結晶	13	15		48	12	13	18	28	29	18	15	28
カリ長石	98	122	45	73	6	11	93	55	138	57	61	42
斜長石	4	1		22			3	3	85	54	4	23
黒雲母	4	3										6
無色雲母					+		3	4	6			
角閃石	7	5	2	8			1	5	1	3	1	
単斜輝石			26									
斜方輝石			4									1
カンラン石			2									
緑簾石		+			1	+					1	
ジルコン	1			+					+			
ザクロ石		1					+	+				
電気石												+
不透明鉱物		1	12	19				3			6	1
玄武岩			7									
安山岩			314	2							3	
デイサイト			3	1							2	
変質火山岩類			12	7						1	14	
花崗岩類	38	140	1	193	186	152	75	83	194	193	350	20
ホルンフェルス		1		2	5	13					1	6
片岩												2
変成岩類(マイロナイト様岩)											5	
砂岩					108	54			1			80
泥岩			1		1	21			30		1	207
珪質岩	1	1		1							4	5
炭酸塩岩												
火山ガラス-無色		1	1	2		3	1	3				
火山ガラス-褐色	1			2			1					
変質岩石		1	1	5	10	1		2	8	1	7	9
変質鉱物	2		14	6		2	2	5	2	2	2	6
泥質ブロック			5	5		1		4		1	1	14
赤褐色粒子		2	6	31	10	2		2	2	4	2	2
マトリクス	1620	1350	1517	1367	1507	1492	1504	1510	1257	1560	1485	1391
合計	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000
石英流動消光	+	+	+	+	++	++	+	+	+	+	+	+
バーサイト	+				+	+	+	+	+	+	+	+
マイクロクリン					+	+						
玄武岩の珪晶鉱物			ol									
安山岩の珪晶鉱物			ol									opq
デイサイトの珪晶鉱物			ol									
変質火山岩類岩質			AD	AD	AD	AD			AD	AD	D	
花崗岩類含有鉱物	bi	bi, mu, ho	bi, ho	bi, mu	bi, mu	bi	mu, ho		bi, mu	bi>ho	bi, mu	
ミルメカイト									+			
マイクログラファイト組織										+		
火山ガラス形態	B	B	B, C	B		A', C	C	C				
植物珪酸体	+	+	++	+	+	+	+	+	+	+	+	+
植物遺存体	+	+	+									

鉱物: bi黒雲母, mu無色雲母, ho角閃石, cpx単斜輝石, opx斜方輝石, opq不透明鉱物  
 変質火山岩類: A D安山岩質~デイサイト質, Dデイサイト質  
 火山ガラス形態: A泡壁型平板状, A'泡壁型Y字状, B塊状, C中間型, D中間型管状, E軽石型繊維状, F軽石型スポンジ状



V 変質火山岩類  
 B 玄武岩  
 A 安山岩  
 D デイサイト  
 G 花崗岩類  
 Mt 変成岩類  
 S s 砂岩  
 M d 泥岩  
 S i 珪質岩  
 C 炭酸塩岩

第25図 岩石組成折れ線グラフ



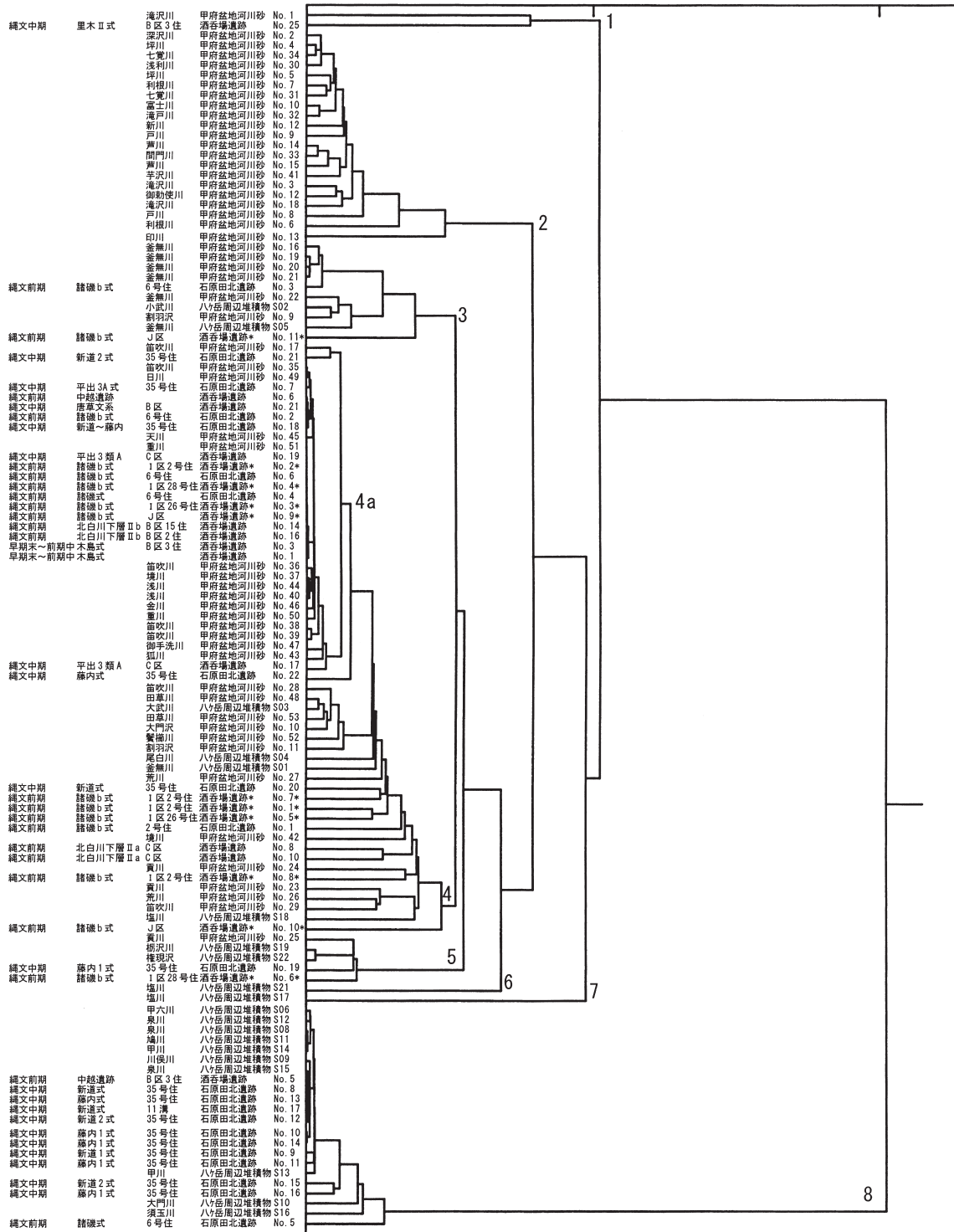
砂粒子  
 赤褐色粒子  
 マトリクス  
 石英-単結晶  
 石英-多結晶  
 カリ長石  
 斜長石  
 変質火山岩類  
 花崗岩類  
 炭酸塩岩  
 泥岩  
 珪質岩  
 玄武岩  
 黒雲母  
 カンラン石  
 白雲母  
 斜方輝石  
 不透明鉱物  
 安山岩  
 デイサイト  
 角閃石  
 単斜輝石  
 斜方輝石  
 花崗岩類  
 変成岩類計  
 その他計  
 砂岩  
 緑簾石  
 ジルコン  
 ザクロ石  
 無色雲母  
 斜方輝石  
 不透明鉱物

第24図 土器胎土の岩石鉱物組成



第32表 折れ線グラフによる土器分類

分類	折れ線グラフの特徴		試料番号
A群	安山岩の第1ピーク	顕著な第1ピーク	5
G群	花崗岩類の第1ピーク	顕著な第1ピーク	1, 3, 6, 14, 16, 19, 21
G-s s群		砂岩の第2ピーク	8, 10
G-m d群		泥岩の第2ピーク	17
M d-s s群	泥岩の第1ピーク	砂岩の第2ピーク	25



第26図 土器のクラスター分析樹形図 [\*は前回分析試料(河西, 2003)]

浸させて補強し、土器の鉛直断面切片（厚さ3mm）を切断し、X線透過写真を撮影し<sup>(1)</sup>、その後岩石薄片と同じ要領で薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし、コバルチ亜硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレパラートとした。次に以下の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行なった。偏光顕微鏡下において、ポイントカウンタを用い、ステージの移動ピッチを薄片長辺方向に0.33mm、短辺方向に0.40mmとし、各薄片で2,000ポイントを計測した。計数対象は、粒径0.05mm以上の岩石鉱物粒子、およびこれより細粒のマトリクス（「粘土」）部分とし、植物珪酸体はすべてマトリクスに含めた。

## 分析結果

分析結果を第31表に示す。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリクスの割合（粒子構成）、および砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を第24図に示す。重鉱物組成では右側に基数を表示した。岩石組成折れ線グラフを第25図に示す。この折れ線グラフは、各岩石のポイント総数を基数とし、各岩石の構成比を示したものである。折れ線グラフの第1・2ピークの組み合わせによって土器を分類した（第32表）。クラスター分析の樹形図を第26図に示す。クラスター分析は、折れ線グラフと同様の10種の岩石データを用いて行なった。クラスター分析での非類似度は、ユークリッド平方距離を用い、最短距離法によって算出した。第26図は、本遺跡今回分析試料のほか、前回分析試料（河西，2003）、長坂町石原田北遺跡（河西，2001）の胎土組成、および甲府盆地周辺地域の河川砂の岩石組成などを比較したもので、便宜的に1～8をクラスターに付した。なお、クラスター4の一部を4aとした。以下に特徴を述べる。

### 木島式（Nos. 1, 3）

粒子構成に占める砂粒子の含有率（以下含砂率）は、No. 1が19%に対し、No. 3は32.4%と高い。岩石鉱物組成は、両者とも類似性が高く、石英・斜長石・花崗岩類などが高率で含まれる。花崗岩類は、黒雲母・白雲母を伴う。重鉱物組成は、角閃石・黒雲母・白雲母から主として構成され、ときにジルコン・ザクロ石などが検出される。第32表ではG群に、第26図ではクラスター4aに含まれる。花崗岩類地域に原料産地が推定される。

水沢（1994）は、長野県御代田町塚田遺跡の木島式を胎土分析し、花崗岩類・接触変成岩・白雲母の多産で特徴づけられることから領家帯を起源とする可能性を指摘している。パリノ・サーヴェイ（2002）は、長野県木曾福島町川合遺跡の木島式を胎土し、領家花崗岩類との関係を推定している。甲府盆地内河川砂の重鉱物組成において、黒雲母よりも白雲母が多い試料は、今のところない。またパリノ・サーヴェイ（2000）は角閃石とザクロ石からなる重鉱物組成を示す北白川系土器の産地を領家帯に推定している。これらのことからNos. 1, 3の産地は、県内には分布しない領家帯などの白雲母を特徴とする花崗岩類分布地域に原料産地が推定される可能性が高いといえる。これらのことは、木島式土器胎土の特徴が広域的に類似している可能性を示す。

### 中越式（Nos. 5, 6）

Nos. 5, 6は、明らかに異なる組成を示す。

No. 5は、含砂率が24%を示す。岩石鉱物組成は、安山岩が66%と卓越し、変質火山岩類・玄武岩・重鉱物・斜長石・石英などをわずかに伴う。重鉱物組成は、単斜輝石が多く、斜方輝石・角閃石・カンラン石・不透明鉱物などが含まれる。第32表ではA群に、第26図では八ヶ岳周辺地域の河川砂や石原田北遺跡の中期土器とともにクラスター8に含まれる。今回の分析試料の内唯一の在地的組成を示す土器である。

No. 6は、含砂率が30%を示す。岩石鉱物組成は、花崗岩類が32%と多く、ほかに石英・カリ長石・斜長石・重鉱物など花崗岩類構成鉱物から主として構成される。安山岩・デイサイトの含有は極めて微量である。重鉱物組成は、黒雲母・不透明鉱物・角閃石など花崗岩類構成鉱物から構成される。第32表ではG群に、第26図ではクラスター4aに含まれる。花崗岩類分布地域に原料産地が推定される。

パリノ・サーヴェイ（2002）は、長野県木曾福島町川合遺跡の中越式土器を胎土し、領家花崗岩類地域および堆積岩地域に産地を推定している。本遺跡のNos. 5, 6は川合遺跡の胎土組成と異なる。花崗岩類が多いNo. 6は、白雲母がほとんど検出されず、黒雲母・角閃石を伴う甲府岩体や甲斐駒ヶ岳岩体などとの類似性が認められる。これ

らのことから、中越式土器胎土は、地域的な特徴をもつ傾向が認められ、木島式胎土と対照的であるといえる。

#### 北白川下層式 (Nos. 8, 10, 14, 16)

Nos. 8, 10, 14, 16は、含砂率が24～25%で極めて類似性の高い値を示す。岩石鉱物組成は、北白川下層Ⅱ a式Nos. 8, 10と北白川下層Ⅱ b式Nos. 14, 16とでやや異なる。

Nos. 8, 10は、岩石鉱物組成において花崗岩類・砂岩・石英などで特徴づけられ、ホルンフェルス・泥岩などをわずかに伴う。斜長石と重鉱物の含有率が極めて低い。第32表ではG-s s群に、第26図ではクラスター4に含まれる。両試料は花崗岩類と堆積岩が分布するほとんど同一産地に属すると考えられる。斜長石と重鉱物の含有率が極めて低く、砂岩などを伴う岩石鉱物組成の特徴は、従来分析された甲府盆地周辺試料ではほとんど認められていない。甲府盆地周辺に原料産地が求められる可能性は低いと推定される。

Nos. 14, 16は、岩石鉱物組成において花崗岩類と石英・斜長石・カリ長石など花崗岩類構成鉱物から構成される。重鉱物は、含有率が少ないものの、黒雲母・白雲母・角閃石など花崗岩類構成鉱物からなる。第32表ではG群に、第26図ではクラスター4 aに含まれる。両試料は花崗岩類分布地域の同一原料産地に属するものと推定される。木島式と同様に領家帯などの白雲母を特徴とする花崗岩類分布地域に原料産地が推定される可能性が高いと考えられる。

境川村諏訪尻遺跡出土の北白川系・北白川系（模倣）などは、角閃石が主体でザクロ石を伴う胎土中重鉱物組成が報告されている（パリノ・サーヴェイ、2000）。今回の北白川下層式試料ではNos. 14, 16で、角閃石とザクロ石が検出されており、分析方法の違いを考慮すると類似性が認められる。

伊豆諸島新島本村田原遺跡や神津島上の山遺跡の北白川下層式土器は、花崗岩類とその構成鉱物から主として構成される（清水,1977；古城, 1978）。神奈川県坪内・宮ノ前遺跡の北白川下層Ⅱ c式土器は、花崗岩類が多く、砂岩・泥岩をわずかに伴う（松田, 2000）。今回の分析結果を含め北白川下層式土器は、花崗岩類を主体とし堆積岩を伴う組成が広域に共通する可能性があるかもしれない。

#### 平出3類A土器 (Nos. 17, 19)

含砂率は、No. 17が37%と高く、No. 19は22%とやや低い。岩石鉱物組成は、花崗岩類およびその構成鉱物が優勢である。No. 17では泥岩・砂岩、および片岩やマイロナイト様変成岩などがわずかに含まれる。重鉱物の含有率も比較的多く、重鉱物組成では黒雲母が卓越し、白雲母・角閃石などが検出される。第32表では、No. 17がG-m d群に、No. 19がG群に、第26図では両者ともクラスター4 aに含まれる。No. 17は、石原田北遺跡No. 7との類似性が高く、片岩は三波川帯の変成岩との関連性が推定され、マイロナイトは中央構造線の分布地域との関連性がそれぞれ想定されることから、長野県内などからの搬入土器の可能性が推定される。No. 19は、花崗岩類分布地域に原料産地が推定されるものの、No. 17ほど地域を限定できない。

#### 唐草文系土器 (No. 21)

No. 21は、含砂率が26%を示す。岩石鉱物組成は、花崗岩類が68%と優占し、変質火山岩類・安山岩・デイサイトなどをわずかに伴う。重鉱物含有率はやや少なく、黒雲母・角閃石・斜方輝石・不透明鉱物などから構成される。第32表ではG群に、第26図ではクラスター4 aに含まれる。主として花崗岩類地域に原料産地が推定される。産地候補としては、甲府盆地の釜無川・笛吹川流域の花崗岩分布地域や長野県内などの花崗岩類分布地域などが挙げられる。大和田遺跡出土の唐草文系土器 (No. 7) は、花崗岩類・変成岩・堆積岩などが多く含まれる特徴を示し、本遺跡No. 21の組成とは明らかに異なる。このことから八ヶ岳南麓に出土する唐草文系土器の産地は、多様である可能性が想定される。

#### 里木Ⅱ式 (No. 25)

No. 25は、含砂率が30%を示す。岩石鉱物組成は、泥岩・砂岩が多く、花崗岩類・変成岩をわずかに伴う。重鉱物組成は、黒雲母と白雲母とから構成される。第32表ではMD-s s群に、第26図ではクラスター1に含まれる。主として堆積岩地域に原料産地が推定される。

岡山県里木貝塚の一部と広島県大田貝塚の里木Ⅱ式には領家変成岩が含有され、里木貝塚出土の他の里木Ⅱ式には花崗岩類が含有される（清水, 1973）。大阪府小阪遺跡での里木Ⅱ式では、花崗岩類が多い（清水, 1992）。本遺跡

No. 25は、これらの胎土組成と異なる。数少ないこれらの胎土組成からみて、里木Ⅱ式土器は大局的には地域的地質を反映した胎土を示すものと推測される。八ヶ岳南麓地域の新道・藤内～曾利期においては在地的土器が作られ、搬入土器もあまり遠方ではない周辺地域に産地が推定される傾向がある。これらの搬入土器は、花崗岩類あるいはデイサイトなどを含むものがほとんどで、堆積岩が卓越する場合は極めて少ない。堆積岩で特徴づけられるNo. 25は、より遠方の地域に産地をもつ可能性が高い。

## おわりに

今回の分析では異系統の土器を分析したが、No. 5の中越式土器を除く全ての土器が八ヶ岳山麓地域とは異なる地質原料を用いていることが明らかになった。おそらく多くの土器は搬入されたものと考えられる。中越式土器については、八ヶ岳西麓地域周辺において下諏訪町武居遺跡・富士見町坂平遺跡・諏訪市十二ノ后茅野市・原村阿久遺跡遺跡などで多くの住居跡が出土していることから、八ヶ岳火山に起源する堆積物を土器原料として利用した可能性は高いと考えられる。

八ヶ岳南麓における従来の胎土分析結果では、新道～藤内式では在地的土器が卓越する。八ヶ岳周辺地域の安山岩質の堆積物を多量に利用した例としては、石原田北遺跡No. 5が中間的組成ながら最も古い事例であった（河西、2001）。今回中越式No. 5が在地的土器であることが判明したことで、安山岩質の堆積物利用が前期初頭までさかのぼる可能性が示された。ただし安山岩質堆積物の利用はその後継続せず、前期後半の諸磯式期の八ヶ岳南麓では、八ヶ岳周辺堆積物の利用が極めて低調であったと考えられる。これは、土器作りのシステムが一様でないことを示していると思われる。データの蓄積を待って再検討したい。

註2 ここではデイサイト～流紋岩質の珪質火山岩の総称としてデイサイトを使用している。

## 文献

- 河西 学 1990「大和田第3遺跡出土縄文土器の胎土分析」『大和田第3遺跡』、大泉村埋蔵文化財調査報告書、8、19-29。
- 河西 学 2001「石原田北遺跡出土縄文土器の胎土分析」『石原田北遺跡Jマート地点』、石原田北遺跡発掘調査団、302-311。
- 河西 学 2003「長坂町酒呑場遺跡出土縄文土器（諸磯b式）の胎土分析」『酒呑場遺跡（第4次）』、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書、第209集、103-118。
- 古城 泰 1978「伊豆諸島出土土器の製作地について」『くろしお』3、1-5。
- 松田光太郎 2000「坪ノ内・宮ノ前遺跡（No. 17）出土縄文土器の胎土分析」『坪ノ内・宮ノ前遺跡（No. 16・17）』、かながわ考古学財団調査報告、77、491-501。
- 水沢 教子 1994「塚田遺跡出土土器の胎土分析について」『塚田遺跡』、御代田町教育委員会、292-310。
- パリノ・サーヴェイ 2000「縄文土器（前期後半）の胎土分析」『諏訪尻遺跡』、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書、第180集、111-115。
- パリノ・サーヴェイ 2002「分析の結果」『川合遺跡』、木曾福島町教育委員会、55-59。
- 清水 芳裕 1973「縄文時代の集団領域について—土器の顕微鏡観察から—」『考古学研究』19（4）、90-102。
- 清水 芳裕 1977「岩石学的方法による土器の産地同定—伊豆諸島の縄文・弥生土器—」『考古学と自然科学』10、45-51。
- 清水 芳裕 1992「小阪遺跡縄文土器の胎土」『小阪遺跡本報告書』595-602。

## 第2節 酒呑場遺跡の使用痕分析

(株) アルカ 高橋 哲

### 資料の選択

チャート・黒曜石製の石匙82点、並びに粗製石匙147点の計229点を観察した。

### 観察方法

キーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ（VH-7000）による低倍率ズーム（VHZ05）と高倍率ズームレンズ（VHZ450）を用いて高倍率の使用痕光沢の観察をおこなった。観察倍率は、450倍～1000倍（倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる）である。観察面は、中性洗剤で洗浄をおこない、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕光沢分類は梶原・阿子島の分類基準とし（梶原・阿子島1981）、微小剥離痕の名称は、阿子島（阿子島1981）を用いた。チャートと黒曜石の光沢タイプは御堂島に準じた（御堂島1986・88）。アルカでも同実験を行い同様な結果が得られている（高橋2003）。

属性表の中に、「なし」「不明」の項目がある。「なし」は何も確認できなかったことを指し、「不明」は痕跡が残されているが、不明瞭であるため、光沢タイプなどを決定することができない項目を示している。

### 分析結果

229点中27点の石匙に使用痕が確認できた。粗製石匙147点は、表面の風化が激しく使用痕は確認できなかった。

#### 光沢

多くは、E、I、CやD1タイプ光沢が確認できた。特にEタイプ光沢やIタイプ光沢が多い。これらの光沢は骨・角・皮・肉などといった動物資源関係で生じる光沢であり、Aタイプ光沢やBタイプ光沢といった植物質被加工物で生じる光沢は確認できなかった。

#### 線状痕

石器の操作方法を推定する重要な属性をもつ線状痕に関しては、刃部に対して平行方向に走るものが14点確認でき、直交方向が5点に確認できた。基本的にはカッティングに使用されたと考えられる。直交方向の線状痕がみられた光沢は、D1タイプとEタイプ光沢である。これらの石匙は刃部が急角度に加工されており、スクレイピングに適した刃部に加工されたと考えられる。

### まとめ

酒呑場遺跡の石匙は、使用痕分析の結果、動物の解体・処理に利用されたことが明らかになった。

粗製石匙に関しては、表面風化が激しく光沢や線状痕は確認できなかった。今後この風化の激しい資料をどのように石器組成全体の中で、位置づけていくかが課題である。

### ※観察石器9点の所見

観察した石匙の中から9点資料化したので、それら石匙について下に記述する。

他の石器については、分析資料属性表（第33表）のデータを参照されたい。

#### 図版編第159図113（第27図）

[形態] 黒曜石製の縦形石匙である。両面加工で、紡錘形の平面形態である。

[刃部] 刃部先端には肉眼でも強度の摩耗がみられた。顕微鏡では、この部分は、黒曜石本来の平滑な面ではなく、

砕けたような状態を呈している（写真6）。

[光沢] 光沢は刃部の左右両辺に確認できた。鈍く表面が荒れており、Eタイプ光沢と考えられる(写真1～4)。

[線状痕] 縁辺に対して平行方向に走る線状痕がみられた。

[摘み部] 摘み部はもとの黒曜石の表面をよくのこしており(写真5)、何かに接触したような痕跡はみられなかった。

[推定される作業] 以上の特徴から、肉・皮などの被加工物に対して、カッティング操作が想定できる。

#### 図版編第157図105 (第28図上)

[形態] 黒曜石製の横形石匙である。

[刃部] 直線状の形態で、低刃角の片面加工である。

[光沢] 光沢は、非常に弱く、元の黒曜石の稜上部分に摩耗とともにかすかにみられる程度であることから、Iタイプ光沢と考えられる(写真1～4)。

[線状痕] 縁辺に対して平行方向に走る線状痕がみられた。

[摘み] 摩滅や光沢などは確認できなかった。

[推定される作業] 皮や肉などの被加工物をカッティングした操作が想定される。

#### 図版編第157図106 (第28図下)

[形態] 黒曜石製の横形石匙である。

[刃部] 外湾した形態で、低刃角の片面加工である。

[光沢] 光沢は、非常に弱く、縁辺の狭い範囲に部分的に発達することから、Iタイプ光沢と考えられる(写真2)。

[線状痕] 縁辺に対して平行方向に走る線状痕がみられた(写真1, 3)。

[摘み部] 摘み部はもとの黒曜石の表面をよくのこしており、何かに接触したような痕跡はみられなかった。

[推定される作業] 皮や肉などの被加工物をカッティングした操作が想定される。

#### 図版編第158図109 (第29図上)

[形態] チャート製の縦形石匙である。

[刃部] 片面加工で直線形態の急角度刃部である。使用痕は、右辺に確認できた。

[表面状態] 良好な表面状態である(写真6)。

[光沢] 光沢は、明るく滑らかであるが、刃部縁辺に限定されて広がる。D1タイプ光沢と考えられる(写真1, 3, 4)。部分的に発達段階のDタイプ光沢がみられた(写真2)。背面側には部分的に稜上にも同タイプの光沢が確認できた(写真5)。

[線状痕] 縁辺に対して直交方向に走る線状痕がみられた。

[摘み部] 軽微の摩耗がみられたが、光沢などはみられなかった。

[推定される作業] 骨・角に対してスクレイピングやホイットリングの操作が想定される。

#### 図版編第159図112 (第29図下)

[形態] チャート製の縦形石匙である。

[刃部] 片面加工で、直線形態の急角度の刃部である。

[光沢] 光沢は、鈍く、荒れた表面である(写真1～2)。光沢分類に類似したものはなく、不明光沢である。

[線状痕] 縁辺に対して直交方向に走る線状痕がみられた。

[摘み部] 軽微の摩耗がみられたが、光沢などはみられなかった。

[推定される作業] 以上の特徴から、被加工物は不明であるが、スクレイピング操作が想定できる。

#### 図版編第157図108 (第30図上)

[形態] 頁岩製の横形石匙である。

[刃部] 直線状の形態で、急刃角である。

[表面状態] 刃部以外の部分は良好な表面である(写真1, 3)。

[光沢] 鈍く荒れた表面状態である。土に対して作業もしくは、作業中に土が混入して生じるXタイプ光沢に類似し

ている（写真2）。

[線状痕] 不明である。

[摘み部] 軽微の摩耗がみられたが、光沢などはみられなかった。

[推定される作業] 光沢から土に対して使用した可能性もあるが、石器自体が小形であるため、土掘りの機能は考えにくく、作業中に土などが混入した可能性がある。そのため被加工物は不明である。

#### 図版編第156図103（第30図下）

[形態] チャート製の横形石匙である。

[刃部] 外湾した形態で、急刃角の片面加工である。

[光沢] 光沢は、末端部に確認できた。鈍く表面が荒れており、E2タイプ光沢に類似している（写真1～3）。しかし典型的なE2タイプ光沢と比較すると明るく、E2タイプ光沢特有の鈍さはない。

[線状痕] 縁辺に対して直交方向に走る線状痕がみられた。

[摘み部] 軽微の摩耗がみられたが、光沢などはみられなかった。

[推定される作業] 皮や肉などの被加工物をスクレイピングした操作が想定される。

#### 図版編第157図107（第31図上）

[形態] チャート製の横形石匙である。

[刃部] 外湾した形態で、低刃角の片面加工である。

[光沢] 光沢は、鈍く、荒れた表面である（写真1, 2）。光沢分類に類似したものはなく、不明光沢である。

[線状痕] 縁辺に対して平行方向に走る線状痕がみられた。

[摘み部] 軽微の摩耗がみられたが、光沢などはみられなかった。

[推定される作業] 被加工物は不明であるが、カッティングした操作が想定される。

#### 図版編第156図102（第31図下）

[形態] チャート製の横形石匙である。

[刃部] 直線状の形態で、急刃角の片面加工である。

[表面状態] 良好な表面状態である（写真4）。

[光沢] やや明るい、網目状に広い範囲に広がる。Cタイプ光沢と考えられる（写真1～3）。

[線状痕] 縁辺に対して平行方向に走る線状痕がみられた。

[摘み部] 軽微の摩耗がみられたが、光沢などはみられなかった。

[推定される作業] 骨・角などに対してカッティングが想定される。

#### 参考文献

- 阿子 島香 1981 「マイクロフレイキングの実験的研究（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その1）」『考古学雑誌』66-4 pp. 1-27
- 1989 『石器の使用痕』考古学ライブラリー56 ニュー・サイエンス社
- 梶原 洋・阿子島 香 1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究—ポリッシュを中心とした機能推定の試み—（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その2）」『考古学雑誌』67-1 pp. 1-35
- 高橋 哲 2003 「使用痕実験報告と使用痕研究の課題」『アルカ研究論集』1 pp. 54-59
- 御堂島 正 1986 「黒曜石製石器の使用痕—ポリッシュに関する実験的研究—」『神奈川考古』22 pp. 66-98
- 1988 「使用痕と石材—チャート、サヌカイト、凝灰岩に形成されるポリッシュ—」『考古学雑誌』74-2 pp. 1-28

第33表 分析資料属性表

図版編図中番号	器種	石材	部位	光沢	線状痕	摩耗	備考	図版番号
第158図109	縦形石匙	ch	右辺	D1	直交	中程度		第29図上
第155図100	横形石匙	ch	末端	E2	平行	中程度		
なし	縦形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	縦形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
なし	横形石匙	ob	末端	なし	平行	軽微		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ch	末端	不明	なし	なし		
第156図102	横形石匙	ch	末端	C	平行	中程度		第31図下
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
なし	石匙	ob	適用外	なし	なし	なし		
なし	石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
第158図110	横形石匙	ch	末端	なし	直交	軽微		
なし	横形石匙	ob	適用外	なし	なし	なし		
なし	縦形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
なし	横形石匙	ch	末端	不明	平行	軽微		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	縦形石匙	ob	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ob	末端	なし	平行	軽微		
第158図111	縦形石匙	ch	末端	E2	直交	中程度		
なし	縦形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
第159図112	縦形石匙	ch	右辺	不明	直交	軽微		第29図下
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
第159図113	縦形石匙	ob	両辺	E	平行	重度	刃部先端に肉眼で摩耗。黒曜石は神津島産	第27図
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
なし	縦形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ob	末端	E	平行	軽微		
なし	石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ob	末端	I	平行	軽微		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
なし	横形石匙	ob	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
なし	石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ob	適用外	なし	なし	なし		
なし	石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	縦形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ch	末端	不明	なし	なし		
なし	横形石匙	凝灰岩	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
なし	横形石匙	ch	末端	F	なし	軽微		
なし	横形石匙	ch	末端	F	なし	軽微		
なし	縦形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
なし	横形石匙	ch	末端	不明	不明	軽微		
なし	石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	刃部欠損	
なし	横形石匙	ch	末端	なし	なし	軽微		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
第156図103	横形石匙	ch	末端	E2	直交	強度		第30図下
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
第156図104	横形石匙	ch	末端	E2	平行	軽微		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
なし	横形石匙	ob	末端	I	平行	軽微		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
第157図105	横形石匙	ob	末端	I	平行	軽微		第28図上
なし	横形石匙	ob	末端	なし	平行	軽微		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ch	末端	なし	なし	軽微		
なし	横形石匙	ob	末端	不明	不明	軽微		
第157図106	横形石匙	ob	末端	I	平行	軽微		第28図下
なし	横形石匙	ob	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
なし	横形石匙	ob	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
第157図107	横形石匙	ch	末端	不明	平行	中程度		第31図上
なし	石匙	ob	適用外	なし	なし	なし	刃部欠損	
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし		
なし	石匙	ob	適用外	なし	なし	なし	刃部欠損	
第158図108	横形石匙	ch	末端	X?	不明	中程度		第30図上
第159図114	横形石匙	ob	末端	I	平行	軽微		
なし	石匙	ob	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ch	適用外	なし	なし	なし	石器表面全体が不明光沢で覆われている	
なし	石匙	ob	適用外	なし	なし	なし		
なし	横形石匙	ob	適用外	なし	なし	なし		
なし	石匙	ob	適用外	なし	なし	なし		

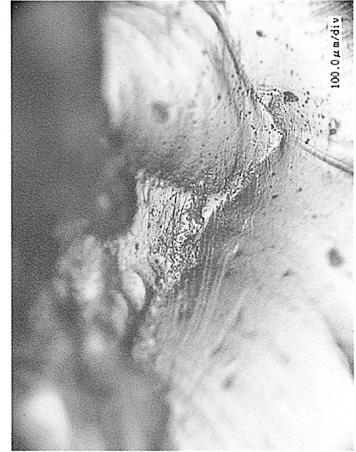




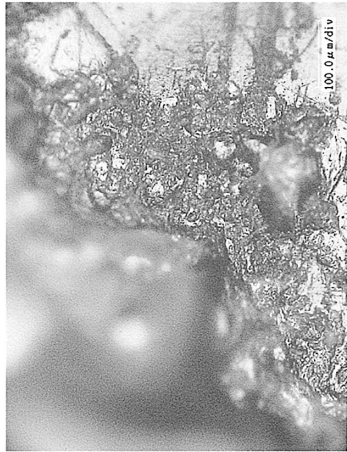
1 Eタイプ光沢



2 Eタイプ光沢



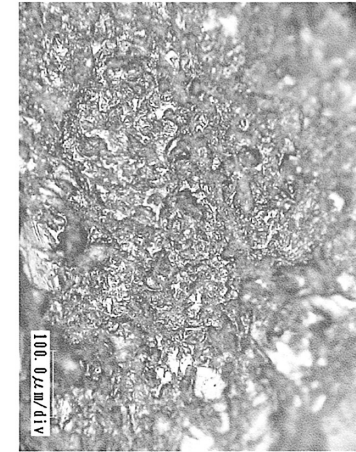
3 Eタイプ光沢



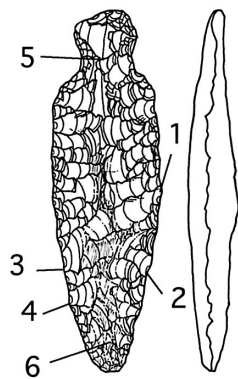
4 Eタイプ光沢



5 摘み部の状況

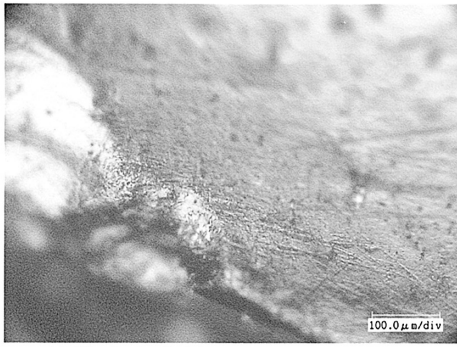


6 摩耗部の状況

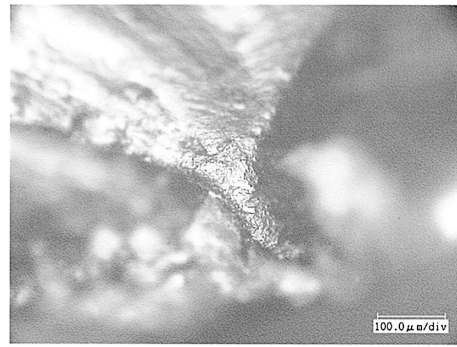


S=2:3

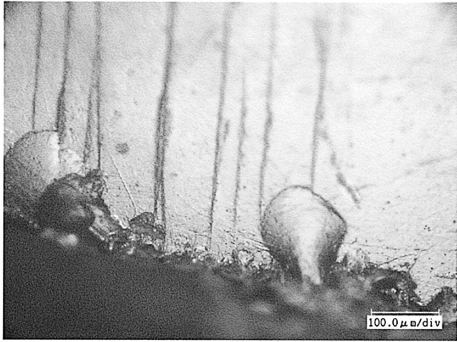
第27図 縦形石匙の使用痕



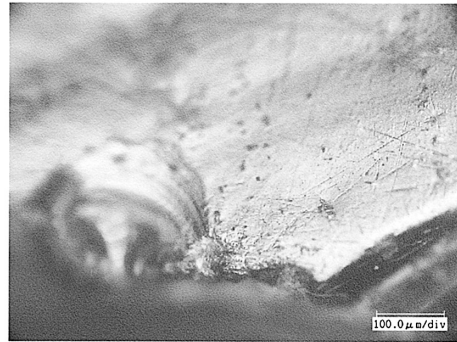
1 線状痕と摩耗



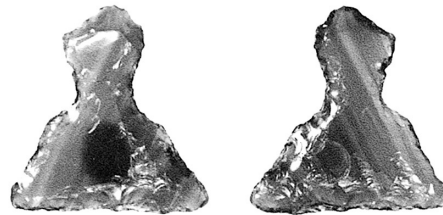
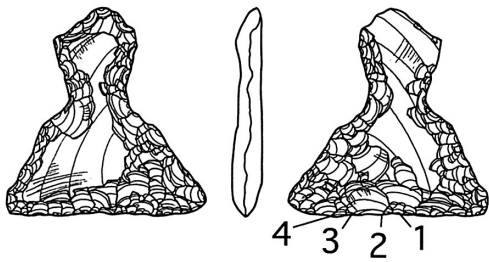
2 線状痕と摩耗



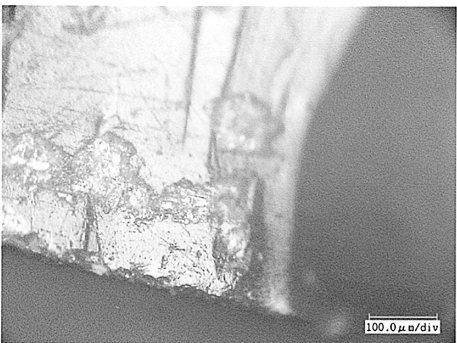
3 線状痕と摩耗



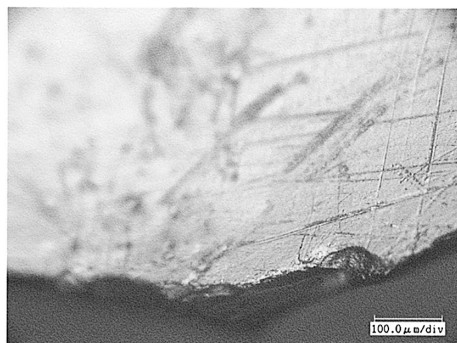
4 線状痕と摩耗



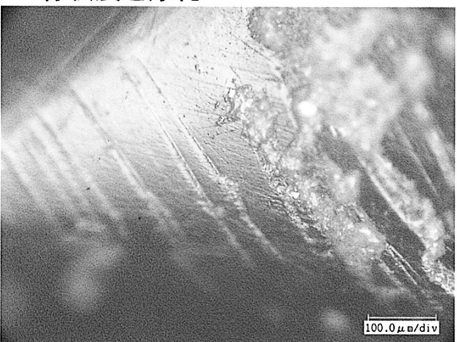
S=2:3



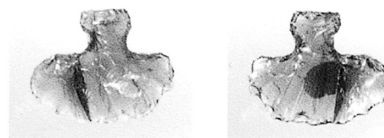
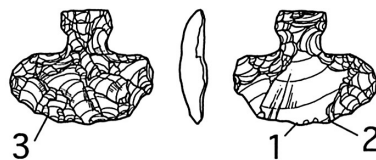
1 線状痕と摩耗



2 Iタイプ光沢と線状痕



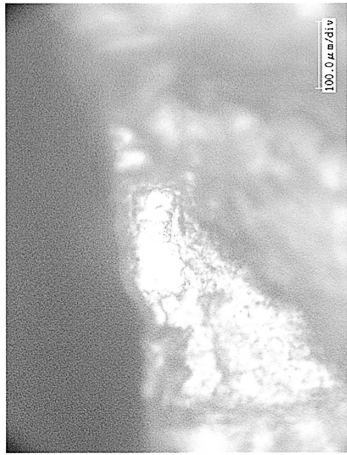
3 正面剥離内の線状痕



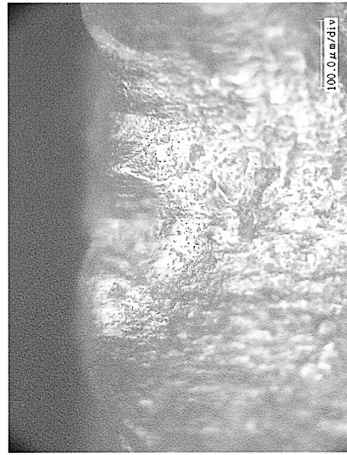
S=2:3

第28図 横形石匙の使用痕

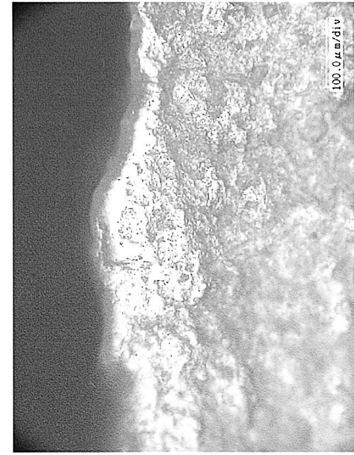
酒呑場遺跡の使用痕



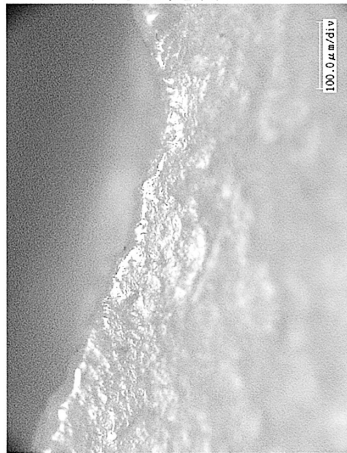
1 D1タイプ光沢



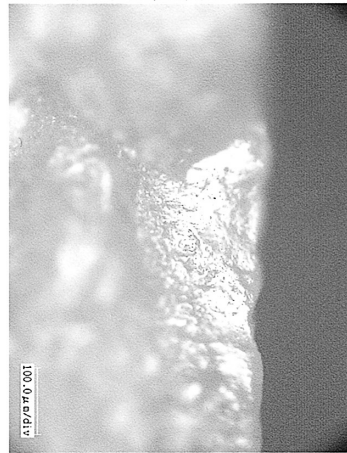
2 Dタイプ光沢



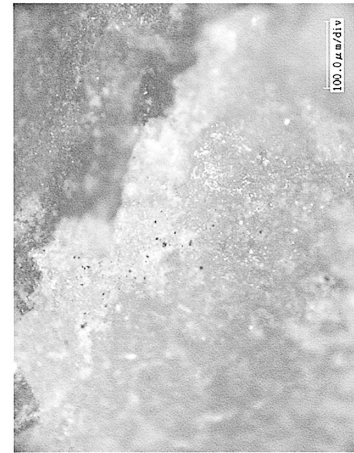
3 D1タイプ光沢



4 D1タイプ光沢

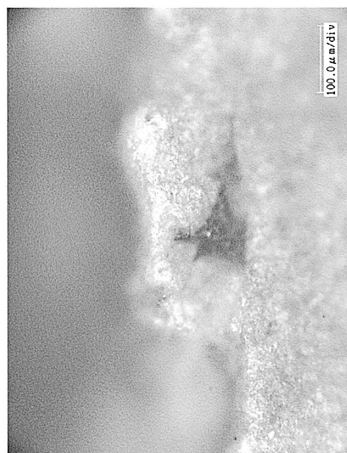
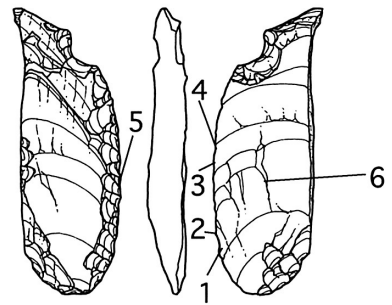


5 D1タイプ光沢

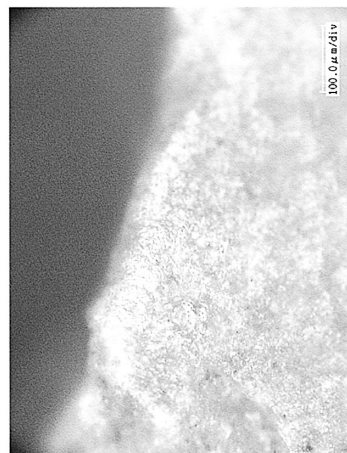


6 石器の表面

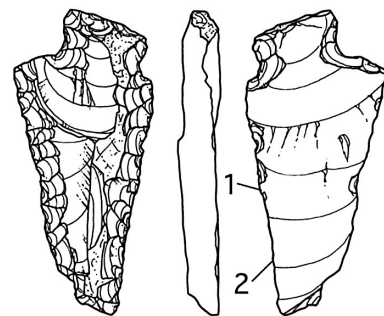
S=2:3



1 不明光沢(Fタイプ?)

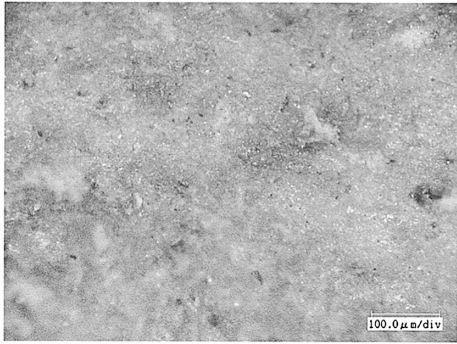


2 不明光沢(Fタイプ?)

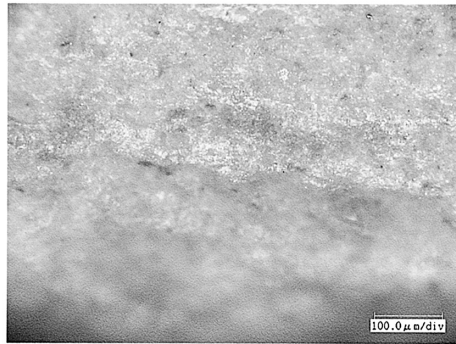


S=2:3

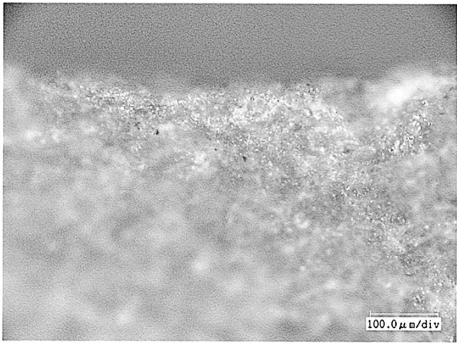
第29図 縦形石匙の使用痕



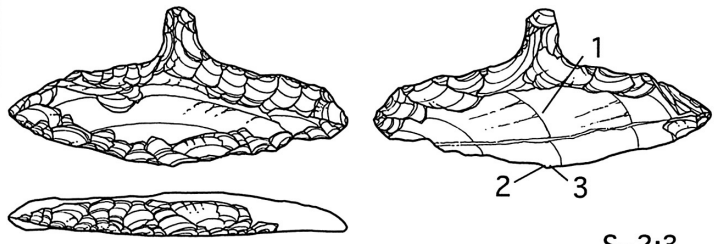
1 石器の表面



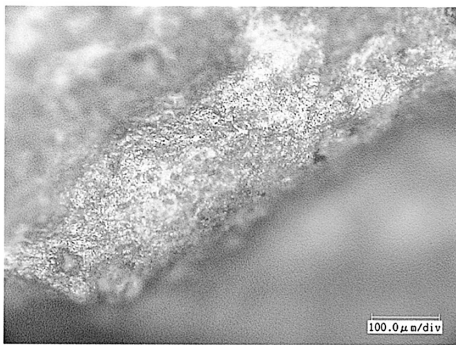
2 不明光沢



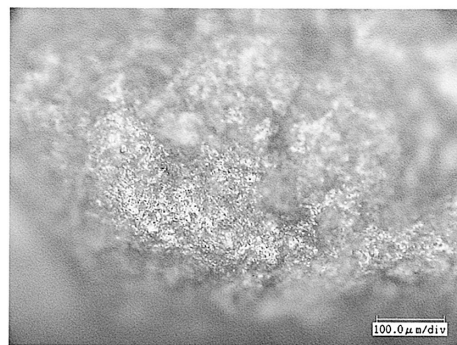
3 未変化の縁辺



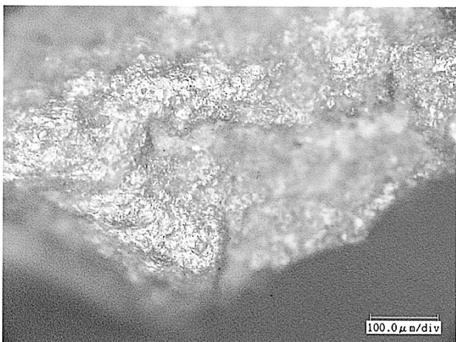
S=2:3



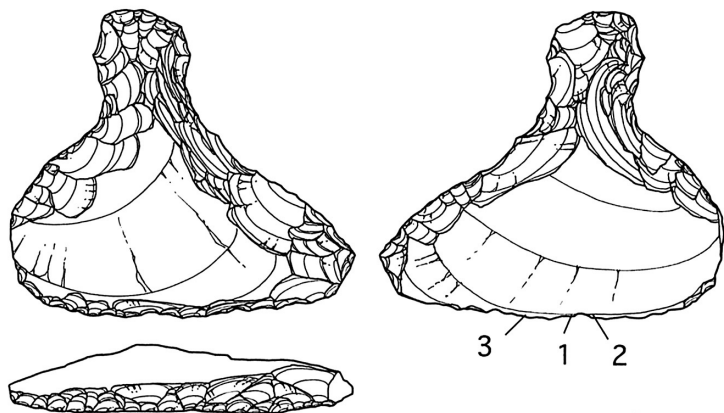
1 E2タイプ光沢



2 E2タイプ光沢

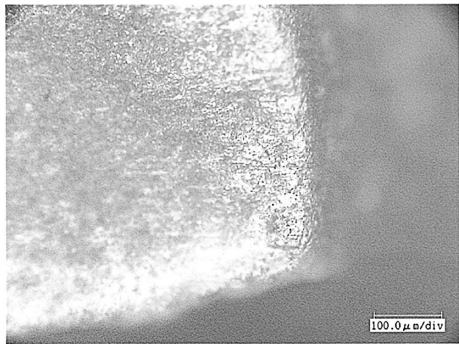


3 E2タイプ光沢

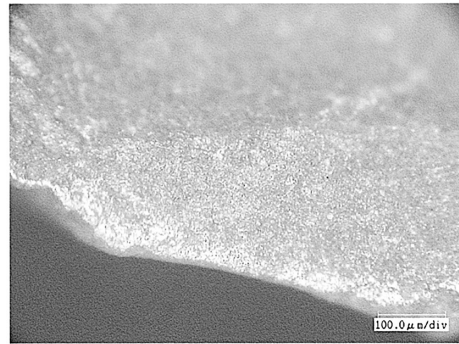


S=2:3

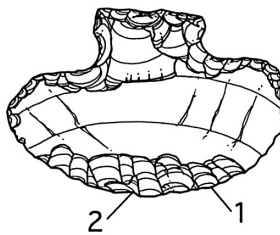
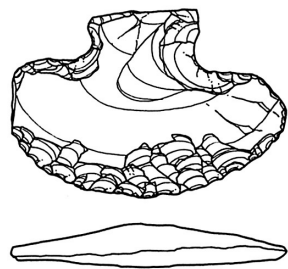
第30図 横形石匙の使用痕



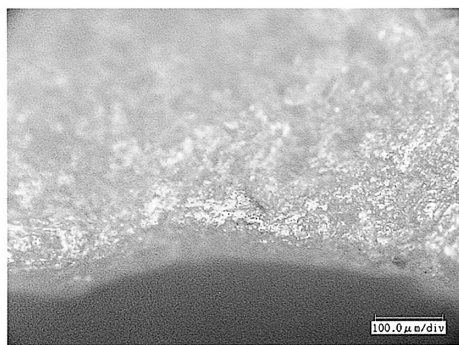
1 不明光沢(E2タイプ光沢?)



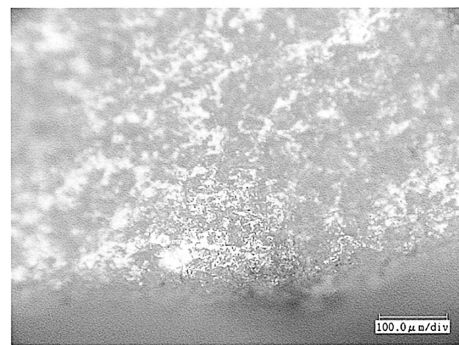
2 不明光沢(E2タイプ光沢?)



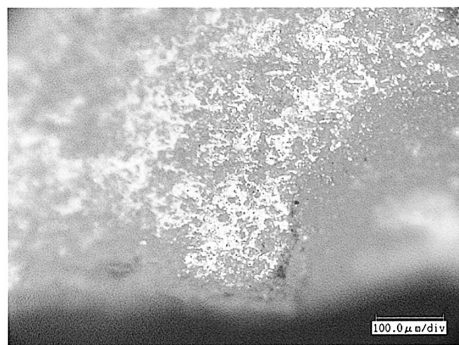
S=2:3



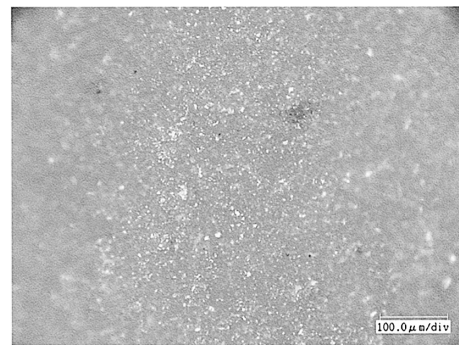
1 Cタイプ光沢



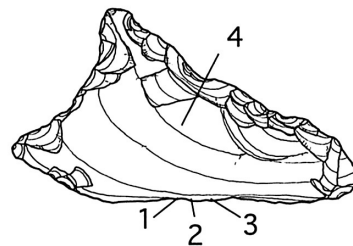
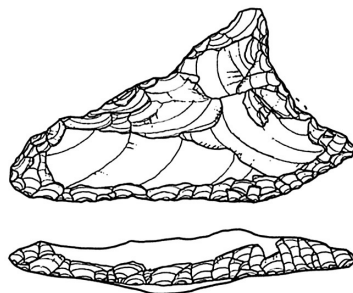
2 Cタイプ光沢



3 Cタイプ光沢



4 石器の表面



S=2:3

第31図 縦形石匙の使用痕

### 第3節 山梨県長坂町酒呑場遺跡出土黒曜石産地推定結果

沼津工業高等専門学校 望 月 明 彦

分析法	エネルギー分散蛍光X線分析法 (EDX)
分析装置	セイコーインスツルメンツ卓上型蛍光X線分析計 SEA-2110L
分析条件	管電圧 50kV 管電流・自動設定 測定時間 240sec 雰囲気・真空 照射径 10mm 検出器 Si (Li) 半導体検出器
測定元素	Al (アルミニウム)、Si (ケイ素)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Mn (マンガン)、Fe (鉄)、Rb (ルビジウム)、Sr (ストロンチウム)、Y (イットリウム)、Zr (ジルコニウム)
試料の洗浄	5分間 (汚れがひどい場合は15分間) 超音波洗浄器で洗浄。 さらに汚れを拭き取ってから測定。
産地推定法	得られた蛍光X線スペクトル強度を元素記号で表すとする。 二つの方法とも以下の指標を用いる。
指標	Sum=Rb+Sr+Y+Zr とする。 Rb分率 = Rb/Sum Sr分率 = Sr/Sum Zr分率 = Zr/Sum Mn*100/Fe log (Fe/K)

産地のシートに上げた黒曜石産地から、産地原石を採集し、測定する。

測定結果から上記の指標を算出する。

以上から、産地原石に関するデータベースを作成する。

下記の二つの方法で産地推定を行う。

#### ①判別図法

用いる指標 図1 横軸：Rb分率、縦軸：Mn/Fe

図2 横軸：Sr分率、縦軸：log (Fe/K)

推定方法 遺跡出土試料を蛍光X線分析し、指標を計算。

指標を図にプロットする。

重なった原石産地を推定結果とする。

#### ②判別分析

用いる指標 算出された指標全て。

推定方法 各産地との類似度を距離で算出。

判別図法では遺跡出土試料と重なっている産地を推定結果とする。

この産地は試料と2次元的に最も距離が近い。

判別分析ではこの距離を数学的にn次元で計算する。

試料と最も距離 (マハラノビス距離) が近い産地を推定結果とする。

この距離から、各産地に属する確率を計算する。

第34表 香榎遺跡出土黒曜石産地推定結果

判別図法・判別分析からの最終推定結果

判別図法による推定結果と判別分析による推定結果

研究室 年間通番	分析番号	遺物番号	推定産地
MKO2-1277	SNB-1	12	諏訪星ヶ台群
MKO2-1277	SNB-2	36	諏訪星ヶ台群
MKO2-1277	SNB-3	41	諏訪星ヶ台群
MKO2-1277	SNB-4	44	諏訪星ヶ台群
MKO2-1277	SNB-5	50	和田鷹山群
MKO2-1278	SNB-6	65	諏訪星ヶ台群
MKO2-1278	SNB-7	74	諏訪星ヶ台群
MKO2-1278	SNB-8	76	諏訪星ヶ台群
MKO2-1278	SNB-9	77	諏訪星ヶ台群
MKO2-1278	SNB-10	79	諏訪星ヶ台群
MKO2-1278	SNB-11	81	和田鷹山群
MKO2-1278	SNB-12	88	諏訪星ヶ台群
MKO2-1278	SNB-13	90	諏訪星ヶ台群
MKO2-1278	SNB-14	94	諏訪星ヶ台群
MKO2-1278	SNB-15	95	諏訪星ヶ台群
MKO2-1279	SNB-16	97	諏訪星ヶ台群
MKO2-1279	SNB-17	99	諏訪星ヶ台群
MKO2-1279	SNB-18	100	諏訪星ヶ台群
MKO2-1279	SNB-19	102	諏訪星ヶ台群
MKO2-1279	SNB-20	105	和田鷹山群
MKO2-1279	SNB-21	106	諏訪星ヶ台群
MKO2-1279	SNB-22	108	和田土屋橋南群
MKO2-1279	SNB-23	137	諏訪星ヶ台群
MKO2-1279	SNB-24	138	和田牧ヶ沢群
MKO2-1279	SNB-25	141	諏訪星ヶ台群
MKO2-1280	SNB-26	151	諏訪星ヶ台群
MKO2-1280	SNB-27	152	諏訪星ヶ台群
MKO2-1280	SNB-28	156	諏訪星ヶ台群
MKO2-1280	SNB-29	159	諏訪星ヶ台群
MKO2-1280	SNB-30	163	諏訪星ヶ台群
MKO2-1280	SNB-31	172	諏訪星ヶ台群
MKO2-1280	SNB-32	175	諏訪星ヶ台群
MKO2-1280	SNB-33	180	諏訪星ヶ台群
MKO2-1280	SNB-34	182	諏訪星ヶ台群
MKO2-1280	SNB-35	189	諏訪星ヶ台群
MKO2-1281	SNB-36	203	諏訪星ヶ台群
MKO2-1281	SNB-37	204	和田鷹山群
MKO2-1281	SNB-38	205	諏訪星ヶ台群
MKO2-1281	SNB-39	207	諏訪星ヶ台群
MKO2-1281	SNB-40	233	諏訪星ヶ台群
MKO2-1281	SNB-41	235	和田鷹山群
MKO2-1281	SNB-42	236	諏訪星ヶ台群
MKO2-1281	SNB-43	245	諏訪星ヶ台群
MKO2-1281	SNB-44	248	諏訪星ヶ台群
MKO2-1281	SNB-45	253	諏訪星ヶ台群
MKO2-1282	SNB-46	257	諏訪星ヶ台群
MKO2-1282	SNB-47	268	和田小深沢群
MKO2-1282	SNB-48	1	諏訪星ヶ台群
MKO2-1282	SNB-49	2	和田小深沢群
MKO2-1282	SNB-50	5	和田小深沢群
MKO2-1282	SNB-51	7	諏訪星ヶ台群
MKO2-1282	SNB-52	9	諏訪星ヶ台群
MKO2-1282	SNB-53	10	諏訪星ヶ台群
MKO2-1282	SNB-54	11	諏訪星ヶ台群
MKO2-1282	SNB-55	12	諏訪星ヶ台群
MKO2-1283	SNB-56	13	和田鷹山群
MKO2-1283	SNB-57	5	諏訪星ヶ台群
MKO2-1283	SNB-58	9	諏訪星ヶ台群
MKO2-1283	SNB-59	11	諏訪星ヶ台群
MKO2-1283	SNB-60	17	諏訪星ヶ台群
MKO2-1283	SNB-61	18	諏訪星ヶ台群

判別図 判別群	判別分析						図番号	図中 通番号	器種
	第1候補産地			第2候補産地					
	判別群	距離	確率	判別群	距離	確率			
SWHD	SWHD	3.83	1	SBIY	85.3	0	第142図	1	刃器
SWHD	SWHD	6.92	1	SBIY	70.83	0	第142図	2	刃器
SWHD	SWHD	18.58	1	SBIY	102.55	0	第142図	3	刃器
SWHD	SWHD	4.15	1	SBIY	105.63	0	第142図	4	刃器
WDTY	WDTY	1.41	1	WDHY	20.09	0	第142図	5	刃器
SWHD	SWHD	9.72	1	SBIY	118.97	0	第142図	6	刃器
SWHD	SWHD	6.67	1	SBIY	119.03	0	第142図	7	刃器
SWHD	SWHD	7.81	1	SBIY	101.24	0	第142図	8	刃器
SWHD	SWHD	7.66	1	SBIY	59.7	0	第143図	9	刃器
SWHD	SWHD	8.78	1	SBIY	59.42	0	第143図	10	刃器
WDTY	WDTY	2.86	1	WDKB	31.44	0	第143図	11	石匙
SWHD	SWHD	12.43	1	SBIY	131.49	0	第143図	12	刃器
SWHD	SWHD	4.32	1	SBIY	78.84	0	第143図	13	刃器
SWHD	SWHD	2.59	1	SBIY	77.18	0	第143図	14	刃器
SWHD	SWHD	8.12	1	SBIY	97.54	0	第143図	15	刃器
SWHD	SWHD	16.96	1	SBIY	80.82	0	第143図	17	刃器
SWHD	SWHD	13.49	1	SBIY	54.79	0	第143図	18	刃器
SWHD	SWHD	9.06	1	SBIY	57.48	0	第144図	19	刃器
SWHD	SWHD	8.12	1	SBIY	101.28	0	第144図	20	刃器
WDTY	WDTY	6.81	1	WDHY	32.67	0	第144図	21	刃器
SWHD	SWHD	12.12	1	WDTN	71.99	0	第144図	22	石錐
WDTM	WDTM	2.17	1	WDTN	49.37	0	第144図	23	刃器
SWHD	SWHD	10.54	1	SBIY	79.08	0	第144図	24	刃器
WOMS	WOMS	5.91	0.9966	WOBD	17.92	0.0034	第144図	25	刃器
SWHD	SWHD	3.73	1	SBIY	73.38	0	第144図	26	刃器
SWHD	SWHD	11.55	1	SBIY	110.46	0	第144図	27	刃器
SWHD	SWHD	2.91	1	SBIY	112.17	0	第144図	28	刃器
SWHD	SWHD	4.24	1	WDTN	86.52	0	第145図	29	刃器
SWHD	SWHD	2.84	1	SBIY	100.81	0	第145図	30	刃器
SWHD	SWHD	2.19	1	SBIY	96.42	0	第145図	31	刃器
SWHD	SWHD	5.64	1	SBIY	87.43	0	第145図	34	刃器
SWHD	SWHD	12.48	1	SBIY	60.35	0	第145図	35	刃器
SWHD	SWHD	11.53	1	SBIY	85.25	0	第145図	36	刃器
SWHD	SWHD	5.78	1	WDTN	111.44	0	第146図	37	刃器
SWHD	SWHD	4.85	1	WDTN	117.32	0	第146図	38	刃器
SWHD	SWHD	2.96	1	SBIY	77.97	0	第146図	39	刃器
WDTY	WDTY	8.29	1	WDHY	32.03	0	第146図	40	刃器
SWHD	SWHD	12.12	1	WDTN	70.99	0	第146図	41	刃器
SWHD	SWHD	5.04	1	SBIY	70.27	0	第146図	42	刃器
SWHD	SWHD	17.93	1	WDTN	79.74	0	第146図	43	刃器
WDTY	WDTY	2.44	1	WDKB	29.23	0	第146図	44	刃器
SWHD	SWHD	4.7	1	SBIY	111.04	0	第147図	45	刃器
SWHD	SWHD	3.57	1	SBIY	74.76	0	第147図	46	刃器
SWHD	SWHD	2.32	1	SBIY	90.99	0	第147図	47	刃器
SWHD	SWHD	9.34	1	SBIY	128.93	0	第147図	48	刃器
SWHD	SWHD	1.79	1	SBIY	94.42	0	第147図	49	刃器
WDKB	WDKB	8.63	0.9984	WDTY	22.13	0.0016	第147図	50	刃器
SWHD	SWHD	6.14	1	SBIY	111.38	0	第147図	51	搔器
WDKB	WDKB	15.88	0.9999	WDTK	35.73	0	第147図	52	搔器
WDKB	WDKB	23.43	0.9467	WDHT	27.26	0.0527	第147図	53	搔器
SWHD	SWHD	10.5	1	SBIY	106.64	0	第147図	54	搔器
SWHD	SWHD	3.8	1	SBIY	90.77	0	第148図	56	刃器
SWHD	SWHD	6.52	1	SBIY	53.15	0	第148図	57	搔器
SWHD	SWHD	10.51	1	SBIY	71.28	0	第148図	58	搔器
SWHD	SWHD	22.41	1	SBIY	150.76	0	第148図	59	搔器
WDTY	WDTY	10.17	1	WDHY	27.75	0	第148図	60	搔器
SWHD	SWHD	9.91	1	SBIY	77.16	0	第148図	61	削器
SWHD	SWHD	5.79	1	WDTN	98.34	0	第148図	62	削器
SWHD	SWHD	13.87	1	WDTM	90.2	0	第148図	63	石匙
SWHD	SWHD	5.5	1	SBIY	103.02	0	第148図	65	刃器
SWHD	SWHD	4.39	1	WDTN	122.04	0	第148図	66	削器

MKO2-1283	SNB-62	22	和田鷹山群
MKO2-1283	SNB-63	23	諏訪星ヶ台群
MKO2-1283	SNB-64	24	諏訪星ヶ台群
MKO2-1283	SNB-65	27	諏訪星ヶ台群
MKO2-1284	SNB-66	28	和田鷹山群
MKO2-1284	SNB-67	29	諏訪星ヶ台群
MKO2-1284	SNB-68	32	諏訪星ヶ台群
MKO2-1284	SNB-69	33	諏訪星ヶ台群
MKO2-1284	SNB-70	34	蓼科冷山群
MKO2-1284	SNB-71	37	諏訪星ヶ台群
MKO2-1284	SNB-72	38	諏訪星ヶ台群
MKO2-1284	SNB-73	39	和田鷹山群
MKO2-1284	SNB-74	6	和田鷹山群
MKO2-1284	SNB-75	9	和田鷹山群
MKO2-1285	SNB-76	28	諏訪星ヶ台群
MKO2-1285	SNB-77	29	諏訪星ヶ台群
MKO2-1285	SNB-78	36	和田小深沢群
MKO2-1285	SNB-79	40	諏訪星ヶ台群
MKO2-1285	SNB-80	53	諏訪星ヶ台群
MKO2-1285	SNB-81	59	諏訪星ヶ台群
MKO2-1285	SNB-82	68	諏訪星ヶ台群
MKO2-1285	SNB-83	69	諏訪星ヶ台群
MKO2-1285	SNB-84	72	諏訪星ヶ台群
MKO2-1285	SNB-85	73	諏訪星ヶ台群
MKO2-1286	SNB-86	75	諏訪星ヶ台群
MKO2-1286	SNB-87	77	諏訪星ヶ台群
MKO2-1286	SNB-88	83	和田鷹山群
MKO2-1286	SNB-89	99	諏訪星ヶ台群
MKO2-1286	SNB-90	112	諏訪星ヶ台群
MKO2-1286	SNB-91	38	神津島恩馳島群
MKO2-1286	SNB-92	143	和田鷹山群

WDTY	WDTY	1.45	1	WDHY	19.51	0	第149図	67	削器
SWHD	SWHD	3.99	1	SBIY	106.17	0	第149図	68	搔器
SWHD	SWHD	12.06	1	SBIY	119.23	0	第149図	69	刃器
SWHD	SWHD	17.24	1	SBIY	55.95	0	第149図	70	刃器
WDTY	WDTY	5.43	1	WDHY	31.84	0	第149図	71	刃器
SWHD	SWHD	6.06	1	SBIY	80.71	0	第149図	72	削器
SWHD	SWHD	9.79	1	SBIY	62.5	0	第149図	73	削器
SWHD	SWHD	1.59	1	SBIY	83.8	0	第149図	74	石匙
TSTY	TSTY	6.1	1	TUTI	33.28	0	第149図	75	刃器
SWHD	SWHD	3.88	1	SBIY	68.19	0	第149図	76	刃器
SWHD	SWHD	11.88	1	SBIY	73.46	0	第150図	77	削器
WDTY	WDTY	2.56	0.9981	WDHY	12.67	0.0019	第150図	78	削器
WDTY	WDTY	2.47	1	WDHY	23.31	0	第150図	79	刃器
WDTY	WDTY	0.59	1	WDHY	18.85	0	第150図	80	刃器
SWHD	SWHD	10.36	1	WDTN	68.66	0	第150図	81	刃器
SWHD	SWHD	5.3	1	SBIY	77.4	0	第150図	82	刃器
WDKB	WDKB	11.44	0.9877	WDTY	20.89	0.0123	第150図	83	刃器
SWHD	SWHD	4.37	1	SBIY	60.31	0	第150図	84	刃器
SWHD	SWHD	6.7	1	SBIY	97.84	0	第150図	85	刃器
SWHD	SWHD	7.65	1	SBIY	115.46	0	第151図	86	刃器
SWHD	SWHD	13.79	1	SBIY	94.43	0	第151図	88	刃器
SWHD	SWHD	8.3	1	SBIY	121.8	0	第151図	89	刃器
SWHD	SWHD	16.37	1	SBIY	85.61	0	第151図	90	刃器
SWHD	SWHD	3.59	1	SBIY	65.31	0	第151図	91	刃器
SWHD	SWHD	11.17	1	SBIY	87.28	0	第151図	92	刃器
SWHD	SWHD	2.33	1	SBIY	79.95	0	第151図	93	刃器
WDTY	WDTY	10.06	1	WDHY	43.07	0	第151図	94	刃器
SWHD	SWHD	3.57	1	SBIY	100.69	0	第156図	105	横形石匙
SWHD	SWHD	5.05	1	SBIY	54.57	0	第156図	106	横形石匙
KZOB	KZOB	11.69	1	KZSN	45.53	0	第158図	113	縦形石匙
WDTY	WDTY	5.05	1	WDHY	25.42	0	第158図	114	横形石匙

左側の表

分析番号:  
遺物番号:  
推定産地:

右側の表

判別図判別群: 判別図法によって推定された産地

判別分析と結果が異なるときは「\*」をつけて示す。

判別分析: 第1候補産地…判別分析により推定された産地の第1候補  
第2候補産地…判別分析により推定された産地の第2候補

判別群 候補産地記号

→ 判別図法による産地と通常は一致する。

距離

試料から候補産地までのマハラノビス距離

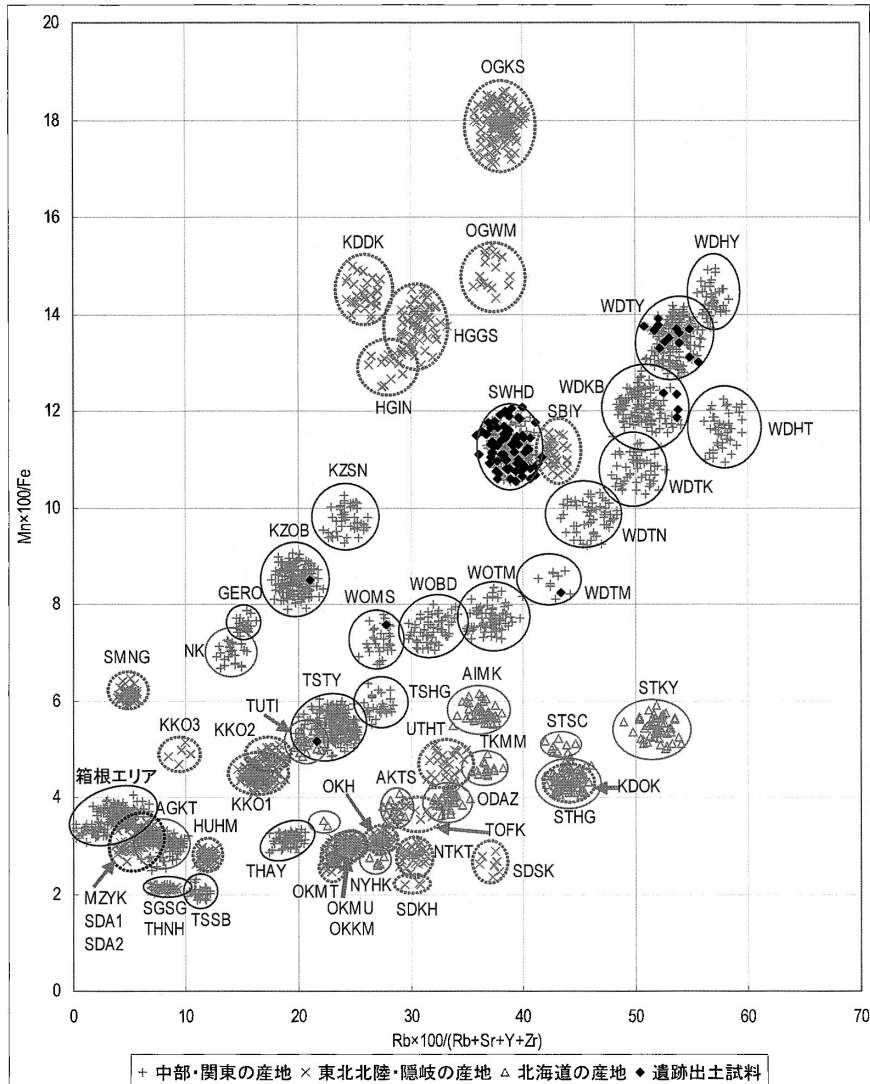
→ 値が小さいほど候補産地と類似性が高い。

確率

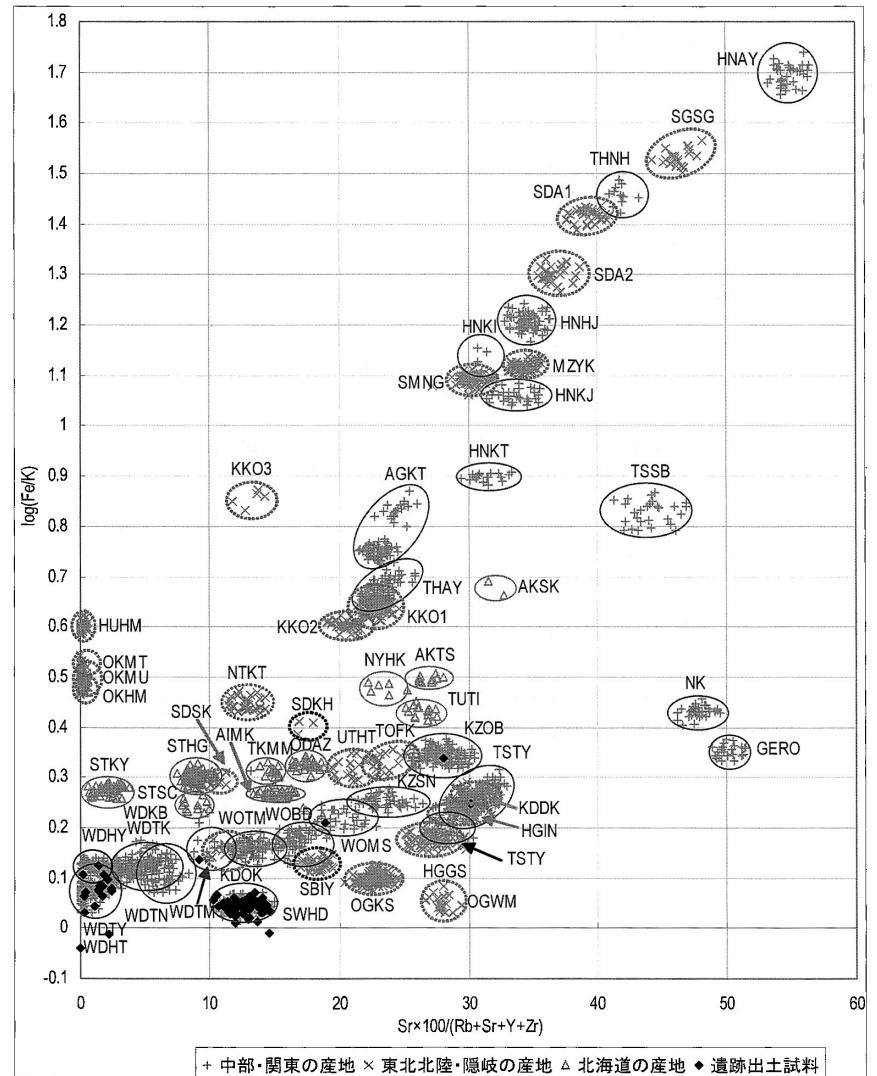
試料が候補産地に属する確率

→ 1に近いほど類似性が高い。





第32図 黒曜石の産地判別 1



第33図 黒曜石の産地判別 2

第35表 判別図に用いた産地原石判別群

都道府県	地図No.	エリア	新判別群	旧判別群	新記号	旧記号	原石採取地(分析数)			
北海道	1	白滝	八号沢群	黒曜の沢群	STHG		赤石山山頂(19)、八号沢露頭(31)、八号沢(79)、黒曜の沢(6)、梶加林道(4)			
			三股群		KSM		十三ノ沢(16)			
			置戸群	安住群	ODAZ		安住(25)、清水ノ沢(9)			
			旭川群	高砂台群	AKTS		高砂台(6)、雨粉台(5)、春光台(5)			
			名寄群	布川群	NYHK		布川(10)			
			新十津川群	須田群	STSD		須田(6)			
			赤井川群	曲川群	AIMK		曲川(25)、土木川(15)			
			豊浦群	豊泉群	TUTI		豊泉(16)			
			木造群	出来島群	KDDK		出来島海岸(34)			
			八森山群	八森山群	HUHM		八森山公園(8)、六角沢(8)、岡崎派(40)			
青森	9	男鹿	金ヶ崎群		OGKS		金ヶ崎温泉(37)、脇本海岸(98)			
			脇本群		OGWM		脇本海岸(16)			
秋田	11	男鹿	月山群		HGGS		月山荘前(30)、朝日町田代沢(18)、樋引町中沢(18)			
			今野川群		HGIN		今野川(9)、大綱川(5)			
山形	12	羽黒	金津群		NTKT		金津(29)			
			板山群		SBIY		板山牧場(40)			
新潟	14	新発田	甘湯沢群	高原山1群	THAY	TKH1	甘湯沢(50)、桜沢(20)			
			七尋沢群	高原山2群	THNH	TKH2	七尋沢(9)、自然の家(9)			
長野	16	和田(WD)	鷹山群	和田崎1群	WDTY	WDT1	鷹山(53)、小深沢(54)、東峰(36)、芙蓉ライク(87)、古峠(50)、土屋橋北(83)、土屋橋西(29)、土屋橋南(68)、丁字御領(18)			
			小深沢群	和田崎2群	WDTK	WDT2				
			土屋橋北群	和田崎3群	WDTK	WDT3				
			土屋橋西群	和田崎4群	WDTN	WDT4				
			土屋橋南群	和田崎5群	WDTM	WDT5				
			芙蓉ライク群		WDHY					
			古峠群		WDHT					
			ブドウ沢群	男女倉1群	WOBD	OMG1	ブドウ沢(36)、ブドウ沢右岸(18)、牧ヶ沢上(33)、			
			牧ヶ沢群	男女倉2群	WOMS	OMG2	牧ヶ沢下(36)、高松沢(40)			
			高松沢群	男女倉3群	WOTM	OMG3				
			諏訪	17	星ヶ台群	霧ヶ峰系		SWHD	KRM	星ヶ塔第1鉱区(36)、星ヶ塔第2鉱区(36)、星ヶ台A(36)、星ヶ台B(11)、水月公園(36)、水月公園(13)、星ヶ塔のつし(36)
						冷山群	蓼科系	TSTY	TTS	冷山(33)、麦苗峠(36)、麦苗峠東(33)、洗ノ湯(29)、美し森(4)、八ヶ岳(17)、八ヶ岳(918)、双子池(34)
						双子山群		TSHG		双子池(26)
			神奈川	19	箱根	播鉢山群		TSSB		播鉢山(31)、亀甲池(8)
						芦ノ湯群	芦ノ湯	HNAY	ASY	芦ノ湯(34)
静岡	21	箱根	畑宿群	畑宿	HNHJ	HTJ	畑宿(71)			
			黒岩橋群	箱根系A群	HNKI	HKNA	黒岩橋(9)			
			鍛冶屋群	鍛冶屋	HNKJ	KJY	鍛冶屋(30)			
東京	23	神津島	上多賀群	上多賀	HNKT	KMT	上多賀(18)			
			柏峠群	柏峠	AGKT	KSW	柏峠(80)			
島根	24	隠岐	恩馳島群	神津島1群	KZOB	KOZ1	恩馳島(100)、長浜(43)、沢尻湾(8)			
			砂糠崎群	神津島2群	KZSN	KOZ2	砂糠崎(40)、長浜(5)			
			久見群		OKHM		久見ハート中(30)、久見探検現場(18)			
その他			箕浦群		OKMU		箕浦海岸(30)、加茂(19)、岸産(35)			
			岬群		OKMT		岬地区(16)			
			NK群		NK		中ノ原1G、5G(遺跡試料)、原石産地は未発見			

産地	判別群	新記号	旧記号
佐々木繁喜氏提供試料(まだ地図には入れていない)			
青森	小泊	折腰内群	KDOK
岩手	北上川	北上折居1群	KKO1
		北上折居2群	KKO2
		北上折居3群	KKO3
宮城	宮崎	湯ノ倉群	MZYK
	色麻	根岸群	SMNG
	仙台	秋保1群	SDA1
		秋保2群	SDA2
	塩竈	塩竈群	SSGS
		小泊市折腰内(8)	
		水沢市折居(36)、花巻市折居(36)、磐石小赤沢(36)、水沢市折居(23)、花巻市折居(18)、磐石小赤沢(2)	
		水沢市折居(5)	
		宮崎町湯ノ倉(54)	
		色麻町根岸(48)	
		仙台市秋保土蔵(17)	
		仙台市秋保土蔵(35)	
		塩竈市塩竈漁港(22)	



第34図 東日本の黒曜石産地

第36表 酒香場遺跡出土黒曜石産地推定結果

エリア	判別群	記号	試料数	%
和田(WO)	ブドウ沢	WOBD	0	0
	牧ヶ沢	WOMS	1	1.09
	高松沢	WOTM	0	0
和田(WD)	芙蓉ライト	WDHY	0	0
	鷹山	WDTY	13	14.13
	小深沢	WDKB	4	4.35
	土屋橋北	WDTK	0	0
	土屋橋西	WDTN	0	0
	土屋橋南	WDTM	1	1.09
	古峠	WDHT	0	0
諏訪	星ヶ台	SWHD	71	77.17
蓼科	冷山	TSTY	1	1.09
	双子山	TSHG	0	0
	播鉢山	TSSB	0	0
天城	柏峠1	AGKT	0	0
箱根	畑宿	HNHJ	0	0
	鍛冶屋	HNKJ	0	0
	黒岩橋	HNKI	0	0
	上多賀	HNKT	0	0
	芦ノ湯	HNAY	0	0
	恩馳島	KZOB	1	1.09
神津島	砂糠崎	KZSN	0	0
	甘湯沢	THAY	0	0
高原山	七尋沢	THNH	0	0
新津	金津	NTKT	0	0
新発田	板山	SBIY	0	0
深浦	八森山	HUHM	0	0
木造	出来島	KDDK	0	0
男鹿	金ヶ崎	OGKS	0	0
	脇本	OGWM	0	0
羽黒	月山	HGGS	0	0
	今野川	HGIN	0	0
北上川	折居1群	KKO1	0	0
	折居2群	KKO2	0	0
	折居3群	KKO3	0	0
宮崎	湯ノ倉	MZYK	0	0
仙台	秋保1群	SDA1	0	0
	秋保2群	SDA2	0	0
色麻	根岸	SMNG	0	0
	塩竈	SSGS	0	0
小泊	折腰内	KDOK	0	0
魚津	草月上野	UTHT	0	0
高岡	二上山	TOFK	0	0
	真光寺	SDSK	0	0
佐渡	金井二ツ坂	SDKH	0	0
	久見	OKHM	0	0
隠岐	岬地区	OKMT	0	0
	箕浦	OKMU	0	0
白滝	8号沢	STHG	0	0
	黒曜の沢	STKY	0	0
	赤石山頂	STSC	0	0
赤井川	曲川	AIMK	0	0
豊浦	豊泉	TUTI	0	0
置戸	安住	ODAZ	0	0
十勝	三股	TKMM	0	0
名寄	布川	NYHA	0	0
	高砂台	AKTS	0	0
旭川	春光台	AKSK	0	0
不明産地1	NK	NK	0	0
下呂石		GERO	0	0
合計			92	100.01

不可など	0
総計	92

## 第4節 酒呑場遺跡における自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

酒呑場遺跡は、釜無川の支流である大深沢川と、塩川の支流である宮川に挟まれた台地上に位置する。本地域の地形については、甲府盆地第四紀研究グループ（1969）や田中（1994）等の研究が知られている。それによれば、本遺跡が立地する台地は、高位段丘面に相当する。

本遺跡では、発掘調査により縄文時代中期や古墳時代前期（五領期）の遺構・遺物が検出されている。本報告では、出土した遺物について自然科学分析を行い、その利用状況に関する情報を得る。

### 1. 調査課題

#### (1) 炭化材の樹種

古墳時代の焼失住居跡や縄文時代の住居跡からは住居構築材などと考えられる炭化材が出土している。これらの炭化材について樹種同定を行い、その種類を明らかにするとともに、各時代の用材選択について考察する。

#### (2) 種実遺体の種類

縄文時代の住居跡や土坑からは、炭化した種実遺体が出土した。これらの種実遺体の同定を行い、過去の植物利用の一端を明らかにする。

#### (3) 土偶に付着した白色物質の分析

本遺跡から出土した土偶の中には、白色物質が付着しているものが確認された。これらの白色物質が何に由来するものかを明らかにするため、X線回折分析を行う。

### 2. 炭化材の樹種

#### (1) 試料

試料は、C・D区の縄文時代中期前葉の20住・32住・78住・79住および、古墳時代（五領期）の10住・33住から出土した炭化材37点である。各試料の詳細については、樹種同定結果と共に表1に記した。

#### (2) 方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

#### (3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。縄文時代中期前葉の32住アスファルトおよび炭化物は、木材組織が全く観察できず不明とした。また、78住炭化物は、種子試料であったため、他の種実とともに報告する。

炭化材は全て落葉広葉樹で、4種類（ハンノキ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ミズキ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

#### ・ハンノキ属 (*Alnus sp.*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2～4個が放射方向に複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は密に対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のものと集合放射組織とがある。柔組織は短接線状～散在状。

#### ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus sp.*) ブナ科

環孔材で孔圏部はほぼ1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

#### ・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

・ミズキ属 (*Cornus sp.*) ミズキ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独。道管は階段穿孔を有し、段の数は20～50、壁孔は対列～交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～5細胞幅、1～30細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。

(4) 考察

古墳時代前期の2軒の住居跡から出土した、住居構築材と考えられる炭化材は、いずれもコナラ節が多く、他にはハンノキ属が各1点認められたのみであった。このことから、住居構築材にはコナラ節を主とした用材選択が行われたと考えられる。本地域では、古墳時代の住居構築材について樹種を明らかにした例はほとんどない。しかし、近接する関東地方では、古墳時代の住居構築材について、多くの調査例が知られている。その結果では、東京都や埼玉県などの台地上を中心とした遺跡でコナラ亜属のクヌギ節・コナラ節が多く認められており（高橋・植木，1994）、今回の結果とも調和的である。また、葦崎市堂の前遺跡では弥生時代後期後半、長坂町健康村遺跡では平安時代の住居構築材について樹種同定が行われた例がある（高橋，1987；パリノ・サーヴェイ株式会社，1994）。その結果では、

第37表 炭化材の樹種同定結果

地区	遺構名	時代・時期	試料名	用途	樹種	
C区	32住	縄文時代中期前葉	炭化物	不明	クリ	
			炭化物	不明	不明	
			アスファルト	不明	不明	
	78住	縄文時代中期前葉	炭化物	不明	種実遺体	
	79住	縄文時代中期前葉	炭化物	不明	ミズキ属	
	33住	古墳時代前期（五領期）	Pit4	柱材	クリ	
			20土	炭（下層）	燃料材	クリ
			No. 1	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 2	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 3	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 4	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 5	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 6	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 7	住居構築材	ハンノキ属	
			No. 8	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 9	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 10	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
No. 11			住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
No. 12			住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
D区	10住	古墳時代前期（五領期）	No. 13	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 1	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 2	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 3	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 4	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 5	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 6	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 7	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 8	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 9	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 10	住居構築材	ハンノキ属	
			No. 11	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			No. 12	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
No. 13	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節				

コナラ亜属のコナラ節やクヌギ節が多く認められ、今回と同様の傾向が認められる。これらのことから本地域では、古墳時代の住居構築材にコナラ亜属を主とした用材選択が行われたことが推定される。また同様の用材選択は、弥生時代後期後半は行われており、少なくとも平安時代までは続いていたことが推定される。

一方、縄文時代の遺構から出土した炭化材は、柱材や燃料材の可能性はあるが、その詳細は不明である。樹種はクリとミズキ属が認められたが、古墳時代に多かったコナラ節は1点も認められなかった。縄文時代の住居跡などから出土する炭化材にクリが多い傾向は、関東地方・北陸地方・東北地方の多くの遺跡で報告例がある。本地域周辺では、白州町上北田遺跡から出土した炭化材にクリ（類似種を含む）が確認された例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993）。これらのことを考慮すれば、本遺跡においても縄文時代にクリが住居構築材や燃料材などに多く利用されていたことが推定される。また、縄文時代に多かったクリが、古墳時代ではほとんど見られなくなる傾向は、関東地方でも確認されている（千野、1991；高橋・植木、1994）。これらのことから、本地域においても縄文時代と古墳時代とで用材選択が異なっていた可能性がある。

本地域では、過去の用材選択に関する資料が少ないので、今後さらに資料を蓄積しながら時代別の用材選択について検討を重ねたい。

### 3. 種実遺体の種類

#### I A・C・D・E区の種実遺体

##### (1) 試料

試料は、A・C・D・E区の縄文時代中期前葉の遺構から出土した種実遺体20点と、炭化材試料中に含まれていた種実遺体1点である。各試料の詳細は、種実遺体同定結果とともに第38表に記した。

##### (2) 方法

双眼実体顕微鏡下で種類を同定し、種類毎にびんに保存する。

##### (3) 結果

結果を第38表に示す。以下に検出された種類の形態的特徴について記す。

#### ・オニグルミ (*Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana (Maxim) Kitamura*) クルミ科クルミ属

炭化した核の破片が検出された。黒色で大きさは1.5cm程度。木質で堅い。表面は荒いしわ状であり、内側には子葉が入る窪みがある。

#### ・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zicc.*) ブナ科クリ属

炭化した子葉の破片が検出された。黒色、半球状で大きさは1cm程度。表面には荒いしわ状の模様がある。

#### ・コナラ属 (*Quercus sp.*) ブナ科コナラ属

炭化した子葉が検出された。黒色、縦につぶれた球形、大きさは1cm程度。表面は維管束が浅い筋状に残る。

##### (4) 考察

今回検出されたものは、いずれも火熱を受けて炭化している。いずれも縄文時代の主要な植物食であり、出土例も多い（渡辺、1982）。このことから、これらは当時の重要な食料として採取、利用されていたことが示唆される。本遺跡周辺では、北巨摩郡白州町上北田遺跡で同様な種類が検出されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993）。

第38表 A・C・D・E区種実遺体の同定結果

地区	遺構名・試料名	時代・時期	種名	数量
A区	11土	縄文時代中期前葉	オニグルミ クリ	細破片 4
	4配-28	縄文時代中期前葉	コナラ属	1
	C-1a (C-1)	縄文時代中期前葉	不明	
	C-1a (C-2)	縄文時代中期前葉	不明	
	C-1a (C-3)	縄文時代中期前葉	クリ	1
C区	E-1a	縄文時代中期前葉	コナラ属	1
	11住 C-1	縄文時代中期前葉	不明	
	37住	縄文時代中期前葉	コナラ属	1
	3住	縄文時代中期前葉	オニグルミ	2
	4住Pit4	縄文時代中期前葉	コナラ属	3
	89土	縄文時代中期前葉	コナラ属	3
	F-39	縄文時代中期前葉	コナラ属	10
	H-40	縄文時代中期前葉	コナラ属	2
	H-42	縄文時代中期前葉	不明	
	K-6住	縄文時代中期前葉	コナラ属	2
	K-43G 40住	縄文時代中期前葉	不明	
D区	78住炭化物	縄文時代中期前葉	不明	
	100土坑	縄文時代中期前葉	クリ	1
E区	1住	縄文時代中期前葉	不明	
	147土 64土	縄文時代中期前葉	不明 クリ	 3

今回検出されたコナラ属は、上北田遺跡ではAタイプとしているクヌギなどに近い形状を有するものである。クヌギは「あくぬぎ」の伝承が途絶えた種類であり、非常に「あく」の強い種類である（渡辺，1975）。現在利用されていない種類が当時利用されていたとすれば、植物利用の変遷をとらえる上で興味深い結果である。

## II I区の種類遺体

### (1) 試料

試料は、縄文時代前期末～中期末にあたる住居跡10件分から出土した16点である。いずれも浮遊選別法によって得られた炭化物で、量は5～50粒ぐらいと少ない。これらは、フローテーション装置にて選別したもので、浮上して1mmの篩に残ったものである。また、沈殿した中にも炭化物がみられたため、この中の一部を拾って加えてある。試料の詳細は、結果とともに表1に示す。

第39表 I区種実遺体の同定結果

地区	遺構名	時代性など	同定結果
4住	焼土	諸磯	不能
5住	炉跡(覆土)	藤内	オニグルミ(破片1)、マメ類(4)
5住	炉跡(焼土)	藤内	ミズキ(1)
12住	炉跡	新道	オニグルミ(破片多数)
12住	炉跡堀方	新道	ミズキ(1)
12住	埋嚢	新道	不能
13住	焼土	曾利	不能
20住	炉焼土	藤内	オニグルミ(破片3)
20住	覆土木炭層(8.9層)	藤内(E'-28-3-⑤)	オニグルミ(破片多数)、ミズキ(1)
20住	覆土木炭層	藤内(E'-28-3-④)	オニグルミ(破片多数)
24住	焼土	五領ヶ台	不能
26住	炉焼土	新道	オニグルミ(破片6)
42住	化つ(旧炉跡)	井戸尻	サンショウ(1)
42住	炉跡	井戸尻	ミズキ(1)
43住	石囲炉	井戸尻	オニグルミ(破片3)、マメ類(1)
45住	埋嚢 外	猪沢	不能

### (2) 方法

双眼実体顕微鏡にて、その形態的特徴から種類を同定する。これらは種類ごとに瓶に入れて保存する。

### (3) 結果

分析の結果を第39表に示す。いずれの試料も保存が悪く、表面の形態などを判別しにくいものが多い。大部分がオニグルミの破片で、他に若干の種実を含む。炭化材片もみられるが、いずれも数mm以下と微細なため、種類を特定することは難しい。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

- オニグルミ (*Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana (Maxim) Kitamura*) クルミ科クルミ属  
炭化した核の破片が検出された。大きさは5mm程度。木質で堅い。表面は深く荒いしわ状となる。
- サンショウ (*Zanthoxylum piperitum DC.*) ミカン科サンショウ属  
果実が検出された。炭化しており黒色、楕円形で大きさは4mm程度。表面には浅い不規則な網目模様がみられる。
- ミズキ (*Cornus controversa Hemsley*) ミズキ科ミズキ属  
炭化した核が検出された。大きさは6mm程度。縦方向にややつぶれた球形。基部に大きな臍がある。縦方向に走る溝がみられる。
- マメ類 (Leguminosae)  
炭化した種子が検出された。大きさは4mm程度。楕円形で、半分に分れ、側面には「へそ」が存在する。

### (4) 考察

今回検出された種実はいずれも炭化していることから、当時の燃料材に混ざるなどして火熱を受けたものと考えられる。いずれも周辺の山野に生育している種類であることから、周辺から採取し、燃料材等として用いた可能性がある。特にオニグルミは細片であることから、人為的に破壊された可能性がある。オニグルミは収量が多く保存もきくことから、植物質食料としては重要である。このことから、食用として利用したあと、残渣を燃やしたと考えられる。また、サンショウは香味や薬用として有用な種類であることから、当時利用されていた可能性がある。ミズキは、木質で堅いことから、残りやすかったのであろう。また、マメ類は保存が悪いためはっきりとはわからないが、非常に小さいことから、野生種であると考えられる。

## 4. 土偶に付着していた白色物質のX線回折分析

### (1) 試料

試料は、縄文時代中期前葉の土偶に付着していた白色物質である。土偶は、C区3住a土偶1（図版編第109図1）とC区97住P-267（図版編第103図10）の2点を選択した。それぞれの土偶からは、表面に付着していた白色物質と、対照試料として胎土を採取した。

### (2) 分析方法

胎土片に付着する白色物質を柄付針やカッターナイフで採取し、メノウ乳鉢で微粉碎（200メッシュ以下）した。また、対照試料の胎土は、破断面を利用してカッターナイフ等で採取し、白色物質と同様の方法で粉碎した。これらを顕微鏡用スライドグラスに採取し、アセトンで薄く広げ、風乾した。これをX線回折分析試料とした。

この分析試料について、以下に示す測定条件でX線回折分析を行った（足立，1980；日本粘土学会，1987）。同定および解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐，未公表）により検索した。

装置：島津制作所製XD-3A

Target：Cu（K $\alpha$ ）

Filter：Ni

Voltage：30KVP

Current：30mA

Count Full Scale：5,000C/S

Time Constant：2.0sec

Scanning Speed：2°/min

Chart Speed：2 cm/min

Divergency：1°

Receiving Slit：0.3mm

Scanning Range：3～45°

### (3) 結果

X線回折チャートと検出鉱物を第35・36図に示す。

C区3住a土偶1に付着していた白色物質から検出された鉱物は、石英（quartz）、斜長石（plagioclase）、クリストバライト（cristobalite）、角閃石（hornblende）、ハロイサイト7Å（7Å halloysite）、透輝石（diopside）である。また、土偶1の胎土から検出された鉱物は、角閃石（hornblende）、ハロイサイト7Å（7Å halloysite）を除けば、白色物質と同じである。

C区97住P-267の土偶に付着していた白色物質から検出された鉱物は、石英（quartz）、斜長石（plagioclase）、クリストバライト（cristobalite）、ハロイサイト7Å（7Å halloysite）、透輝石（diopside）である。また、土偶の胎土から検出された鉱物は、透輝石を除けば白色物質と同じである。

検出鉱物の説明を以下に記す。

#### 石英（quartz）

化学式はSiO<sub>2</sub>。最も普遍的に産出する造岩鉱物の一つで花崗岩・片麻岩など酸性の火成岩・変成岩中の主成分鉱物として産する。また鉱脈中の脈石として、砂岩・礫岩などの堆積岩中など珪酸に飽和した岩石中に広く産する。比重は2.65。通常無色、ときに黄・赤・緑・青・黒褐色、ガラス～脂肪光沢。

#### 斜長石（plagioclase）

長石（feldspars）の一種。主としてAb（NaAlSi<sub>3</sub>O<sub>8</sub>）－An（CaAlSi<sub>2</sub>O<sub>8</sub>）からなる長石。斜長石はたいていの岩石中にほとんど普遍的に存在し、その量と岩石構造上の役割から、造岩鉱物の内で最も重要なもの。比重2.62～2.76。

斜長石には低温型と高温型があり、両型の漸移型も存在する。いずれも三斜晶系である。

#### クリストバライト (cristobalite)

石英と多形の関係にある結晶性ケイ酸塩鉱物で、 $\text{SiO}_2$ の化学式で表される。火山岩や火山砕屑物中に見い出される。

#### 角閃石 (hornblende)

造岩鉱物の主要な一群。化学組成は一般式 $\text{AX}_2\text{Y}_5\text{Z}_8\text{O}_{22}$  (OH, F, Cl) により表される。この式のAにはNaが、Xには主としてMg, Ca, Mn,  $\text{Fe}^{2+}$ などが、YにはMg, Al,  $\text{Fe}^{2+}$ ,  $\text{Fe}^{3+}$ などが、Zには主にSiとAlが入る。それらの組合せによる多くの鉱物種が知られている。単斜晶系で、一部斜方晶系のものもある。結晶構造は二重鎖構造のイノケイ酸塩。火成岩中の角閃石は、主にホルンブレンドであり、酸性岩から超塩基性岩まで広く産する。ホルンブレンドは変成岩にもよく見られる。また、変成岩には多くの種類の角閃石が産し、とくに高压型変成岩に見られる藍閃石は、特徴的な鉱物として知られる。その他アクチノライト、カミングナイトなどもよく見られる。

#### ハロイサイト (halloysite)

カオリン粘土鉱物の一つの種で、ケイ素四面体シートとアルミニウム八面体シートの1:1層の積み重なりからなる。試料によっては、八面体シートのアルミニウムが一部鉄によって同型置換されている。ハロイサイトのうち、層間に1分子層の水をはさむものをハロイサイト10A (加水ハロイサイト)、層間水がぬけたものわハロイサイト7A (メタハロイサイト)と呼ぶ。

#### 透輝石 (diopside)

単斜輝石の一つ。Mgは $\text{Fe}^{2+}$ およびMnによって置換されるほか、AlAlによるMgSiの置換 (いわゆるチェルマーク置換) が成立する。無・白・灰・淡緑色、ガラス光沢。硬度6。比重3.27。石灰岩・苦灰岩起源のスカルンの構成鉱物として産するほか、苦鉄質～超苦鉄質岩の構成成分をなす。

#### (4) 考察

分析の結果、C区3住a土偶1の表面から採取した白色物質では、土偶の胎土には認められなかった角閃石とハロイサイトが認められた。検出された鉱物の一般的な性状を勘案すると、白色物質は陶磁器や耐火物の原料、製紙用として利用されるハロイサイトに由来する可能性が高い。C区97住P-267の土偶では、白色物質と胎土両方からハロイサイトが検出されているが、ハロイサイトが熱に弱いこと、土偶が脆かったことを考慮すると、試料採取時に白色物質が少量混入した可能性がある。

ハロイサイトは、粘土鉱物として一般的であり、白色系の粘土が土偶焼成後に塗布された可能性がある。

#### 引用文献

足立 吟也 1980「粉末X線回折法」『機器分析のてびき3』p. 64-76, 化学同人。

千野 裕道 1991「縄文時代に二次林はあったかー遺跡出土の植物性遺物からの検討ー」『東京都 埋蔵文化財センター研究論集』X, p. 215-249.

甲府盆地第四紀研究グループ 1969「八ヶ岳南麓の地質」『地質学雑誌』75, p. 401-416.

日本粘土学会編 1987『粘土ハンドブック』第二版。1289p, 技報堂出版。

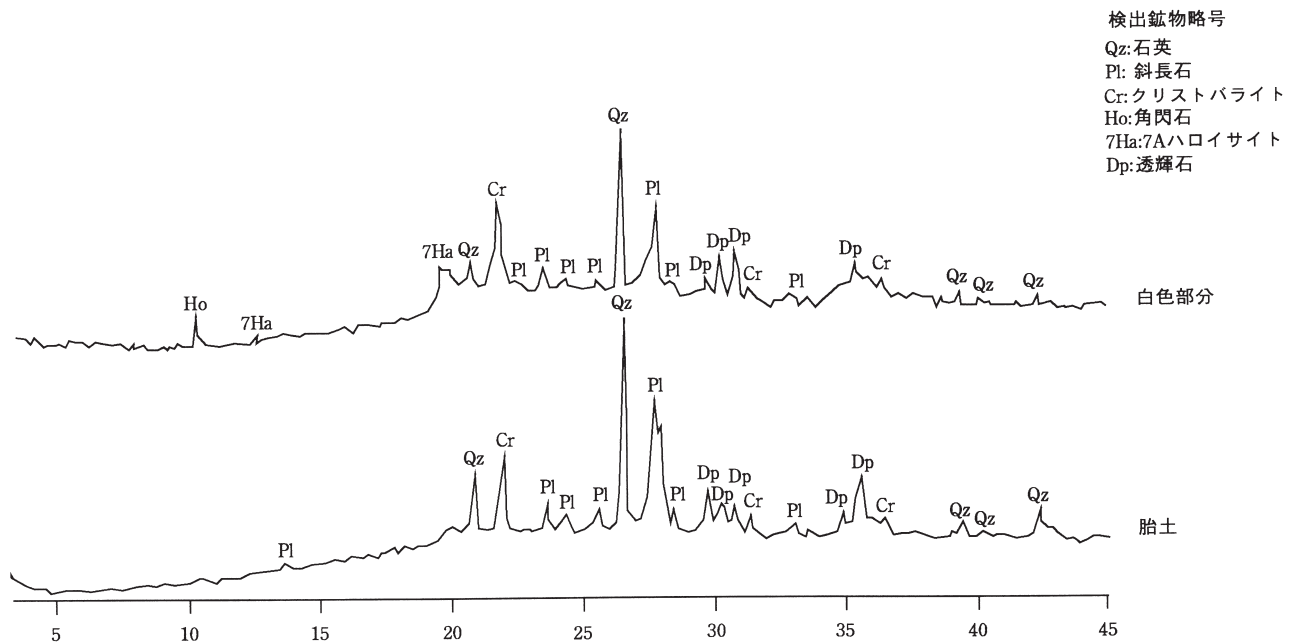
パリノ・サーヴェイ株式会社 1993「上北田遺跡から出土した炭化材および炭化種子の同定」『山梨県北巨摩郡白州町 上北田遺跡 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』p. 1-5, 白州町教育委員会・狭北土地改良事務所。

パリノ・サーヴェイ株式会社 1994「健康村遺跡自然科学分析調査報告」『山梨県北巨摩郡長坂町 健康村遺跡ー(仮称) 東京都新宿区立区民健康村建設工事に伴う発掘調査報告書ー』p. 116-128, 新宿区区民健康村遺跡調査団。

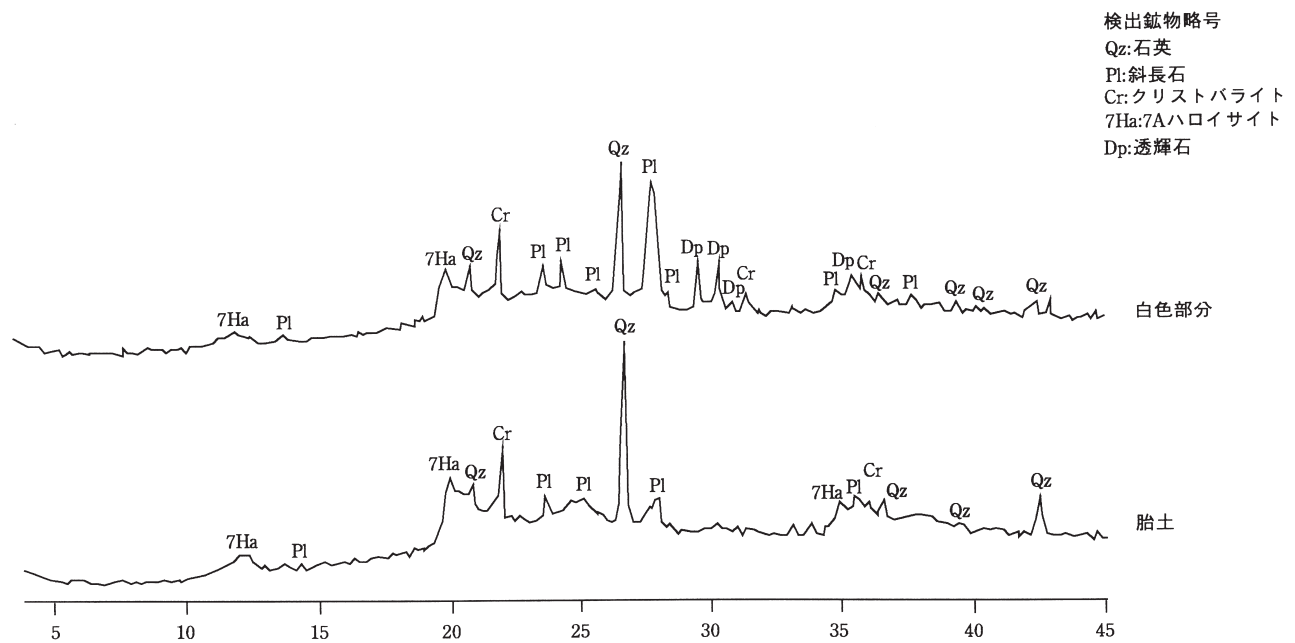
高橋 利彦 1987「炭化材について」『山梨県韮崎市 中本田遺跡・堂の前遺跡 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』p. 56-60, 韮崎市教育委員会・狭北土地改良事務所。



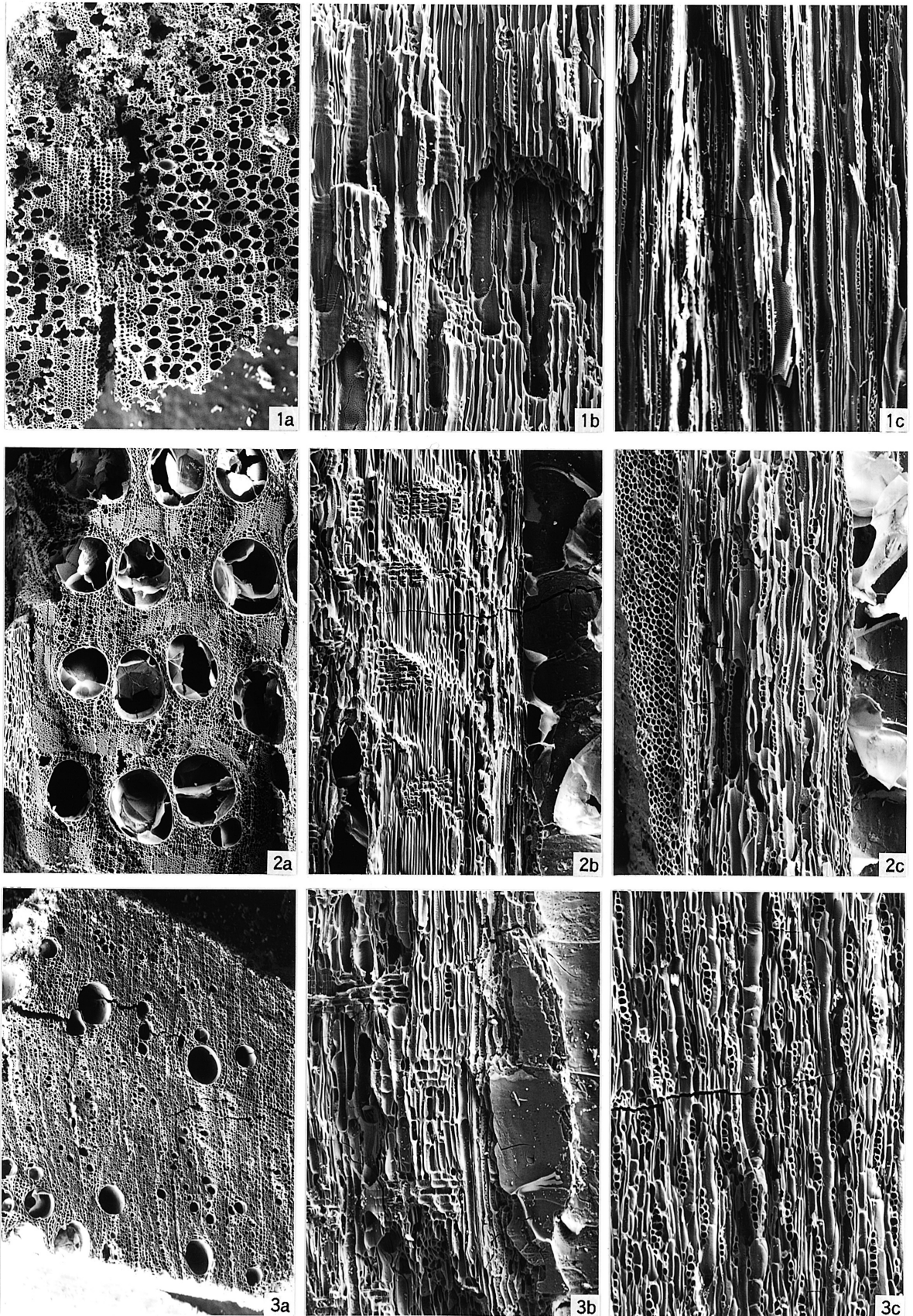
- 高橋 敦・植木 真吾 1994「樹種同定からみた住居構築材の用材選択」『PALYNO』2, p. 5-18.  
 田中 俊廣 1994「ハヶ岳火山の概要」『アーバンクボタ』33, p. 2-7.  
 渡辺 誠 1975『縄文時代の植物食』247p, 雄山閣.  
 渡辺 誠 1982「採集対象植物の地域性」『季刊考古学』1, p. 28-31, 雄山閣.  
 山田富貴子 1980「赤外線吸収スペクトル法」『機器分析のてびき1』p. 1-18, 化学同人.



第35図 C区3住a土偶1の白色物質・胎土のX線回折チャートおよび検出鉱物



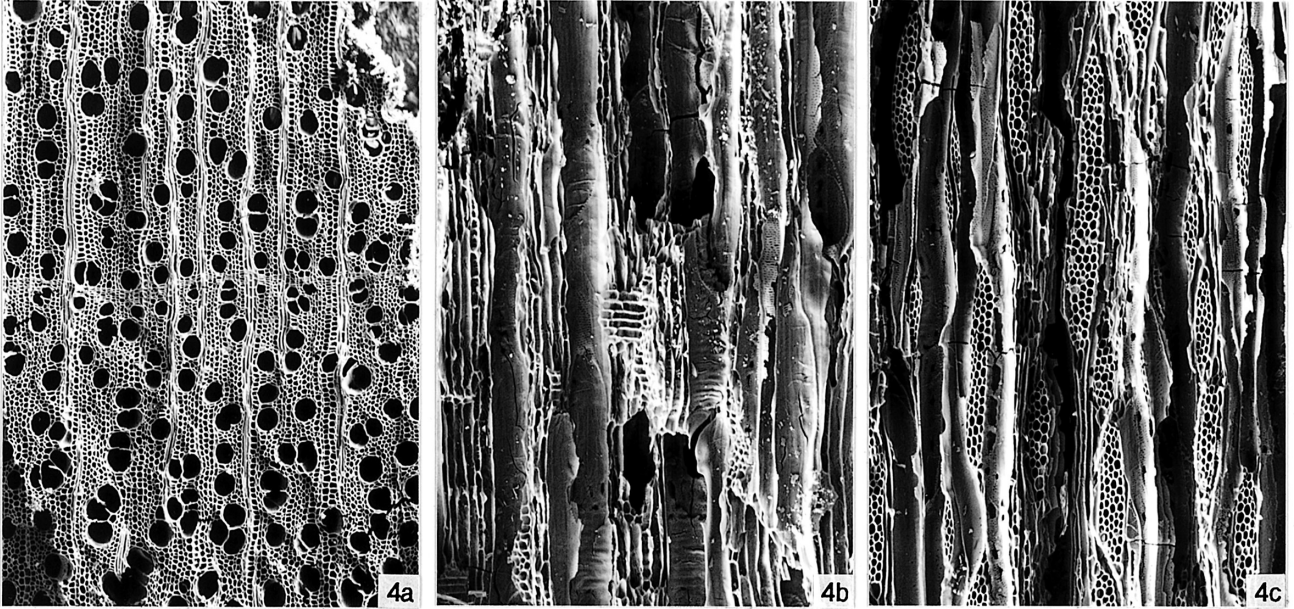
第36図 C区97住P-267の白色物質・胎土のX線回折チャートおよび検出鉱物



1. ハンノキ属 (33号住 No. 7)  
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (10号住 No. 2)  
 3. クリ (20土炭)  
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200  $\mu$ m : a  
 200  $\mu$ m : b, c

第37図 炭化材 (1)



5a



5b



6



7

───────── 200  $\mu$ m : 4a  
 ───────── 200  $\mu$ m : 4b-c  
 ───────── 1cm : 5-7

4. ミズキ属 (79住炭化物) a: 木口, b: 柁目, c: 板目  
 5. オニグルミ (3住C区)  
 6. コナラ属 (37住)  
 7. クリ (64土)

第37図 炭化材(2)・種実遺体

## 第5節 酒呑場遺跡出土土偶の付着物質について

(株) パレオ・ラボ

### 1. はじめに

山梨県北巨摩郡長坂町に所在する酒呑場遺跡において、表面の一部に白色を呈する付着物質が認められる土偶が出土した（C区97住P267、図版編第103図10）。この物質は、土偶表面の文様の溝の部分や、くぼんだ部分に付着しているものの、量的には非常に少ないものである。ここでは、この付着物質の化学組成を蛍光X線分析により明らかにした。さらに、その他の比較試料の分析結果を考慮し、材質について若干の検討を行なった。

### 2. 分析方法

試料については、以下のとおりで、試料No. 2, 3を比較試料とする。

試料No. 1：白色付着物質の一部を土偶表面から削り取ったもの。

試料No. 2：本遺跡で出土した白色粘土をそのまま乾燥させたもの。No. 1の白色付着物質は、この白色粘土に由来する可能性が指摘されたため、比較試料として分析を行なった。

試料No. 3：土偶の表面で、付着物質がついていない部分。参考のため、比較試料として分析を行なった。

これらについて、エネルギー分散型蛍光X線分析計（SEA-2001L：セイコー電子工業株式会社製、Be薄型-X線管球）を用いて、非破壊で蛍光X線を計測し、スペクトルで表した。測定条件は、測定時間300sec、照射径10mm、電圧15KVで、試料室内は真空である。なお、元素は、Si（ケイ素）、Ti（チタン）、Al（アルミニウム）、Fe（鉄）、Mn（マンガン）、Ca（カルシウム）、K（カリウム）、P（リン）について測定した。化学組成については、酸化物の形式で表すとともに、通産省工業技術院地質調査所の岩石標準試料を用いて定量し、%で表した。なお、ここでは、Na（ナトリウム）およびMg（マグネシウム）は、定量が困難な場合があるので、除いてある。

### 3. 結果および考察（第40表、第39～41図）

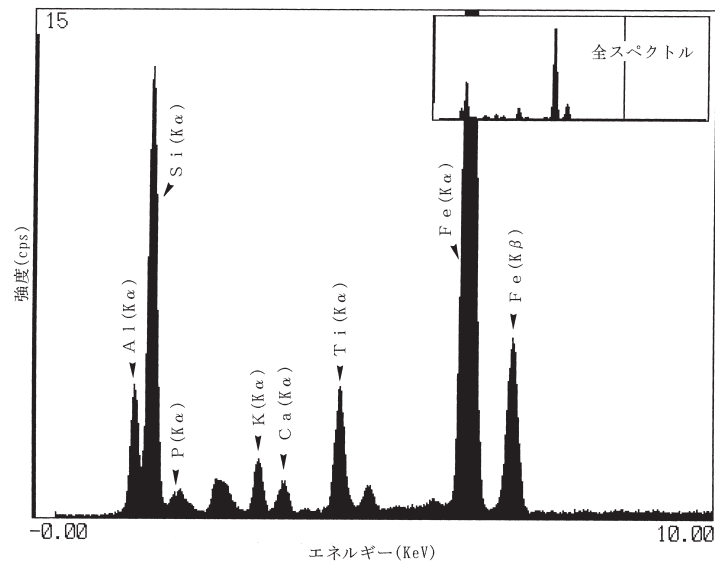
蛍光X線スペクトルからは、No. 1から3ともに、主としてAl, Si, P, K, Ca, Ti, Mn, Feのピークが検出される。化学組成からみると、No. 1は、No. 2, 3と比較して、 $P_2O_5$ が多い点特徴的である。また、No. 1はNo. 2, 3と比較して、 $Al_2O_3$ が多く、 $Fe_2O_3$ ,  $TiO_2$ ,  $K_2O$ が少ない。No. 2は、No. 1, 3と比較して $SiO_2$ , CaOがやや多い。

以上の結果のように、No. 1の白色付着物質の化学組成は、当然のこととして、No. 3の土偶の表面のものとは異なっている。また、No. 2の白色粘土とも明らかに異なる特徴を示す。したがって、No. 1の白色付着物質は、No. 2の白色粘土を直接用いたものではないと考えられる。

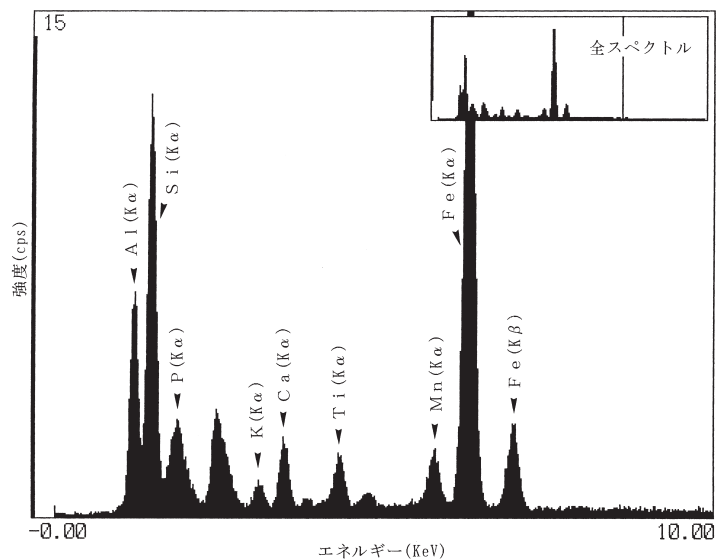
上記のように、白色付着物質には、リンが多く含まれている。白色を呈し、リンを多く含む物質として、可能性があるものをあげると、木材や草本などの植物を燃やした灰、あるいは獣骨や人骨などが推定される。しかし、上記の分析結果だけで、この物質の起源を断定することは困難である。さらに、その他の状況的な証拠の検討、および考古学的な知見からの考察を加えて判断するべきであろう。

第40表 試料の化学組成

	1	2	3
SiO <sub>2</sub>	50.70	55.15	50.36
TiO <sub>2</sub>	0.94	2.44	2.43
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	35.85	24.14	26.21
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	5.56	11.67	14.76
MnO	0.44	0.05	0.93
CaO	1.10	4.04	0.66
K <sub>2</sub> O	0.34	1.14	1.10
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	4.42	0.93	0.51

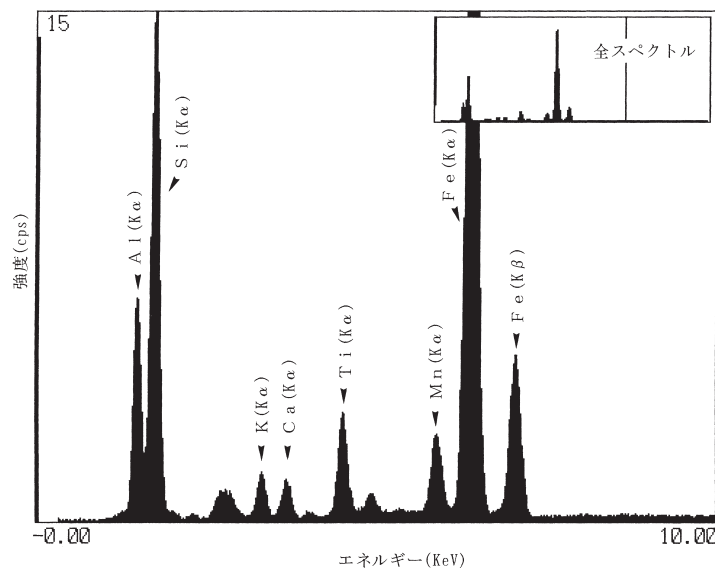


第40図 試料No. 2 (白色粘土)の蛍光X線スペクトル図



第39図 試料No. 1 (白色付着物質)の蛍光X線スペクトル図

(Al : アルミニウム, Si : ケイ素, P : リン, K : カリウム, Ca : カルシウム,  
Ti : チタン, Mn : マンガン, Fe : 鉄)



第41図 試料No. 3 (土偶表面)の蛍光X線スペクトル図

## 第6節 酒呑場遺跡出土の炭化種実

(株) パレオ・ラボ 新山 雅 広

### 1. 試料と方法

検討した試料は、試料番号(遺構名など)の付されたピンに収納された炭化物を主体とした試料175点である。炭化物は、炭化材が大半であり、その中に含まれている炭化種実を実体顕微鏡下で拾い上げた。ここでは、これらの炭化種実を検討し、本遺跡付近での食生活を推定することを目的とした。

### 2. 結果および考察

出土した炭化種実の一覧を第41表に示した。なお、大型植物化石として同定しうるものを全く含んでいなかった試料は、「なし」と記載した。同定されたのは、木本のみでオニグルミ炭化核、クヌギ近似種炭化子葉、クリ炭化子葉、ブナ科炭化子葉、サンショウ属炭化種子、キハダ炭化種子、ミズキ炭化核の7分類群であった。ブナ科炭化子葉は、細かな破片であり、同定は控えたが、おそらくクヌギ近似種かクリであると思われる。これら出土した分類群は、食用などとして利用されていたことが予想され、特に多くの試料から出土したオニグルミ、クリは主要な食料源であったのではないだろうか。

### 3. 大型植物化石の形態記載

#### ・オニグルミ (*Juglans ailanthifolia* Carr.) 炭化核

出土した核は、炭化した細かな破片であり、明らかに利用されていたことが予想される。オニグルミの核は、表面には筋が入り、緩やかな起伏があるが、裏面は著しい起伏があることが多い。核壁は緻密で硬く、割れ口にはしばしば光沢がみられる。割れ口の断面は、空隙がみられることが多い。

#### ・クヌギ近似種 (*Quercus cf. Acutissima* Carruth.) 炭化子葉

炭化子葉は比較的大型で完形であれば球形であるのでクヌギ近似種としたが、アベマキの可能性もある。表面には、浅い筋が入る。

#### ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) 炭化子葉

出土した炭化子葉は、全て破片であるが、完形であれば三角状卵形であることが予想でき、断面が平凸レンズ状のものがみられるのでクリと同定した。表面には比較的深い筋(溝)が入る。

#### ・サンショウ属 (*Zanthoxylum*) 炭化種子

破片であるためこれ以上の同定は控えたが、表面の網目模様が細かいのでおそらくサンショウと思われる。

#### ・キハダ (*Phellodendron amurense* Rupr.) 炭化種子

完形であれば扁平な半月形。表面には非常に細かな浅い網目模様がある。

#### ・ミズキ (*Cornus controversa* Hemsley) 炭化核

核は偏円形で基部に大きな臍があり、表面には浅い縦溝がある。

第41表 出土炭化種実一覧（個数の（ ）付きは破片の数を示す）

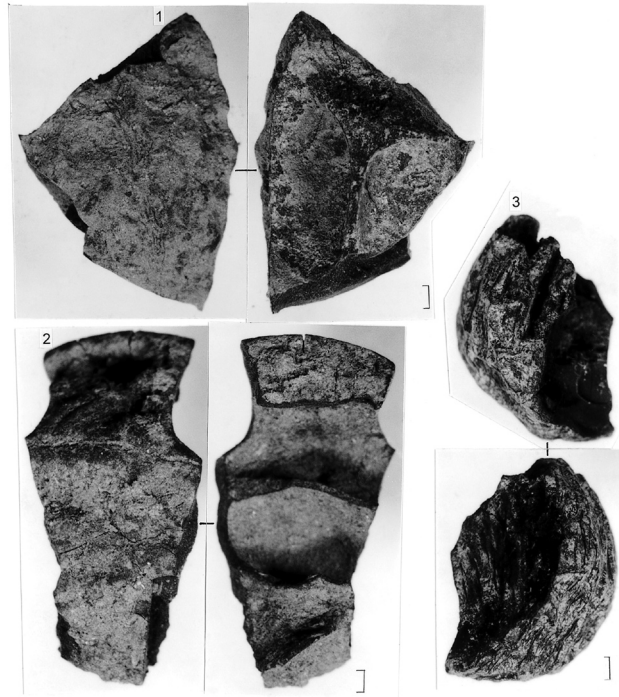
(その1)

	試料	試料数	分類群(部位・個数)	
A	31焼土	1	ブナ科(炭化子葉、(3))	
	2号配石	1	ブナ科(炭化子葉、(2))	
	4号配石5土坑	1	なし	
	4号配石29	1	ブナ科(炭化子葉、(3))	
	4号配石30	1	ブナ科(炭化子葉、(3))	
	11土坑焼土	1	ブナ科(炭化子葉、(1))	
	26土坑	1	なし	
	37土坑	1	オニグルミ(炭化核、(2))、ブナ科(炭化子葉、(3))	
	42土坑	1	なし	
	73土坑	2	オニグルミ(炭化核、(1))…約1/2個分)、ブナ科(炭化子葉、(2))	
	76土坑	1	なし	
	77土坑2	1	ブナ科(炭化子葉、(2))	
	192土坑	1	クヌギ近似種(炭化子葉、(多数)…約1個分)	
	235土坑	1	クリ(炭化子葉、(3)…約1/2個分)	
	284土坑	1	オニグルミ(炭化核、(1))	
	1住102	1	なし	
	5住炉	1	オニグルミ(炭化核、(2))	
	6住配石	1	なし	
	9住炉	2	なし	
	9住(炉)	3	なし	
	12住	1	なし	
	12住373	1	ブナ科(炭化子葉、(1))	
	23住炉土層	1	なし	
	表示なし	2	ブナ科(炭化子葉、(12))	
	F-13G No.1	3	オニグルミ(炭化核、(1))	
	F-15Gウツガノクサ	1	オニグルミ(炭化核、(8)…1/3~1/2個分)	
	67土坑No.1	1	なし	
	69土坑	1	オニグルミ(炭化核、(1))	
	130土坑No.13	1	オニグルミ(炭化核、(4))	
	155土坑No.1	1	オニグルミ(炭化核、(2))	
	164土坑(カメ)	1	オニグルミ(炭化核、(7))	
	164土坑埋めガメ(2-2)	1	なし	
	182土坑No.2	2	なし	
	184土坑1土	1	なし	
	2住	3	オニグルミ(炭化核、(2))、クヌギ近似種(炭化子葉、(約60)…15~20個分)	
	2住(1)	2	ブナ科(炭化子葉、(1))	
	2住(2)	1	キハダ(炭化種子(3)…約1個分)	
	2住14	1	キハダ(炭化種子、(1))	
2住159	1	クヌギ近似種(炭化子葉、(2)…約2/3個分)		
2住210	1	ブナ科(炭化子葉、(1)…1/2個)		
7住炉	2	なし		
8住ウツガノクサ	1	オニグルミ(炭化核、(6))		
8住ウツガノクサNo.357	2	オニグルミ(炭化核、(5))		
8住ウツガノクサNo.361	1	なし		
8住ウツガノクサNo.362	2	オニグルミ(炭化核、(6)…1/4~1/3個分)、ブナ科(炭化子葉、(1))		
9住P-169	1	オニグルミ(炭化核、(3))		
16住ウツガノクサ(No.1)	2	なし		
19住No.1-17(2)	1	なし		
B	1住ウツガノクサ	1	なし	
	1住ウツガノクサ3層	1	なし	
	4住ウツガノクサ	3	オニグルミ(炭化核、(1))	
	4住炉地床	1	オニグルミ(炭化核、(7))	
	4住P-11	1	なし	
	4住Pill15	1	なし	
	4住一括	1	なし	
	15住P-58	1	オニグルミ(炭化核、(1))	
	7住炉	1	なし	
	9住炉	1	なし	
	12住P-2	1	なし	
	13住35	2	オニグルミ(炭化核、(2))	
	13住炉土器	2	オニグルミ(炭化核、(2))、サンショウ属(炭化種子、(1))	
	14住ピット115	1	なし	
	14住炉	2	ミズキ(炭化核、1(1))	
	15住炉	1	なし	
	15住ウツガノクサ	2	なし	
	17住炉	2	オニグルミ(炭化核、(1))	
	19住(炉)(2)	2	オニグルミ(炭化核、(1))	
	19住P.122-123	1	なし	
	19住P-133	1	なし	
	19住P-142	1	なし	
	19住S109	1	オニグルミ(炭化核、(1))	
	20住23	1	なし	
	20住炉埋めガメ	1	なし	
	C			

(その2)

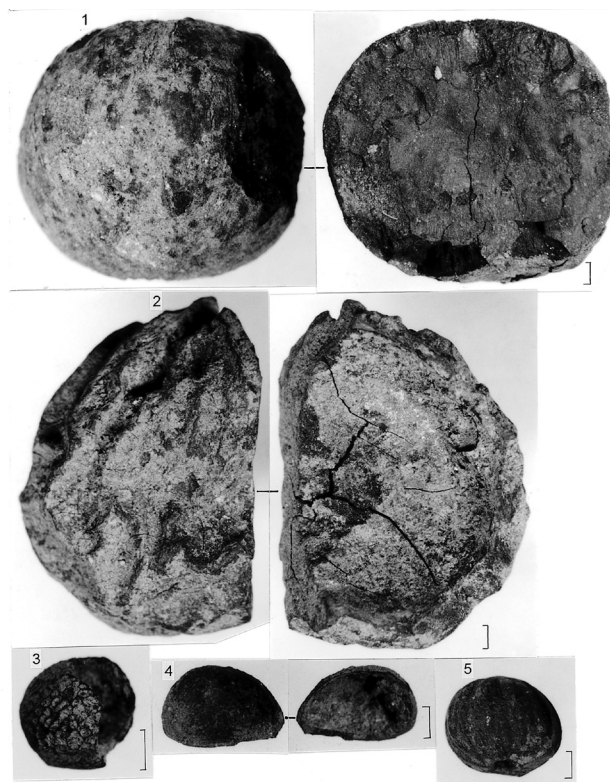
	試料	試料数	分類群 (部位・個数)
	30住炉	2	オニグルミ (炭化核、(4))
	30住No. 28内土 (土坑)	1	オニグルミ (炭化核、(1))
	32住 (炉)	1	なし
	33住P-15小内土	1	なし
	33住 d 区	1	なし
	33住炉	1	なし
	38住炉	1	なし
	41住P-6	1	なし
	41住P-115	1	なし
	43住	1	なし
	43住炉	2	オニグルミ (炭化核、(3))
	43住ウカメ	1	オニグルミ (炭化核、(4))
	46住	1	なし
	47住炉	1	なし
	58住炉内側	1	なし
	58住炉外	1	なし
	65住ウカメ炉	1	なし
	69土	1	なし
	78住P-18	1	なし
	78住P. 56	1	オニグルミ (炭化核、(5))、ミズキ (炭化核、(1))
	79住P-43	1	なし
	79住P-45	1	なし
	79住焼土	1	オニグルミ (炭化核、(3))
	J91住土坑 (2) P-4	1	なし
	J92住P-3	1	オニグルミ (炭化核、(6))
	J92住P-7	1	オニグルミ (炭化核、(1))
	J92住P-8	1	オニグルミ (炭化核、(2))
	J92住P-9土	1	オニグルミ (炭化核、(4))
	J92住P-11	1	オニグルミ (炭化核、(1))、ミズキ (炭化核、(1))
	J92住P-12	1	オニグルミ (炭化核、(1))
C	J92住P-13	1	なし
	J92住P-19	1	なし
	J92住P-20	1	なし
	J92住P-33	1	なし
	J92住P. 24	1	なし
	J92住P-25	1	オニグルミ (炭化核、(1))
	J92住P-27	1	なし
	J95 P-17	1	なし
	J95住P-33	1	ミズキ (炭化核、(1))
	J95住P-61	1	なし
	J97住ビット1	1	クリ (炭化子葉、(1) …1/2個)
	J97住P-165	1	なし
	J-98住P-1	1	なし
	J99住P-2	1	なし
	J99住P-3	1	なし
	J99住P-5	1	オニグルミ (炭化核、(1))
	J100住炉	1	なし
	J101住ウカメ	1	オニグルミ (炭化核、(2))
	J102住炉	1	オニグルミ (炭化核、(1))
	12土坑P-1	1	なし
179土坑P-2	1	なし	
232土P-2	1	なし	
244土坑	1	なし	
247土坑埋ウカメ	1	なし	
248土坑	2	なし	
E 38G. 2土坑	1	なし	
F-14土器	1	なし	
F -39	1	なし	
G -35-5	1	なし	
I -42土坑	1	クリ (炭化子葉、(約50) …約10個分)	
I -42-1	1	オニグルミ (炭化核、(2))	
I -42-2土	2	クリ (炭化子葉、(多数) …20個分以上)	
D	2住炉	1	なし
	3住ウカメ炉体	1	オニグルミ (炭化核、(1))
	7住ベルト	1	なし
	24土坑	2	オニグルミ (炭化核、(3))
90土	1	なし	
E	1住炉	1	なし
	ウカメ1号	1	なし
	64土坑	1	なし
	64土坑No. 7土層	2	オニグルミ (炭化核、(14) …1/3~1/2個分)
64土坑No. 8土層	2	オニグルミ (炭化核、(多数) …2~4個分)	





第42図 出土した炭化種実 (スケールは1 mm)

1. オニグルミ、炭化核破片、73土坑 2. オニグルミ、炭化核破片、8住ウメガメNo. 362  
3. クリ、炭化子葉破片、235土坑



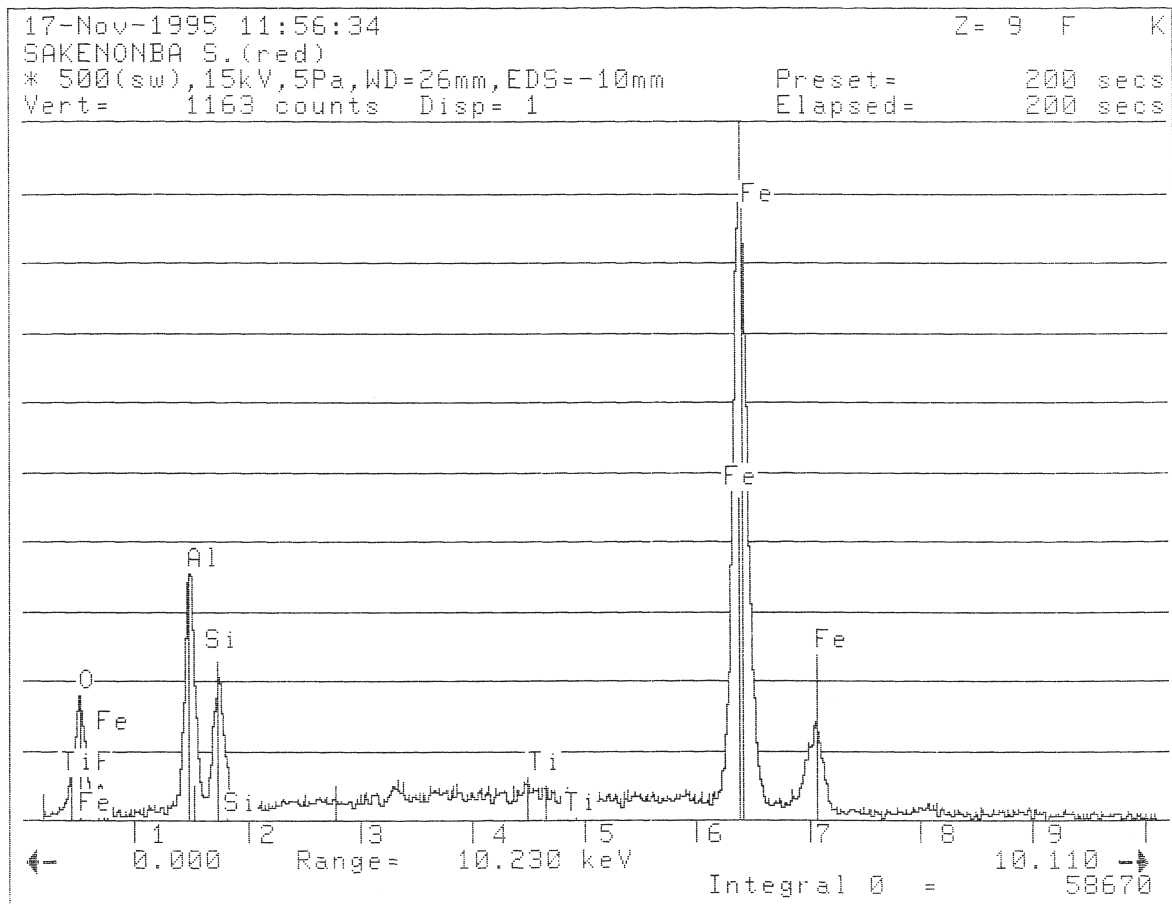
第43図 出土した炭化種実 (スケールは1 mm)

1. クヌギ近似種、炭化子葉破片 (半割)、2住 2. クリ、炭化子葉破片、1'-42-22 3. サンショウ属、炭化種子破片、13住炉土器 4. キハダ、炭化種子破片 (半割)、2住 (2) 5. ミズキ、炭化核完形、14住炉

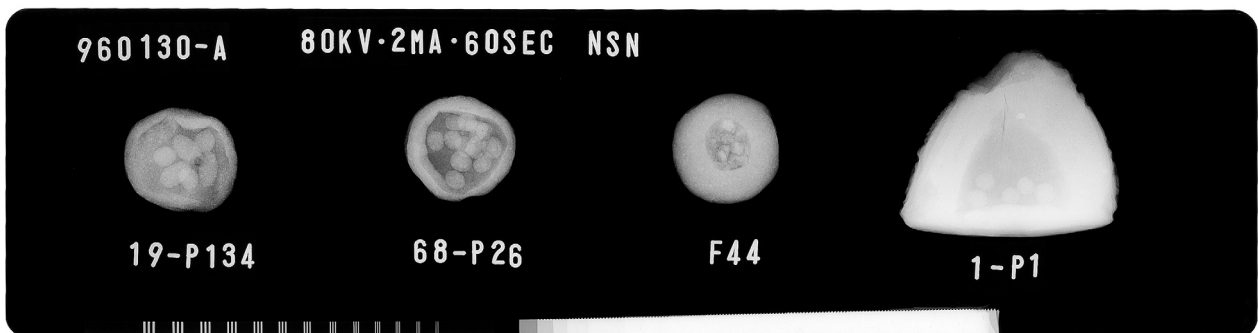
## 第7節 彩色土器塗料の蛍光X線分析と土鈴・土偶のX線写真

図版編第50図1の諸磯b式期の浅鉢彩色土器について、蛍光X線による非破壊分析を、帝京大学山梨文化財研究所鈴木稔氏に実施していただいた。第44図にスペクトル図を示した。鉄分に強いピークがみられ、酸化鉄が原材料であることが分かる。

また、体内に空洞があり小石ないし土玉を入れた土偶や土鈴について、内部の観察のためレントゲン撮影を、鈴木稔氏に実施していただいた。第45図にネガ状態の写真を示した。1-P1が土偶で、C区1住P1（図版編第111図1）である。土鈴は、19-P134がC区19住P134（図版編第127図2）、68-P26がC区68住P26（図版編第127図7）、F44がF'44Pit3（図版編第127図5）である。いずれも、中の玉は丸みが強く、土玉である可能性が高い。



第44図 彩色土器塗料の蛍光X線分析スペクトル図



第45図 土鈴・土偶のレントゲン写真

## 第7章 まとめ

酒呑場遺跡は、4次にわたり9区約11,000m<sup>2</sup>の発掘調査がなされ、今回の遺物編により一応ここにこれらの報告を終了することになる。改めてこれまでに刊行された酒呑場遺跡関連の報告書を列記すると、

1. 山梨県教育委員会・山梨県農務部1997『酒呑場遺跡（第1・2次）—酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書（遺構編—）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第135集、（A～H区）
2. 山梨県教育委員会・山梨県農務部1997『酒呑場遺跡（第3次）—酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書（遺構編—前編—）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第136集、（I区）
3. 山梨県教育委員会・山梨県農務部1998『酒呑場遺跡（第3次）—酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書（遺構編—後編—）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第169集、（I区）
4. 山梨県教育委員会・山梨県農務部2003『酒呑場遺跡（第4次）—酪農試験場屎尿発酵施設建設に伴う発掘調査報告書—』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第209集、（J区）
5. 山梨県教育委員会2004『酒呑場遺跡（第1～3次）—酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査—（遺物編—図版編）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第216集
6. 長坂町教育委員会1996『酒呑場遺跡G区』長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

の6冊である。7冊目の本報告書で全部出揃うことになる。本報告書で扱う1～3次調査の出土品はコンテナ約2,700箱におよび、十分消化できたとは言いがたい状況であり、土器は大形個体でありながら縄文のみのものなど実測・報告ができなかったものが相当数ある。石器についても膨大な資料数のため実測図については代表例の提示を行い、住居跡ごとについては実数の提示にとどまった。

酒呑場遺跡の縄文時代集落像については、大きく3段階の集落がみられる。第1段階は諸磯b式期で、I・D・B・J区にかけて、長方形で中央部分が空白となるような小さな環状集落の存在を推定できる。次に五領ヶ台式期から新道式期にかけてはC・D・G・I区に限定的な環状集落が形成される。この環状集落は、中期中葉の藤内式期から井戸尻式期へと引き継がれるが、環状集落の内側へと住居跡分布の密度を濃くしている。これらが第2段階である。中期後葉の曾利式期では環状集落を構成していたC・D・I区から住居跡の分布がほとんどなくなり、A・B区での住居跡分布が濃くなる。これが第3段階である。これ以外に前期初頭の中越式期の住居跡2軒と、後期初頭の称名寺式期が1軒ずつみられるが、集落を構成してない。さらに、古墳時代前期の集落が形成されるが、八ヶ岳南麓では稀少な例である。また、通常みられる平安時代の遺構・遺物がほとんどみられないのも特徴といえる。

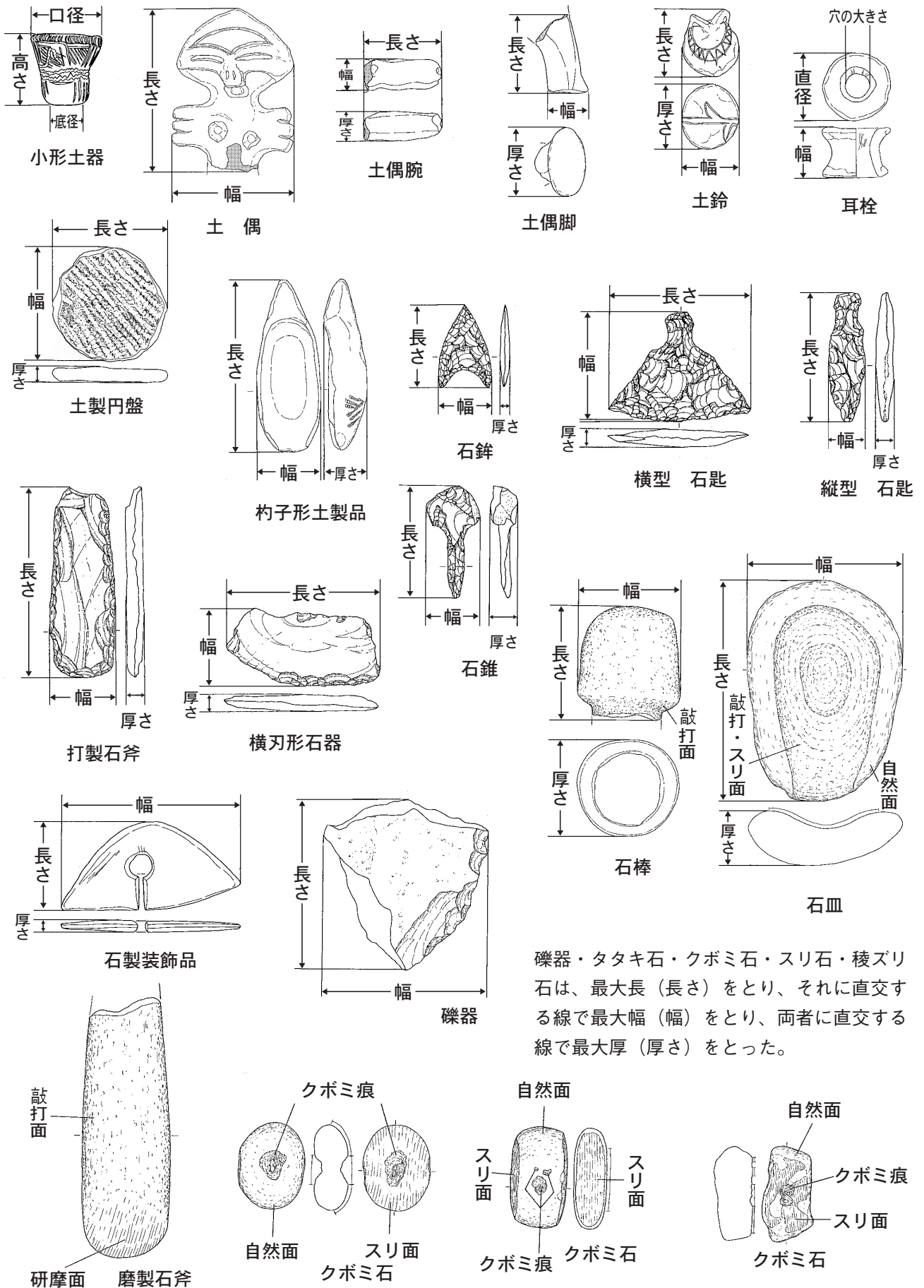
遺物群では、土器では、早期終末から前期中葉の木島式土器群、前期初頭の中越式土器群、前期前半の羽状縄文系土器群が若干みられるものの、遺構に伴うものは中越式のみである。諸磯式土器群は比較的豊富で、集落を構成する。諸磯b3式段階を中心に諸磯a～c式がみられるが、諸磯a式初頭はまったくみられず、諸磯a式後半、b式初頭、c式は希薄であり、遺構もほとんどみられない。前期末の十三菩提式から五領ヶ台式Ⅱ式の古い段階まではほとんど見られない。五領ヶ台式Ⅱ式段階から土器が急激に増加し、それ以降継続的に曾利Ⅱ式段階までみられる。型式としては、五領ヶ台式Ⅱ式から井戸尻式初頭にかけては豊富であるが、井戸尻式中葉段階の土器群が希薄で、曾利式の土器群も他の遺跡と比較して貧弱である。称名寺式段階の土器はあるものの、それ以降の土器はごく少量ある程度である。

土製品では土偶が152点と多い点が目につく。曾利式期がほとんどなく、五領ヶ台式期から井戸尻式期のもので、猪沢式期から新道式期の土偶が多い点の特徴である。正座位のポーズ形土偶が目を引き、酒呑場型として認識されている。また、粥状食料の存在を示す杓子形土製品が19点と多く出土している点も注目される。

石器については、多量に出土はしているものの、どの時期に帰属するかは出土状態をたよりにしなければならない。住居跡内出土遺物の垂直分布を検討し、下層の無遺物層、中層の当該時期遺物包含層、上層の住居埋没以降の遺物包含層の3区分を行い、中層が住居の帰属時期に関する遺物の様相を示すことが確認できた。下層の出現過程を検討し、

屋根の土葺きがなされたと推定し、住居での生活期間中に土葺き中に混和された遺物である可能性を示した。したがって、中層遺物群を注意深く抽出すれば、ある生活期間中での土器や石器の内容や量の把握ができる可能性がある。礫も土葺きの混和材として持ち込まれた可能性があり、上部構造の違いを背景として混和量に時期差があることが把握された。石器の特徴としては、石鏃が諸磯式期から曾利式期まで幅広から細長へと徐々に形態変化している点、打製石斧の最大長のものが徐々に長くなり藤内式期で最大となる点、藤内式期を中心として小形礫器が多く見られる点など、把握できたことが成果としてあげられる。また、石皿の出土数が特に多く、諸磯式段階からその状況が出現することから、石皿を多用する集落としての位置づけが当初よりあった可能性が指摘できる。

理化学分析では、胎土分析で異系統土器を中心に行ったが、中越式の一部に在地的要素があり、安山岩質の八ヶ岳系堆積物利用が前期初頭まで遡る可能性が示された。J区の報告で諸磯b式土器群を分析したが、八ヶ岳系の胎土がみられず花崗岩を主体とした胎土で、土器作りのシステムが時期によって異なることが解明されつつある。黒曜石産地分析では、膨大な資料から抽出した100点あまりを分析したが、諏訪星ヶ台群を主体に、和田群が一定量みられ、蓼科群が少量みられる状況である。J区の報告で、資料抽出法も含め検討したが、五領ヶ台式期から曾利式期までおおむね同じような状況である。注目されるのは、神津島恩馳島群が少量ではあるが確認された点である。信州産黒曜石の優位な地域になぜ遠く神津島産の黒曜石が搬入されたのか今後の課題である。使用痕分析では、A～H区の229点の石匙を観察し、チャート・黒曜石製の27点に使用痕が確認された。使用痕のうち光沢はE・Iタイプが多く、A・Bタイプがみられないことから、骨・角・皮・肉の処理に使用され、植物質の対象の加工には使われなかった可能性が指摘された。線状痕からは、カッティングやスクレーピングの動作が推定されている。炭化材の分析ではクリ材の多出が把握された。古墳時代ではコナラ節が中心で、時代による建築材の違いが推定された。炭化種実では、オニグルミ・クリ・コナラ属（クヌギ）・サンショウ属・マメ類（自然種）・ミズキ・キハダが確認された。炭化材の分析結果と合わせ、クリの存在は食料として大きかったものと思われる。オニグルミも出土数は多く、利用頻度が高かったものと思われる。コナラ属のクヌギについては、特にアクの強い種類であり、高度なアクヌキ技術が必要である。杓子形土製品の存在から、粥状食物の存在が推定されるが、クヌギなどが利用されていた可能性は高い。マメ類は種の同定はできなかったが、小形のため自然種とされた。サンショウ属も含めて食料とされていた可能性は高い。こうした植物性食料と、クボミ石、スリ石、石皿といった石器群がどう結びつくか検討課題となる。ミズキ・キハダについては食料というよりも燃料とした枝に種実が付いていたものと思われる。



礫器・タタキ石・クボミ石・スリ石・稜ズリ石は、最大長（長さ）をとり、それに直交する線で最大幅（幅）をとり、両者に直交する線で最大厚（厚さ）をとった。

第46図 付表計測位置と図版編実測図凡例

付表 図版編掲載遺物観察表

## 土器

図版	図内番号	出土地点	住居番号	器形	器形特徴	把手・文様等の特徴	色調	時期
第1図	1	A区	1号住居	深鉢	口縁部最大径、括部・胴部再び膨む・底部極端に縮小。	口縁部無文、括れ部4単位X字状把手、X字状把手より半肉状隆帯・渦巻懸垂文。	褐色	曾利Ⅲ段階
第1図	2	A区	1号住居	深鉢	口縁部で最大径、括部・胴部再び膨らむ。	条線の蛇状懸垂文。	橙	曾利Ⅲ式
第1図	3	A区	1号住居	深鉢	底部で縮小する深鉢。	縁部欠損、地文集合沈線に、垂下する蛇状沈線。	にぶい褐色	曾利Ⅲ段階
第1図	4	A区	1号住居	深鉢F	括れ部を有し、直下で文様帯、後、最大径。	括れ部直下に隆帯文・方形区画、内側は集合沈線、区画する縦位隆帯上にはS字文。	にぶい橙	曾利3式
第1図	5	A区	4号住居	深鉢	口縁部・丸み。括部有し、胴部で最大径。	口縁部無文、括れ部直下・3～4本の横位粘土貼付文と垂下する粘土貼付懸垂文、地文縄文。	にぶい橙	曾利3式
第1図	6	A区	9号住居址	深鉢	括部から極端に外反する口縁部、中央部で膨らむ。	口縁部・重弧文、括部直下は斜行集合沈線地文と粘土貼付で、籠目文形成。胴部・地文条線、粘土貼付隆帯によりU字状懸垂・渦巻文の組合文、4単位。	橙	曾利2式
第2図	1	A区	10号住居址	深鉢	口縁部・4単位小突起、胴中央付近で括れ。	口縁部・楕円区画文が一周、胴部は直線・先端状懸垂文で4区画。内側は綾杉状沈線が充填。	にぶい橙	曾利Ⅲ式
第2図	2	A区	13号住居址	壺	胴部・ほぼ球形、口縁部・直立。	無文。4単位・橋状把手と上下2段の連結隆帯文。	にぶい赤褐色	曾利Ⅳ式
第2図	3	A区	13号住居址	深鉢F	小底部より極端に外反、口縁部では直立。	両耳・把手・横帯文、内側は集合沈線、渦巻隆線により区画。	赤褐色	曾利4式
第2図	4	A区	13号住居址	深鉢F	背の高い底部、口縁部括れ部から直立する。	両耳・把手・横帯文・内側縦列沈線。	にぶい赤褐色	曾利Ⅳ式
第2図	5	A区	13号住居址	深鉢	直線的に外反するバケツ。	口縁部・長楕円文による文様帯、以下は、沈線地文集合・頭部逆Uの平行沈線懸垂文で4区画。	明赤褐色	曾利式
第2図	6	A区	13号住居址	深鉢	底部よりほぼ直線的に外反するバケツ。	1条の口縁部に平行する沈線、以下は集合沈線。	暗褐色	曾利Ⅳ式
第2図	7	A区	13号住居址	深鉢	直線的に開くバケツ。	口縁部に1条平行沈線を施した後、4単位コ状区画、内側に縦位・斜行集合沈線。	にぶい赤褐色	曾利Ⅳ式
第2図	8	A区	13号住居址	深鉢	底部より外反、胴部括れ。	口縁部に平行する1条の沈線、以下は集合沈線。	にぶい橙	曾利Ⅳ式
第2図	9	A区	13号住居址	深鉢	底部より口縁部まで直線的に開く。	不規則な地文集合沈線に懸垂文を配す。		曾利Ⅳ段階
第2図	10	A区	13号住居址	深鉢	底部より口縁部まで開き口縁部外反。	無文で整形痕が残る。	にぶい橙	曾利Ⅳ式
第2図	11	A区	13号住居址	深鉢	底部より口縁部まで開くが、胴部はやや曲線。	無文の粗製土器で整形痕が残る。	にぶい橙	曾利Ⅳ段階
第2図	12	A区	13号住居址	浅鉢	やや曲線的に口縁部まで外反。	口縁部に平行して1条の沈線文。	橙	曾利Ⅳ段階
第2図	13	A区	13号住居址	浅鉢		口縁部に平行する1条の沈線胴部では、整形痕が残る。		曾利Ⅳ段階
第2図	14	A区	16号住居址	椀	小型土器。	無文。	赤褐色	中期
第3図	1	A区	16号土坑	深鉢	肩部で最大径、口縁部は直立。	橋状突起。突起下部中心に左右に先端渦巻文。地文、不規則な綾杉文。	にぶい橙	曾利Ⅳ段階
第3図	2	A区	67号土坑	浅鉢	底部より極端に外反し、口縁部は直立する。	器体全体に縄文。		曾利Ⅳ段階
第3図	3	A区	3号土坑	深鉢	胴部上半は欠損、口縁部以下は欠損。外反して口縁部では直立。	胴部下に渦巻文、4単位の小突起、口縁部・先端渦巻の隆帯区画。	にぶい橙	曾利4段階
第3図	5	A区	314号土坑	深鉢		3本一組の沈線・懸垂文で6区画、内側は不規則な綾杉状沈線を地文に蛇状懸垂文	にぶい橙	曾利Ⅳ式
第3図	6	A区	311号土坑	深鉢	口縁部欠損。胴部やや丸み。	胴部集合条線。	にぶい赤褐色	曾利Ⅱ段階
第3図	7	A区	352号土坑	深鉢	口縁部はやや外反・胴部筒形。	有孔鐔付土器。	赤褐色	井戸尻
第3図	9	A区	1号配石	脚付碗				
第3図	10	A区	5号配石	深鉢	基本的にバケツ形、括れ部有り。	口縁部に平行して半肉状隆帯・垂下する8条の半肉隆帯。	にぶい赤褐色	曾利Ⅳ段階
第7図	1	B区	1号住居	深鉢	口縁部が開き、直線的な胴部。	括れ部に5条の平行隆帯。胴部は地文条線に4本一組の貼り付け懸垂文。	にぶい赤褐色	曾利古Ⅰ新式
第7図	2	B区	1号住居		口縁部、胴部伴に丸みを持つ形態。	括れ部に2条の平行半肉状隆帯。	暗褐色	曾利Ⅰ新段階
第7図	3	B区	1号住居	深鉢	胴部/筒形で口縁部開く。	X字状突起から垂下するU字状懸垂文。地文RL縄文。	にぶい橙	曾利Ⅰ段階
第7図	4	B区	2号住居	深鉢	口縁部、胴部下半は欠損して現状は筒型。	X字状把手、地文に、烈点文を配し、4本一組の懸垂文。	にぶい褐色	曾利Ⅱ段階
第7図	6	B区	3号住居	深鉢	底部よりやや曲線で膨らみを持ちながら外反する深鉢。			曾利Ⅱ式
第7図	7	B区	3号住居	深鉢	胴部は球形、口縁部は外反する。	括れ部に1条の平行貼付文。胴部は、括れ部以下は横走する集合半肉状隆帯を地文・貼付懸垂文。	にぶい赤褐色	曾利Ⅱ段階
第8図	1	B区	8号住居	深鉢	胴部上位に最大径、括れ部より極端に外反。	胴部・地文集合条線に粘土貼付懸垂文。括れ部粘土貼り付平行隆帯文、口縁部重弧文。	明褐色	曾利Ⅲ段階
第8図	2	B区	8号住居	深鉢	口縁部欠損。胴部下に最大	地文集合沈線地文に粘土貼付蛇状懸垂文。		曾利Ⅲ段階
第8図	3	B区	8号住居	深鉢F	胴部丸みを有する。口縁部は括れ部よりやや外反。	両耳壺、肩部に、先端渦巻楕円区画文。	にぶい橙	曾利Ⅲ段階
第8図	4	B区	8号住居	深鉢	X字状大型土器。	地文集合沈線に大型な渦巻隆帯を垂下。	にぶい黄橙	曾利Ⅲ段階
第8図	5	B区	8号住居	深鉢	口縁部・極端に外反。	太い半肉状隆帯文を基調とする。口縁部文様帯は、先端渦巻の楕円区画、地文集合条線に口縁部文様帯より懸垂文。	にぶい褐色	曾利Ⅲ段階
第8図	6	B区	8号住居	深鉢	胴部中央で膨らみの頂点となり括れを形成して口縁部で外反する深鉢。	口縁部に沿って1条の沈線、それを境に上部の口縁部端は無文、され以下では地文条線に、先端渦巻の状懸垂文。	灰褐色	曾利Ⅲ式

第8図	7	B区	8号住居	深鉢	口縁部、胴部上半欠損。器体下部・膨み頂点。	地文集合沈線に半肉状渦巻。	にぶい褐色	曾利Ⅲ段階
第8図	8	B区	8号住居	深鉢	胴部中央で最大計、括部を形成、口縁部で外反。	口縁部に平行して2条の沈線、胴部・地文集合条線に蛇状粘土貼付文。	にぶい橙	曾利Ⅲ段階
第8図	9	B区	8号住居	深鉢	底部よりやや外反、胴部中央最大計、括部より外反。	口縁部に平行して2条の沈線、胴部・地文集合条線に直線状の粘土貼付懸垂文。	にぶい赤褐色	曾利Ⅲ式
第9図	1	B区	8号住居	深鉢	底部より外反し、胴部中央で最大径。括れ部を形成し、胴部とほぼ同角度で広がる。	口縁部・先端渦巻帯区画文帯。胴部・無文。	灰褐色	曾利Ⅲ段階
第9図	2	B区	8号住居	深鉢	底部より外反・胴部最大計。括れ部・形成、外反する口縁部。	口縁部では、先端蕨状の帯区画文。胴部は、八字状文に蛇状沈線・懸垂文。	にぶい褐色	曾利Ⅲ段階
第9図	3	B区	9号住居	深鉢	胴部中央で膨み括部に達し、口縁部でさらに外反す。	地文、縄文。	黒褐色	曾利Ⅲ段階
第9図	4	B区	9号住居	深鉢	器体中央やや上位で膨らみ最大計、極端に括れ、口縁部はほぼ直立。	口縁部・隆帯文により区画文を形成。胴部・隆帯による懸垂文後、縄文を施文。	にぶい赤褐色	曾利Ⅲ式
第9図	5	B区	9号住居	深鉢	底部よりやや外反。胴上半部は欠損。	4単位に2条一組の平行沈線を配し、その間に不規則な菱形状沈線さらにその中央には蛇状沈線。	灰褐色	曾利Ⅳ段階
第9図	6	B区	9号住居	深鉢	底部より口縁部まで直線的に開く。	口縁部・1条の平行沈線、コ状に4単位に区画されその中に、八字状紋が充填される。		曾利Ⅴ段階
第9図	7	B区	10号住居	深鉢	胴部上半は欠損。底部より外反して中央で頂点に達する。	懸垂文により4分割、内側に逆八字文が充填。	黒褐色	曾利Ⅴ段階
第9図	8	B区	11号住居	深鉢	底部より外反し器体上半部で頂点となる。		褐色	曾利Ⅴ段階
第9図	9	B区	11号住居	深鉢	胴上半部は欠損。底部より緩い弧を描き外反。	地文縄文。	褐色	曾利Ⅲ段階
第9図	10	B区	12号住居	深い鉢	胴部上部欠損。外反する口縁部。	蛇状貼付隆帯による懸垂文により4分割後、重弧文。括部にX字状把手。胴部地文縄文。	橙	曾利Ⅲ段階
第9図	11	B区	12号住居	深鉢	胴部球形に近い形状、口縁部・括部より外反。	口縁部、半竹工具・集合斜行沈線・胴部は集合沈線後、粘土貼付・蛇状隆線の懸垂文。	鈍い橙	曾利Ⅲ段階
第9図	12	B区	16号住居	深鉢	底部より外反し胴部中央で括れる。口縁部欠損。	地文集合沈線後、隆帯文と蛇状沈線による懸垂文。	にぶい橙	曾利Ⅳ段階
第10図	1	B区	16号住居	深鉢	括れ部を形成し口縁部に至る。	口縁部に平行する一条の沈線、胴部では、4単位に状区画、内には地文集合条線に蛇状沈線を施す。	にぶい褐色	曾利Ⅳ段階
第10図	2	B区	16号住居	深鉢	括れ部を形成して外反する。	口縁部に平行して一条の沈線。胴部、4単位状区画に分割後、内に地文条線後蛇状懸垂文。	にぶい褐色	曾利Ⅳ段階
第10図	3	B区	17号住居	深鉢F	口縁部は括部よりく字状に広がる。	口縁部無文。括部直下に、先端渦巻帯区画文。	明赤褐色	曾利Ⅲ段階
第10図	4	B区	33土坑		胴部筒型。括部から口縁部外反。	口縁部無文、胴部地文集合沈線。	灰褐色	曾利Ⅰ新段階
第10図	5	B区	67土坑	碗	底部より曲線で口縁部に達する。	無文。	橙	曾利Ⅲ段階以
第10図	6	B区	67土坑	深鉢	底部より直線的に外反。	口縁部に沿って一条の沈線と垂下する懸垂文。	褐色	曾利Ⅲ段階
第10図	7	B区	129土坑	深鉢F	括部形成後再び外反。	括部直下に橋状把手を伴う帯区画文。	褐色	曾利Ⅲ段階
第10図	8	B区	130土坑		直線的に開くバケツ。	1対の三角状突起。口縁部・1条の沈線。隆帯文・懸垂文で4分割、は曲線文による条線。	にぶい褐色	曾利Ⅴ段階
第10図	10	B区	142土坑	深鉢	底部より直線的に開くバケツ。	口縁部に平行する沈線。胴部コ状区画した後、八字状文で充填。	橙	曾利Ⅴ段階
第10図	11	B区	155土坑		底部より外反、括部でさらに急反する。	口縁部・貼付隆帯による帯区画文帯。胴部、2段縄文。		曾利Ⅰ新段階
第10図	12	B区	155土坑	深鉢	胴部・欠損。丸い口縁部、無文。	括部に横走する貼付粘土紐、胴部・集合沈線。	にぶい褐色	曾利Ⅰ新段階
第11図	1	B区	182土坑	脚付深鉢	器体の中央が括る。	口縁部に連弧状文、胴部は懸垂文を施し、内側に横位・不規則条線。	にぶい赤褐色	曾利Ⅴ段階
第11図	3	B区	184土坑	脚付土器	胴部下位より直線的に開く。	口縁部に横位の弧状文を連続施文、胴部では簡略された沈線による懸垂文。	明赤褐色	曾利Ⅴ段階
第11図	4	B区	248号土坑	深鉢	底部より外反して中央で括れる。口縁部欠損。	2本1組の懸垂文で4分割後、櫛状工具による刺突行為。	にぶい褐色	曾利Ⅴ段階
第11図	5	B区	グリット	深鉢	底部より外反、口縁部下端で括部。	口縁部無文帯。口縁部は無文。胴部半肉状隆帯・懸垂文で6分割後、地文条線に蛇状粘土貼付文。	にぶい橙	曾利Ⅳ段階
第11図	7	B区	グリット	深鉢	括れ部以上は、欠損。底部より急反して胴部中央で頂点、括部からさらに外反。	地文集合条線に沈線・懸垂文で分割、その間に蛇上沈線。	にぶい橙	曾利Ⅴ段階
第12図	1	C区	1号住居	深鉢	底部・緩いく字状に屈折。胴部・円筒状に内湾する口縁部。	口縁部・胴部・底部の文様帯の3段構成。口縁部、内窓と褶曲隆帯文組合の大突起と3個の眼鏡状小突起で4分割、突起の下位は櫛状区画が施される。胴部は三角交互、底部は帯区画文。施文特徴は隆帯文・キャタピラ・波状沈線の組み合わせ。	橙	藤内Ⅲ段階
第12図	2	C区	1号住居		胴部ほぼ円筒状に、膨らみを持つ外反する口縁部が着く深鉢。	文様帯は口縁部・胴部（括部文様帯含む）・底部で構成。口縁部は4単位の字状突起。胴部は曲線隆帯文、連続爪形文、集合沈線、波状沈線が施される。底部は帯区画文。	明赤褐色	藤内Ⅲ段階
第12図	3	C区	1号住居	深鉢	底部が開き、中央が狭く、口縁部で開く深鉢。	口縁部、括・胴上部、胴下半・底部に分かれる。口縁部は、の字状・眼鏡状突起が交互に配す。突起の下位に対称・三角区画、括れ・胴上半は帯区画が3段、胴下半～底部は縄文。	明褐色	藤内Ⅲ段階
第13図	1	C区	1号住居	深鉢	直線的に開き口縁部で丸くなり、内湾。	複合三角文、胴部・2段縦列沈線、	橙	藤内Ⅲ式

第13図 2	C区	1号住居	深鉢	胴部ほぼ円筒状に膨らみを持つ外反する口縁部。	口縁部は小突起4単位、口縁部一段縦区画文、その直下に鐫付。以下は縄文2段RL。	褐色	藤内Ⅲ段階
第13図 3	C区	1号住居	深鉢	底部屈折。胴部中央で狭く口縁部で大きく外反して内湾。	4単位眼鏡状突起。文様帯口縁部、複合三角系。	明るい赤褐色	藤内Ⅲ段階
第13図 4	C区	1号住居	深鉢	底部緩い屈折。外反して口縁部。4単位突起+U字口縁部。	口縁部文様帯は小円を有する楕円区画横帯文。胴部・縄文。	明褐色	藤内Ⅲ段階
第13図 5	C区	1号住居	深鉢	ほぼ直線的に開き口縁部で丸くなる。	小突起・口縁部無文。胴部・縦位区画文。	橙	藤内Ⅲ段階
第13図 6	C区	1号住居	深鉢	底部付近屈折底。胴部上方に直線的に伸び、口縁部で丸み・内湾。	4単位の眼鏡状突起。幅広半肉隆帯+キャタピラ文による幾何学的懸垂文。	明赤褐色	藤内Ⅲ段階
第13図 7	C区	1号住居	深鉢	胴部筒型。口縁部丸みを呈し僅かに内湾。	4単位、眼鏡状突起。胴部は弧状隆帯により区画。	灰褐色	藤内Ⅲ段階
第13図 8	C区	1号住居		胴下半欠損。4単位の字状変形突起。	口縁部無文。括れ部直下横長区画文。胴部、J字懸垂文と三角区画文の組み合わせ。	暗褐色	藤内Ⅲ段階
第14図 1	C区	1号住居	深鉢	屈折底。バケツ状に外反。	口縁部大半が欠損。ラーメン状半肉隆帯が多用。	褐色	藤内Ⅲ
第14図 2	C区	1号住居	深鉢	底部に張り。緩い弧状に外反。口縁部内湾。	大突起1個、小突起3個の4単位。口縁部は突起から懸垂する渦巻文。胴部削り出し状の太い隆帯文による、直線・曲線文。	橙	藤内Ⅲ
第14図 3	C区	1号住居	深鉢	胴下位欠損。直線的に外反して開くバケツ。	大突起1個。口縁部・波状隆帯により区画後、内側に三叉文。以下は縄文。	にぶい赤褐色	藤内Ⅲ段階
第14図 4	C区	1号住居	深鉢	底部欠損。直線的に開くバケツで鐫付土器。	大突起1個。縦区画文。	赤褐色	藤内Ⅲ
第14図 5	C区	1号住居	深鉢	底部下半部欠損。直線的に開くバケツ	口縁を隆帯状に施し、その直下に鐫付隆帯文。胴部は鐫から4均等に懸垂文で区画。ラッパ状突起1個を配する鐫付土器。鐫からは4均等に懸垂文、胴部Ⅳ分割、地文縄文。	赤褐色	藤内Ⅲ段階
第14図 6	C区	1号住居	深鉢	底部張り、緩い弧状で外反。	キャタピラ隆帯文。	浅黄橙	藤内Ⅲ段階
第14図 7	C区	1号住居	深鉢	屈折底。胴部上半欠損。	板状の三角突起と垂下する眼鏡状突起の組み合わせ。口縁部・横長方形横帯文。胴部は縄文。	にぶい橙	井戸尻Ⅰ段階
第14図 8	C区	1号住居	深鉢	底部張り、底部付近から外反後、口縁部直下で膨らむ。	括部相当位置に、2段の楕円区画の横帯文。胴部・地文縄文。	暗褐色	藤内Ⅲ段階
第14図 9	C区	1号住居	深鉢	胴中央部より欠損。口縁部まで直線的に外反。	円形・窓突起に蛇状隆帯の組合突起。それより隆帯文がクランク上に垂下。口縁部以下は縄文配。	にぶい橙	藤内Ⅲ段階
第14図 10	C区	1号住居	深鉢	筒型胴部に口縁が広がる形態。直線的に外反、口縁部で極端に開く。	口縁部に円窓と蛇状隆帯文の組み合わせ突起。口縁部無文で胴部縄文。	橙	藤内Ⅲ段階
第14図 11	C区	1号住居	深鉢	極端な屈折底。胴部下位から極端に外反した後、口縁部直下で丸く膨らむ。	突起欠損。括部に配置された眼鏡状突起から地文縄文にJ字状懸垂紋。地文縄文で口縁部付近に4単位、擦消円文。	橙	井戸尻Ⅰ段階
第14図 12	C区	1号住居	深鉢	胴部下位欠損・円筒状。口縁部欠損。底部屈折底。胴部下位から弧状に外反。	口縁部楕円区画文。直線とJ字状懸垂文が交互に配される。	暗赤褐色	藤内Ⅲ段階
第15図 1	C区	1号住居	深鉢	波状口縁、大きな底部。	波の頂点から連鎖状文が垂下。底部は、算盤底が肥大化して体部の4まで伸びる。平出ⅢA類系。	にぶい褐色	藤内Ⅲ段階
第15図 2	C区	1号住居	深鉢	胴下半は極端に外反して丸く、胴部中央で狭まり、口縁部は直立する。	4単位の小突起。口縁部文様帯は小突起を起点に、2単位・偽反射鏡文が展開する。胴部は縄文。	褐色	藤内Ⅲ段階
第15図 3	C区	1号住居	深鉢	直線的に外反するバケツ形。	無文で、指頭痕跡。	橙	藤内Ⅲ段階
第15図 4	C区	1号住居	碗	碗形で片口状そぞぎ口を有す	無文	にぶい黄橙	藤内Ⅲ段階
第15図 5	C区	3号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。	粘土紐貼付により、口縁部から胴上半に4単位楕円区画が交互2段、以下は粘土紐によりクランク懸垂文。	にぶい赤褐色	猪沢
第15図 6	C区	3号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。	1対の突起。器面全面に押引文。	にぶい褐色	猪沢
第15図 7	C区	3号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。	口縁部2段区画。縦位の楕円区画が2段。角押文。	にぶい橙	猪沢
第15図 8	C区	3号住居	深鉢	口縁部欠損。直線的に開くバケツ。	4単位楕円形を横帯文状に配し、下位にはクランク文を施文。	にぶい赤褐色	猪沢
第15図 9	C区	4号住居	深鉢	口縁部以下は欠損。4単位の字状突起。	複合三角文で内部には玉抱三叉文。炉体土器。	にぶい橙	藤内Ⅰ段階
第16図 1	C区	4号住居	深鉢	底部下位欠損。口縁部は丸みを有し内湾する。	三角状突起で両サイドは非対称に小円形文でまとめる。口縁部直下に隆帯文による鐫、それから垂下する4単位の懸垂文により縦区画文を形成する。	明赤褐色	藤内Ⅱ段階
第16図 2	C区	4号住居	樽型	底部より外反して肩部で丸く最大径となり、以上は内湾する樽形状態。	口縁部無文帯、それ以下で渦巻と波状文との連結文で土器を1周させる横帯文。胴中央以下では結節縄文にクランク状も無文。	明褐色	藤内Ⅱ式
第16図 3	C区	4号住居	深鉢	口縁部、底部欠損で胴部筒形。	隆帯文による区画内部はJ字渦巻文が際立つ。	明褐色	藤内Ⅱ式
第16図 4	C区	4号住居	樽形	有孔鐫付土器	無文地に粘土貼り付け。	赤褐色	藤内
第16図 5	C区	4号住居	小型・深鉢	直線的に開くバケツ。	地文縄文に半竹による2段の連続三角文。	橙	藤内
第16図 6	C区	4号住居	小型碗		沈線により縦・横位の直線文。		
第16図 7	C区	7号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。	口縁部に1条の平行沈線。コ状区画、内に八字文を充填。	にぶい橙	曾利Ⅴ式
第16図 8	C区	7号住居	浅鉢		無文。	褐色	曾利Ⅴ式
第17図 1	C区	9号住居	深鉢	胴部直線で筒型、口縁部直下で外反。	鐫付・縦区画文。鐫直下には、円区画が横帯。	にぶい黄褐色	藤内Ⅲ式
第17図 2	C区	9号住居	深鉢	胴部丸く口縁部に向かって緩く内湾。	口縁部三角文区画、内部に三叉文。胴部以下縄文。	赤褐色	藤内Ⅲ式
第17図 3	C区	9号住居	深鉢	胴中央以下欠損。口縁部で丸く緩く内湾。4単位、波状口縁。	波状口縁部・玉葱区画文。頸部に楕円区画文、以下縄文。	にぶい黄褐色	藤内Ⅲ式



第17図 4	C区	11号住居	深鉢	底部算盤、胴部ネガ弧状、口縁部丸く開く。	頸部、楕円横帯文。以下は縄文。	明褐色	井戸尻Ⅰ式
第17図 5	C区	11号住居	樽型	胴部膨らみ、口縁部直立、有孔鍔付土器。	粘土張付隆線。	明赤褐色	藤内Ⅲ式
第17図 6	C区	11号住居	深鉢	胴部筒形、口縁部で外反。	貼付隆線を主体に曲線状に施文。焼町系土器。	明赤褐色	藤内Ⅲ段階
第17図 7	C区	11号住居	深鉢	底部屈折底、胴部下位から外反して口縁部内湾するキャリバー。	鍔付。胴部縦位に分割、内には半肉による渦巻、三叉文、U字文。	明褐色	井戸尻Ⅰ式
第18図 1	C区	11号住居	深鉢	狭い底部より外反、括れ部から丸みをもつ口縁部。	肩部に横帯文。下部、縄文。	明褐色	井戸尻Ⅰ式
第18図 2	C区	11号住居	深鉢	胴部破片。	肩部から胴部中央部に横帯文。	褐色	井戸尻Ⅰ式
第18図 3	C区	11号住居	深鉢	屈折底。胴部下位から外反、口縁部でく字に屈曲。	大突起は円窓に褶曲粘土紐針付け。右側にリング状小突起。胴部縄文に摩り消し。	橙	井戸尻Ⅰ式
第18図 4	C区	11号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。	口縁部無文。胴部縄文。	にぶい褐色	井戸尻Ⅰ式
第18図 5	C区	11号住居	深鉢	胴部下位で大きく括れ。キャリバー。	口縁部、胴部下位に横帯文。	明赤褐色	井戸尻Ⅰ式
第18図 6	C区	12号住居	深鉢	口縁部で極端に開き内湾。	文様4段構成。重三角文・玉抱三叉文。	橙	新道
第19図 1	C区	12号住居	深鉢	直線的に開き、口縁部内湾。	文様帯は口縁部複合三角文、無文部をはさみ2段楕円区画横帯文。	にぶい褐色	新道
第19図 2	C区	12号住居	深鉢	口縁部で極端に開きやや内湾。	大突起。重三角文・玉抱三叉文。胴部隆帯文の連続三角文。	にぶい褐色	新道
第19図 3	C区	12号住居	深鉢	口縁部で極端に開きやや内湾。	大突起。重三角文・内側無地。	褐色	新道
第19図 4	C区	12号住居	鉢	4単位波状口縁部。	地文縄文で、掏消による、円形、縦位の摩り消帯。	橙	新道
第19図 5	C区	12号住居	深鉢	口縁部で開きやや内湾。	の字突起。口縁部、無文地に隆帯による連続三角文。胴部、連続にX字状文。	明赤褐色	新道
第19図 6	C区	12号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。	4単位の字突起。胴部抽象文。	にぶい褐色	新道
第19図 7	C区	12号住居	深鉢	口縁部まで直線的に開く。整形痕残る。		明褐色	新道
第19図 8	C区	12号住居	深鉢	口縁部まで直線的に開く。	整形痕。	にぶい褐色	新道
第19図 9	C区	12号住居	深鉢	口縁部まで直線的に開く。	整形痕。	にぶい橙	新道
第19図 10	C区	12号住居	深鉢	口縁部まで直線的に開く。	整形痕。	にぶい褐色	新道
第20図 1	C区	13号住居	深鉢	算盤底、体部中央で括れ極端に開き、口縁部キャリバー形。	1対突起。螺旋状突起。地文は縄文。	赤褐色	井戸尻Ⅱ式
第20図 2	C区	13号住居	深鉢	大きい屈折底、口縁部直下く字括れ外反。	貼付・隆帯文で円弧、直線文。	にぶい橙	井戸尻Ⅱ式
第20図 3	C区	13号住居	深鉢	直線的に広がるバケツ。	口縁部より胴部下位にかけて把手。	橙	井戸尻Ⅱ式
第20図 4	C区	13号住居	深鉢	底部より直線的に広がるバケツ。	コ状懸垂に区画され、八字状で充填。口縁部文様は、両脇押引・粘土貼り付けによる、対抗U字文。	にぶい褐色	曽利Ⅴ式
第20図 5	C区	14号住居	深鉢	体部中央で括れるキャリバー。胴部中央で膨らみ、括れ部から外反。地文集合沈線。		橙	井戸尻Ⅱ式
第20図 6	C区	14号住居	深鉢			橙	曽利Ⅰ古式
第21図 4	C区	19号住居	深鉢	筒型やや外に開く。	口縁部よりJ字懸垂文。半肉状により渦巻、円文。	にぶい橙	井戸尻Ⅰ式
第21図 5	C区	19号住居	深鉢	口縁部、底部が丸く膨らむ、キャリバー。	口縁部文様帯、1対の小突起。胴部下位半円の櫛形文。	橙	井戸尻Ⅰ式
第21図 6	C区	19号住居	深鉢	算盤底。キャリバー形。	頸部に鍔付き。胴部区画文。	橙	井戸尻Ⅰ式
第21図 7	C区	19号住居	深鉢	口縁部が巨大化して、内湾するキャリバー。	口縁部文様帯、胴部下位に半円の櫛形文。	明褐色	井戸尻Ⅰ式
第21図 8	C区	19号住居	深鉢	胴部上半欠損。底部・屈折底。	地文縄文に懸垂隆帯文。	にぶい橙	井戸尻Ⅰ式
第21図 9	C区	19号住居	深鉢	口縁部欠損。胴部筒型。	地文集合沈線に粘土貼り付けJ字文。	橙	曽利Ⅰ式
第21図 10	C区	19号住居	深鉢	胴部欠損。口縁部丸み。		赤褐色	井戸尻
第21図 11	C区	19号住居	深鉢	直線的に広がる。地文縄文。		にぶい褐色	井戸尻
第21図 12	C区	19号住居	深鉢	直線的に広がる。地文縄文。		にぶい橙	井戸尻
第21図 13	C区	19号住居	深鉢	直線的に広がる。地文縄文。		にぶい褐色	井戸尻
第22図 1	C区	19号住居	浅鉢		4単位張り付け突起。地文縄文。	赤褐色	井戸尻
第22図 2	C区	19号住居	台付碗		整形痕。	橙	井戸尻
第22図 3	C区	20号住居	深鉢	胴部欠損。口縁内湾・キャリバー。	口縁部・横帯文。	橙	井戸尻Ⅰ式
第22図 4	C区	21号住居	深鉢	口縁、底部部欠損。胴部下位でネガ曲線。	胴部には半肉隆線による上下幅のある波状文・両脇キャタピラ刻。	暗褐色	藤内
第22図 5	C区	22号住居	深鉢	口縁部キャリバー。	大型突起。胴部縄文。	にぶい黄褐色	井戸尻Ⅰ式
第22図 9	C区	30号住居	深鉢	算盤底、口縁部キャリバー。	小リング付大突起。口縁部半肉状文。胴部縄文。	にぶい褐色	井戸尻Ⅰ式
第22図 10	C区	32住居	深鉢	胴部欠損。口縁部で外反後、やや内湾。	4単位捻り突起。複合三角文。ベン先押引文。	にぶい橙	新道
第23図 1	C区	32住居	深鉢	底部より口縁部に直線的に開く。	4単位捻り突起。粘土貼り付けによる重三角文。	にぶい橙	新道
第23図 2	C区	32住居	深鉢	底部より直線的に外反するバケツ。	平出Ⅲ類Aタイプ、沈線で施文。	にぶい褐色	新道
第23図 3	C区	34号住居	深鉢	口縁部で極端に開き内湾するキャリバー形。	口縁部小突起。隆帯と半肉構成により横帯文。	にぶい赤褐色	井戸尻Ⅰ式
第23図 4	C区	35住居	碗			橙	
第23図 5	C区	35住居	杯			明褐色	
第23図 6	C区	35住居	深鉢	口縁部波状・口縁部下位膨らむ。	文様帯・現状で6段の横帯文。	明褐色	藤内
第23図 7	C区	36住居	深鉢	肩部に最大径。	口縁部・無文。胴部1本引き集合条線地文に、隆帯の懸垂文。	暗褐色	井戸尻Ⅲ
第23図 8	C区	37住居	深鉢	胴部小さく、口縁部が肥大するキャリバー。	無文に横位の粘土紐貼り付け。	橙	井戸尻
第23図 9	C区	38住居	深鉢	口縁部で開き内湾。4単位捻小突起。	口縁部文様帯・重三角文と波状文。	褐色	新道～藤内
第23図 10	C区	38住居	浅鉢	舟形形	両先端に有孔。	にぶい橙	新道～藤内
第24図 1	C区	39号住居	深鉢	胴部直線、口縁部で外反。4単位波状口縁部。	文様帯は、口縁部、頸部、胴部に分かれる。隆帯の両脇には、鈍角なベン先工具による押引文。	橙	新道
第24図 2	C区	39号住居	浅鉢	口縁部、く字に屈曲。	口縁上端押引文、口縁部横位並走沈線、連鎖状文。	明褐色	新道

第24図 3	C区	39号住居	小型浅鉢		無文。	褐色	新道
第24図 4	C区	40号住居	深鉢	直線的に開くバケツ形。	楕円形区画横帯文の3段構成。隆帯文向脇に連続爪状キョウビラ文で抑え、隆帯上部連鎖状文。胴部下部はクランク状文。	にぶい赤褐色	狹沢
第24図 5	C区	40号住居	深鉢	口縁部が膨らむ形態。単独突起+眼鏡状突起。	口縁部4単位楕円横帯文2段。胴部縄文。隆帯文にラーメン状文。	橙	井戸尻Ⅰ
第24図 6	C区	40号住居	深鉢	胴部下部が膨らみ、口縁部丸みをもつ外反。	文様帯4段構成、口縁部(1段)では、複合三角文の退化形態。頸部から胴部中央(2段)は、波状隆帯による三角連続区画。3段・縦区画文。4段・縦列沈線。	淡い黄褐色	藤内Ⅱ段階
第25図 1	C区	41号住居		細い胴長、口縁部で開く。	三角状突起。鐳付き、区画文。	橙	藤内Ⅲ
第25図 2	C区	41号住居		胴部で弧状となり、口縁部は直立する。4単位波状。	胴部Y字懸垂文。隆帯は、指頭痕による連鎖状文。平行沈線による波状、直線文。	にぶい橙	藤内Ⅲ
第25図 3	C区	41号住居		直線的に外反するバケツ。	三角上突起。口縁部鐳付、以下はJ字懸垂文に絡ませた区画文。	橙	藤内Ⅲ
第25図 4	C区	41号住居	深鉢	口縁部で開くバケツ形。	楕円横帯文、胴部下半、口縁部波状隆帯。	明褐色	藤内3
第25図 5	C区	41号住居	深鉢	円窓突起。	縦楕円区画文。	灰褐色	藤内Ⅲ
第25図 6	C区	41号住居	深鉢	4単位波状口縁。	口縁部、隆帯による、対抗波状文。地文無文。	にぶい褐色	藤内3
第26図 1	C区	41号住居	深鉢	直線的に開くバケツ形。	口縁部、両端小円付き突起。キョウビラ文と沈線の組み合わせによる曲線、直線文。	暗灰黄	藤内Ⅲ
第26図 2	C区	41号住居	深鉢	両端小円付き突起、鐳付、口縁部やや開く筒型。	キョウビラ文と沈線による曲線文と直線。	橙	藤内Ⅲ
第26図 3	C区	41号住居	深鉢	口縁部に丸み。板状山形突起。	隆帯とキョウビラ文により区画横帯文。縦列沈線。隆帯文にキョウビラ文。縦区画文。	暗い褐色	藤内Ⅲ
第26図 4	C区	41号住居	深鉢	口縁部丸く、内湾するキャリパー。	縦列沈線。隆帯文にキョウビラ文。縦区画文。	にぶい黄橙	藤内Ⅲ
第26図 5	C区	41号住居	深鉢	口縁部、無文。	隆帯に交互刻みでV字刻み。区画文。	橙	藤内Ⅲ
第26図 6	C区	41号住居	深鉢	外反して、口縁部で内湾。	円窓+蛇状隆帯(裏・眼鏡状)突起。楕円横帯文7段。	にぶい褐色	藤内Ⅲ
第26図 7	C区	41号住居	深鉢	口縁部で大きく外反。	口縁部、複合三角文、内側・三叉文。	にぶい褐色	藤内Ⅲ
第26図 8	C区	41号住居	深鉢	口縁部欠損、筒型胴部。	波状隆帯文と直線懸垂の組み合わせ。	明赤褐色	藤内Ⅲ
第27図 1	C区	41号住居	深鉢	口縁部やや開くバケツ形。	2对小突起。括れ部、楕円横帯文。胴部状文。	橙	藤内Ⅲ
第27図 2	C区	41号住居		4単位微突起。口縁部で開き内湾。	口縁部~括れ部に2段横帯区画文。胴部縄文。	にぶい褐色	藤内Ⅲ
第27図 3	C区	41号住居	深鉢	口縁部上端欠損。口縁部付近で極端に開き内湾。	口縁部には、4単位菱形区画、胴中央部楕円区画。	にぶい赤褐色	藤内Ⅲ
第27図 4	C区	41号住居	深鉢	口縁部付近で若干開く。	地文縄文に連鎖状隆帯文のJ字懸垂文。	明赤褐色	藤内Ⅲ
第27図 5	C区	41号住居	釣手・鉢	釣手は土器中央に橋状に架けられる。	器面は区画文。	灰褐色	藤内Ⅲ
第27図 6	C区	41号住居	碗	小型手ずくね。	整形痕無し。	明褐色	藤内Ⅲ
第27図 7	C区	41号住居	深鉢	小型楕形・有孔鐳付土器。	隆帯懸垂文。	明褐色	藤内Ⅲ
第27図 9	C区	43号住居	深鉢	4単位微突起口縁部。胴部筒型口縁部付近で極端に外反。	隆帯の両脇に連続押し引き文による、三角文、胴部は半渦巻文。	赤褐色	新道
第27図 10	C区	43号住居	深鉢	口縁部、胴部欠損。隆帯の内側に連続押し引き文。	横長法形状区画による横帯文。	赤褐色	新道
第27図 11	C区	43号住居	深鉢	口縁部欠損。	胴部渦巻隆帯文。底部、楕円区画による横帯文。	橙	新道
第27図 12	C区	43号住居	碗		無文。	橙	新道
第28図 1	C区	50号住居	深鉢	口縁部丸くやや内湾。	全面に縦列沈線。隆帯により口縁部、複合三角(変形)、頸部・楕円、胴部・連続三角。	灰褐色	井戸尻Ⅰ
第28図 2	C区	52号住居	深鉢	胴部、口縁部丸みを持ち括れ。	口縁部無文に粘土紐による対抗U字文、胴部集合沈線に葉状・懸垂文。	黄橙	井戸尻Ⅱ~Ⅲ
第28図 3	C区	54号住居	深鉢	口縁部、胴部欠損。	楕円区画横帯文。	黒褐色	井戸尻Ⅰ
第28図 4	C区	55号住居	深鉢	口縁部丸み、底部算盤底。底部欠損。口縁部丸みを持つ鐳付き土器。	鐳付土器。胴部4分割され、交互刻隆帯文で区画後、内に沈線で充填。	にぶい橙	井戸尻Ⅰ
第28図 5	C区	55号住居	深鉢	口縁部丸み、底部算盤底。底部欠損。口縁部丸みを持つ鐳付き土器。	胴部4単位に区画後、隆帯、沈線により施文。	にぶい橙	井戸尻Ⅰ
第28図 6	C区	56号住居	鉢	直線に開く。	無文。	にぶい黄褐色	不明
第28図 7	C区	58号住居	深鉢	直線的に開き口縁部丸く内湾。	集合沈線により口縁部、胴部上半、胴部下半が充填。	にぶい赤褐色	曾利Ⅰ
第28図 9	C区	60号住居	深鉢	4単位捻り突起。屈折底。口縁部で極端に開き内湾。	刻み隆帯により大きく区画。口縁部、玉葱状区画内に縦沈線、胴部逆U字連続、底部楕円区画横帯文。	赤灰	井戸尻Ⅰ
第28図 10	C区	60号住居	深鉢	胴部下半欠損。4単位捻り小突起。	口縁部突起を中心に区画後内部沈線で充填。胴部楕円横帯文。	にぶい褐色	井戸尻Ⅰ
第28図 11	C区	60号住居	深鉢	直線的に開き、口縁部で極端に内折。	断面リング状で片方に渦巻小突起。口縁部無文。胴部縄文。	褐色	井戸尻Ⅰ
第28図 12	C区	60号住居	深鉢	胴下半欠損。	口縁部微突起・楕円区画横帯文で内部沈線で充填。	暗い褐色	井戸尻Ⅰ
第28図 13	C区	60号住居	深鉢	筒型小型土器。	地無文に押し引き。	明褐色	不明
第29図 1	C区	62号住居	深鉢	4単位突起。口縁部で開くバケツ。	口縁部は三角・円窓突起を中心に隆帯文が施文、口縁部文様帯が形成。胴部縄文。底部楕円横帯文。	にぶい赤褐色	井戸尻Ⅰ
第29図 2	C区	62号住居	深鉢	胴部中央以下欠損。非対称三角突起。	隆帯は交互のV字刻と連鎖状文が多うして口縁部文様帯を形成。	赤褐色	井戸尻Ⅰ
第29図 3	C区	62号住居	深鉢	胴部下半欠損。口縁部丸く内湾するキャリパー。	捻り突起。太く背の低い隆帯により区画。対抗U字文、内部沈線文。	にぶい褐色	井戸尻Ⅰ
第29図 4	C区	62号住居	深鉢	胴部上半より欠損。	三角上突起、鐳突き土器。	明褐色	井戸尻Ⅰ
第29図 5	C区	62号住居	深鉢	口縁部極端に大きく丸みをもつ、キャリパー。	4単位微突起。口縁部連鎖状隆帯文多用。	にぶい褐色	井戸尻Ⅰ
第29図 6	C区	63号住居	深鉢	突起+微突起が1対で波状口縁形成。	口縁部縦区画文。胴部無文に毛虫状張り付け。	にぶい赤褐色	藤内Ⅱ
第29図 9	C区	68号住居	深鉢	胴部中央より外反、口縁部丸く内湾。	捻り突起。口縁部縦列沈線。縦区画文。	赤褐色	藤内Ⅰ

第29図	10	C区	68住居	深鉢		部複合三角文。隆帯はキャタピラ文で両脇から押捺される。胴部、無文帯、楕円横帯文。	橙	藤内I
第30図	4	C区	75住居	深鉢	口縁部極端に開く。胴部上半から欠損。	隆帯による楕円区画横帯文、内側は角押文。	にぶい橙	猪沢
第30図	5	C区	75住居	深鉢	口縁部下半から欠損。	4単位小突起。浅い沈線で施文。平出川類A系。	にぶい赤褐色	猪沢
第30図	6	C区	75住居	深鉢	口縁部で開くバケツ。	ノ字捻り突起。口縁部3段文様帯、内は、格押し文。	橙	猪沢
第30図	7	C区	75住居	鉢	小型手ずくね。	無文	暗褐色	猪沢
第30図	8	C区	76住居		胴部欠損、バケツ形。	口縁部4単位区画。内は、浅い押し引き。	暗赤褐色	新道
第30図	9	C区	76住居	深鉢	口縁部欠損。底部より口縁に向かって開く。	現状、文様帯5段形成。隆帯両脇にはベン先状押し引き。玉抱三叉文、J字文。	赤褐色	新道
第30図	10	C区	78住居	深鉢	括れ部以下、欠損。口縁部捻り突起。	隆帯両脇キャタピラ文、それに沿って区画内、押し引き文。複合三角文の退化形態。	にぶい黄褐色	藤内I
第30図	11	C区	78住居	深鉢	胴部ほぼ筒形、口縁部で外反後内湾する。	口縁部器面調整後・対抗U字文。胴部、隆帯両脇に爪形キャタピラ文による連続三角、楕円による横帯文。	鈍い黄褐色	藤内I
第30図	12	C区	78住居	深鉢	括れ部以下欠損。円窓+隆帯突起1、と容器状突起3。	細い半竹状工具で集合沈線、連続三角文、菱形区画文。	灰褐色	藤内I
第30図	13	C区	78住居	深鉢	口縁部以下欠損、脚付土器?円窓付突起。突起よりJ字懸垂紋。	口縁部、区画文。	灰褐色	藤内I
第31図	1	C区	78住居	深鉢	口縁部で僅かに開く。口縁部、3条の隆帯。	胴上半地文縄文に波状隆帯文。下部、縦列沈線。	にぶい黄橙	藤内I
第31図	2	C区	78住居	深鉢	筒型胴部に丸い口縁部。突起。僅かに括れ丸い口縁部。ノ字状突起。	半竹工具で、口縁部縦列沈線、胴部連続三角文、底部縦列沈線。	灰褐色	藤内I
第31図	3	C区	78住居	深鉢		半竹工具、縦列沈線。胴部、方形縦区画文系土器文。	にぶい黄橙	藤内I
第31図	4	C区	78住居	深鉢	口縁部欠損、筒型胴部。	区画文。	灰褐色	藤内I
第31図	5	C区	78住居	深鉢	口縁部、胴下半欠損。	隆帯両脇にキャタピラ文。連結楕円懸垂文。	にぶい赤褐色	藤内I
第31図	8	C区	78住居	碗脚付土器		口縁部、両脇にキャタピラ文で押し付けられた波状隆帯文。	灰褐色	藤内I
第31図	9	C区	78住居	深鉢	口縁部、底部欠損。	隆帯上に連続爪形文。胴部にソウリムシ状文添付。	灰褐色	藤内I
第31図	10	C区	79号住居	深鉢	体部に3段丸み。大突起、捻り突起2、眼鏡状突起。	口縁部、複合三角文。胴部、所謂抽象文。	明赤褐色	新道
第32図	1	C区	79号住居	深鉢	口縁部でラッパ状に開く。	楕円区画中心に7段文様帯。段のつなぎはクランク状。	橙	新道
第32図	2	C区	79号住居		口縁部やや開くバケツ。	隆帯両脇にU字押し引き。文様3段構成で区画内も押し引きで充填。	褐色	新道
第32図	3	C区	79号住居		口縁部直線的に開くバケツ。	口縁部2段文様帯。粘土紐で楕円区画後、半竹工具で、表裏を用いて押し引き。	橙	猪沢
第32図	4	C区	79号住居	深鉢	胴部括れまで直線で以後外反。	隆帯両脇には鈍いベン先押し引き。胴部上半には逆三角文の連続。胴部下半無文。	灰褐色	新道
第32図	5	C区	79号住居	深鉢	底近欠損。4単位捻り突起。	隆帯内側に押し引き文で複合三角文。4段文様帯。	暗褐色	新道
第32図	6	C区	79号住居	深鉢	口縁部が開くバケツ形。捻り突起。	両脇を先端U字で押し付けた粘土紐で区画、2段構成。口縁部は楕円区画、胴部は斜列縦線。	明褐色	新道
第32図	7	C区	79号住居	深鉢	口縁部で極端に開くバケツ形。	口縁部、複合三角文、内部は三角印刻文。胴部は無地に直線、クランク?懸垂。	にぶい赤褐色	新道
第32図	8	C区	79号住居	樽	樽型、有孔鍔付土器。	口縁部、半竹工具により横帯区画文。胴部、無地に懸垂文。	浅黄橙	新道
第32図	9	C区	80号住居	深鉢	大型破片。	横帯文3段構成。楕円区画文が顕著。区画内に対抗U字文。	にぶい赤褐色	井戸尻I
第33図	1	C区	83号住居	深鉢	胴部筒型、口縁部開く。	貼付+刻装飾・発達した隆帯文により幾何学的に区画される。三叉文、渦巻文は、半肉状となっている。	赤褐色	井戸尻I
第33図	2	C区	83号住居	深鉢	口縁部で極端に開く。捻り突起で4分割。	貼付+刻装飾、連鎖状文による隆帯文で斜、あるいは波状に区画。区画内は沈線。	明褐色	井戸尻I
第33図	4	C区	85住居	深鉢	両耳壺。2狭い底部から胴部中央で極端に開く。	1対橋状把手の両端で頸部文様帯、内に渦巻文、集合条線で充填。	にぶい黄褐色	曾利IV
第33図	5	C区	85住居	深鉢	両耳壺。底より頸部まで極端に開く。	頸部文様帯は方形区画、内に集合条線。沈線文により長楕円が縦に連続配置、内外に円形列点。	にぶい橙	曾利IV
第33図	6	C区	84号住居	碗	小型碗形土器。	細条線により縦列沈線。平出川類A系統。	暗褐色	曾利III
第33図	7	C区	84号住居	深鉢	胴部下半に括れ部。	無文。有孔突起。	黒褐色	不明
第33図	8	C区	84号住居	鍋形		4単位突起、それより組紐状懸垂文で区画。区画内にも隆線文を貼り付け。	橙	不明
第33図	9	C区	91号住居	深鉢	中央で括れ口縁部で開く。		にぶい橙	井戸尻III
第33図	10	C区	91号住居		口縁部欠損。筒型胴部、口縁部欠損。	1本引集合沈線。頭部渦巻隆帯懸垂文。頸部は、楕円横帯文、内に対称渦巻文。胴下部は縄文。	赤褐色	井戸尻III
第33図	12	C区	91号住居	深鉢	口縁部欠損。胴部筒型。	口縁部無文、胴部集合沈線。	橙	井戸尻III
第33図	13	C区	91号住居	深鉢	直線的に開く長めのバケツ。		橙	井戸尻III
第33図	14	C区	91号住居		直線的に開く長めのバケツ。		橙	井戸尻III
第33図	16	C区	91号住居	深鉢	小型手ずくね土器。		褐色	不明
第34図	1	C区	92号住居		底部算盤底で口縁部やや開くバケツ。	三角状突起・鍔付土器。刻目付隆帯文によるJ字、I字懸垂文の中間に区画文。	橙	井戸尻I
第34図	2	C区	92号住居		口縁部欠損。	胴上半部、半肉状、隆帯で充填。	橙	井戸尻I
第34図	3	C区	92号住居		胴部下半より残存、大型深鉢。	刻目隆帯文で区画。中には、浅い渦巻、縦列沈線。	橙	井戸尻I
第34図	4	C区	92号住居		口縁部丸くなる形態。	口縁部刻目隆帯により区画、連鎖状文で4区画、どう部下半、隆帯文以下縄文。	橙	井戸尻I
第34図	5	C区	92号住居		胴部中央で括れ、口縁部で内湾。	口縁部、半肉隆帯で三角区画、内部、三叉文?胴部下半、櫛齒文。	橙	井戸尻I

第34図	7	C区	92号住居		はりの弱い算盤底、鐙付土器。	J字懸垂文。	橙	井戸尻I
第34図	8	C区	92号住居		4単位突起の波状文。	口縁部鐙状隆帯で区画。	橙	井戸尻I
第34図	9	C区	92号住居	深鉢	胴部やや丸く、口縁部付近で括れ部。	口縁部、粘土紐蓮子文後、それに粘土紐を組み合わせて幾何学文。胴部、押引文により偽縄文。	褐色	井戸尻I
第34図	10	C区	92号住居		算盤底。口縁部丸く膨らみ直立。	胴部地文縄文にJ字懸垂文。隆帯は刻み目。	橙	井戸尻I
第34図	11	C区	92号住居		口縁部まで直線的に開く、バケツ形。	1対直線懸垂文。胴部・無地に、平行沈線によるX字文。	赤褐色	井戸尻I
第34図	12	C区	92号住居	深鉢	口縁部まで直線的に開くバケツ形。	4単位突起。全体無文。	明褐色	井戸尻I
第35図	1	C区	92号住居	深鉢	口縁部まで直線的に開くバケツ形。	全面縄文。	橙	井戸尻I
第35図	2	C区	92号住居		口縁部まで直線的に開くバケツ形。	無文。	橙	井戸尻I
第35図	3	C区	92号住居	浅鉢		連鎖状文。	褐色	井戸尻I
第35図	4	C区	92号住居	浅鉢		鐙状隆帯に刻み。	橙	井戸尻I
第35図	5	C区	92号住居	浅鉢		無文。	黒褐色	井戸尻I
第35図	6	C区	92号住居	浅鉢		無文。	橙	井戸尻I
第35図	7	C区	92号住居	注口・浅鉢		無文。	灰褐色	井戸尻I
第35図	8	C区	94号住居	深鉢	底部算盤底。口縁部で極端に開き、内湾するキャリパー。塔状把手。	胴部刻み目隆帯により4単位区画、中間1本引き沈線の集合。	にぶい橙	井戸尻I
第35図	9	C区	95号住居	深鉢	算盤底、胴部緩いカーブ、口縁部極端に開く。三角状突起。	口縁部玉葱区画。胴部、刻み目隆帯で区画、内側半肉文で施文。	赤褐色	井戸尻I
第35図	10	C区	95号住居	深鉢	胴部で括れ口縁部で開き、胴下半より容積大。4単位突起、区画。	内側半肉隆帯により円・曲線。胴部、櫛歯文？	鈍赤褐色	井戸尻I
第36図	1	C区	95号住居	深鉢	口縁部極端に内湾するキャリパー。4単位小突起。	口縁部、対抗U字連続文。懸垂紋は、2本仕立・捻り隆帯文。	灰赤	井戸尻I
第36図	2	C区	95号住居	深鉢	底部隆帯状に飛び出る。胴部、口縁部まで直線的広がるバケツ。鐙付土器。	胴部4単位懸垂文で区画、内側半肉により区画。	にぶい橙	井戸尻I
第36図	3	C区	95号住居	深鉢	算盤底、胴部筒型。	刻み隆帯文と半肉文により区画文。	橙	井戸尻I
第36図	4	C区	95号住居	深鉢	胴部大半欠損。口縁部直角に内湾。	隆帯文突起。地文縄文に連鎖状・隆帯文。	明赤褐色	井戸尻I
第36図	5	C区	95号住居	深鉢	胴部下部欠損、筒型、口縁部丸み。円形突起。鐙付土器。	胴部隆帯文により区画沈線文により施文。	にぶい赤褐色	井戸尻I
第36図	6	C区	95号住居	深鉢	口縁部極端に内湾するキャリパー。4単位小突起。	口縁部、対抗U字連続文。	暗赤灰色	井戸尻I
第36図	7	C区	95号住居	深鉢	胴部中央で大きく括れ、口縁部で開く。4単位突起。	半肉隆帯文上にキャタピラ文。こうい口縁部点文充填。胴下半、櫛歯文。	暗褐色	井戸尻I
第36図	8	C区	95号住居	深鉢	口縁部やや丸くなるバケツ。	地文縄文。	橙	井戸尻I
第36図	9	C区	95号住居	深鉢	直線的に口縁部まで広がるバケツ。	無文。	にぶい橙	井戸尻I
第36図	10	C区	96号住居	深鉢	口縁部まで直線的に開くバケツ。4単位突起。	口縁部、無文。胴部地文縄文に半竹工具による平行文により区画。	橙	井戸尻I
第36図	11	C区	96号住居	深鉢	底部算盤底。頸部で膨らみ口縁部直立。	地文、縄文。	橙	井戸尻I
第36図	12	C区	96号住居	深鉢	手づくね・小型土器。		にぶい橙	不明
第36図	13	C区	97号住居	深鉢	胴部中央が最大径。大型破片	半肉隆帯文に区画。正面・顔付土器。	橙	井戸尻I
第37図	1	C区	97号住居		算盤底。三角状突起・鐙付土器。胴部、懸垂文で4単位区画。	内部、半肉文により充填。	にぶい赤褐色	井戸尻I
第37図	2	C区	97号住居	深鉢	口縁部で大きく開き内湾するキャリパー。4単位突起。	刻み目隆帯文により円・X状文が施文。括れ以下無文。	橙	井戸尻I
第37図	3	C区	97号住居	深鉢	胴部中央より欠損。口縁部で開き内湾するキャリパー。4単位小突起。	半肉状隆帯文でJ、花形文。	暗褐色	井戸尻I
第37図	4	C区	97号住居	深鉢	大型破片、深鉢。	両端リング状突起（本段階より出現）。	にぶい黄褐色	井戸尻I
第37図	5	C区	97号住居	深鉢	大型破片、深。円窓+蛇状隆帯文突起と眼鏡状突起の複合、把柄中央で括れ、口縁部で開き内湾するキャリパー。2対式突起。	口縁部縦列沈線。	橙	井戸尻I
第37図	6	C区	97号住居	深鉢		口縁部半肉文により円、波状文、胴部下位、櫛歯文。	橙	井戸尻I
第38図	1	C区	97号住居	深鉢	胴部やや下半が括れ口縁部で開く。4単位突起の波状。	連鎖状隆帯文で口縁部、底部文様帯および胴部4分割。口縁部・楕円、底部・櫛歯文。	赤褐色	井戸尻I
第38図	2	C区	97号住居	深鉢	口縁部で開き、直立。	口縁部、縦列沈線。以下、無文。	にぶい橙	井戸尻I
第38図	3	C区	97号住居	深鉢	破片。	縦列沈線、三角文。	にぶい橙	藤内
第38図	5	C区	97号住居	深鉢	口縁部まで直線的に開くバケツ。1対突起。	地文縄文に擦り消し円形、+字文。	黒褐色	井戸尻I
第38図	6	C区	97号住居	深鉢	底部算盤底。胴部筒型、口縁部開き内湾するキャリパー。	括れ部口縁部に平行して刻み隆帯。胴部状文。	暗褐色	井戸尻I
第38図	7	C区	97号住居	浅鉢		口縁部、隆帯両脇にキャタピラ押し付けの波状文。	褐色	井戸尻I
第38図	10	C区	97号住居	小型深鉢	胴部やや括れるバケツ。	沈線による曲線文。	にぶい褐色	井戸尻I
第38図	11	C区	97号住居	小型深鉢	直線的に開くバケツ。	無文。	にぶい褐色	井戸尻I
第38図	12	C区	97号住居	小型深鉢	湾曲し口縁部で開く。	無文。	明褐色	井戸尻I
第38図	13	C区	97号住居	小型深鉢	胴部下半直線、以上開く。	地文縄文。	橙	井戸尻I
第38図	14	C区	97号住居	小型深鉢	口縁部内湾。突起。	地文縄文に連鎖状隆帯文。	褐色	井戸尻I
第38図	15	C区	97号住居	丸底碗		縄文。	明褐色	井戸尻I
第38図	16	C区	97号住居	脚付土器		地文縄文。	橙	井戸尻I
第38図	17	C区	97号住居	脚付土器	脚部三角透かし	列点文。	橙	井戸尻I
第38図	18	C区	97号住居	脚付土器	脚部有孔。		橙	井戸尻I
第39図	1	C区	98号住居	深鉢	胴部中央で括れ、口縁部で大きく開く。4単位小突起。	口縁部、対抗U字文、内側集合沈線。底部、櫛歯文で、内側は無文。	橙	井戸尻II
第39図	2	C区	98号住居	深鉢	大型深鉢破片。	口縁部、無文。胴部、刻み目隆帯文、内側、沈線。	橙	井戸尻II
第39図	3	C区	99号住居	深鉢	口縁部で開くバケツ。半円形突起。	刻み目隆帯による懸垂文。	にぶい赤褐色	井戸尻III

第39図	4	C区	99号住居	深鉢	胴部中央で括れ、口縁部直線的に開く。	無地に粘土貼り付け隆帯文。	にぶい赤褐色	不明
第39図	5	C区	99号住居	深鉢	括れ部が僅かに認知、筒型。	無文。	にぶい赤褐色	井戸尻Ⅲ
第39図	6	C区	99号住居	深鉢	括れ部が僅かに認知、細長い筒型。	前面に縄文。	赤褐色	井戸尻Ⅲ
第39図	7	C区	99号住居	深鉢	筒型。	全面に状文。	橙	井戸尻Ⅲ
第39図	8	C区	99号住居	浅鉢		無文。	にぶい黄橙	井戸尻Ⅲ
第39図	9	C区	99号住居	深鉢	小型手づくね土器。	口縁部無文。胴部、集合沈線。	にぶい黄褐色	井戸尻Ⅲ
第39図	10	C区	101号住居	深鉢	口縁部胴部欠損。	条線による、斜状文、逆U字文。	にぶい黄橙	不明
第39図	11	C区	101号住居	浅鉢		口縁部、押し引き文。	褐色	新道
第39図	12	C区	102号住居	深鉢	口縁部で開くバケツ。4単位小突起。	条線により施文。	にぶい褐色	猪沢平出Ⅲ類A系統
第39図	13	C区	102号住居	深鉢	口縁部、底部欠損。筒型、口縁部突起を挟んで、楕円区画文。	3段楕円横帯文。下部、クランク状隆帯文。	暗赤褐色	猪沢
第39図	14	C区	長坂町・7号住居	深鉢・大大型破片		括れ以下では、楕円、三角区画の横帯文2段。	にぶい褐色	猪沢
第40図	1	C区	1号土坑	浅鉢		外面無文。内面口縁部爪形押し引き、三叉文。	褐色	新道
第40図	2	C区	3号土坑	深鉢	底部算盤底。口縁部で大きく開く。	4単位、捻り突起を中心に下部は刻み目隆帯で玉葱区画される。胴部地文縄文にジグザグ隆帯文。	褐色	井戸尻Ⅰ
第40図	4	C区	4号土坑	深鉢	口縁部まで直線的に開くバケツ。	ほぼ平行沈線により、コ区画、内面に集合条線。	にぶい橙	曾利Ⅳ
第40図	5	C区	7号土坑	深鉢	口縁部で開く、ややバケツ。小型土器、口縁部でやや開くバケツ。	口縁部、ノ字突起・4単位？括れ半竹工具により区画、内面縄文。	褐色	猪沢
第40図	6	C区	4号土坑	深鉢		平行沈線による口縁に平行、曲線文。	にぶい橙	不明
第40図	7	C区	11号土坑	深鉢	口縁部欠損。	括れ部半肉隆帯。胴部、集合沈線。	黄褐色	井戸尻Ⅲ
第40図	9	C区	38土坑	深鉢	口縁部まで直線的に開くバケツ。	4単位突起。突起からの懸垂文により4区画。内側には半肉隆帯により区画、縄文後に擦り消す文。	にぶい黄橙	井戸尻Ⅰ
第40図	10	C区	43土坑	深鉢	胴下半以上欠損。	横位沈線。	褐色	不明
第40図	11	C区	45号土坑	深鉢	口縁部直下まで筒型。口縁部でやや開き内湾する。	地文縄文に「毛虫」突起文。	にぶい褐色	藤内Ⅲ
第41図	4	C区	96号土坑	深鉢	口縁部まで直線的に開くバケツ。	口縁部縄文。胴部、抽象文。	橙	藤内Ⅲ
第41図	5	C区	98土坑	壺	両耳壺形土器。4単位把手。	地文縄文に頭部渦巻懸垂文4単位。	暗赤褐色	曾利Ⅳ
第41図	6	C区	101土坑	鉢	有孔鍔付土器。	無文。	にぶい橙	井戸尻
第41図	7	C区	102号土坑	深鉢	胴部上半欠損。	集合沈線に2本1組の粘土貼り付け隆帯文。	にぶい黄橙	井戸尻
第41図	8	C区	111号土坑	深鉢	口縁部で開くバケツ。	粘土貼り付けにより楕円区画、直線垂下。	にぶい褐色	猪沢
第41図	9	C区	111号土坑	深鉢	胴上半欠損。	押し引きによる、対抗、クランク状文。	暗褐色	猪沢
第42図	1	C区	120号土坑	鉢	底部より一挙に外反して口縁部で立ち上がる。	口縁部に2本の平行沈線。沈線で4区画懸垂後、列点文。	にぶい黄褐色	曾利Ⅴ
第42図	2	C区	122号土坑	深鉢	底部開き、胴部内に弧。口縁部丸く内湾するキャリバー。	括れ部1条の隆帯文。以下縄文。	にぶい褐色	井戸尻
第42図	5	C区	132・133土坑	深鉢	口縁部まで開き、外反する。	4単位W字突起、刻み目隆帯懸垂文。内側には集合沈線。	橙	井戸尻Ⅲ
第42図	6	C区	145号土坑	深鉢	樽形に近い深鉢。	4単位突起。口縁部、胴部文様帯は横帯文。底部文様帯は波状文。	明赤褐色	藤内Ⅲ
第42図	7	C区	146号土坑	脚付浅鉢	I対リング状突起。	無文。	にぶい赤褐色	不明
第42図	8	C区	148土坑	深鉢	口縁部で開くバケツ。	全面縄文。	赤褐色	不明
第42図	9	C区	147土坑	深鉢	底部、口縁部欠損。底部で大きく、く字状に屈折。	半肉状隆帯により円形・楕円に区画。内部沈線。	橙	井戸尻
第42図	10	C区	151土坑	深鉢	底部張り出し。胴部下半から口縁部に外反。	4単位捻り突起。括れ部、底部、楕円横帯文。	灰白	井戸尻Ⅰ
第43図	1	C区	156号土坑	深鉢	胴部筒形、口縁部で大きく開く。	口縁部・括れ部、粘土紐で楕円文横帯	にぶい赤褐色	新道
第43図	2	C区	157号土坑	深鉢	口縁部以下欠損。	円窓・蛇状隆帯突起、両端リング。	橙	井戸尻Ⅰ
第43図	3	C区	164土坑	深鉢		隆帯文により、3段横帯文。胴部中央、対抗U字文。	にぶい赤褐色	井戸尻Ⅱ
第43図	4	C区	164号土坑	浅鉢	直線的に広がるバケツ。	口縁部無文、以下縄文。	にぶい赤褐色	井戸尻Ⅱ
第43図	5	C区	166土坑	深鉢	口縁部、胴部消失、大型破片。鍔付土器。	J字、懸垂文による大柄な区画文。半肉文により偽反射文等多用。	赤明褐色	井戸尻Ⅰ
第43図	6	C区	174土坑	深鉢	胴部中央で括れ、口縁部が極端に内湾するキャリバー形。	口縁部褶曲文。胴部、櫛歯文。	にぶい黄橙	井戸尻Ⅱ
第43図	7	C区	176土坑	深鉢	胴部筒型、口縁部で外反。	沈線による隆帯で偽反射・渦巻文等を施文。	明褐色	井戸尻Ⅲ
第43図	8	C区	179土坑	深鉢	やや湾曲するバケツ。	板状突起、玉抱三叉様。胴部地文縄文に擦り消し文。	橙	井戸尻Ⅰ
第44図	1	C区	179号土坑	深鉢	口縁部で開く。	地文、縄文。	橙	井戸尻
第44図	2	C区	179号土坑	深鉢	口縁部欠損。	胴部中央連鎖状文。以下無文。	にぶい赤褐色	井戸尻
第44図	3	C区	181・182土坑	深鉢	屈折底。口縁部開き丸み、鍔付き土器。	刻目隆帯・懸垂文により4単位区画。内部、隆帯文に縦列沈線。	明褐色	井戸尻Ⅰ
第44図	4	C区	181土坑	深鉢	口縁部欠損。鍔付土器。	刻目隆帯により4単位区画。	にぶい褐色	井戸尻Ⅰ
第44図	5	C区	181・182土坑	深鉢	屈折底胴下部で括れ上方に開。胴下部で括れ上方に開き、口縁部はく字状に極端に内湾。	円窓に隆帯突起・リング付き。	橙	井戸尻Ⅰ
第44図	6	C区	181号土坑	深鉢	直線的に開くバケツ。	逆U字微突起・懸垂文。	にぶい褐色	井戸尻
第44図	7	C区	181号土坑	深鉢	胴部筒形、括れ部有。	モンブラン形把手。胴部、集合沈線に懸垂文。渦巻把手状土器のⅣ段階、亜種。	褐色	曾利Ⅰ
第44図	8	C区	184号土坑	深鉢	胴部中央に括れ帯、口縁部大きく内湾するキャリバー。	口縁部、褶曲文、胴部、櫛歯文。	にぶい赤褐色	井戸尻Ⅱ
第44図	9	C区	185号土坑		胴部中央で欠損。	隆帯貼り付けを縦列。口縁部、小波状隆帯（火炎系統？）。	灰褐色	井戸尻Ⅱ
第45図	1	C区	187・188土坑	深鉢	胴下半欠損、直線的に開くバケツ。	円形突起と懸垂文により4分割後、対抗U字文、内側に集合条線。隆帯文は刻み目。	褐色	井戸尻Ⅲ段階
第45図	2	C区	187・188土坑	深鉢	胴部上半欠損。	地文、縄文。	褐色	

第45図 3	C区	200号土坑	深鉢	口縁部で大きく開く。	条線で口縁部、楕円横帯文、括れ部横帯文等を施文。	にぶい赤褐色	猪沢
第45図 4	C区	200号土坑	深鉢	直線的に開くバケツ。	4単位突起。粘土貼り付けによる隆帯文。内側を刻みがやや長い角押文。胴部2段、楕円横帯文。	暗褐色	猪沢
第45図 5	C区	202号土坑	深鉢	胴部下半底らみ、括れ部有し、口縁部でやや開く。	4単位、渦巻文、コ状懸垂区画、内部縄文で充填後、区画中央に蛇状沈線。	橙	曾利Ⅳ
第45図 6	C区	204号土坑	深鉢	口縁部直下で大きく括れる胴部樽形。	ノ字捻突起。口縁部コ字区画。隆帯両脇角押文。	明褐色	猪沢
第46図 1	C区	212号土坑	深鉢	直線的に開くバケツ。	無文。	橙	不明
第46図 5	C区	219号土坑	深鉢	口縁部直下欠損。極端にく字状に屈曲。	両端リング三角突起。	褐色	井戸尻Ⅰ
第46図 6	C区	222号土坑	深鉢	口縁部、半胴部下欠損。	括れ部に頭部渦巻把懸垂文で4分割。対抗U字文、偽反射炭状文。三叉文、残りの部分、集合沈線。	褐色	井戸尻Ⅲ段階以降
第46図 7	C区	223号土坑	脚付土器	胴部中央で括れ、口縁で大きく開く。	縄文擦消状文。	橙	曾利Ⅴ
第46図 11	C区	248号土坑	浅鉢		口縁部、ノ字突起。無文。	にぶい橙	猪沢～新道
第47図 1	C区	250号土坑	深鉢	胴部欠損	地文縄文、J縁部・複合三角文。隆帯両脇、キャタピラ文押し付け。	にぶい橙	新道新
第47図 2	C区	251号土坑	深鉢	底部やや屈折、胴部筒形。口縁部僅かに開く。鍔付土器	鍔からの懸垂文で4単位分割、内にJ字懸垂文後、縦区画。	にぶい赤褐色	藤内Ⅲ段階
第47図 3	C区	251号土坑	深鉢	筒形・底部付近丸く狭まる。	無文。	黄褐色	
第47図 5	C区	I-45G1号土坑	深鉢	直線的に開くバケツ。	隆帯内側に沿って角押文、区画内、角押文充填。胴部、クランク状文。	にぶい褐色	猪沢
第48図 1	C区	H-45G	深鉢	口縁部、胴下半欠損。	複合三角文。隆帯内側角押による	橙	新道
第48図 2	C区	グリッド	深鉢	直線的に開くバケツ。	コ字区画、内側集合細条線	明褐色	曾利Ⅴ段階
第48図 3	C区	グリッド	深鉢	波状口縁部。胴部欠損。	4～7条・1単位の集合条線で波状曲線文	にぶい橙	曾利Ⅴ段階
第48図 4	C区	グリッド	深鉢	胴部下位欠損。	4単位把手。半肉状隆帯により大柄な区画・渦巻文。	にぶい褐色	井戸尻1段階
第48図 5	C区	グリッド	深鉢	大きな直線的に開く口縁部	X字状把手。	橙	曾利Ⅴ
第49図 10	F区	12号土坑	壺	両耳壺。	胴上半、楕円横帯文、内、列点。	にぶい褐色	曾利Ⅴ
第51図 1	I区	1号住居	深鉢	同部中央括れ、大きく開き口縁部やや内湾。	口縁部、半竹工具で半肉・縦列沈線。ノ字捻突起。口縁部以下、整然とした半地区区画、半肉隆帯の長方形区画。内側、キャタピラ文。	黒褐色	新道・最終末から藤内への移行過程（酒呑Ⅳ段階）
第51図 2	I区	1号住居	深鉢	口縁部で弱く外反。胴中央欠損。	口縁部、括れ部、同部文様帯。角押文主体で施文。	明褐色	猪沢
第53図 11	I区	3号住居	鉢	脚付土器？	4単位突起、半肉文による横帯文。	赤褐色	井戸尻Ⅰ
第53図 12	I区	3号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。	口縁部2条平行隆帯文。三角文に懸垂文。	にぶい褐色	藤内Ⅲ
第53図 13	I区	3号住居	深鉢	屈折底。同部下位で大きく括れ口縁部で大きく開き、く字に内湾。円窓・裝飾隆帯突起・リング付き。胴地文・縄文。		赤褐色	井戸尻Ⅰ
第54図 1	I区	5号住居	深鉢	口縁部で若干膨らみ、捻りノ字突起。	口縁部、区画文による横帯文。胴部、隆帯文とキャタピラ文により横帯文。	にぶい黄褐色	藤内Ⅰ段階
第54図 2	I区	5号住居					
第54図 3	I区	5号住居	深鉢	口縁部で開き内湾。	隆帯貼り付け、隆帯文両脇にキャタピラ文、外側に波状沈線。	にぶい黄褐色	藤内Ⅰ
第54図 4	I区	5号住居					
第54図 5	I区	5号住居	深鉢	直線的にやや開く。	口縁部、三角状文による横帯文。	橙	藤内Ⅰ
第54図 18	I区	7号住居	深鉢	口縁部、底部欠損。隆帯両脇にキャタピラ文による、楕円文懸垂。		にぶい橙	藤内
第54図 19	I区	7号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。	無文、指頭痕。	明赤褐色	藤内
第55図 1	I区	10号住居	深鉢	胴下部で括れ、口縁部に向って開く、細長い深鉢。	4単位・頭部Y字突起・懸垂文で4分割。半竹工具による平行沈線でクランク・方形区画、中に集合沈線。	にぶい橙	藤内Ⅰ段階
第55図 2	I区	10号住居	浅鉢	破片。	隆帯文による複合三角文、4単位小突起。胴部、無文。	にぶい橙	藤内Ⅰ
第55図 3	I区	10号住居	深鉢	破片。	口縁部、横帯区画文。	灰褐色	藤内Ⅰ
第55図 4	I区	10号住居	深鉢	55-1の一部。	Y字突起、内部・三叉文。長方形縦区画。	にぶい黄橙	藤内Ⅰ段階
第55図 5	I区	10号住居	深鉢	深鉢・破片。	隆帯文両脇キャタピラ文、押し付け後、波状沈線。	橙	藤内
第55図 6	I区	10号住居	深鉢	破片。	楕円隆帯区画。	にぶい褐色	藤内Ⅰ
第55図 16	I区	12号住居	深鉢	直線的開くバケツ、	4単位捻り突起。4単位楕円区画、3段、胴下部懸垂。隆帯内側押し引き。	橙	新道
第55図 17	I区	12号住居	深鉢	緩やかに開き、口縁部で直立。	口縁部・4単位貼付突起後、その間に蓮子文で充填し口縁部文様帯を形成。	にぶい橙	猪沢～新道
第56図 1	I区	12号住居	深鉢	破片。	U字突起。角押文。	にぶい黄橙	猪沢
第56図 2	I区	12号住居	深鉢	直線的に開き口縁部やや外反。	口縁部、複合三角文、胴、X字。	橙	新道
第56図 3	I区	12号住居	深鉢	胴部筒形。口縁部外反。	複合三角。胴部J字文。細かいペン先工具。	にぶい橙	新道
第56図 4	I区	12号住居	深鉢	口縁部欠損。	連続三角文横帯文。	にぶい黄橙	新道
第56図 5	I区	14号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。	隆帯両脇にキャタピラ文外部に波状沈線でX字文。	明赤褐色	新道
第57図 1	I区	16号住居	深鉢	口縁部やや外反する、バケツ。	口縁部より懸垂文。半竹工具により線引き後、交互刺突、爪形押し文、波状沈線を施文。	灰褐色	猪沢
第57図 2	I区	16号住居	深鉢	背の低いバケツ、波状口縁部。	両脇に角押文隆帯文により2段文様帯。底部は、崩れたクランク文。	にぶい橙	猪沢
第57図 3	I区	16号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。	非在地・斜行沈線文系。4単位ノ字突起、口縁部2段・斜行沈線、胴部、粘土張り付く隆帯・懸垂文。	橙	猪沢
第57図 4	I区	16号住居	深鉢	4単位突起。	角押文により口縁部・楕円文様帯。	灰褐色	猪沢
第57図 5	I区	16号住居	深鉢	胴部樽形、口縁部で極端に開く。	4単位貼付突起、内に角押文によるコ字区画。胴部、4段区画。	橙	猪沢

第57図	6	I区	16号住居	深鉢	口縁部、胴部欠損。	楕円区画文帯。胴部、指頭痕。	橙	狹沢
第57図	7	I区	16号住居	深鉢	胴部欠損。口縁部開く。	4単位ノ字突起。内に、コ字文(角押文)で充填。角押文は、幅広、角押文の2種。	橙	狹沢
第57図	8	I区	16号住居	深鉢	直線的に開く、バケツ。	4単位・コ字突起を中心に2段・口縁部文様帯。それ以下は、Y字懸垂文。	にぶい褐色	狹沢
第57図	9	I区	16号住居	深鉢	直線的に開き、口縁部で直立する。	口縁部は、4単位区画、3段・楕円文帯、胴下部無地に粘土貼付懸垂文。施文具、幅広、角押文の2種。	橙	狹沢
第57図	10	I区	16号住居	深鉢	胴上半～口縁部欠損。	角押文。クランク状文。	明赤褐色	狹沢
第57図	11	I区	16号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。	突起。角押文。	明赤褐色	狹沢
第57図	12	I区	16号住居	深鉢	括れ部以下欠損。口縁部外反。	4単位ノ字突起(対抗・ノ字)。口縁部、角押文で充填。頸部3段・楕円文様帯。	灰褐色	狹沢
第57図	13	I区	16号住居	深鉢	バケツ形、口縁部残し以下欠損。	角押文により楕円区画。	暗褐色	狹沢
第57図	14	I区	16号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。	灯在地系。5段・楕円横帯文。U字懸垂紋。	橙	狹沢
第57図	15	I区	16号住居	深鉢	直線的に開き口縁部で直立。	4単位区画。3段構成。施文具、幅広、角押文の2種。	橙	狹沢
第57図	16	I区	16号住居	深鉢	やや直線的に開く、バケツ形。	対抗、ノ字突起。無文、指頭痕。	褐色	狹沢
第58図	1	I区	16号住居	深鉢	直線的に開くバケツ、口縁部で直立。	施文具、幅広、角押文の2種。複合三角文。	にぶい橙	新道
第58図	2	I区	16号住居	深鉢	胴部筒形、口縁部開く。	楕円・小突起。隆帯両脇にキャタピラ文で押し付け。文様帯、3段構成。	黄橙	新道
第58図	3	I区	16号住居	深鉢	口縁部底部欠損。胴部、弧状。	楕円、三角、方形区画文。	灰褐色	新道
第58図	4	I区	16号住居	深鉢	胴部以下欠損。バケツ形。	4単位小突起。細条線、縄文で施文。	灰褐色	狹沢
第58図	5	I区	16号住居	深鉢	口縁部、底部欠損。	施文具、幅広、角押文の2種。	にぶい赤褐色	新道
第58図	6	I区	16号住居	深鉢	胴部丸み。	地・無文に瘤状突起貼り付け。	橙	狹沢
第58図	7	I区	16号住居	深鉢	口縁部破片。4単位捻り突起。	角押文。	褐色	狹沢
第58図	8	I区	16号住居	深鉢	口縁部破片。	ペン先状工具・押し引き。	黄色橙	新道
第58図	9	I区	16号住居	深鉢	口縁部破片。			
第58図	10	I区	16号住居	深鉢	口縁部破片。			
第58図	11	I区	16号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。	2条のキャタピラ文。	にぶい黄褐色	藤内
第58図	12	I区	16号住居	深鉢	底部屈折。口縁部まで広がり直立。	胴部、縄文。	橙	藤内III
第58図	13	I区	17号住居	深鉢	口縁部、胴部欠損。	楕円横帯文、クランク状。地、指頭痕。角押文。	灰褐色	狹沢
第58図	14	I区	16号住居	深鉢	有孔鍔付土器。		にぶい橙	藤内
第58図	15	I区	19号住居	深鉢	口縁部、胴部以下欠損。	貼り付け隆帯文、角押文。	にぶい褐色	狹沢
第58図	16	I区	17号住居	深鉢	口縁部下端まで極端に外反し、直立。	両脇にキャタピラ文で押し付け。口縁部、半円、胴部、三角、底部楕円文。	橙	新道
第58図	17	I区	17号住居	深鉢	小型深鉢。	縦横にキャタピラ文。	橙	藤内
第59図	3	I区	20号住居	深鉢	口縁部外反。	複合三角文。4単位捻り突起。	にぶい黄色橙	新道最終末～藤内
第59図	4	I区	20号住居	深鉢	胴部、口縁部で丸み。波状口縁部。	口縁部、頸部、胴部で、半肉平行沈線により区画、胴部円形瘤付き、胴半、縄文。	暗褐色	藤内II
第59図	5	I区	20号住居	深鉢	ほぼ円筒形。	4単位眼鏡状突起と懸垂文。縦区画文。	暗赤褐色	藤内II
第59図	6	I区	20号住居	深鉢	直線的に開く細形バケツ。	小突起。口縁部、連続三角文。胴部、縦位区画。	暗褐色	藤内II
第59図	7	I区	20号住居	深鉢	やや開く、筒形。縦区画文。		にぶい褐色	藤内II
第59図	8	I区	20号住居	深鉢	筒形。	無文、指頭痕。	暗褐色	藤内
第59図	9	I区	20号住居	深鉢	直線的に開き口縁部やや丸み。	無文、指頭痕。	黄橙	藤内
第59図	10	I区	20号住居	深鉢	直線に開き口縁部で直立。	4単位小突起。隆帯文により口縁部楕円区画、胴部、三角区画、内側に三叉文。	明褐色	藤内非在地系
第59図	11	I区	20号住居	深鉢	筒形。	地文縄文。	橙	藤内
第59図	12	I区	20号住居	浅鉢		地文縄文。	黄橙	藤内
第59図	13	I区	20号住居	深鉢	小型土器。	籠状工具により施文。	明赤褐色	藤内
第60図	5	I区	21号住居	深鉢	筒形、口縁部極端に開く。	胴部、列点、条線文。	橙	曾利
第61図	1	I区	25号住居	深鉢	底部屈折、口縁部開く。	2対型突起。口縁部、玉葱。頸部、胴部、底部文様帯形成。	橙	井戸尻I
第61図	2	I区	25号住居	深鉢	胴部欠損。口縁部やや内湾。	1対突起。キャタピラ隆帯文による横帯区画文。	にぶい褐色	井戸尻I
第61図	3	I区	25号住居	深鉢	小刻みな波状口縁部。バケツ形で口縁部で内湾。	連鎖状文。胴部、縄文。	灰褐色	井戸尻I段階
第61図	4	I区	25号住居	深鉢	口縁部大きく内湾するキャリパー	大型突起。隆帯文により頸部に横帯区画文。集合沈線が顕著。	橙	井戸尻I段階
第61図	5	I区	25号住居	深鉢	胴部大半欠損。口縁部直立。	横走する、蛇状隆帯、隆帯渦巻突起を基点に懸垂文。	橙	井戸尻I
第61図	6	I区	25号住居	浅鉢		無文。口縁部・十字文。	褐灰色	井戸尻I
第63図	16	I区	28号住居	深鉢	基本はバケツ形で、やや内湾。	地文縄文にノ字突起貼付文が等間隔に全面に粘貼。	にぶい橙	狹沢～新道
第64図	1	I区	29号住居	深鉢	口縁部直下で大きく外反し、口縁部直立。	口縁部、キャタピラ文・隆帯文により複合三角文状に分割。胴部、縄文。	にぶい黄褐色	新道
第64図	6	I区	32号住居	深鉢	直線的に開くバケツ形。	ノ字捻り突起。半竹系工具により横・縦に区画。地文縄文。	灰黄褐色	狹沢
第64図	7	I区	32号住居	深鉢	口縁部で開く。	2対突起。沈線文後刺突。楕円区画。	明赤褐色	狹沢非在地系
第64図	8	I区	32号住居	深鉢	直線的に開くバケツ形。	ノ字突起貼付文が等間隔に粘貼される。	にぶい橙	狹沢
第64図	9	I区	32号住居	深鉢	胴部中央が大きく括れ、口縁部内湾するキャリパー形土器。	隆帯文で区画、内側、半肉文。	褐色	井戸尻I
第64図	10	I区	32号住居	碗?	口縁部欠損。碗形土器。	1対把手。無文。	褐灰	井戸尻I
第65図	1	I区	33号住居	深鉢	胴部筒形、口縁部急激に内湾。ラッパ状突起。	鍔付、U字懸垂。	にぶい黄褐色	藤内III段階
第65図	2	I区	33号住居	深鉢	胴部筒形、口縁部開く、波状口縁部。	括れ部に楕円区画文。	暗褐色	藤内
第65図	3	I区	33号住居	深鉢	口縁部やや内湾するバケツ形。	全面、縄文。	暗褐色	藤内III
第65図	4	I区	33号住居	深鉢	底部欠損。ラッパ状突起。	縦区画文。鍔付土器	にぶい褐色	藤内III段階
第65図	5	I区	33号住居	深鉢	胴部筒形、口縁部直下で大きく外反して口縁部で小さく内湾。	円窓+蛇状隆帯突起。胴部、懸垂文顕著。	灰白	藤内III

第66図	1	I区	33号住居	浅鉢		捻り突起。無文。	にぶい黄橙	藤内III
第66図	4	I区	33号住居	浅鉢		口縁部、連鎖状文。無文。	橙	藤内III
第66図	5	I区	33号住居	鉢	釣手土器。	釣手部に三角印刻。	にぶい黄橙	藤内III
第66図	6	I区	35号住居	深鉢	胴部欠損。	複合三角文	黄褐色	新道終末～藤内I段階
第66図	7	I区	35号住居	深鉢	バケツ形で口縁部に鐫状隆帯。	縦位の押引文。	明褐色	藤内III
第66図	8	I区	35号住居	深鉢	胴部筒形。口縁部開く。	4単位捻り突起下位に玉葱区画。	暗褐色	藤内III
第66図	9	I区	35号住居	深鉢	捻り突起下位に玉葱区画。	胴部縦区画。底部楕円文。	明褐色	藤内III
第66図	10	I区	35号住居	深鉢	バケツ形で口縁部に鐫状隆帯。	縦区画文。	にぶい褐色	藤内III
第66図	11	I区	35号住居	深鉢	胴部筒形、口縁部で外反。	1対突起。縦区画。	灰褐色	藤内III
第66図	12	I区	35号住居	深鉢	胴部下位欠損。口縁部で外反し、内湾。	三角状突起。縦区画。	褐色	藤内III
第67図	1	I区	35号住居	深鉢	胴部欠損、筒形。突起。	隆帯にキャタピラ文。三角文、楕円懸垂文。	暗赤褐色	藤内III
第67図	2	I区	35号住居	深鉢	直線的に外反するバケツ。胴部欠損。	ラッパ状突起。口縁部無文帯。胴部、縄文。	暗赤褐色	藤内III
第67図	3	I区	35号住居	深鉢	バケツ。	無文、指頭痕。	にぶい赤褐色	不明
第67図	4	I区	35号住居	深鉢	やや屈折底。胴部上半欠損。	毛虫、ノ字突起貼付文が規則的に粘貼。	褐色	藤内III
第67図	5	I区	39号住居	深鉢	口縁部破片。	4単位突起？	にぶい黄橙	井戸尻III段階
第67図	6	I区	42号住居	深鉢	直線的に開くバケツ。胴部中央から欠損。	口縁部無文帯。4単位W字突起。口縁部直下・楕円横帯文で内側に偽反射鏡文。	橙	井戸尻III
第67図	7	I区	43号住居		底部より口縁部にかけて大きく広がる。突起欠損。	鐫付、胴部刻み目隆帯文。	橙	藤内III
第67図	8	I区	38号住居	深鉢	口縁部・胴部欠損。	半肉隆帯文により、渦巻、方形区画文。	にぶい橙	井戸尻I
第67図	10	I区	42号住居	深鉢	口縁部、底部欠損。	口縁部下位の頸部がやや膨らむ。地文集合沈線に大きいキャタピラ文刻み隆帯文により方形、楕円区画。	にぶい黄橙	井戸尻III
第67図	11	I区	42号住居		小型土器。	区画文。	橙	藤内III
第67図	12	I区	42号住居		小型手づくね。		橙	藤内III
第67図	13	I区	42号住居		有孔鐫付土器。樽型。		橙	藤内III
第67図	14	I区	42号住居		有孔鐫付土器。樽型。		黒褐色	藤内III
第68図	1	I区	43号住居	樽	胴中央以下欠損。	眼鏡状突起。現状・2段楕円横帯文。	橙	井戸尻I
第68図	2	I区	43号住居	深鉢	口縁部、胴部中央以下欠損。鐫付土器。	半肉状隆帯文により大柄な縦区画を基調とする。	黒褐色	井戸尻I
第68図	3	I区	43号住居	深鉢	算盤底、胴部括れ口縁部内湾するキャリバー形土器。	両端リング付・三角状突起。鐫付、半肉隆帯文。J・I字懸垂の交互。内側に三叉文、沈線文。	橙	井戸尻I
第68図	4	I区	43号住居		屈折底。胴部下部に括れ、口縁部丸く内湾。	三角状突起、J字・I字懸垂の交互、内側に沈線紋。		
第69図	1	I区	43号住居	深鉢	口縁部に括れを有する樽形。	両端リング、円窓に蛇状隆帯文突起・裏眼鏡状。刻み隆帯による懸垂で4区画、内側に半肉文。	にぶい橙	井戸尻1
第69図	2	I区	43号住居		屈折底。胴部下部括れ口縁部丸く内湾。	円窓・三角状突起。胴部縄文。	明赤褐色	井戸尻1
第69図	3	I区	43号住居		屈折底。直線的に開き、口縁部で極端に内湾。リング付円窓突起。	地文縄文、口縁部、円弧文。	橙	井戸尻I
第69図	4	I区	43号住居		屈折底、口縁部で丸く膨らむ。	突起。地文縄文に半肉懸垂文。	にぶい橙	井戸尻I
第69図	5	I区	43号住居		胴部下部欠損。直線的に開く。	突起。地文、燃糸文に半肉懸垂文。	にぶい赤褐色	井戸尻I
第70図	2	I区	43号住居	深鉢	キャリバー形土器。口縁部破		にぶい黄色	井戸尻I
第70図	3	I区	43号住居		口縁部括れ小型樽が形土器。	地文無文に貼り付け隆帯文。	暗褐色	井戸尻I
第70図	4	I区	43号住居		胴部中央以下欠損。	三角状突起。連鎖状懸垂文、地文、縄文。	にぶい橙	井戸尻I
第70図	5	I区	43号住居		胴部中央括れ、口縁部内湾。	4単位小突起、下部円形文。胴部下部、櫛歯文。	暗褐色	井戸尻I
第70図	6	I区	43号住居		口縁部下位が膨らむ形態。突起欠損。	口縁部、胴部にJ字懸垂。	赤褐色	井戸尻I
第70図	7	I区	43号住居		括れ部直下に最大径。口縁部外反、壺状土器。	括れ部刻み目隆帯。地文縄文に反連弧文。中央に円形文。	橙	井戸尻I
第71図	1	I区	44号住居		直線的に開くバケツ形。	4単位突起、多段・長楕円形区画文。角押文。	にぶい橙	猪沢期
第71図	3	I区	44号住居		括れ部から外反し口縁部で立ち上がる。	直線的に沈線、条線で施文。	灰褐色	猪沢期
第71図	6	I区	44号住居		直線的に開き口縁部やや丸くなる。	4単位小突起。多段・長楕円区画。角押文。	にぶい赤褐色	猪沢
第72図	1	I区	45号住居		括部以下欠損。口縁部外反した後直立。	粘土貼り付け、ム字文により4分割後、内部に縄文、頸部は沈線による斜格子目文。	明褐色	猪沢
第72図	2	I区	45号住居		直線的に開き、口縁部で極端に外反するが丸みを持ちながら直立。	口縁部に平行に幅広角押文後等間隔に垂線。括れ部以下は、無文に粘土貼付けによるクランク状文。	にぶい橙	猪沢
第72図	3	I区	45号住居		胴部丸み、括れた後小さく外反。	擬似・蓮華文、胴部、半竹文により縦位分割。	明るい褐色	猪沢
第74図	1	I区	49号住居		括れ部を形成する樽状。	口縁部4単位小突起。胴部、指頭痕。	にぶい橙	藤内
第74図	2	I区	49号住居		発達しない屈折底。直立する筒形で口縁部僅かに開く。	括部文様帯から押引文による懸垂文。指頭痕。	明褐色	藤内III
第74図	3	I区	49号住居		胴部緩やかに外反し口縁部直立。	鐫付。J字懸垂、三角文。	橙	藤内III
第74図	4	I区	49号住居		胴部以上欠損。	指頭痕。	にぶい橙	不明
第74図	5	I区	49号住居		ゆるい外反で口縁部内湾。	括れ部隆帯文、胴部縄文。	にぶい橙	藤内III
第74図	6	I区	49号住居		発達しない屈折底。口縁部丸	円形突起。パネル文。		藤内III
第74図	7	I区	49号住居		胴ほぼ直立口縁部やや内湾。	4単位突起・玉葱文。胴部、隆帯懸垂文。	褐灰	藤内III
第74図	8	I区	49号住居		直線的に開いた後、内湾。	縦位系区画文。	灰褐色	藤内III
第74図	9	I区	49号住居		直線的に開く。	口縁部、連続三角文、胴部縄文。	にぶい赤褐色	藤内III
第74図	10	I区	49号住居		体部、蓮華状の台付土器。	1対把手。連続三角文。	にぶい褐色	藤内III
第74図	11	I区	49号住居		弱く外反して口縁部に達する。	頸部付近に粘土紐貼り付けによる横帯文。無文。	明褐色	猪沢
第75図	1	I区	49号住居		胴部直立、口縁部やや外反。	地文縄文。	にぶい橙	藤内III
第75図	2	I区	49号住居		浅鉢。	小突起。地文縄文。	にぶい褐色	藤内III
第75図	3	I区	49号住居		小型手づくね土器。碗形。	円孔。	にぶい黄橙	藤内III
第75図	4	I区	49号住居		小型手づくね土器。		にぶい黄橙	藤内III？



第75図	5	I区	49号住居		小型時、直線的に開くバケツ。	鐳付土器。J字、I字状懸垂によりIV分割。	にぶい橙	党内III
第75図	6	I区	49号住居		小型手づくね土器。深鉢。		褐色	藤内III
第75図	7	I区	49号住居		直線的に広がり、口縁部に達する。	地文、縄文。		藤内III
第75図	8	I区	49号住居		小型手づくね土器。		褐色	藤内III
第75図	9	I区	50号住居		直線的に開くバケツ。	4単位突起からの懸垂文で4分割。両脇キャタピラ隆帯文により三角、円文。小突起。胴部、縄文。	にぶい褐色	藤内III
第75図	10	I区	50号住居	深鉢	やや屈折底、口縁部は小さく内湾。突起。	地文縄文	にぶい橙	井戸尻I段階
第75図	11	I区	50号住居	両耳状壺?		無文。		不明
第75図	12	I区	50号住居	小型手づくね				不明
第76図	5	I区	53号住居		緩やかに開き口縁部でさらに開くバケツ。4単位小突起。	楕円区画文。クランク状文。角押文。		猪沢
第76図	6	I区	53号住居		口縁部直下膨らみ、口縁部直立。	刻み目隆帯文。楕円横帯文。		井戸尻II
第76図	7	I区	53号住居		口縁部膨らみ。	刻み目隆帯文。口縁部、小突起・玉葱文。		井戸尻II
第76図	8	I区	53号住居		屈折底。口縁部で外反し内湾。4単位突起。	胴部、縄文。		井戸尻II
第76図	9	I区	53号住居		樽型。	沈線系渦巻文。		井戸尻II
第76図	10	I区	53号住居	小型手づくね		無文。		井戸尻II
第76図	11	I区	53号住居		括部・く字状に屈曲。	刻み目隆帯文。地文集合沈線。		井戸尻II~III
第76図	12	I区	56号住居		口縁部直下で急激に外反し、直立する。	両脇にキャタピラ文の隆帯により複合三角文、内部に玉抱三叉文。	橙	新道新
第76図	13	I区	56号住居		直線的に開くバケツ。	両脇キャタピラ文の隆帯により三角・横帯文、波状沈線。	にぶい赤褐色	新道新
第76図	14	I区	56号住居		胴部やや膨らむ樽形。	両脇キャタピラ文の隆帯により三角・横帯文。	橙	新道新
第76図	15	I区	56号住居		口縁部欠損。樽形。	多段・互違・楕円横帯文。	橙	新道新
第77図	1	I区	56号住居		直線的に開き、口縁部やや直立するバケツ。	地文縄文に粘土貼付けによる抽象文。		新道新
第78図	1	I区	56号住居		胴部、外に僅かに湾曲して開く。	地文縄文。口縁部、捻りノ字。胴部、粘土貼付けによるU地文。		新道新
第78図	2	I区	56号住居		括れ部形成、口縁部直立。	沈線、条線により施文。口縁部下位に連鎖状文。		新道新
第78図	3	I区	56号住居		緩やかに外反する。	楕円瘤貼り付け。		新道新
第78図	4	I区	56号住居		胴部中央に括れ、口縁部直下が膨らみ、口縁部直立。	口縁部集合沈線。胴部中央楕円横帯文。地文縄文。		新道新
第78図	5	I区	56号住居		脚付浅鉢状、有鐳付土器。	無文。		新道新
第78図	6	I区	56号住居	小型てづくね		無文。		新道新
第78図	7	I区	56号住居	手づくね、小型丸底		無文。		新道新
第78図	8	I区	56号住居	手づくね碗		整形痕。		新道新
第78図	9	I区	56号住居	手づくね、小型深鉢		懸垂文。		新道新
第78図	10	I区	53号住居		胴部中央最大径、括部を形成、口縁部内湾。	1対把手。口縁部、無文。胴部、三角・楕円横帯文。		井戸尻I
第78図	11	I区	58号住居		直線的に開くバケツ。	地文縄文、口縁部粘土貼り付けによる蓮子、胴部、蛇状・粘土貼付・懸垂文。		曾利III~IV
第78図	12	I区	58号住居		胴部中央以上欠損。外側に開く。	地文縄文に蛇状沈線。		曾利IV
第79図	1	I区	B-31イ土坑	深鉢	胴部直線的開き、口縁部下端で外反し、直立。	4単位、突起(ノ字突起含む)突起の下部は玉葱区画。括部部楕円横帯文。胴部、U字懸垂を中心とした、縦位文様。	にぶい赤褐色	藤内III
第82図	1	I区	J'-31ホ土坑		直線的に開き長めの体部。口縁部極端に内湾。	円窓+蛇状隆帯突起。隆帯文による三角文。括れ部楕円横帯文。胴部地文縄文。		藤内III
第82図	2	I区	J'-32口土坑		屈折底、極端に開き、口縁部く字に内側に屈折。	地文縄文。円窓+蛇状隆帯文突起。先端部は蛇頭化、端部にリング付。刻み目隆帯。		井戸尻I
第83図	1	I区	F'-32ハ土坑		直線的に開き口縁部付近で緩やかに外反。	無文地に粘土貼付文と角押文により三角文、クランク状?文。		猪沢
第83図	2	I区	H'-28イ土坑		直線的に開く、細身のバケツ。	小突起よりJ字状懸垂文、縦位区画文。		藤内III
第83図	3	I区	L'-32口土坑		底部張り出し、胴部直立後、口縁部で外反。	円窓突起。4段・楕円横帯文。		井戸尻1
第83図	4	I区	H'-30-1グリッド		口縁部、底部欠損。現状、釜形。	地文縄文に渦巻連結文。		曾利
第83図	5	I区	H'-31トビット		魚籠形、有孔鐳付土器。	地文縄文。		井戸尻
第83図	6	I区	K'-32イ土坑		筒形に近いが、直線的に開く。口縁部欠損。	頭部・反射藤・懸垂文。地文集合沈線。		曾利1
第84図	3	I区	J'-31口土坑		基本的にバケツ形に括部を形成。	施文は同一の半竹工具で、口縁部、縦列沈線文、括部上部は、方形区画の横帯文、胴部は無文地に乱脈文。		藤内I
第85図	1	I区	I'-31リ土坑	浅鉢		羊肉状隆帯文により円形・波状文。		新道
第85図	3	I区	M'-32口土坑		つぼ状。4単位把手付。	胴部、対抗U字文。		井戸尻II
第85図	4	I区	J'-31ヲ土坑	浅鉢		連鎖状文、内ぶにキャタピラ文。1対突起。		藤内
第85図	6	I区	A-31単出土土器		括部以下欠損。	4単位ノ字突起。複合三角文。		新道新~藤内I
第86図	2	I区	E'-32-4グリッド		胴部、口縁部が丸く、括れ部を形成する。	集合沈線文にキャタピラ文を配する垂下隆帯文。		曾利I段階
第86図	3	I区	J'-32-1グリッド		直線的に開き、口縁部でさらに開く。	口縁部、4単位・W字突起。胴部上半、4単位・楕円区画・偽反射鏡文、以下は地文縄文。		井戸尻III
第86図	4	I区	L'-31-3グリッド		胴部中央が僅かに括れるが、基本的には直線的に開くバケツ。	三角状小突起を基点に、口唇部4分割。縦位区画文。		藤内I段階

第86図	7	I区	E'-29-1 グリッド		胴部中央が膨らみ僅かな括れを形成。	地文、集合沈線にU字懸垂文。		曾利I
第87図	1	I区	I'-31ホ 土坑	深鉢	直線的に開き、口縁部直立。	円窓+蛇状隆帯突起。J字懸垂文を中心に縦位区画文。	薄橙	藤内II
第87図	2	I区	M'-32-4 グリッド	深鉢	直立する胴部に口縁部膨らみ内湾。	キャタピラ隆帯文により渦巻文、対抗U字文。	にぶい褐色	藤内III段階
第87図	4	I区	M'-28単 独出土土器	深鉢	緩い膨らみを保ち開く。	八字状文と蛇状懸垂文の交互文。	淡褐色	曾利V段階
第87図	5	I区	L'-26イ 土坑	深鉢	底部	八字文	淡褐色	曾利V
第87図	6	I区	L'-26イ 土坑	深鉢	直線的に広がるバケツ	コ字区画の内側に八字文充填	淡黄～褐色	曾利V段階
第87図	7	I区	C'-30-4 号配石	壺	肩部より急角度で狭まる。	弧状隆線。八字文が充填される。	にぶい褐色	曾利V段階
第88図	1	I区	C'-31-4 号配石	深鉢	直線的に広がるバケツ。胴部欠損	コ字区画に足の短い集合条線で充填	淡褐色	曾利V
第88図	2	I区	C'-30-4 号配石	深鉢	胴部欠損。直線的に開くバケツ	口縁部・沈線に長細楕円による文様帯胴部・八字状文	淡褐色	曾利V
第88図	3	I区	A'-29屋外 埋塞	深鉢	基本的にバケツで括れ部を有する。	大きなコ字区画、内部に八字文充填	淡褐色	曾利V
第88図	4	I区	K'-25ト 土坑	深鉢	緩やかにぼれ部を胴中央部に形成	口縁部一条の沈線、コ字区画・内側列点文で充填	淡褐色	曾利V
第88図	5	I区	B'-2814 住覆土	深鉢	直線的に開くバケツ。大半が欠損	口縁部並行沈線、コ字区画に八字文充填	淡褐色	曾利V
第88図	6	I区	D'-2820 住覆土	深鉢	直線的に開くが口縁部で小さく直立・内湾	口縁部並行沈線、コ字区画、内側縄文で充填	にぶい褐色	曾利IV～V
第88図	7	I区	B'-24-2・3 グリッド	深鉢	X字把手土器	括部部に4単位X字把手	淡い褐色	曾利IV～V
第89図	1	I区	K'-30ホ 土坑	深鉢	極端に開き口縁部付近丸み	平行沈線による懸垂文で区画後内側に蛇状沈線	淡い褐色	曾利V
第89図	2	I区	A'-31屋外 埋塞	深鉢	胴部中央に括れ。口縁部4単位波状突起	口縁部並行沈線後U字区画、内部縄文で充填	にぶい褐色	曾利V段階
第89図	3	I区	D'-315 住覆土	深鉢	直線的に開くバケツ	口縁部並行沈線、コ字区画・内部八字文で充填	淡い褐色	曾利V
第89図	4	I区	B'-28-3 グリッド	壺		両部沈線による渦巻文	にぶい褐色	曾利IV～V
第89図	5	I区	A'-28-3 グリッド	深鉢	胴部状半に緩い括れ部	平行沈線による懸垂文で区画後、大柄文で充填	にぶい褐色	曾利V
第89図	6	I区	K'-31-2 グリッド	壺	両耳粒	無文	淡い褐色	曾利IV～V

#### 台形土器

図番号	区内番号	出土地区	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	帰属遺構の時期	出土層	時期判定	上径 (cm)	下径 (cm)	高さ (cm)
第50図	4C		4住			4住	藤内I			20.7	18.5	4.4
第50図	5C		49住		P6	49住	井戸尻I			20.0	15.6	5.0
第50図	6C		92住		P8	92住	井戸尻II～III			22.0	24.9	7.5
第91図	1I		33住		24773	33住	藤内	床直上(下)	藤内	20.0	19.4	6.8
第91図	2I		G'-28 33住		24774	33住	藤内	床直上(下)	藤内	24.2	24.4	3.3
第91図	3I		A'-26 10住		7789	10住	藤内	壁立掛(下)	藤内	24.2	26.1	3.0
第91図	4I		B'-27-4	1	8588	17住	猪沢	上		(10.0)	(11.9)	3.2
第92図	1I		K'-23-2 49住	3	30134	49住	藤内	中		17.2	18.7	3.1
第92図	2I		10住Pit10		9736	10住	藤内	住居ビット内	藤内	14.4	16.5	2.0
第92図	3I		B'-27-4	1	8594	17住	猪沢	上		12.8	13.8	2.0

#### 小形土器

図番号	区内番号	出土地区	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	帰属遺構の時期	出土層	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	形態
第94図	1A		16住		P11	16住	曾利IV		72.0	52.1	52.2	平底鉢
第94図	2A		2トレンチ内3土上面							(27.6)	(50.6)	平底鉢
第94図	3A		B1						(45.5)	40.4	80.1	深鉢
第94図	4B		2住		P62	2住	諸磯 a		44.8	20.9	30.0	平底鉢 諸磯 a
第94図	5B		67土			67土	曾利I		105.0	40.0	69.0	鉢 曾利I
第94図	6C		1住		P519他	1住	藤内II		166.0	80.0	91.0	把手付鉢
第94図	7C		1住		P60他	1住	藤内II		(106.0)	57.0	92.0	
第94図	8C		7住		P20+21+22他	7住	曾利V		155.0	70.0	77.0	鉢 曾利V
第94図	9C		19住		P104	19住	井戸尻III		112.0		78.0	深鉢 井戸尻III

第95図	1C	19住		P110	19住	井戸尻Ⅲ		127.5	55.0	84.5	鉢 井戸尻Ⅲ	
第95図	2C	35住		P8	35住	猪沢		(90.5)	43.0	37.6	平底鉢 猪沢	
第95図	3C	35住			35住	猪沢		(88.0)		(45.8)	丸底鉢 猪沢	
第95図	4C	37住		炉内出土	37住	井戸尻Ⅲ		(67.0)	30.0	(90.5)	深鉢 井戸尻	
第95図	5C	41住			41住	藤内Ⅱ		(62.0)		36.0	丸底鉢 藤内	
第95図	6C	43住			43住	新道		137.0	72.5	70.0	鉢 新道	
第95図	7C	56住		P39	56住	井戸尻Ⅰ～Ⅱ		92.0	65.0	76.0	鉢 井戸尻Ⅰ～Ⅱ	
第95図	8C	75住		Pit5-P1	75住	猪沢		57.4	33.1	44.2	平底鉢 猪沢	
第95図	9C	84住		P1	84住	藤内Ⅰ		53.8	31.2	58.3	深鉢 藤内	
第95図	10C	84住		P10+11 他	84住	藤内Ⅰ		132.0	92.0	91.0	把手付鉢 藤内Ⅰ	
第95図	11C	91住		P16	91住	井戸尻Ⅲ		(52.5)	36.5	67.5	深鉢 井戸尻Ⅲ	
第96図	1C	92住		P5	92住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ		112.0	64.0	120.0	深鉢 井戸尻Ⅱ～Ⅲ	
第96図	2C	92住		P36	92住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ		102.5	50.0	49.0	鉢 井戸尻	
第96図	3C	94住		炉内出土	94住	井戸尻Ⅲ		(66.0)	(55.0)	65.1	井戸尻 平底鉢 赤色塗料	
第96図	4C	96住			96住	井戸尻Ⅱ		46.5	31.6	49.0	高台付鉢 井戸尻	
第96図	5C	97住		P90他	97住	井戸尻Ⅲ		(79.0)	47.6	88.4	深鉢 井戸尻	
第96図	6C	97住		P165	97住	井戸尻Ⅲ		(89.0)	42.3	99.6	深鉢 井戸尻	
第96図	7C	97住		P53	97住	井戸尻Ⅲ		(90.3)	40.5	97.2	深鉢 井戸尻	
第96図	8C	97住		P163	97住	井戸尻Ⅲ		(80.5)	47.9	97.4	深鉢 井戸尻	
第96図	9C	97住		P232	97住	井戸尻Ⅲ		(51.9)	40.2	82.6	深鉢 井戸尻	
第96図	10C	97住			97住	井戸尻Ⅲ		(51.7)		41.4	井戸尻 丸底鉢 台付鉢 井戸尻 赤色塗料	
第96図	11C	97住		P229	97住	井戸尻Ⅲ		77.2	45.6	64.0	台付鉢 井戸尻 赤色塗料	
第97図	1C	97住		P31	97住	井戸尻Ⅲ			55.0	47.5	台付土器 井戸尻	
第97図	2C	99住		P10	99住	井戸尻Ⅲ		55.0	32.6	63.0	平底鉢 井戸尻	
第97図	3C	F' 40 4土			F' 40 4土			(74.0)	36.4	(84.2)	深鉢 五領ヶ台	
第97図	4C	43土		P1	43土	新道				53.0	29.5	鉢 新道
第97図	5C	146土			146土	井戸尻		146.2	(62.3)	60.2	台付両把手付土器	
第97図	6C	I' 45 1土			I' 45 1土			(81.0)	33.0	85.0	深鉢	
第97図	7C	D' 39						97.0		75.0	深鉢 五領ヶ台	
第97図	8C	C' 41						(53.0)		(26.5)	鉢	
第97図	9C	G' 37						40.0		35.0	丸底鉢	
第97図	10C	B' 41						(54.0)	51.4	46.1	平底鉢 赤色塗料	
第97図	11C	B' 41							45.9	(45.6)	深鉢	
第98図	1I	E'-29-1 16住	2	1390	16住	猪沢	上	70.0		(87.0)	有孔台付	
第98図	2I	D'-29-3	2	11819	16住	猪沢	上	82.0	42.0	96.0	深鉢	
第98図	3I	C'-27-1 17住	1	10119	17住	猪沢	上		41.0	71.0	深鉢	
第98図	4I	C'-27-3	1	9668	18住	諸磯 b	上		28.0		鉢	
第98図	5I	K'-32-3 42住	3		42住	井戸尻	上		17.0		鉢	
第98図	6I	E'-28-2 20住		16640	20住	藤内	中	46.0	36.0	67.0	深鉢	
第98図	7I	K'-32-3 42住		28253	42住	井戸尻	中	24.0	60.0	64.0	有孔罎付	
第98図	8I	M'-29-2 45住	3	26022	45住	猪沢	中	57.0		28.0	鉢	
第98図	9I	M'-26 41住		34091	41住	藤内	中		25.0	87.0	深鉢	
第98図	10I	M'-31 43住		30993	43住	井戸尻	床面	85.0	50.0	68.0	台付鉢	
第98図	11I	M'-31 43住		30994	43住	井戸尻	床面	84.0	35.0	45.0	鉢	
第99図	1I	L'-27-3 45住	3	30316	45住	猪沢	中	82.0		38.0	鉢	
第99図	2I	L'-28 49住		34016	49住	藤内	中	47.0	26.0	51.0	深鉢	
第99図	3I	K'-29-2 49住		28913	49住	藤内	中	83.0		38.0	鉢	
		K'-29-2 49住		28572	49住	藤内	中					
第99図	4I	K'-28-1 49住	3	30683	49住	藤内	中	(42.0)		18.0	鉢	
第99図	5I	L'-26 50住 PIT3		33205	50住	藤内	住居ピット	26.5		31.0	鉢	
第99図	6I	K'-28 49住		34252	49住	藤内	中	50.0		34.5	鉢	
第99図	7I	L'-26 50住		32445	50住	藤内	床面	(68.0)	44.0	(92.0)	深鉢	
第99図	8I	56住			56住	藤内	中		36.0		鉢	
第99図	9I	J'-29 51住		29910	51住	五領ヶ台	中	60.0	28.0	57.0	深鉢	
第99図	10I	53住		30233	53住	藤内	中		25.5	39.0	深鉢	
第99図	11I	K'-26 56住 PIT4		34303	56住	藤内	住居ピット	59.0		66.0	有孔罎付台付	
第99図	12I	J'-26-1 56住	1	33211	56住	藤内	中	60.0		30.0	鉢	
第100図	1I	J'-26 56住			56住	藤内	中	(36.0)	27.5	28.0	鉢	
第100図	2I	J'-27 56住		34316	56住	藤内	中	70.0		35.0	鉢	
第100図	3I	C'-28-4	1	9515				(63.0)	40.0	33.0	鉢	
第100図	4I	F'-25-1	2	20815				38.0	40.0	34.0	鉢	
第100図	5I	G'-30 PITイ					ピット	(52.0)	43.0		深鉢	
第100図	6I	56住			56住	藤内	中				鉢	
第100図	7I	K'-30-4	1	27101				30.5	33.0	55.0	深鉢	
第100図	8I			33198	50住	藤内		(71.0)	49.0	100.0	深鉢	
第100図	9I							72.0	50.0	42.0	鉢	

## 土偶

図番号	図内番号	出土地区	土偶番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	帰属遺構の時期	出土層	時期判定	分類	部位・形態	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
第103図	1A		12	1住		P33	1住	曾利Ⅲ		称名寺 I	IA	右脚部	-40	-45.5	-47.5	56.4	
第103図	2A		8	5住		P104	5住	曾利Ⅳ		曾利		左胸部	-40.4	-36.7	-23.6	23.5	
第103図	3A		69	B5G							IA	右胸部・右腕	-19.5	-37	27.1	16.8	
第103図	4B		101	1住		51	1住	曾利Ⅰ		新道	IA	左腕	-34.4	-62.1	26.4	51.2	
第103図	5B		102	3住		P119	3住	曾利Ⅰ			IB	腕部	-19.7	-55.5	-50.6	43.8	
第103図	6B		100	8住		ウ	8住	曾利Ⅲ				胸部	-42.1	-40.5	22.2	35.3	
第103図	7B		37	8住		工	8住	曾利Ⅲ			IB	左脚部	-24	18.7	24.5	10.6	
第103図	8B		40	8住		P20	8住	曾利Ⅲ			IA	腕部	-33.2	19.4	14.8	7.6	
第103図	9B		39	8住		P103	8住	曾利Ⅲ			IA	腕部	-35.3	25.3	14.8	10.7	
第103図	10C		97	97住		P267	97住	諸磯b		藤内	Ⅲ	腹・臀部	-119	-71.2	44.8	369	レリアウトミス
第104図	1C		107	41住		P120	41住	井戸尻		五領ヶ台	I	頭部	43.5	35	15.5	22.1	
第104図	2C		84	1住		Pit1	1住	藤内Ⅱ		猪沢～新道	Ⅳ	頭部	-61.1	-59	-27	52	
第104図	3C		10	19住		土1	19住	井戸尻Ⅲ		藤内	Ⅳ	頭部	-121	90.6	62.4	314	
第104図	4C		27	78住		P26	78住	藤内Ⅰ		新道	Ⅵ	腕部	-127	-91.5	55.5	234	
第105図	1C		29	1住			1住	藤内Ⅱ		猪沢～新道	Ⅲ	頭部	-52.3	50.7	48.2	96.7	
第105図	2C		41	1住		P41	1住	藤内Ⅱ		猪沢～新道	Ⅴ	頭部	-49.6	-51.9	35	68.3	
第105図	3C		91	21住			21住	猪沢		五領ヶ台	I	頭部	-31	45.2	36.1	34	
第105図	4C		32	21住			21住	猪沢		五領ヶ台～猪沢	Ⅱ	頭部	-45.2	48.5	-36	66.1	
第105図	5C		86	40住			40住	猪沢		五領ヶ台	I	頭部	-24.1	23.8	22.8	11	
第105図	6C		4	78住			78住	藤内Ⅰ		五領ヶ台～猪沢	Ⅱ	頭部	-27.9	-38.2	-21.6	13.9	
第105図	7C		28	92住			92住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ		五領ヶ台～猪沢	Ⅱ	頭部	-32.5	42.9	-38.3	39	
第106図	1C		11	86住			86住	猪沢		五領ヶ台～猪沢	Ⅱ	頭部	-56.1	-46.6	-44.9	63.9	
第106図	2C		77	95住		P7	95住	井戸尻Ⅲ		五領ヶ台～猪沢	Ⅱ	頭部	-28.4	40.5	38.8	42.6	
第106図	3C		73	92住			92住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ		五領ヶ台～猪沢	Ⅱ	頭部	-24	-38	-25	14	
第106図	4C		90	97住			97住	井戸尻Ⅲ		五領ヶ台	I	頭部	-31.4	33.6	25.6	15.5	
第106図	5C		63	C'39・40G		P8				猪沢～新道	Ⅴ	頭部	-37	-39.1	-27.3	30.3	
第106図	6C		52	53住			53住	猪沢		五領ヶ台	I	頭部	-36.5	37.2	34.7	23.7	
第106図	7C		104	H'34G						五領ヶ台	I	頭部	-21.3	-36.4	-24.5	11.3	
第106図	8C		7	I'35G						曾利	Ⅴ	頭部	-44	50	23.6	46.8	
第106図	9C		80	52住			52住	井戸尻Ⅲ		IA水平		胸部・両腕	-29.7	69.2	21.6	29.7	
第106図	10C		13	99住			99住	井戸尻Ⅲ				左胸部	-67.7	-30	34.9	49.2	
第107図	1C		47	21住		P11	21住	猪沢		猪沢	ⅡA水平	胸部・右腕	-56.3	-87	-19.8	91.8	
第107図	2C		85	19住			19住	井戸尻Ⅲ			ⅡB水平	左腕・左胸	-63.2	-56	-28.8	53.3	
第107図	3C		93	94住			94住	井戸尻Ⅲ			ⅡA水平	左胸部・左腕	-45	-74	22.4	97.8	
第107図	4C		17	41住			41住	藤内Ⅱ			ⅡA水平	左胸・左腕	-22.7	-32.8	21.5	11.7	
第107図	5C		64	1住		Pit8	1住	藤内Ⅱ			ⅡA	右腕	-31.4	38.8	20.6	20.6	
第107図	6C		68	1住		北ベルト	1住	藤内Ⅱ			IA	右腕	-35.9	25.3	20.8	16.6	
第107図	7C		67	7住		P26	7住	曾利Ⅴ			IA	右腕	-55.9	22.6	19.5	19.9	
第107図	8C		61	92住			92住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ			IA	右腕	-55.5	-23.4	19.2	22.6	
第107図	9C		34	108住			108住	井戸尻				右腕	-64.6	-28.5	19	30.4	
第107図	10C		72	81土		P241	81土	新道			IA	右腕	-51.2	21.5	19	17.3	
第107図	11C		110	4住		pit3	4住	藤内Ⅰ			IA	右腕	-31.8	11.4	9.6	2.8	
第107図	12C		1	3住		P9	3住	猪沢			ⅡA	左腕	-45	-34.7	12.6	22.6	
第107図	13C		18	19住			19住	井戸尻Ⅲ			ⅡA	左腕	-38	40.5	22	24	
第107図	14C		35	41住		P33	41住	井戸尻		新道	IB	左腕	-35.6	-27.7	18.3	12.1	
第107図	15C		36	52住			52住	井戸尻Ⅲ			IA	左腕	-23.6	-21.9	15.2	7.5	
第107図	16C		70	91住			91住	井戸尻Ⅲ			IB	左腕	-35.2	17.5	14.5	8.2	
第107図	17C		106	町7住			町7住	猪沢			IA	左腕	-45.3	14.5	16	11.2	
第107図	18C		105	B'41G							IA	左腕	-26.9	11.4	10.6	3.3	
第108図	1C		9	61住		pit2	61住	新道		猪沢～新道	Ⅱ	腹・臀部	-50.5	53.1	26.1	69.5	
第108図	2C		2	75住			75住	猪沢				腹部	-39.6	-40	30.5	40.4	
第108図	3C		6	99住			99住	井戸尻Ⅲ				腹部	-44.8	-37.8	-22.7	23.3	
第108図	4C		22	G'45G						新道	Ⅱ	腹部	-57.4	-40.1	-21	40.5	
第108図	5C		14	60住			60住	藤内Ⅱ				腰部	-62.9	-50.8	-41.6	88.6	
第108図	6C		113	200土			200土			猪沢	I	腹・臀部	-77	84	55	262.2	
第108図	7C		112	49住			49住	井戸尻Ⅰ		猪沢	I	腹・臀部	-112	-74	50	293	
第109図	1C		98	3住			3住	曾利Ⅰ		新道	I	腹・臀部	-60	-57.3	-43.2	127	
第109図	2C		74	14住		P3	14住	井戸尻Ⅲ		新道～井戸尻	Ⅱ	腹・臀部	-65.2	32.5	18	40.1	
第109図	3C		45	41住		P17	41住	藤内Ⅱ		猪沢	Ⅱ	腹・臀部	-60.7	-60	-45.7	101.8	
第109図	4C		42	41住		P18	41住	井戸尻		藤内		胸部	-58.5	-38	31.6	69.5	
第109図	5C		58	63住		P1	63住	藤内Ⅰ		猪沢	I	腹・臀部	-95.5	-50.1	-65.5	223	
第109図	6C		108	78住		P27	78住	藤内Ⅰ		新道		円錐形	-106	-59	60.5	204	
第110図	1C		49	92住			92住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ		井戸尻	Ⅲ	腹・臀部	-82.8	-54.1	30.1	112	
第110図	2C		82	54住			54住	井戸尻Ⅲ				胸部	-43.1	-50.5	-28.2	47.3	

第110図	3C	76	B'39G					猪沢～新道	II	腹・臀部	-54.6	51.3	27.1	74.1	
第110図	4C	103	H'45G						水平	胸・腕部	-43.6	-31.3	16.6	19.8	
第110図	5C	46	42住	P63	42住	猪沢		猪沢～新道	II	腹・臀部	-61	-75.5	-50	138	
第110図	6C	96	92住		92住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ		井戸尻		臀部・中空	-84.3	-64.3	42.8	103	
第111図	1C	31	1住	P1	1住	藤内Ⅱ		藤内	I	正座位	-60	71.6	56.5	190	
第111図	2C	55	63住		63住	藤内Ⅰ		新道	III	腹・臀部	-68.1	46.4	36.5	63	
									V	脚部					
第111図	3C	65	103住		103住	古墳時代前期		新道	I	正座位	-27.2	24.3	16.2	15.2	
第111図	4C	53	14住		14住	五領ヶ台Ⅱ		井戸尻	III	正座位	-44.6	64	-33.7	75.3	
第111図	5B	99	74土	P317	74土	井戸尻Ⅲ		曾利	III	正座位	-95.9	74.1	-57.8	259	レイアウトミス
第111図	6C	57	D'41G					井戸尻	III	正座位	-42.4	47	46.7	40.9	
第111図	7C	30	D'44G					新道	II A水平	胸・腕部	-71.7	86.7	-41.6	102	
第112図	1C	83	1住	P819	1住	藤内Ⅱ			III B	座位・右脚部	-51	-25.8	-39.6	39.2	
第112図	2C	60	1住	P839	1住	藤内Ⅱ		新道	IVA	右脚部	-20.3	32.7	41.5	23.7	
第112図	3C	54	2住		2住	藤内Ⅰ			III A	右脚部	-50.4	32.2	75.6	91.2	
第112図	4C	62	14住	P51	14住	井戸尻Ⅲ			III B	右脚部	-18.1	27.4	43	17	
第112図	5C	50	62住	P3	62住	藤内Ⅱ			I A	右脚部	-59	42.7	44	109.3	
第112図	6C	43	19住		19住	井戸尻Ⅲ			IV B	右脚部	-40.4	-56.8	-75	130	
第112図	7C	95	97住	P230	97住	井戸尻Ⅲ				水鳥頭	-51.7	40.7	44.3	54.3	
第112図	8C	92	78住		78住	藤内Ⅰ			III A	右脚部	-25.2	-45.1	-74.6	66.2	
第112図	9C	89	107住	P1	107住	古墳時代前期			IVA	右脚部	-28.4	34.7	52.5	41	
第113図	1C	87	38住		38住	五領ヶ台Ⅱ			IV B	右脚部	-39	-39.8	-16	16.7	
第113図	2C	71	14住	P119	14住	井戸尻Ⅲ				胸部	-36.9	-32.2	18.9	13.7	
第113図	3C	51	75住	Pit2	75住	猪沢			I A	右脚部	-36.1	-40.8	-47	60	
第113図	4C	56	町7住	P15	町7住	猪沢			I B	右脚部	-47.5	47.2	-47.8	83	
第113図	5C	79	237土		237土	五領ヶ台Ⅱ			II A	右脚部	-25.4	38.1	32.4	18.9	
										腕部・円錐形部					
第113図	6C	75	D'41G			新道					-68.4	32.5	31.8	67	
第113図	7C	5	G'43G			藤内			II A	右脚部	-22.8	-34.3	-27.2	19.2	
第113図	8C	111	22住		22住	井戸尻Ⅱ		新道	VA	脚部	-28.5	-45	46.5	44.3	
第113図	9C	109	12住		12住	新道			IVA	左脚部	-14.3	35	-32.4	10.3	
第114図	1C	88	108住		108住	中期			III B	左脚部	-19	27	50.2	23.2	
第114図	2C	44	74住		74住	猪沢			I A	左脚部	-57.7	44.5	48.6	110	
第114図	3C	38	D'32・33G						II	左脚部	-14.5	17.4	16.4	3	
第114図	4C	94	70住		70住	五領ヶ台Ⅱ			III B	左脚部	-28.4	39.5	49.8	38	
第114図	5C	59	168土	P2	168土	藤内Ⅱ			I A	左脚部	-54.6	-48.2	64.5	139	
第114図	6C		第112-7とダブリ												
第114図	7C	81	G'37G			井戸尻			III A	左脚部	-22.5	28.4	49.8	23.7	
第114図	8C	78	50土		50土	諸磯b				腹部	-52.7	-48.6	-31.5	60.9	
										胸部					
第115図	1I		A-24-3							胸部	-27	-20	14	5	
第115図	2I		A-27-4	1				猪沢	II A	脚部	-39	25.5	28.5	12.8	
第115図	3I		A-30-1	1	1住	五領ヶ台 上		猪沢		胸部	-29	-39.5	-27.5	25	
第115図	4I		A-30-1	1	302	1住	五領ヶ台 上		I A	脚部	-52	65	-48	103.8	
第115図	5I		A-30-4	2	925	1住	五領ヶ台 上		II A水平	胸・腕部	-47	-52.5	25	38.4	
第115図	6I		A-32-4	1	10住	藤内 上			I	脚部	-30.5	-37.5	-37.5	38	
第115図	7I		B'-31-2	3	2259	3住	井戸尻 上	猪沢～新道	III	頭部	-54	-45.5	-42.5	83	
第116図	1I		C'-24-1 23住		15458	23住	諸磯 上		I	脚部	-40.5	-58	-62	101.1	
第116図	2I		C'-26-4	2		21住	曾利 中	猪沢～新道	IV	頭部	-34.5	31.5	-28.5	18	
第116図	3I		D'-28 20住		19251	20住	藤内 中	藤内	VII	頭部	-97.5	-86.5	42	157.6	
									I A水平	腕部					
第116図	4I		D'-29-4	1	10640	16住	猪沢 上	猪沢	III	脚部	-34.5	28.5	46.5	29.2	
第116図	5I		D'-31-3 5住	1		5住	藤内 中	藤内	VIII	頭部	98	49	19	69.6	接合
			D'-31-3	5	3475	5住	藤内 中		III	正座位					
第117図	1I		D'-31-4 5住	3		5住	藤内 中		II B	腕部	-76	48.5	-28.5	79.9	
第117図	2I		D'-32-3	4	12182	19住	猪沢 中	新道	I	腹・臀部	-76	45	27	67.8	
第117図	3I		E'-28-1	2	15730	20住	藤内 中	藤内		胸部	-59.5	-50	30	78.6	
第117図	4I		E'-28-2			20住	藤内 上	新道	水平	胸・腕部	-54	-58	22.5	50.8	
第117図	5I		E'-29-1 163住	2	17058	16住	猪沢 上	新道	IV B	脚部	-41	37	-62	78.9	
第117図	6I		E'-30-3	1		25住	井戸尻 中		I A	腕部	-29.5	17	12	5.7	
第118図	1I		E'-29-3	1	13431			藤内	VII	頭部	-47	-55.5	-40.5	72.2	
第118図	2I		E'-29-1	1	13432	16住	猪沢 上		III A	脚部	-59	-39	52	64.6	
第118図	3I		E'-29-4	1	13433	25住	井戸尻 中	五領ヶ台～猪沢	II	頭部	-38.5	41.5	38.5	32.9	
第118図	4I		E'-31 12住			12312	12住	新道	I	腹・臀部	-87.5	-45.5	62	177.4	
第119図	1I		F'-27-4	1	18800	33住	藤内 上	藤内	VII	頭部	-67	41	27	34.1	
									I A水平	腕部					
第119図	2I		F'-29-3	3	20465	29住	新道 中	猪沢	I	腹・臀部	-59.5	-55.5	-44	115.6	
第119図	3I		F'-30 32住		22412	32住	新道 中		I A	脚部	-33	41.5	49	46.6	
第119図	4I		F'-32						I A	腕部	-59	24	-22.5	29.7	
第119図	5I		F'-31-4	2		30住	五領ヶ台 上		II B	脚部	-30.5	32	-28	19.5	
第119図	6I		G'-28 33住		24895	33住	藤内(新) 中	藤内	I A水平	胸・腕部	-59.5	-72.5	32	90.9	
第120図	1I		G'-28 33住		24495	33住	藤内(新) 中	新道	II	腹・臀部	-50	56	36	66.6	
第120図	2I		G'-27 33住		25362	33住	藤内(新) 中		II A	脚部	-38.5	-41	25.5	21.9	

第120図	3I		H'-30 39住		26163	39住	井戸尻	中	猪沢	II A	腕部	-53	-74.5	24.5	88.3	
第120図	4I		H'-30 39住		26187	39住	井戸尻	中		VA	脚部	-34	-39.5	45	41.7	
第120図	5I		H'-29-2	1	22384					II A	脚部	-37	26.5	33	21.8	
第120図	6I		I'-31-3	1	24509					I B水平	胸・腕部	-63	-84	40	141.8	
第120図	7I		J'-26-1	1	33262	56住	藤内	上	新道		胸部	-77	-60	-32.5	139.8	
第121図	1I		J'-26 56住		34141	56住	藤内	中	猪沢	I	腹・臀部	-70	56	-38.5	114.2	
										VA	脚部					
第121図	2I		J'-26 56住			56住	藤内	中	猪沢	I	腹・臀部	-74	-40.5	46	97.6	
										IA	脚部					
第121図	3I		J'-26 56住		34218	56住	藤内	中	新道	II A	腕部	-55.5	-42.5	31	49.3	
第121図	4I		56住			56住	藤内	中	新道	III A	脚部	-39.5	-50.5	56.5	66.5	
第121図	5I		J'-30-1	2	27516					II A	脚部	-28	28.5	25.5	14	
第121図	6I		J'-31-3	1							脚部	-27	-32	46.5	32.1	
第121図	7I		K'-28-4	4		49住	藤内	中	新道	III	腹・臀部	-53.5	-34	-41.5	54.4	
第121図	8I		K'-28-4	2		49住	藤内	上		II A	脚部	-34.5	-22.5	-27.5	10.6	
第122図	1I		K'-32 42住		28608	42住	井戸尻	中	井戸尻	IX	頭部	190	-82	54.5	472.9	接合
										I B水平	腕部					
			K'-32-4	1	27110	42住	井戸尻	上		II	正座位					
第122図	2I		L'-27-3 50住 北部小塚集中		32425	50住	藤内	中	藤内	VIII	頭部	135	84.5	38.5	201.8	接合
			K'-28 49住		33693	49住	藤内	中		I A水平	腕部					
			L'-26 50住 pit1		33207	50住	藤内	ピット		II	正座位					
第123図	2I		L'-31 44住		30396	44住	猪沢	中	猪沢	I	腹・臀部	-60	-38	43	68.1	
第123図	3I		L'-32-4	1	27773				新道	VII	頭部	-56	46.5	-26.5	46	
第123図	4I		M'-29-3 ペルト		25314				藤内	VII	頭部	-56.5	72	49	122.1	
第123図	5I		住		30532	45住	猪沢	中		II A	脚部	-27.5	25.5	-31	18.2	
第123図	6I				19275					II B	腕部	-30.5	47.5	23.5	24.2	
第123図	7I		M'-30-4	2	24130	43住	井戸尻	中	井戸尻	III	腹・臀部	-73.5	54	43	134.5	
第123図	8I		M'-33-4	1	23435				井戸尻	I A	脚部	-45	-45	-58.5	92.1	

装飾突起・顔面把手

図番号	図内番号	出土区	資料番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	帰属遺の時期	出土層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
第124図	1	C	1	12住			12住	新道		(48.5)	55.8	51.7	58.6
第124図	2	C	66	95住		P9	95住	井戸尻Ⅲ		(23.0)	31.6	32.1	15.8
第124図	3	C	3	97住		P12	97住	井戸尻Ⅲ		(83.5)	(101.7)	10.0	147.0
第124図	4	C	4	97住		P26	97住	井戸尻Ⅲ		(53.7)	(91.6)	9.5	177.0
第125図	1	I区		B'-26-2	1	9263				(35.5)	(36.5)	(19.0)	20.9
第125図	2	I区		F'-28 29住		19889	29住	新道	中	(50.5)	53.5	49.5	56.2
第125図	3	I区				34263				(29.5)	32.0	29.5	13.9
第125図	4	I区		J'-26 56住		33979	56住	藤内	中	(50.0)	57.0	56.5	103.2
第125図	5	I区		H'-32-2	3	24704				(19.5)	33.5	32.0	16.2
第125図	6	I区		J'-26-1 56住	4		56住	藤内	中	(53.5)	48.5	46.0	68.9

土鈴

図番号	図内番号	出土区	資料番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	帰属遺の時期	出土層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考	
第126図	1	A	19	13住		P165	13住	曾利Ⅳ		(39.3)	(39.2)	5.9	14.5		
第126図	2	B	12	D10G				曾利		(42.0)	(31.0)	9.5	14.5		
第126図	3	C	13	96住			96住	井戸尻Ⅱ		32.5	30.4	(21.3)	13.2		
第126図	4	C	4	58住		Pit8	58住	藤内Ⅰ		31.2	31.4	32.3	17.2	玉47入	
第126図	5	C	18	55住			55住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ		(42.8)	(40.2)	3.8	9.0		
第126図	6	C	14	98住			98住	井戸尻Ⅲ		(28.0)	36.6	8.8	20.3		
第126図	7	C	7	50住			50住	藤内Ⅱ		(38.0)	(35.6)	6.5	16.5		
第126図	8	C	17	97住		P100	97住	井戸尻Ⅲ		(35.5)	(24.6)	6.2	6.0		
第126図	9	C	8	19住			19住	井戸尻Ⅲ		(42.3)	(35.0)	6.5	12.1		
第126図	10	C	16	16住			16住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ		(40.2)	(48.0)	7.2	12.2		
第126図	11	C	11	41住		P126	41住	井戸尻		(33.8)	(25.6)	5.6	6.5		
第127図	1	C	15	97住			97住	井戸尻Ⅲ		(23.4)	31.6	9.0	14.1		
第127図	2	C	3	19住		P134	19住	井戸尻Ⅲ		37.8	33.0	32.7	30.1		
第127図	3	C	6	92住			92住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ		(43.4)	(41.9)	3.2	13.3		
第127図	4	A	22	C1G		P129				(48.6)	(45.4)	10.0	21.6		
第127図	5	C	5	F'44G		Pit3		井戸尻・藤内		36.7	35.6	31.6	36.6		
第127図	6	C	10	13住			13住	井戸尻Ⅲ		12.6	11.6	11.6	1.7		
第127図	7	C	2	68住			68住	藤内Ⅰ		37.0	34.0	32.6	28.3		
第127図	8	C	9	4住			4住	藤内Ⅰ		34.8	34.5	40.8	28.4		
第127図	9	C	1	12住		Pit1 154	12住	新道		(57.8)	41.2	6.8	44.8		
第133図	11	I区		F'-29-2 29住		2	20500	29住	新道	中	51.0	36.5	36.0	58.3	
第133図	12	I区		K'-31-2	2					32.5	30.5	14.0	9.2		

## 耳栓

図番号	図内番号	出土区	資料番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	帰属遺の時期	出土層	直径(mm)	幅(mm)	穴の大きさ(mm)	重さ(g)
第128図	1	C	7	13住		P1	13住	井戸尻Ⅲ		15.5	12.2	4.3	7.6
第128図	2	C	4	14住		P2	14住	井戸尻Ⅲ		21.8	14.7	8.6	5.5
第128図	3	C	5	14住		P39	14住	井戸尻Ⅲ		19.6	17.0	3.5	7.9
第128図	4	C	10	41住		P124	41住	藤内		36.2	26.6	19.4	23.8
第128図	5	C	11	95住		P10	95住	藤内		27.4	19.0	13.0	11.6
第128図	6	C	8	97住			97住	井戸尻Ⅲ		12.1	12.7	なし	1.9
第128図	7	C	1	92住			92住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ		20.9	17.9	5.1	9.9
第128図	8	C	6	81土		P199	81土	新道		25.8	10.5	12.6	6.7
第128図	9	C	3	106住			106住	古墳時代前期		17.8	13.9	9.4	2.9
第128図	10	C	2	45土			45土	藤内Ⅱ		25.5	25.8	9.3	10.6
第128図	11	E	9	E19G						31.9	19.2	なし	18.4
第133図	1	I		A'-26-1	1		6住	五領ヶ台	上	21.0	15.0	9.0	6.5
第133図	2	I		C'-27-1		9656	17住	猪沢	上	22.5	18.0	11.0	6.6
第133図	3	I		I'-30 土	2	28184	土坑			21.0	15.0	10.5	5.0
第133図	4	I		H'-27-4	1	31471	54住	井戸尻	上	20.5	18.5	11.5	6.2
第133図	5	I		H'-32 土	7	26832	土坑			21.0	16.5	10.0	5.5
第133図	6	I		F'-33		148				19.5	16.5	10.0	5.0
第133図	7	I		J'-29-1	1	31250	51住	五領ヶ台	上	35.0	22.5	15.5	20.1
第133図	8	I		J'-33-2	1	22623	52住	井戸尻	上	26.0	15.5	9.0	6.9
第133図	9	I		L'-28 49住		34023	49住	藤内	中	22.5	18.0	8.5	7.8
第133図	10	I		L'-31-2	1	29600				21.5	12.0	5.0	1.8

## 杓子形土製品

図番号	図内番号	出土区	資料番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	帰属遺の時期	出土層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
第128図	12	C	6	41住		P122	41住	藤内		95.5	34.2	7.0	36.1
第128図	13			注記ナシ						53.0	36.5	9.0	30.7
第128図	14	C	10	4住			4住	藤内		(32.8)	(37.4)	6.3	8.3
第128図	15	C	5	78住			78住	藤内Ⅰ		(57.2)	(41.3)	7.1	20.0
第129図	1	C	13	L'41G						(34.0)	(32.3)	7.7	8.2
第129図	2	C	1	78住			78住	藤内Ⅰ		(82.5)	43.6	16.0	43.0
第129図	3	C	2	9住			9住	井戸尻		(55.4)	(38.3)	8.6	25.3
第129図	4	C	12	G'45G						(46.8)	(44.0)	11.1	21.8
第129図	5	C	9	99住			99住	井戸尻		(50.0)	(36.5)	8.3	16.6
第129図	6	C	3	19住		Pit5	19住	井戸尻Ⅲ		77.6	34.6	7.0	32.6
第129図	7	C	11	96住			96住	井戸尻Ⅱ		(59.8)	(30.8)	10.7	20.3
第129図	8	C	4	78住			78住	藤内Ⅰ		(43.0)	(35.8)	10.0	13.1
第130図	1	C	8	78住			78住	藤内Ⅰ		(138.7)	115.6	11.5	184.0
第131図	1	I区		D'-26-4			21住	曾利	中	(56.5)	20.5	12.0	7.5
第131図	2	I区		J'-26-4	2	33321	56住	藤内	上	(80.5)	36.0	24.0	38.7
第131図	3	I区		J'-32-3	1	23581				(64.0)	38.0	(35.0)	29.0
第131図	4	I区		K'-28 49住		34247	49住	藤内	中	(79.0)	43.0	18.5	33.5
第131図	5	I区		K'-32-3	1	28028	42住	井戸尻	上	74.0	50.0	22.5	43.6

## 焼成粘土塊

図番号	図内番号	出土区	資料番号	取上地点	取上番号	帰属遺構	帰属遺の時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
第130図	5	C	1	97住		97住	井戸尻Ⅲ	54.5	27.0	27.0	32.0
第130図	6	C	2	98住		98住	井戸尻Ⅲ	41.5	32.0	20.0	18.6
第130図	7	C	3	56住		56住	井戸尻Ⅰ～Ⅱ	45.0	49.0	35.0	43.5
第130図	8	C	4	4住		P143	藤内Ⅰ	47.0	38.5	21.5	17.6
第130図	9	C	5	99住		99住	井戸尻Ⅲ	37.0	37.0	23.0	17.4

## その他の土製品

図番号	図内番号	出土地区	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	帰属遺構の時期	出土層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
第130図	2	B	17住			17住	曾利Ⅲ		(54.0)	(33.0)	6.5	14.1	杓子形か
第130図	3	C	92住			92住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ		(33.4)	(23.6)	3.4	2.9	
第130図	4	C	4住			4住	藤内Ⅰ		(23.5)	(29.0)	9.0	7.2	
第131図	6	I区	13住		12880	13住	曾利	中	(39.0)	(26.0)	(21.0)	12.8	
第131図	7	I区	住			56住	藤内	中	32.0	19.0	13.5	7.7	
第131図	8	I区	E'-28-1	2	15756				(29.0)	37.0	37.0	24.1	
第131図	9	I区			22723				(19.5)	7.5	7.0	1.0	
第131図	10	I区	埋ガメ内				曾利	埋壘内	(50.5)	9.0	8.0	3.5	
第131図	11	I区			20575				(18.0)	17.5	15.5	37.6	接合
			G'-30-1	1	19909								
第132図	1	I区	H'-30-2	1	25674				(78.0)	90.0	36.0	174.5	
第132図	2	I区	K'-28-1	2					51.0	(22.5)	17.0	14.8	
第132図	3	I区	M'-33-1	1	26642				(35.0)	(48.5)	(47.5)	49.8	
第132図	4	I区										207.0	
第133図	13	I区											蓋

## 土製円盤

図番号	図内番号	出土区	資料番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	帰属遺の時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
第134図	1A		115	4土			4土	曾利Ⅱ	32.6	(20.7)	9.9	6.8
第134図	2A		116	13住			13住	曾利Ⅳ	37.0	32.0	7.2	10.0
第134図	3A		117	32土			32土	曾利Ⅴ	32.2	(22.7)	9.3	7.8
第134図	4A		118	38土			38土	曾利Ⅳ	41.4	36.8	11.5	16.6
第134図	5A		119	74土			74土	諸磯b	16.8	15.6	6.9	1.8
第134図	6A		120	263土			263土	諸磯b	25.3	21.8	8.3	4.6
第134図	7A		121	327土			327土	諸磯b	27.1	23.8	8.4	6.2
第134図	8A		122	C2G					33.3	32.6	9.6	11.1
第134図	9A		123	C2G					25.6	23.1	7.0	4.7
第134図	10A		124	E1G					31.9	31.7	10.2	10.2
第134図	11A		125						40.5	35.4	13.3	23.3
第134図	12A		1	12住			12住	諸磯a	64.8	64.5	8.0	36.6
第134図	13B		126	3住			3住	曾利Ⅰ	41.3	(37.5)	7.7	13.5
第134図	14B		127	14住			14住	諸磯b	42.9	41.6	13.2	26.2
第134図	15B		128	22住			22住	中越	34.2	32.9	7.1	9.7
第134図	16B		129	E11G					38.3	36.4	10.6	12.0
第134図	17B		130	E12G					35.5	32.7	9.7	12.4
第134図	18B		131	E14G					36.6	36.2	7.1	10.5
第134図	19B		132	F15G					28.6	17.0	9.3	5.3
第134図	20B		2	G12G					57.0	31.0	9.4	20.9
第134図	21B		133	G15G					34.2	28.8	8.4	8.5
第134図	22B		134	G16G					37.8	(32.4)	11.1	13.5
第134図	23B		135	G16G					32.2	(19.6)	9.6	6.6
第135図	1C		3	1住			1住	曾利Ⅰ	23.1	21.0	8.6	5.4
第135図	2C		4	1住			1住	藤内Ⅱ	38.0	38.0	13.5	24.0
第135図	3C		5	1住			1住	藤内Ⅱ	29.0	27.9	15.2	11.1
第135図	4C		6	1住			1住	藤内Ⅱ	35.8	(27.6)	8.6	10.8
第135図	5C		7	3住			3住	猪沢	31.0	36.6	11.5	11.6
第135図	6C		8	4住			4住	藤内Ⅰ	29.8	27.3	12.1	10.6
第135図	7C		9	4住			4住	藤内Ⅰ	38.9	37.2	14.5	24.8
第135図	8C		10	9住			9住	藤内Ⅱ	20.4	20.2	6.9	3.4
第135図	9C		11	9住			9住	藤内Ⅱ	24.6	24.6	9.2	5.4
第135図	10C		12	12住			12住	新道	47.0	(39.4)	11.6	24.1
第135図	11C		13	12住			12住	新道	52.7	45.8	11.4	31.2
第135図	12C		14	12住			12住	新道	33.2	32.0	8.0	9.0
第135図	13C		15	14住			14住	井戸尻Ⅲ	29.0	29.0	11.6	13.4
第135図	14C		16	14住			14住	井戸尻Ⅲ	57.2	(32.6)	12.3	29.2
第135図	15C		17	14住		81	14住	井戸尻Ⅲ	35.3	32.4	12.6	16.5
第135図	16C		18	15住			15住	五領ヶ台Ⅱ	22.9	22.7	10.4	6.0
第135図	17C		19	19住			19住	井戸尻Ⅲ	21.2	20.5	10.7	5.2
第135図	18C		20	19住			19住	井戸尻Ⅲ	42.2	41.0	10.1	21.2
第135図	19C		21	20住			20住	井戸尻Ⅲ	40.7	38.6	12.0	20.7
第135図	20C		22	21住			21住	猪沢	24.6	23.2	9.0	6.1
第136図	1C		23	21住			21住	猪沢	38.0	35.1	10.5	14.6
第136図	2C		24	21住			21住	猪沢	29.6	28.8	13.3	13.7
第136図	3C		25	22住			22住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ	25.2	25.0	9.0	6.5
第136図	4C		26	32住		S1	32住	新道	33.0	30.2	11.7	14.4
第136図	5C		27	32住		S2	32住	新道	33.1	32.4	10.8	14.5
第136図	6C		28	32住		Pit21	32住	新道	38.1	31.1	12.4	13.2
第136図	7C		29	33住			33住	古墳時代前期	31.0	29.4	11.8	12.5
第136図	8C		30	33住			33住	古墳時代前期	30.1	26.9	8.1	7.8
第136図	9C		31	33住			33住	古墳時代前期	35.8	35.1	12.0	15.7
第136図	10C		32	33住			33住	古墳時代前期	31.8	29.6	10.0	9.9
第136図	11C		33	34住			34住	井戸尻Ⅲ	38.2	35.1	10.0	13.1
第136図	12C		34	35住			35住	猪沢	31.7	(25.9)	9.6	8.7
第136図	13C		35	35住			35住	猪沢	40.0	36.7	9.4	15.6
第136図	14C		36	36住			36住	井戸尻Ⅲ	35.6	39.6	11.5	12.6
第136図	15C		37	37住			37住	井戸尻Ⅲ	42.0	41.4	10.3	20.0
第136図	16C		38	40住			40住	猪沢	33.2	(26.6)	9.7	9.9
第136図	17C		39	41住			41住	藤内Ⅱ	41.2	39.0	10.0	16.8
第136図	18C		40	41住			41住	藤内Ⅱ	27.7	27.0	9.1	7.7
第136図	19C		41	41住		Pit10	41住	藤内Ⅱ	40.5	(15.6)	6.3	4.7
第136図	20C		42	42住			42住	猪沢	28.0	27.1	9.0	7.1
第136図	21C		43	43住			43住	新道	35.6	34.2	10.6	11.9
第136図	22C		44	50住			50住	藤内Ⅱ	31.4	28.5	10.0	9.4
第136図	23C		45	53住			53住	猪沢	31.6	30.0	12.2	14.6
第136図	24C		46	58住			58住	藤内Ⅰ	24.3	24.2	11.8	7.8
第137図	1C		47	61住			61住	新道	32.2	26.4	10.3	9.1
第137図	2C		48	78住			78住	藤内Ⅰ	37.2	36.9	12.7	21.4
第137図	3C		49	85住			85住	曾利Ⅳ	44.3	39.0	14.2	26.8
第137図	4C		50	92住			92住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ	30.4	30.0	9.6	10.4
第137図	5C		51	92住			92住	井戸尻Ⅱ～Ⅲ	33.6	(8.4)	6.0	3.2
第137図	6C		52	99住			99住	井戸尻Ⅲ	39.8	(33.0)	11.1	14.5
第137図	7C		53	99住			99住	井戸尻Ⅲ	29.3	27.0	11.1	7.9
第137図	8C		54	101住			101住	猪沢	31.1	(19.0)	8.6	6.1
第137図	9C		55	101住			101住	猪沢	23.8	23.2	11.2	5.9
第137図	10C		56	101住			101住	猪沢	37.7	(19.7)	11.2	9.1



第137図	11	C	57	101住			101住	猪沢		35.6	33.3	14.3	16.3
第137図	12	C	58	101住			101住	猪沢		31.1	29.6	12.2	13.0
第137図	13	C	59	103住			103住	古墳時代前期		36.3	32.2	10.2	12.2
第137図	14	C	60	町7住			町7住	猪沢		41.3	35.7	6.1	10.9
第137図	15	C	61	40土			40土	諸磯c		35.8	(19.0)	9.0	7.5
第137図	16	C	62	61土			61土	曾利V		31.6	30.3	9.0	10.2
第137図	17	C	63	74土			74土	五領ヶ台Ⅱ		31.0	27.9	9.7	9.6
第137図	18	C	64	81土		240	81土	新道		47.8	45.7	14.6	38.0
第137図	19	C	65	119土			119土	藤内Ⅰ		46.0	(34.7)	11.8	20.3
第137図	20	C	66	128土			128土	五領ヶ台Ⅱ		27.2	28.9	13.1	8.1
第137図	21	C	67	140土			140土	五領ヶ台Ⅱ		41.8	38.6	9.9	19.5
第137図	22	C	68	193土			193土	猪沢		33.0	31.0	13.1	11.0
第138図	1	C	69	233土			233土	猪沢		21.0	20.0	10.6	5.4
第138図	2	C	70	257土			257土	五領ヶ台Ⅱ		36.5	30.2	10.1	13.7
第138図	3	C	71	A'38G						34.8	32.9	11.0	13.8
第138図	4	C	72	A'38G						45.2	44.1	11.6	28.2
第138図	5	C	73	B'40G						35.0	34.5	11.0	16.1
第138図	6	C	74	B'40G						20.2	19.3	13.2	5.8
第138図	7	C	75	D'44G						41.8	40.9	11.0	23.3
第138図	8	C	76	C'38G						35.1	35.1	9.0	11.2
第138図	9	C	77	C'38G						25.1	21.0	12.3	6.8
第138図	10	C	78	C'40G						35.0	34.3	10.5	15.3
第138図	11	C	79	C'41G						24.3	24.2	10.8	7.1
第138図	12	C	80	C'41G						32.0	30.6	8.0	10.2
第138図	13	C	81	C'44G						23.0	(16.6)	6.2	2.9
第138図	14	C	82	C'44G						37.1	33.4	10.6	14.7
第138図	15	C	83	D'44G						35.0	32.2	7.1	9.2
第138図	16	C	84	D'44G						36.8	35.0	12.1	20.6
第138図	17	C	85	E'39G 1土			E'39G 1土			36.4	34.0	15.0	19.7
第138図	18	C	86	F'34G 3土			F'34G 3土			30.7	29.9	12.0	11.5
第138図	19	C	87	F'37G		P53				32.8	30.6	8.8	10.4
第138図	20	C	88	F'39G						29.6	(27.0)	8.8	8.3
第138図	21	C	89	F'41G						27.4	26.3	10.1	8.6
第139図	1	C	90	F'41G						56.0	49.4	10.8	34.8
第139図	2	C	91	F'44G		Pit1				37.1	31.2	11.0	12.7
第139図	3	C	92	G'36G						52.4	50.4	12.1	35.4
第139図	4	C	93	G'37G						41.3	(27.2)	6.0	11.7
第139図	5	C	94	G'38G						37.2	(28.6)	9.8	11.8
第139図	6	C	95	G'38G						36.8	34.6	9.6	13.2
第139図	7	C	96	G'42G						25.8	24.1	6.0	4.5
第139図	8	C	97	G'H'44G						31.6	31.0	14.6	15.3
第139図	9	C	98	G'46G						40.2	(26.1)	8.6	11.1
第139図	10	C	99	G'46G						34.1	(30.2)	7.8	10.6
第139図	11	C	100	H'37G 3土						48.8	40.8	(11.0)	18.5
第139図	12	C	101	I'36G						33.4	33.4	11.0	14.2
第139図	13	C	102	I'45G 1土			I'45G 1土			57.1	56.6	12.8	46.9
第139図	14	C	103	J'45G Pit						31.8	29.3	7.6	9.8
第139図	15	C	104	K'46G						30.3	29.6	10.2	9.7
第139図	16	C	105	試掘トレンチ10						28.6	26.7	10.8	9.0
第139図	17	C	106	包含層						41.4	38.1	10.5	19.8
第139図	18	C	107							27.4	27.0	9.0	8.1
第140図	1	D	108	1住			1住	古墳時代前期		34.8	33.9	7.3	9.8
第140図	2	D	109	E32G						32.2	27.8	10.1	9.7
第140図	3	D	110	F30G						46.0	45.8	9.1	21.5
第140図	4	E	111	156土			156土	五領ヶ台Ⅱ		44.9	44.0	7.4	18.4
第140図	5	G	112	B27G 2土						39.2	36.2	8.7	14.1
第140図	6	G	113	C28G 2土						36.2	(29.8)	10.0	12.2
第140図	7	H	114	L24G						50.6	(43.3)	12.0	28.5
第141図	1	I		J'-27-4		2				53.5	47.5	11.0	30.9
第141図	2	I		56住			56住	藤内		50.0	45.0	13.0	33.7
第141図	3	I		29住		22378	29住	新道		39.0	37.5	11.0	17.9
第141図	4	I		B'-27-1		1	11330			36.0	35.0	10.5	16.1
第141図	5	I		E'-33-4						38.5	36.0	9.0	13.6
第141図	6	I		C'-27-4		1				38.5	36.0	14.5	19.5
第141図	7	I		K'-25						36.5	31.5	8.5	11.1
第141図	8	I		E'-25-3		1	36住	五領ヶ台		38.5	38.5	11.5	20.3
第141図	9	I		G'-30-4		2	39住	井戸尻		36.0	32.0	11.0	14.4
第141図	10	I		F'-29-3		4	29住	新道		31.5	30.5	11.0	12.0
第141図	11	I		L'-31-3			44住	猪沢		24.0	21.0	10.0	5.7
第141図	12	I		E'-29-1			16住	猪沢		36.0	34.5	11.5	14.9
第141図	13	I		A-31-3		1	6445	1住	五領ヶ台	33.0	32.0	9.5	11.5
第141図	14	I		B'-24-1		4				34.0	33.0	6.5	7.4
第141図	15	I		I'-29口土坑				土坑		35.0	32.5	12.5	17.1
第141図	16	I		J'-31						31.0	25.5	9.5	7.8
第141図	17	I		K'-31-2		2				29.0	25.5	11.0	9.4
第141図	18	I		C'-27-4						25.5	25.0	9.0	6.9
第141図	19	I		B'-31-1 3住		3	3住	井戸尻		18.5	18.0	7.0	2.7
第141図	20	I		B'-28-3		1	9071	14住	諸磯b	53.5	51.0	13.0	42.2
第141図	21	I		J'-26-1		1	32239	56住	藤内	56.0	54.5	13.0	42.9

A～E区の石器

図番号	図内番号	器種	区	遺構名	石材	長さ	幅	厚さ	態加	刃部属性	素材形態	素材打面	素材技術	欠損	所見
第142図	1	刃器	A	B-1G	ob	39.0	35.5	9.3	なし	mf	剥片	平坦	HD		
第142図	2	刃器	B	5住居	ob	24.2	16.1	3.8	なし	mf	剥片	点状	SD		
第142図	3	刃器	B	8住居	ob	47.9	17.7	7.3	なし	mf	片	不明	不明		背面に1本の稜を形成
第142図	4	刃器	B	11住居	ob	34.7	18.4	5.3	なし	mf	片	線状	HD		
第142図	5	刃器	B	143土坑	ob	41.7	23.2	12.8	なし	mf	片	平坦	HD		143.113注記不明瞭、要確認
第142図	6	刃器	B	1134	ob	35.1	15.8	7.3	なし	mf	片	平坦	HD		
第142図	7	刃器	C	1住居	ob	40.1	15.1	7.1	なし	mf	片	不明	不明		
第142図	8	刃器	C	3住居	ob	35.9	16.6	8.4	なし	mf	片	不明	不明		
第143図	9	刃器	C	4住居	ob	29.3	41.2	7.9	なし	mf	剥片	折れ	不明		
第143図	10	刃器	C	4住居	ob	27.7	13.8	5.1	なし	mf	剥片	不明	不明		
第143図	11	石匙	C	5住居	ob	31.1	20.9	6.1	HP	S'P	剥片	不明	不明	欠	
第143図	12	刃器	C	12住居	ob	31.5	27.4	6.1	なし	mf	剥片	不明	不明		刃部以外の3辺折り取り
第143図	13	刃器	C	14住居	ob	41.1	19.9	9.4	なし	mf	片	点状	SI		
第143図	14	刃器	C	19住居、 ピット13	ob	29.2	17.2	7.8	なし	mf	剥片	平坦	HD		
第143図	15	刃器	C	19住居、 ピット13	ob	30.3	9.8	5.1	なし	mf	石刃状剥片	平坦	SD		
第143図	16	刃器	C	19住居、a 区	下呂石	21.9	20.0	6.3	SP	SP	剥片	不明	不明		
第143図	17	刃器	C	区	ob	22.9	17.8	5.9	なし	mf	剥片	平坦	HD		
第143図	18	刃器	C	区	ob	31.6	17.0	9.6	なし	HP+mf	剥片	自然面	SD		
第144図	19	刃器	C	19住居	ob	31.9	11.9	6.1	HP	HP	片	不明	不明		打面側末端に搔器状の縁辺
第144図	20	刃器	C	21住居	ob	25.0	21.7	6.7	なし	mf	剥片	平坦	HvD		
第144図	21	刃器	C	号埋甕	ob	44.1	13.6	9.9	なし	mf	片	不明	不明		
第144図	22	石錐	C	号埋甕	ob	31.4	19.0	6.2	HP	HP	剥片	不明	不明		錐部に摩耗みられる
第144図	23	刃器	C	28住居	ob	36.2	27.2	12.0	なし	mf	剥片	自然面	HD		
第144図	24	刃器	C	39住居	ob	15.0	23.3	6.7	なし	mf	剥片	切り子	HD		
第144図	25	刃器	C	39住居	ob	25.6	16.7	6.1	なし	mf	剥片	不明	不明		折り取り
第144図	26	刃器	C	39住居	ob	29.9	15.8	5.5	なし	mf	片	平坦	S'D		
第144図	27	刃器	C	41住居	ob	21.4	18.9	10.6	なし	mf	剥片	不明	不明		
第144図	28	刃器	C	42住居	ob	43.9	12.4	9.1	なし	mf	剥片	不明	不明		
第145図	29	刃器	C	43住居	ob	39.0	23.8	8.4	なし	mf	剥片	自然面	S'D		
第145図	30	刃器	C	43住居	ob	22.7	24.3	6.5	なし	mf	剥片	平坦	S'D		侶右側
第145図	31	刃器	C	54住居	ob	29.7	22.7	7.2	なし	mf	剥片	不明	不明		
第145図	32	刃器	C	J-1住居	ch	28.9	45.3	10.8	SP	SP	剥片	不明	不明		刃部にE2タイプ光沢と平行方向の線状痕
第145図	33	刃器	C	91住居	水晶	49.5	28.8	13.8	なし	mf	剥片	不明	不明		スクレイピングに使用
第145図	34	刃器	C	J-1住居	ob	29.0	18.6	5.1	なし	mf	剥片	自然面	HD		
第145図	35	刃器	C	J-2住居	ob	25.3	38.2	8.7	なし	mf	剥片	自然面	HD		
第145図	36	刃器	C	J-2住居	ob	24.9	42.7	12.1	なし	mf	剥片	不明	不明		
第146図	37	刃器	C	J-3住居	ob	33.8	15.8	6.8	なし	mf	石刃状剥片	不明	不明		97住居あるいはJ-7住居、注記2つある
第146図	38	刃器	C	J-9住居	ob	50.8	28.1	11.4	S'P	S'P	剥片	不明	不明		表裏風化
第146図	39	刃器	C	224土坑	ob	41.9	23.6	9.1	S'P	S'P	剥片	不明	不明		搔器状の微小剥離痕
第146図	40	刃器	C	243土坑	ob	38.2	13.4	7.0	なし	mf	片	面?	不明		
第146図	41	刃器	C	252土坑	ob	19.1	24.1	5.8	なし	mf	剥片	平坦	HD		
第146図	42	刃器	C	坑	ob	19.4	16.4	5.4	なし	mf	剥片	線状	HvD		
第146図	43	刃器	D	1住居	ob	25.4	38.0	9.4	なし	mf	剥片	平坦	HD		
第146図	44	刃器	D	1住居	ob	24.1	30.4	12.5	なし	mf	剥片	自然面	S'D		
第146図	45	刃器	D	1住居	ob	36.0	21.1	9.0	なし	mf	片	自然面	HD		
第147図	46	刃器	D	66土坑	ob	25.6	29.3	11.2	なし	mf	剥片	自然面	HD		
第147図	47	刃器	D	99土坑	ob	26.8	35.7	8.6	なし	mf	剥片	切り子	HD		
第147図	48	刃器	E	15土坑	ob	31.2	17.5	6.6	なし	mf	剥片	平坦	SD		
第147図	49	刃器	E	89土坑	ob	32.8	26.8	6.9	なし	mf	剥片	平坦	HD		
第147図	50	刃器	F	7土坑	ob	39.0	12.1	7.7	なし	mf	片	不明	不明		
第147図	51	搔器	A	12住居	ob	30.2	16.9	11.2	HP	HP	剥片	不明	不明		主用剥離面は激しい摩耗
第147図	52	搔器	A	178土坑	ob	22.2	17.8	8.0	HP	HP	剥片	不明	不明		
第147図	53	搔器	A	C-3G	ob	38.9	14.2	7.1	HP	HP	剥片	不明	不明		
第147図	54	搔器	B	G-13	ob	23.6	25.2	7.4	HP	HP	剥片	不明	不明		打面側に加工を入れている
第147図	55	搔器	B	1784	ch	49.7	23.8	10.9	SP	SP+mf	剥片	不明	不明		
第147図	56	刃器	C	4住居	ob	25.4	14.4	6.3	なし	mf	剥片	平坦	SD		
第148図	57	搔器	C	J-9住居	ob	17.9	21.6	5.2	SP	SP+mf	剥片	不明	不明		
第148図	58	搔器	C	A'-39	ob	20.2	22.0	6.9	S'P+	mf	剥片	不明	不明		
第148図	59	搔器	D	87土坑	ob	27.0	12.7	5.8	S'P	S'P	剥片	不明	不明		
第148図	60	搔器	E	D-20	ob	20.5	18.6	7.0	SP	SP	剥片	不明	不明		
第148図	61	削器	A	B-3G	ob	49.3	25.8	10.3	S'P	S'P	剥片	自然面	HP		
第148図	62	削器	B	5住居115	ob	25.7	39.6	15.6	SP	SP	剥片	不明	不明		
第148図	63	石匙	B	5住居	ob	30.4	21.5	10.1	HP	なし	剥片	不明	不明		未製品

第148図	64	削器	B	6住居	ch	36.4	33.5	10.9	SP	SP	剥片	自然面	SD		
第148図	65	刃器	B	D-18	ob	23.8	16.4	6.2	なし	mf	片	線状	S'D		
第148図	66	削器	B	E-13	ob	28.7	44.0	12.7	HD	HD+MF	剥片	不明	不明		縁辺摩耗
第149図	67	削器	C	1住居a区	ob	27.8	28.9	15.2	なし	S'P+mf	剥片	不明	不明	欠	
第149図	68	搔器	C	1住居a区	ob	21.7	18.6	8.2	HD	S'P+mf	剥片	不明	不明		裏面は自然摩耗
第149図	69	刃器	C	3住居	ob	30.7	14.2	4.8	なし	mf	剥片	不明	不明		右辺に折り取り。両面自然摩耗。
第149図	70	刃器	C	12住居	ob	33.2	14.7	6.4	なし	S'P+mf	片	不明	不明		
第149図	71	刃器	C	20住居	ob	21.2	18.9	7.3	S'P	S'P+mf	剥片	不明	不明		刃部は両面加工
第149図	72	削器	C	21住居	ob	24.3	34.3	12.4	HP	HP	剥片	不明	不明		刃部は両面加工
第149図	73	削器	C	21住居	ob	21.9	23.7	5.7	なし	S'P+mf	剥片	不明	不明		刃部は両面加工
第149図	74	石匙	C	64住居	ob	27.7	19.1	5.6	S'P	S'P+mf	剥片	不明	不明		
第149図	75	刃器	C	K-1住居	ob	19.2	25.3	10.1	S'P	S'P+mf	剥片	不明	不明		
第149図	76	刃器	C	J-43	ob	45.5	26.4	10.8	HD	HI	剥片	不明	不明		
第150図	77	削器	D	3住居 A	ob	34.2	23.0	7.8	S'P	S'P+mf	剥片	不明	不明		
第150図	78	削器	D	1土	ob	44.1	31.0	10.7	HI	HI+MF	剥片	不明	不明		左側面裏面に間接打撃
第150図	79	刃器	B	5住居1	ob	35.6	23.1	9.8	なし	mf	剥片	自然面	HD		末端に微小剥離痕、搔器 再加工剥片の右側を折り取る
第150図	80	刃器	B	5住居ウ	ob	42.8	17.0	11.0	なし	mf	剥片	不明	不明		右側折り取り
第150図	81	刃器	C	1住居	ob	30.8	16.6	4.5	なし	mf	剥片	線状	SD		
第150図	82	刃器	A	2住居	ob	29.0	17.3	3.7	なし	mf	剥片	不明	不明		
第150図	83	刃器	D	19住居、 ビット2	ob	49.0	18.5	8.4	なし	mf	石刃状剥片	平坦	SD		
第150図	84	刃器	D	19住居	ob	25.0	18.3	8.4	なし	S'P+mf	剥片	不明	HD		搔器
第150図	85	刃器	C	40住居	ob	33.4	16.0	6.8	なし	mf	剥片	平坦	SD		
第151図	86	刃器	C	44住居	ob	54.3	33.9	11.0	なし	mf	剥片	不明	HD		
第151図	87	欠番													
第151図	88	刃器	C	63住居	ob	26.1	20.1	5.4	なし	mf	剥片	自然面	HD		
第151図	89	刃器	C	63住居、 ビット3	ob	35.4	17.8	10.4	なし	mf	両極剥片	砕け	HvD		
第151図	90	刃器	J	3住居	ob	40.1	19.9	11.6	なし	mf	片	不明	S'D?		
第151図	91	刃器	J	3住居	ob	45.3	22.2	7.2	なし	mf	片	自然面	S'D		
第151図	92	刃器	J	8住居	ob	32.6	24.9	6.9	なし	mf	剥片	線状	HD		
第151図	93	刃器	C	166土坑	ob	41.5	19.3	6.0	なし	mf	片	平坦	HD		
第151図	94	刃器	C	L-40	ob	32.7	41.7	10.9	なし	mf	剥片	自然面	HD		大形剥片を再加工して刃器にしている。打面部に調整加工をいれている。
第152図	95	横形 石匙	E	42土坑	泥岩	71.0	114.5	16.7	HD	HD	剥片	不明	不明		
第153図	96	横形 石匙	なし	注記なし	凝灰岩	74.1	106.4	12.9	S'P	S'P+mf	剥片	不明	不明		
第154図	97	石匙	A	D-2	フェルス	89.7	63.4	12.8			剥片	不明	不明		
第154図	98	石匙	B	2住居	安山岩	31.7	52.6	6.8	S'P	S'P+mf	剥片	不明	不明		
第155図	99	横形 石匙	B	5住居 7土 坑	ホルン フェルス	32.4	61.4	7.9	S'P	S'P+mf	剥片	不明	不明		
第155図	100	石匙	A	12住居	頁岩	32.6	53.6	9.9	S'P	S'P+mf	剥片	自然面	SD		
第155図	101	石匙	A	103土坑	ch	46.3	51.9	8.9	SP	SP+mf	剥片	不明	不明		
第156図	102	石匙	A	6配	ch	38.9	68.3	13.2	SP	SP+mf	剥片	不明	不明		
第156図	103	石匙	C	17住居	ch	61.3	67.9	13.6	S'P	S'P+mf	剥片	不明	不明		
第156図	104	石匙	C	24住居	ch	21.3	56.7	8.2	SP	SP+mf	剥片	自然面	SD		
第157図	105	石匙	J	9住居	ob	41.6	39.5	6.2	S'P	S'P+mf	剥片	不明	不明		
第157図	106	石匙	C	37G	ob	22.8	28.5	5.6	S'P	S'P+mf	剥片	不明	不明		
第157図	107	横形 石匙	E	64土坑 S-2	頁岩	31.9	66.8	8.9	HP	HP-mf	剥片	不明	不明		
第157図	108	横形 石匙	C	H-45	ch	37.5	54.4	8.7	S'P	S'P+mf	剥片	不明	不明		反方向に刃部加工をいれている
第158図	109	縦形 石匙	A	5住居	ch	57.3	21.5	8.1	SP	SP	剥片	不明	不明		
第158図	110	横形 石匙	B	2住居	ch	40.9	54.2	10.0	SP	SP	剥片	不明	不明		
第158図	111	縦形 石匙	C	J-7住居	ch	70.3	29.9	16.6	S'P	S'P+mf	剥片	不明	不明		
第159図	112	縦形 石匙	C	81土坑	頁岩	60.8	27.6	8.3	S'P	S'P+mf	剥片	不明	不明		
第159図	113	縦形 石匙	C	44住居、 S-33	ob	71.5	21.5	9.9	S'P	S'P+mf	不明	不明	不明		神津島産黒曜石
第159図	114	横形 石匙	B	2a	ob	24.8	36.6	8.1	S'P	S'P+mf	横長剥片	不明	不明		

C・E区石匙

図番号	図版番号	出土地点	最大長	最大幅	最大厚	重量
第160図	1	C区 4住	9.95	4.05	7.00	27.0
第160図	2	C区 7住	4.45	8.85	1.10	300.0
第160図	3	C区 19住	5.25	10.55	1.80	55.0
第160図	4	C区 19住	11.40	3.60	1.15	450.0
第160図	5	C区 19住	8.60	4.30	0.90	300.0
第160図	6	C区 39住	11.85	5.25	1.60	70.0
第160図	7	C区 40住	10.10	10.60	2.30	180.0
第160図	8	C区 41住	7.75	2.85	7.50	15.0
第160図	9	C区 41住	3.90	10.50	1.10	33.0
第160図	10	C区 43住	3.70	5.15	1.05	20.0
第160図	11	C区 80住	4.45	5.85	1.55	32.0
第160図	12	C区 83住	9.60	3.30	9.50	250.0
第160図	13	C区 7土	4.60	8.25	1.35	28.0
第160図	14	C区 9土	6.75	8.10	1.30	45.0
第160図	15	C区 9土	7.85	4.75	8.50	30.0
第160図	16	C区 9土	5.70	6.70	1.15	400.0
第160図	17	C区 27土	4.65	6.25	9.50	20.0
第160図	18	C区 37土	7.90	10.25	2.75	155.5
第160図	19	C区 66土	4.35	6.90	7.50	15.0
第160図	20	C区 83土	8.35	5.40	1.05	42.0
第160図	21	C区 104土	7.90	10.90	2.00	130.0
第160図	22	C区 169土	5.80	9.50	1.55	38.0
第160図	23	C区 Pit10	6.50	9.60	1.20	70.0
第160図	24	C区 K-36	5.45	8.45	1.10	40.0
第160図	25	E区 E-20	4.25	8.35	1.20	30.0

A・C・D区の石製品

図番号	図内番号	出土区	種類	資料番号	取上地点	取上番号	帰属遺物の時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
第164図	1	A	小型磨製石斧	3	7住	208	諸磯b	(31.7)	19.4	8.6	7.5
第164図	2	C	小型磨製石斧	11	74住	S3	五領ヶ台	44.8	23.4	9.5	15.4
第164図	3	C	小型磨製石斧	14	93住		井戸尻Ⅱ	(32.0)	(19.3)	(6.4)	3.7
第164図	4	C	小型磨製石斧	4	92住		井戸尻Ⅱ～Ⅲ	51.0	20.8	6.4	12.3
第164図	5	C	小型磨製石斧	13	98住		井戸尻Ⅲ	(32.2)	16.3	5.9	6.5
第164図	6	C	小型磨製石斧	7	12住	S1	新道	(49.7)	(34.9)	(15.7)	34.8
第164図	7	C	小型磨製石斧	8	21住		五領ヶ台Ⅱ	(59.6)	15.2	8.1	13.4
第164図	8	C	小型磨製石斧	12	23住	Pit1	井戸尻Ⅲ	42.6	25.1	8.3	13.7
第164図	9	C	小型磨製石斧	2	32住	S40	新道	48.1	29.8	12.5	28.1
第165図	1	C	小型磨製石斧	15	140土		五領ヶ台Ⅱ	40.6	18.5	5.7	8.4
第165図	2	C	小型磨製石斧	10	21住		五領ヶ台Ⅱ	27.2	7.5	5.1	1.5
第165図	3	C	異形石器	1	6住	S1	諸磯b	31.5	26.0	4.9	1.3
第165図	4	D	異形石器	5	3住	S16	五領ヶ台Ⅱ	(20.4)	25.5	4.1	1.2
第165図	5	C	異形石器	6	F37			(57.1)	10.4	8.1	6.1
第165図	6	C	浮子	浮子1	98住		井戸尻Ⅲ	(70.8)	(55.0)	19.3	20.8
第165図	7	C	石錘	石錘1	H40G 1土		五領ヶ台	(39.6)	31.4	8.8	16.9

C区石皿

図番号	図内番号	出土区	取上地点	取上番号	帰属遺物の時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材
第166図	1	C	74住			493.2	345.0	78.6	25600.0	安山岩
第166図	2	C	E' -37			340.2	292.2	136.2	8800.0	安山岩
第166図	3	C	37住	S-10	井戸尻Ⅲ	416.4	367.8	151.8	36400.0	安山岩

C区石棒

図番号	図内番号	出土区	取上地点	取上番号	帰属遺物の時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材
第167図	1	C	20-3土坑	S-3		264.6	255.0	(160.2)	8700.0	デイサイト
第167図	2	C	245土坑	S-30		(821.4)	256.8	(222.0)	15500.0	安山岩
第167図	3	C	92住		井戸尻Ⅱ～Ⅲ	(575.4)	295.2	290.4	23200.0	安山岩

B・C・D・F区の磨製石斧

図番号	図版番号	出土地点	最大長	最大幅	最大厚	重量
第161図	1	C区 E-38	8.85	5.65	3.40	270.0
第161図	2	C区 21住	11.00	5.00	3.40	300.0
第161図	3	C区 J9住	11.00	4.30	2.50	205.0
第161図	4	C区 55住	9.70	4.50	3.05	195.0
第161図	5	C区 36住	6.45	4.15	1.60	60.0
第161図	6	C区 15住	6.70	5.60	2.55	120.0
第161図	7	B区 17土	9.50	2.90	1.55	63.0
第161図	8	C区 36住	6.60	2.40	1.95	35.0
第161図	9	C区 J5住	6.55	3.10	1.85	65.0
第161図	10	C区 4住	7.35	3.40	1.25	4.5
第161図	11	C区 48住	5.15	2.60	1.00	15.0
第161図	12	C区 13住	9.35	5.65	2.55	260.0
第161図	13	C区 J2住	8.90	5.10	1.95	150.0
第161図	14	C区 12住	8.85	4.75	2.10	125.0
第161図	15	C区 56住	7.60	4.65	2.15	155.0
第161図	16	C区 33住	9.20	3.80	1.45	55.0
第161図	17	C区 49住	7.00	4.45	2.20	90.0
第161図	18	C区 15住	5.10	4.10	1.95	68.0
第161図	19	E区 D-20	5.15	3.95	1.50	50.0
第161図	20	D区 包含層	5.70	3.20	1.80	48.0
第161図	21	D区 10土	6.50	2.55	1.15	40.0
第161図	22	C区 38住	9.30	6.70	3.20	335.0
第161図	23	C区 15住	7.10	5.25	2.10	195.0
第162図	1	C区 J4住	12.30	4.95	3.85	325.0
第162図	2	C区 55住	11.55	4.75	3.45	295.0
第162図	3	C区 19住	11.95	4.75	3.30	265.0
第162図	4	D区 包含層	11.90	4.60	3.15	275.0
第162図	5	C区 78住	12.20	4.10	3.00	240.0
第162図	6	C区 H'-44	11.20	4.25	1.65	95.0
第162図	7	C区 J2住	9.70	4.80	4.25	215.0
第162図	8	C区 9住	9.70	4.30	3.50	310.0
第162図	9	C区 31住	8.50	4.70	3.70	315.0
第162図	10	C区 J7住	9.70	4.70	4.05	305.0
第162図	11	C区 78住	8.20	4.70	3.30	130.0
第162図	12	C区 32住	11.10	4.10	1.70	130.0
第162図	13	C区 62住	12.10	3.45	1.80	920.0
第162図	14	C区 5住	11.70	2.40	1.70	800.0
第162図	15	C区 39住	12.20	2.75	1.95	105.0
第162図	16	C区 J2住	12.60	2.90	2.05	140.0
第162図	17	C区 21住	11.30	2.30	1.30	35.0
第162図	18	C区 7住	11.80	5.60	3.80	380.0
第162図	19	C区 J8住	10.95	4.90	3.70	360.0
第162図	20	C区 48住	10.85	5.30	2.75	270.0
第162図	21	C区 J6住	10.80	5.10	4.10	370.0
第163図	1	C区 78住	20.25	5.85	4.00	815.0
第163図	2	C区 244土	18.15	5.50	2.20	430.0
第163図	3	C区 52住	14.00	5.80	4.25	595.0
第163図	4	C区 78住	11.50	4.65	3.80	335.0
第163図	5	C区 D-41	14.70	5.15	4.45	525.0
第163図	6	C区 J2住	14.00	5.15	3.80	430.0
第163図	7	C区 63住	13.90	4.50	3.30	340.0
第163図	8	C区 J-20	13.00	5.15	3.55	370.0
第163図	9	C区 F-42	14.20	4.10	2.90	260.0
第163図	10	C区 G-45	13.80	3.95	2.95	240.0
第163図	11	C区 42住	11.80	3.95	2.85	195.0
第163図	12	C区 J1住	13.35	18.5	2.25	240.0
第163図	13	F区 2土	11.80	4.55	3.25	260.0

I区の石礫

図番号	図内番号	出土区	取上地点	層位	取上番号	帰属構	帰属遺の時期	出土層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	石材分類	長幅比	備考	詳細図番号	図内番号
第173図	2-1	I	A'-29-2	3	4234	2住	諸磯b	中	(2.1)	2.2	0.6	2.7	黒曜石	B-1	(104.76)			
第173図	2-2	I	A'-29-3	2	4715	2住	諸磯b	上	2.5	2.1	0.4	1.4	チャート	緑灰色	84.00		第168図	4
第173図	2-3	I	A'-29-3	2	4867	2住	諸磯b	上	1.4	1.5	0.3	0.5	黒曜石	B-1	107.14		第168図	6
第173図	2-4	I	A'-29-2	2	1126	2住	諸磯b	上	2.3	1.8	0.3	0.7	黒曜石	B-1	78.26		第168図	5
第173図	2-5	I	A'-29-3	2	206	2住	諸磯b	上	2.5	1.5	0.3	0.9	黒曜石	B-2	60.00			
第173図	2-6	I	A'-29-3	1	105	2住	諸磯b	上	2.1	1.8	0.3	0.8	黒曜石	B-1	85.71			
第173図	2-7	I	A'-29-3	1	106	2住	諸磯b	上	(2.8)	(1.3)	0.3	0.7	黒曜石	B-2	46.43	衝撃剥離		
第173図	4-1	I	B'-29-3	2	4258	4住	藤内	上	2.1	1.3	0.4	0.8	黒曜石	A-2	61.90	衝撃剥離	第168図	11
第173図	4-2	I	B'-29-4	1	2793	4住	藤内	上	1.4	1.1	0.2	0.3	黒曜石	B-1	78.57		第168図	12
第173図	4-3	I	B'-28-4	1	2671	4住	藤内	上	1.3	1.8	0.3	0.4	黒曜石	G	138.46			
第173図	2-4-1	I	A'-29-2	2	1046	2住~4住			2.1	1.9	0.3	0.6	黒曜石	A-1	90.48			
第173図	2-4-2	I	A'-28-1	1		2住~4住			3.6	2.0	0.3	1.1	黒曜石	A-1	55.56			
第173図	2-4-3	I	A'-29-2		3580	2住~4住			1.7	1.1	0.4	0.6	黒曜石	B-2	64.71	焼け		
第173図	9-1	I	A'-24-3	1	5868	9住	諸磯b	上	2.4	2.5	0.5	2.0	黒曜石	A-1	104.17	焼け	第169図	1
第173図	11-1	I	A'-23-4 11住		9309	11住	諸磯b	中	1.9	1.5	0.3	0.6	黒曜石	A-2	78.95		第169図	7
第173図	11-2	I	B'-24-2	7		11住	諸磯b	中	1.7	1.8	0.4	0.8	黒曜石	D	105.88	離		
第173図	11-3	I	B'-24-2	7		11住	諸磯b	中	2.4	(1.8)	0.3	0.8	黒曜石	E	(75.00)			
第173図	11-4	I	B'-24 11住		13396	11住	諸磯b	中	1.3	1.3	0.2	0.3	黒曜石	D	100.00		第169図	5
第173図	11-5	I	B'-24 11住		12603	11住	諸磯b	中	2.0	1.6	0.4	1.0	黒曜石	A-1	80.00		第169図	6
第173図	11-6	I	B'-24 11住		12604	11住	諸磯b	中	2.1	(1.6)	0.4	0.9	黒曜石	A-1	(76.19)			
第173図	11-7	I	B'-24-1 11住		10830	11住	諸磯b	中	1.5	(1.6)	0.3	0.5	黒曜石	E	(106.67)			
第173図	11-8	I	A'-24-4 11住	4		11住	諸磯b	中	(1.0)	1.1	0.2	0.2	黒曜石	A-1	(110.00)			
第173図	11-9	I	A'-24-3	3		11住	諸磯b	上	1.8	1.4	0.5	1.0	黒曜石	B-2	77.78		第169図	4
第173図	11-10	I	B'-24-2	3		11住	諸磯b	上	(1.6)	2.1	0.4	0.9	黒曜石	B-2	(131.25)			
第173図	11-11	I	A'-24-4ベルト	3		11住	諸磯b	上	2.1	(1.7)	0.3	0.7	黒曜石	I	(80.95)			
第173図	11-12	I	A'-23-4	3	8667	11住	諸磯b	上	1.7	(1.7)	0.3	0.6	黒曜石	D	(100.00)			
第173図	11-13	I	B'-24-2	3	8100	11住	諸磯b	上	(1.8)	(1.9)	0.4	0.9	黒曜石	D	105.56			
第173図	11-14	I	B'-24-2	3		11住	諸磯b	上	2.3	(1.2)	0.3	0.7	黒曜石	B-1	(52.17)			
第173図	11-15	I	B'-24-2	3		11住	諸磯b	上	2.0	(1.6)	0.3	0.5	黒曜石	A-1	(80.00)			
第173図	11-16	I	A'-24-4	1		11住	諸磯b	上	2.1	(1.2)	0.4	0.5	黒曜石	A-1	(57.14)			
第173図	11-17	I	A'-24-3	3		11住	諸磯b	上	1.4	1.5	0.3	0.3	黒曜石	A-1	107.14			
第173図	14-1	I	B'-28-3	3	10012	14住	諸磯b	上	1.3	1.1	0.3	0.3	黒曜石	B-2	84.62			
第173図	14-2	I	B'-28-3	3	10020	14住	諸磯b	上	(2.0)	(1.1)	0.4	0.6	黒曜石	B-1	55.00			
第173図	14-3	I	B'-28-2	2	8170	14住	諸磯b	上	(2.8)	(1.6)	0.3	1.4	黒曜石	B-2	57.14			
第173図	14-4	I	B'-28-3	2		14住	諸磯b	上	1.1	1.2	0.2	0.2	黒曜石	B-1	109.09			
第173図	14-5	I	B'-28-2	1		14住	諸磯b	上	(1.2)	(1.0)	0.3	0.2	黒曜石	A-1	83.33		第169図	16
第173図	14-6	I	B'-28-4	1		14住	諸磯b	上	2.0	1.8	0.6	1.1	黒曜石	A-1	90.00	衝撃剥離	第169図	15
第173図	14-7	I	B'-28-3	1	9036	14住	諸磯b	上	2.2	2.0	0.3	0.9	黒曜石	A-1	90.91		第169図	14
第173図	14-8	I	B'-28-3	1	9057	14住	諸磯b	上	2.2	1.2	0.4	0.8	黒曜石	A-2	54.55			
第173図	14-9	I	C'-28-1	1	11994	14住	諸磯b	上	1.7	1.2	0.3	0.5	黒曜石	B-2	70.59			
第173図	15-1	I	A'-29-4	1		15住	諸磯b	上	2.2	1.5	0.4	0.8	黒曜石	A-1	68.18			
第174図	22-1	I	D'-25-2	1	12682	22住	諸磯b	中	1.8	2.2	0.4	1.0	黒曜石	B-2	122.22		第170図	18
第174図	22-2	I	D'-25-3	1	13134	22住	諸磯b	中	1.9	1.4	0.4	0.7	黒曜石	D	73.68			
第174図	23-1	I	B'-25-3口Pit			23住	諸磯b	住馬 ボット	(1.8)	(1.8)	0.3	1.0	チャート	黒灰色	100.00		第171図	1
第174図	23-2	I	B'-24-3	4		23住	諸磯b	上	1.4	1.6	0.4	0.7	黒曜石	G	114.29	衝撃剥離	第171図	3
第174図	23-3	I	C'-24-1	2		23住	諸磯b	上	1.4	1.2	0.3	0.3	黒曜石	B-1	85.71		第171図	4
第174図	23-4	I	B'-24-3	2		23住	諸磯b	上	1.9	1.2	0.3	0.6	黒曜石	A-1	63.16			
第174図	23-5	I	B'-25-3	1	8702	23住	諸磯b	上	1.8	1.5	0.5	1.2	黒曜石	A-1	83.33			
第174図	23-6	I	B'-25-3	1	8304	23住	諸磯b	上	1.8	0.8	0.3	0.3	黒曜石	B-1	44.44		第171図	2
第174図	23-7	I	C'-24-4	1		23住	諸磯b	上	2.2	2.4	0.5	2.2	黒曜石	A-1	109.09			
第174図	23-8	I	B'-24-3	1		23住	諸磯b	上	1.8	1.6	0.3	0.7	黒曜石	A-1	88.89			
第174図	23-9	I	C'-25-2	1		23住	諸磯b	上	2.6	1.2	0.4	1.1	黒曜石	B-1	46.15			
第174図	23-10	I	B'-24-4	1		23住	諸磯b	上	2.0	2.0	0.6	1.9	黒曜石	A-1	100.00			
第174図	23-11	I	C'-24-4	1		23住	諸磯b	上	1.5	1.2	0.2	0.3	黒曜石	B-2	80.00			
第174図	23-12	I	B'-24-3	1		23住	諸磯b	上	1.7	2.2	0.6	1.6	黒曜石	B-1	129.41			
第174図	37-1	I	F'-25-2	2	19485	37住	諸磯b	上	1.2	1.6	0.4	0.8	黒曜石	A-1	133.33			
第174図	6-1	I	A'-26-4	4	2434	6住	五領ヶ台	中	2.0	1.9	0.3	0.6	黒曜石	G	95.00		第168図	17
第174図	6-2	I	A'-26-4	3	2218	6住	五領ヶ台	中	1.6	1.8	0.6	0.6	黒曜石	A-2	112.50		第168図	18
第174図	6-3	I	A'-26-3		7475	6住	五領ヶ台	上	2.2	1.4	0.3	0.5	黒曜石	A-3	63.64			
第174図	6-4	I	A'-26-1	1		6住	五領ヶ台	上	(2.1)	(1.5)	0.4	0.9	チャート	白色・黒色シ マ入	71.43		第168図	19
第174図	6-5	I	A'-26-2	1	4332	6住	五領ヶ台	上	2.0	(1.2)	0.2	0.4	黒曜石	神津島	(60.00)			
第174図	6-6	I	A'-26-3	1	2227	6住	五領ヶ台	上	1.5	1.2	0.2	0.3	黒曜石	A-2	80.00			
第174図	24-1	I	D'-24-3	2	14705	24住	諸磯b	中	2.2	1.2	0.3	0.6	黒曜石	A-1	54.55		第171図	5
第174図	24-2	I	D'-24-2	1		24住	諸磯b	中	1.5	1.5	0.3	0.5	黒曜石	A-1	100.00			
第174図	24-3	I	D'-24-2	1		24住	諸磯b	中	1.8	1.7	0.3	0.5	黒曜石	A-2	94.44		第171図	6
第174図	30-1	I	F'-31-4	5	19786	30住	五領ヶ台	上	2.0	(1.2)	0.4	0.8	黒曜石	A-2	(60.00)			
第174図	30-2	I	F'-31-1	2	18924	30住	五領ヶ台	上	(2.5)	(1.5)	0.3	0.7	黒曜石	D	60.00			
第174図	30-3	I	F'-30-2	2		30住	五領ヶ台	上	2.3	1.4	0.5	1.4	黒曜石	A-1	60.87	加工途上	第171図	19
第174図	30-4	I	F'-31-4	1	18596	30住	五領ヶ台	上	2.4	1.7	0.5	1.2	黒曜石	A-2	70.83		第171図	17

第174図	30-5	I	F'-32-2	1		30住	五領ヶ台	上	2.8	(1.7)	0.5	1.5	黒曜石	A-1	(60.71)		第171図	18
第174図	30-6	I	F'-31-3	1	20577	30住	五領ヶ台	上	(1.8)	1.4	0.3	0.6	黒曜石	D	(77.78)	衝撃剥離		
第174図	30-7	I	F'-31-1	1		30住	五領ヶ台	上	(2.8)	(1.7)	0.3	1.4	黒曜石	K	60.71			
第174図	34-1	I	G'-31-4	1	19763	34住	五領ヶ台	上	1.8	1.6	0.4	0.7	黒曜石	B-2	88.89		第171図	20
第174図	46-1	I	L'-29-2	1		46住	五領ヶ台	上	2.7	1.8	0.6	2.4	黒曜石	A-1	66.67			
第174図	55-1	I	I'-26-1	2	32933	55住	五領ヶ台	上	1.9	1.3	0.3	0.7	黒曜石	B-2	68.42			
第174図	55-2	I	I'-26-4	1		55住	五領ヶ台	上	2.0	1.5	0.4	0.7	黒曜石	E	75.00			
第175図	16-1	I	E'-29-1	5	17080	16住	猪沢	中	1.6	1.5	0.4	0.5	黒曜石	A-1	93.75			
第175図	16-2	I	E'-29-1	5	17081	16住	猪沢	中	(1.7)	(1.6)	0.5	0.9	黒曜石	D	94.12	衝撃剥離		
第175図	16-3	I	D'-29-3	4		16住	猪沢	上	1.8	1.3	0.5	0.8	黒曜石	B-1	72.22		第169図	19
第175図	16-4	I	E'-29-2	4		16住	猪沢	上	2.5	(1.9)	0.6	1.8	黒曜石	D	(76.00)			
第175図	16-5	I	D'-30-3	4		16住	猪沢	上	(1.5)	(1.2)	0.3	0.3	黒曜石	B-1	80.00	衝撃剥離・焼け		
第175図	16-6	I	E'-30-2	3		16住	猪沢	上	2.4	1.7	0.4	1.0	黒曜石	B-2	70.83		第170図	6
第175図	16-7	I	E'-29-2	3	14436	16住	猪沢	上	1.4	1.5	0.3	0.5	黒曜石	B-2	107.14		第170図	2
第175図	16-8	I	E'-29-2	3	14469	16住	猪沢	上	2.3	1.4	0.4	0.8	黒曜石	B-1	60.87	鋸歯縁加工		
第175図	16-9	I	E'-29-2	3	14435	16住	猪沢	上	2.8	1.6	0.4	1.7	黒曜石	A-1	57.14			
第175図	16-10	I	D'-29		13577	16住	猪沢	上	2.5	1.8	0.3	1.2	黒曜石	B-2	72.00		第170図	5
第175図	16-11	I	E'-30-2	1	15636	16住	猪沢	上	1.8	1.4	0.3	0.5	黒曜石	A-1	77.78		第170図	1
第175図	16-12	I	D'-29-3			16住	猪沢	上	1.7	1.3	0.4	0.8	黒曜石	B-1	76.47			
第175図	16-13	I	D'-29		14472	16住	猪沢	上	2.7	(1.5)	0.4	0.9	黒曜石	B-2	(55.56)	鋸歯縁加工		
第175図	16-14	I	E'-29			16住	猪沢	上	3.0	1.9	0.6	2.4	黒曜石	A-1	63.33	衝撃剥離	第170図	4
第175図	16-15	I	D'-29		13578	16住	猪沢	上	(1.2)	(1.2)	0.4	0.3	黒曜石	B-1	100.00	衝撃剥離		
第175図	16-16	I	D'-29-4	2	10733	16住	猪沢	上	2.2	1.8	0.4	0.8	チャート 白灰色黒色スジ入		81.82		第169図	17
第175図	16-17	I	D'-29-3	2		16住	猪沢	上	1.5	1.4	0.3	0.5	黒曜石	A-1	93.33			
第175図	16-18	I	E'-29-1	2		16住	猪沢	上	(1.3)	(1.4)	0.4	0.5	黒曜石	D	107.69	衝撃剥離		
第175図	16-19	I	D'-29-4	3	17170	16住	猪沢	上	(1.5)	1.3	0.3	0.4	黒曜石	D	(86.67)			
第175図	16-20	I	D'-29-4	2	10956	16住	猪沢	上	2.0	1.3	0.4	0.6	黒曜石	A-1	65.00		第169図	18
第175図	16-21	I	D'-29-3	1		16住	猪沢	上	1.4	1.3	0.3	0.3	黒曜石	D	92.86		第170図	3
第175図	16-22	I	D'-29-4	1		16住	猪沢	上	(2.4)	1.7	0.4	1.8	黒曜石	A-1	(70.83)	焼け		
第175図	16-23	I	D'-29-4	1		16住	猪沢	上	(3.0)	(1.7)	0.4	1.3	黒曜石	B-2	56.67			
第175図	16-24	I	D'-29-2	1	11839	16住	猪沢	上	(2.3)	1.4	0.4	0.8	黒曜石	D	(60.87)			
第175図	16-25	I	D'-29-2		11840	16住	猪沢	上	1.8	1.4	0.3	0.3	黒曜石	B-2	77.78		第169図	20
第175図	19-1	I	D'-32-3	4	12189	19住	猪沢	中	1.7	(1.6)	0.3	0.5	黒曜石	A-1	(94.12)			
第175図	19-2	I	D'-32-3	4		19住	猪沢	中	2.2	1.8	0.4	1.4	黒曜石	C	81.82			
第175図	19-3	I	D'-32-3	3	11426	19住	猪沢	中	1.7	1.5	0.4	0.7	黒曜石	D	88.24	衝撃剥離・鋸歯縁加工		
第175図	19-4	I	D'-32-3	1		19住	猪沢	上	2.3	1.9	0.3	1.0	黒曜石	A-2	82.61	焼け	第170図	9
第175図	19-5	I	D'-32-3	2	11207	19住	猪沢	上	1.9	1.5	0.3	0.4	黒曜石	A-2	78.95		第170図	10
第175図	1-1	I	A-30-1 1住	5		1住	五領ヶ台	中	1.1	1.1	0.3	0.3	黒曜石	A-1	100.00			
第175図	1-2	I	A-30-4	3	1321	1住	五領ヶ台	上	2.0	(1.5)	0.4	1.1	黒曜石	B-2	(75.00)			
第175図	1-3	I	A-30-3	3	763	1住	五領ヶ台	上	2.0	(1.2)	0.3	0.4	黒曜石	A-1	(60.00)	鋸歯縁加工		
第175図	1-4	I	A-30-3	3	762	1住	五領ヶ台	上	2.4	1.4	0.4	0.7	黒曜石	A-1	58.33			
第175図	1-5	I	A-31-2 1住	3		1住	五領ヶ台	上	2.0	1.7	0.4	0.9	黒曜石	B-2	85.00			
第175図	1-6	I	A'-31-2	3		1住	五領ヶ台	上	2.0	1.1	0.4	0.7	黒曜石	A-1	55.00			
第175図	1-7	I	A-30-4	2	6671	1住	五領ヶ台	上	2.1	1.6	0.3	0.5	黒曜石	C	76.19		第168図	1
第176図	1-8	I	A-30-1	2		1住	五領ヶ台	上	2.0	1.4	0.6	1.0	黒曜石	A-1	70.00			
第176図	1-9	I	A-30-4	2	649	1住	五領ヶ台	上	2.0	1.2	0.4	0.5	黒曜石	D	60.00			
第176図	1-10	I	A-30 1住		7016	1住	五領ヶ台	上	1.4	1.3	0.3	0.3	黒曜石	A-2	92.86	衝撃剥離	第168図	3
第176図	1-11	I	A-30-2	1		1住	五領ヶ台	上	2.2	1.6	0.5	1.2	黒曜石	A-2	72.73			
第176図	1-12	I	A-30-4	1		1住	五領ヶ台	上	1.9	(1.2)	0.3	0.3	黒曜石	神津島	(63.16)			
第176図	12-1	I	E'-31-4	4		12住	新道	上	2.7	(2.2)	0.3	1.2	黒曜石	A-1	(81.48)			
第176図	12-2	I	E'-31-1	3	12211	12住	新道	上	2.3	1.9	0.3	0.8	黒曜石	A-1	82.61		第169図	11
第176図	12-3	I	E'-31-1 12住	3		12住	新道	上	2.2	1.3	0.3	0.6	黒曜石	A-2	59.09		第169図	9
第176図	12-4	I	A-30-1	3		1住	五領ヶ台	上	2.1	1.4	0.3	0.8	黒曜石	A-1	66.67	レイアウトミス	第168図	2
第176図	12-5	I	E'-31-1 12住	3		12住	新道	上	1.9	1.7	0.4	0.9	黒曜石	D	89.47			
第176図	12-6	I	E'-31-1 12住	3		12住	新道	上	1.5	1.4	0.3	0.4	黒曜石	A-2	93.33			
第176図	12-7	I	E'-31-1 12住	3		12住	新道	上	1.9	1.4	0.4	0.7	黒曜石	B-2	73.68			
第176図	12-8	I	E'-31-1 12住	3	14809	12住	新道	上	(2.0)	1.9	0.3	1.1	黒曜石	C	(95.00)			
第176図	12-9	I	E'-31-2 12住	2	11687	12住	新道	上	3.1	2.0	0.4	1.5	黒曜石	A-1	64.52		第169図	10
第176図	12-10	I	E'-31-1	2		12住	新道	上	1.2	1.3	0.3	0.3	黒曜石	C	108.33			
第176図	12-11	I	E'-31-1	2		12住	新道	上	2.7	(1.6)	0.6	1.3	黒曜石	B-2	(59.26)			
第176図	12-12	I	E'-31-2 12住	2	11686	12住	新道	上	(1.0)	1.2	0.2	0.2	黒曜石	A-1	(120.00)			
第176図	12-13	I	E'-31-1	2		12住	新道	上	(1.8)	(1.6)	0.3	0.5	黒曜石	B-2	88.89			
第176図	12-14	I	E'-31-1 12住		14403	12住	新道	上	1.8	1.3	0.3	0.3	黒曜石	E	72.22			
第176図	12-15	I	E'-31-2 12住		14157	12住	新道	上	1.8	1.7	0.2	0.5	チャート 灰色ごまつぶ入る		94.44		第169図	8
第176図	12-16	I	E'-31-2 12住	1	11478	12住	新道	上	1.7	1.5	0.3	0.5	黒曜石	A-2	88.24			
第176図	12-17	I	E'-32-2	1		12住	新道	上	2.4	1.5	0.5	1.1	黒曜石	A-2	62.50			
第176図	12-18	I	E'-31-2	1		12住	新道	上	2.3	(1.9)	0.5	1.3	黒曜石	K	(82.61)			
第176図	17-1	I	B'-27-4	1	12758	17住	猪沢	上	2.7	1.7	0.3	0.8	黒曜石	A-1	62.96		第170図	7
第176図	17-2	I	C'-27-1	1		17住	猪沢	上	2.0	1.5	0.5	1.3	黒曜石	A-1	75.00			
第176図	17-3	I	C'-27-2			17住	猪沢	上	2.3	(1.5)	0.5	1.2	黒曜石	A-1	(65.22)			
第176図	26-1	I	D'-28-2ペルト	3		26住	諸磯b	上	(2.5)	1.8	0.4	1.0	黒曜石	A-1	(72.00)		第171図	10

第176図	26-2	I	D'-28-2	2	11868	26住	諸磯b	上	2.2	1.7	0.6	1.5	黒曜石	D	77.27			
第176図	26-3	I	D'-28-2	1	16269	26住	諸磯b	上	2.2	1.4	0.3	0.7	黒曜石	E	63.64			
第176図	26-4	I	D'-28-1		11846	26住	諸磯b	上	1.4	1.2	0.3	0.4	黒曜石	C	85.71			
第176図	27-1	I	D'-27-4	2	13247	27住	諸磯b	上	2.3	1.8	0.3	0.8	黒曜石	E	78.26		第171図	11
第176図	27-2	I	D'-27-1	1	15361	27住	諸磯b	上	(1.5)	1.7	0.3	0.5	黒曜石	E	(113.33)			
第176図	27-3	I	D'-27-3	1		27住	諸磯b	上	(2.4)	(1.3)	0.3	0.8	黒曜石	A-1	54.17		第171図	12
第176図	29-1	I	F'-28-4	2	20237	29住	新道	中	1.8	1.5	0.3	0.6	黒曜石	A-1	83.33		第171図	16
第176図	29-2	I	F'-29-3	1	20466	29住	新道	中	2.0	1.3	0.3	0.5	黒曜石	B-2	65.00		第171図	15
第176図	29-3	I	F'-29-3	1	20482	29住	新道	中	2.7	(1.3)	0.3	0.7	黒曜石	A-1	(48.15)			
第176図	29-4	I	F'-29-3	1		29住	新道	中	1.8	(1.1)	0.2	0.3	黒曜石	A-2	(61.11)			
第176図	29-5	I	F'-29-3	1		29住	新道	中	(1.9)	1.8	0.6	1.4	黒曜石	B-2	(94.74)			
第177図	32-1	I	F'-30-4	4	18977	32住	新道	中	2.3	2.0	0.4	1.2	黒曜石	A-1	86.96	衝撃剥離	第171図	2
第176図	32-2	I	F'-30-4	4	19006	32住	新道	中	2.2	1.4	0.3	0.6	黒曜石	A-1	63.64			
第176図	32-3	I	F'-29-4 32住			32住	新道	中	1.1	(1.1)	0.3	0.2	黒曜石	B-2	(100.00)			
第176図	32-4	I	F'-30-4	1	18681	32住	新道	中	2.2	2.0	0.3	0.9	黒曜石	C・F	90.91		第172図	1
第176図	32-5	I	F'-30-4	1	18682	32住	新道	中	2.2	1.6	0.3	0.6	黒曜石	A-1	72.73			
第177図	5-1	I	D'-31-1	6	4070	5住	藤内	中	1.9	1.5	0.4	0.6	黒曜石	E	78.95		第168図	14
第177図	5-2	I	D'-31-4	4		5住	藤内	中	1.6	1.4	0.3	0.6	黒曜石	A-1	87.50		第168図	15
第177図	5-3	I	D'-31-1	4		5住	藤内	中	1.9	(1.4)	0.4	0.6	黒曜石	A-1	(73.68)			
第177図	5-4	I	D'-31-1	4		5住	藤内	中	(1.4)	1.9	0.4	1.1	黒曜石	A-2	(135.71)			
第177図	5-5	I	D'-31-4	4		5住	藤内	中	2.0	1.9	0.3	0.8	黒曜石	A-2	95.00			
第177図	5-6	I	D'-31-1	4		5住	藤内	中	1.9	(1.3)	0.3	0.4	黒曜石	A-1	(68.42)			
第177図	5-7	I	D'-31-4	4		5住	藤内	中	2.4	1.5	0.4	1.1	黒曜石	A-1	62.50			
第177図	5-8	I	D'-32-2	3		5住	藤内	上	1.5	1.5	0.2	0.5	黒曜石	A-2	100.00		第168図	16
第177図	5-9	I	D'-31-2	2		5住	藤内	上	2.0	1.3	0.3	0.6	黒曜石	A-2	65.00			
第177図	5-10	I	C'-31-3	1	7159	5住	藤内	上	2.2	1.4	0.4	1.1	珪質頁岩		63.64	衝撃剥離	第168図	13
第177図	5-11	I	D'-31-4 5住	1	11181	5住	藤内	中	(2.1)	(1.3)	0.3	0.5	黒曜石	E	61.90			
第177図	5-12	I	D'-32-2	1		5住	藤内	上	1.7	(1.2)	0.3	0.4	黒曜石	A-2	(70.59)			
第177図	5-13	I	D'-31-1 5住			5住	藤内	中	2.2	(1.4)	0.3	0.5	黒曜石	A-1	(63.64)			
第177図	5-14	I	D'-31-1 5住			5住	藤内	中	(3.0)	(2.0)	0.3	0.8	黒曜石	A-2	66.67			
第177図	7-1	I	B-31-3	2		7住	藤内	中	1.5	1.4	0.4	0.6	黒曜石	A-1	93.33			
第177図	7-2	I	A-31-1 1住		6689	7住	藤内	中	1.6	1.3	0.3	0.4	黒曜石	A-1	81.25	焼け	第168図	20
第177図	7-3	I	A-31-1			7住	藤内	中	1.9	1.3	0.3	0.3	黒曜石	A-1	68.42			
第177図	10-1	I	A-32-3	4	5979	10住	藤内	中	2.0	(1.5)	0.4	0.6	黒曜石	A-2	(75.00)		第169図	3
第177図	10-2	I	A-32-1	3		10住	藤内	中	2.0	1.6	0.6	1.7	黒曜石	A-1	80.00			
第177図	10-3	I	グリッド出土										黒曜石	B-2				
第177図	10-4	I	グリッド出土										黒曜石	I				
第177図	10-5	I	A-32-4			10住	藤内	上	2.8	1.8	0.4	1.6	黒曜石	A-1	64.29		第169図	2
第177図	18-1	I	C'-27-2 18住	3		18住	諸磯b	中	1.8	(1.2)	0.4	0.5	黒曜石	D	(66.67)			
第177図	18-2	I	C'-27 18住	2		18住	諸磯b	中	1.9	1.7	0.2	0.5	黒曜石	A-1	89.47		第170図	8
第177図	18-3	I	C'-27 18住	2		18住	諸磯b	中	1.5	1.0	0.3	0.3	黒曜石	B-2	66.67	焼け		
第177図	18-4	I	C'-27-3	1	9658	18住	諸磯b	上	2.0	(1.4)	0.3	0.6	黒曜石	E	(70.00)			
第177図	20-1	I	E'-28 20住P7		20333	20住	藤内	住居 ビット	(1.6)	1.8	0.3	0.6	チャート	緑灰色	(112.50)		第170図	14
第177図	20-2	I	E'-28-2	4		20住	藤内	中	1.7	1.6	0.4	0.8	黒曜石	D	94.12			
第177図	20-3	I	E'-27-1	3	17603	20住	藤内	中	2.7	(1.8)	0.5	1.6	黒曜石	A-1	(66.67)			
第177図	20-4	I	E'-28-2 20住		16672	20住	藤内	中	2.3	1.5	0.4	0.3	黒曜石	A-1	65.22		第170図	12
第177図	20-5	I	D'-28 20住		19276	20住	藤内	中	3.3	2.1	0.9	4.3	黒曜石	A-2	63.64		第170図	11
第177図	20-6	I	D'-28 20住		18344	20住	藤内	中	2.2	1.6	0.5	1.2	チャート 白灰色黒色ス ジ入		72.73		第170図	13
第177図	20-7	I	E'-27-1 20住			20住	藤内	中	2.4	1.6	0.6	1.6	黒曜石	B-2	66.67			
第177図	20-8	I	E'-28 20住		19294	20住	藤内	中	1.9	1.2	0.4	0.7	黒曜石	B-2	63.16			
第177図	20-9	I	E'-28-2 20住		16607	20住	藤内	中	1.5	1.3	0.3	0.3	黒曜石	B-2	86.67			
第177図	20-10	I	E'-28-2 20住		16606	20住	藤内	中	(1.9)	(1.6)	0.5	1.1	黒曜石	D	84.21			
第177図	20-11	I	E'-28-4	1		20住	藤内	上	2.3	1.8	0.6	2.5	黒曜石	A-1	78.26			
第177図	28-1	I	F'-27-1	2		28住	諸磯b	上	1.1	1.5	0.3	0.3	黒曜石	B-1	136.36		第171図	14
第177図	28-2	I	E'-27 28住		19088	28住	諸磯b	中	2.2	1.7	0.3	0.7	黒曜石	A-1	77.27			
第177図	28-3	I	F'-27-2	1		28住	諸磯b	上	2.2	1.5	0.3	0.8	黒曜石	A-1	68.18	鋸歯縁加工	第171図	13
第177図	28-4	I	F'-27-2	1	18725	28住	諸磯b	上	1.7	1.4	0.3	0.4	黒曜石	A-1	82.35			
第177図	28-5	I	F'-27-1	1		28住	諸磯b	上	(1.3)	1.5	0.3	0.4	黒曜石	B-2	(115.38)			
第177図	28-6	I	F'-27-1	1		28住	諸磯b	上	1.6	(1.7)	0.3	0.4	黒曜石	E	(106.25)			
第177図	33-1	I	F-28 33住			33住	藤内	中	(2.0)	(1.2)	0.3	0.7	黒曜石	A-1	60.00	衝撃剥離		
第177図	33-2	I	F'-27-4	1	18850	33住	藤内	上	3.3	1.6	0.5	1.8	チャート	白灰色	48.48		第172図	3
第177図	33-3	I	F'-27-3	1	20258	33住	藤内	上	(2.0)	2.2	0.3	0.9	黒曜石	E	(110.00)		第172図	4
第177図	33-4	I	F'-27-3	1	20259	33住	藤内	上	1.7	(1.4)	0.3	0.4	黒曜石	A-2	(82.35)			
第177図	33-5	I	F'-27-4	1		33住	藤内	上	(1.6)	(1.5)	0.3	0.6	黒曜石	A-1	93.75			
第178図	35-1	I	E'-26-3	1	18235	35住	藤内	上	1.9	(1.3)	0.3	0.5	黒曜石	A-2	(68.42)			
第178図	50-1	I	L'-26-1ベルト	1		50住	藤内	上	1.8	(1.3)	(0.3)	0.5	黒曜石	B-1	(72.22)			
第178図	51-1	I	J'-29-1	1		51住	五領ヶ台	上	(2.5)	(1.3)	0.4	0.7	黒曜石	A-1	52.00			
第178図	51-2	I	51住 ベルト	1		51住	五領ヶ台	上	(2.2)	1.3	0.3	0.5	黒曜石	K	(59.09)		第172図	7
第178図	53-1	I	J'-28-1	1		53住	藤内	上	1.7	1.2	0.4	0.7	黒曜石	A-1	70.59			
第178図	3-1	I	B'-31-3	4	4936	3住	井戸尻	中	(2.5)	1.5	0.4	1.2	黒曜石	D	(60.00)		第168図	8
第178図	3-2	I	B'-31-4 3住	2	5578	3住	井戸尻	中	2.5	1.5	0.4	1.2	珪質頁岩	黒灰色スジ入	60.00	衝撃剥離	第168図	7
第178図	3-3	I	B'-31-3	2	1753	3住	井戸尻	上	1.6	1.1	0.3	0.3	黒曜石	E	68.75			
第178図	3-4	I	B'-31-1	2	5564	3住	井戸尻	上	1.8	(1.6)	0.5	0.9	黒曜石	A-1	(88.89)			

第178図	3-5	I	C'-31-1	2		3住	井戸尻	上	2.3	1.7	0.3	1.1	黒曜石	B-1	73.91			
第178図	3-6	I	B'-30-4	2	1434	3住	井戸尻	上	2.4	1.7	0.7	2.1	黒曜石	A-1	70.83	焼け		
第178図	3-7	I	C'-31-2	2	4241	3住	井戸尻	上	(1.5)	2.3	0.3	0.9	黒曜石	D	(153.33)			
第178図	3-8	I	C'-31-2	1	4240	3住	井戸尻	上	2.4	1.5	0.3	1.0	黒曜石	B-2	62.50		第168図	9
第178図	3-9	I	B'-31-4	1		3住	井戸尻	上	1.2	1.1	0.3	0.2	黒曜石	A-1	91.67	衝撃剥離		
第178図	3-10	I	C'-31-2	1	4242	3住	井戸尻	上	2.4	(1.6)	0.4	0.9	黒曜石	B-2	(66.67)			
第178図	3-11	I	B'-31-3	1	1386	3住	井戸尻	上	(2.6)	(1.4)	0.5	0.9	黒曜石	A-1	53.85			
第178図	3-12	I	A'-31-4			3住	井戸尻	上	1.7	1.2	0.3	0.3	黒曜石	B-2	70.59			
第168図	10	I	B'-31-3	1	2593	3住	井戸尻	上	2.0	1.3	0.4	0.8	黒曜石	B-1	65.00	レイアウトミス	第168図	10
第178図	25-1	I	E'-29-4	4	17236	25住	井戸尻	中	2.5	1.6	0.5	0.9	黒曜石	D	64.00		第171図	7
第178図	25-2	I	E'-30-4	3	17227	25住	井戸尻	中	2.0	1.4	0.4	0.7	黒曜石	C	70.00		第171図	8
第178図	25-3	I	E'-30-1	1	19386	25住	井戸尻	中	1.6	1.4	0.4	0.7	黒曜石	A-2	87.50		第171図	9
第178図	25-4	I	E'-30-4	1		25住	井戸尻	中	(2.0)	(1.2)	0.3	0.4	黒曜石	A-1	60.00	焼け		
第178図	25-5	I	E'-29-4	1		25住	井戸尻	中	(2.7)	(1.5)	0.4	1.1	黒曜石	A-1	55.56			
第178図	25-6	I	E'-30-4	1	16886	25住	井戸尻	中	1.8	(1.4)	0.5	0.9	黒曜石	A-2	(77.78)			
第178図	38-1	I	F'-30-3	1	20405	38住	井戸尻	上	2.0	1.3	0.2	0.5	黒曜石	E	65.00		第172図	5
第178図	39-1	I	H'-30-2	3		39住	井戸尻	上	1.8	1.9	0.4	1.4	黒曜石	D	105.56		第172図	6
第178図	54-1	I	I'-27-2	2		54住	井戸尻	上	1.6	1.3	0.3	0.6	黒曜石	E	81.25			
第178図	54-2	I	I'-27-2	2		54住	井戸尻	上	(1.3)	1.2	0.2	0.4	黒曜石	K	(92.31)	衝撃剥離		
第178図	54-3	I	H'-27-3	1		54住	井戸尻	上	(2.5)	1.2	0.5	1.0	黒曜石	D	(48.00)			
第178図	54-4	I	H'-27-3			54住	井戸尻	上	(2.8)	(1.4)	0.4	1.1	黒曜石	B-2	50.00			
第178図	13-1	I	13住Pit4		15265	13住	曾利Ⅲ	住歴 ピット	(1.9)	1.7	0.3	0.7	黒曜石	D	(89.47)		第169図	12
第178図	13-2	I	B'-28-1 13住		12843	13住	曾利Ⅲ	中	(2.3)	(1.6)	0.3	0.7	黒曜石	D	69.57			
第178図	13-3	I	B'-28-1 13住		12846	13住	曾利Ⅲ	中	(2.5)	(2.0)	0.3	1.1	黒曜石	B-1	80.00			
第178図	13-4	I	B'-28-1	2		13住	曾利Ⅲ	中	(1.4)	2.2	0.3	0.8	黒曜石	A-1	(157.14)			
第178図	13-5	I	B'-28-1	1	7808	13住	曾利Ⅲ	中	(1.8)	1.8	0.3	0.6	黒曜石	A-1	(100.00)		第169図	13
第178図	13-6	I	B'-29-2		12846	13住	曾利Ⅲ	中	(1.7)	(1.3)	0.2	0.4	黒曜石	B-2	76.47			
第178図	13-7	I	A'-29-3			13住	曾利Ⅲ	中	(1.6)	(1.9)	0.3	0.6	黒曜石	A-1	118.75			
第178図	21-1	I	D'-26 21住		18108	21住	曾利Ⅱ	中	1.3	1.1	0.2	0.1	黒曜石	A-2	84.62		第170図	17
第178図	21-2	I	D'-26-2	1	15392	21住	曾利Ⅱ	中	2.0	1.4	0.4	0.7	黒曜石	B-2	70.00		第170図	16
第178図	21-3	I	C'-26-4カクラン			21住	曾利Ⅱ	攪乱	2.1	2.0	0.4	0.8	黒曜石	D	95.24		第170図	15
第178図	21-4	I	C'-26-4カクラン			21住	曾利Ⅱ	攪乱	2.6	2.0	0.5	1.7	黒曜石	A-2	76.92			
第172図	8	I	I'-31 へ土坑			土坑			1.6	1.2	0.4	0.3	黒曜石	A-1	75.00	焼け		
第172図	9	I	D'-26-4ハ土坑			土坑	藤内		2.4	1.7	0.4	0.8	黒曜石	A-1	70.83			
第172図	10	I	F'-27口土坑		19975	土坑			1.8	1.8	0.4	0.5	黒曜石	神津島	100.00			
第172図	11	I	B'-32ハ土坑			土坑	諸磯b		2.0	1.6	0.2	0.4	黒曜石	A-1	80.00			
第172図	12	I	D'-30 二土坑		12417	土坑	五領ヶ台		3.1	(2.1)	0.3	1.3	黒曜石		(67.74)			
第172図	13	I	B'-27-3ウ土坑		16344	土坑			2.3	1.4	0.4	1.2	チャート 赤色		60.87			
第172図	14	I	D'-26						(2.0)	1.0	0.2	0.4	チャート 緑灰色		(50.00)			

### I区の石錐

図番号	国内番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	時期	帰属層	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	石材分類
第179図	1	1住			11住	諸磯b	中	I A2	4.3	1.3	0.8	3.4	珧質頁岩	白色
第179図	2	B'-23-1	6		11住	諸磯b	中	I A2	2.8	2.3	0.64	2.3	黒曜石	H
第179図	3	A'-24-4	3		11住	諸磯b	上	I B1	2.5	1.4	0.7	2.3	珧質頁岩	緑色
第179図	4	P口			11住	諸磯b	ピット内	I B1	2.8	1.2	1.1	2.5	黒曜石	B1
第179図	5	A-29-4	2	1994	2住	諸磯b	上	I B2	3.1	1.8	1	4	黒曜石	G
第179図	6	C'-25-2			23住	諸磯b	上	I C	3.6	0.8	0.9	2.2	黒曜石	E
第179図	7	A-29-3	3	390	2住	諸磯b	中	II B1	2.1	1.5	0.3	0.8	黒曜石	A2
第179図	8	B'-24-3	3		23住	諸磯b	上	II BC	1.8	2	0.6	1.9	チャート	赤色
第179図	9	B'-24-3	2		11住	諸磯b	上	II C	2.1	1.1	0.4	0.7	黒曜石	D
第179図	10	2住	2	3922	2住	諸磯b	上	III A2	4.2	1.9	1	3.8	黒曜石	A1
第179図	11	A-29-1			2・4住		上	IV C	4.7	0.8	0.8	1.8	黒曜石	B1
第179図	12	A'-29-4	2		15住	諸磯b	上	IV B2	2	1	0.3	0.8	黒曜石	A1
第180図	1	L'-30-3	1	30490	47住	五領ヶ台	中	I A1	3.4	3.3	0.6	4.5	チャート	赤色
第180図	2	A-26-4	4	2435	6住	五領ヶ台	中	I A1	3.3	1.1	0.5	1.3	黒曜石	A1
第180図	3	A-26-4	1	1793	6住	五領ヶ台	上	I B1	3	1.9	0.7	2.4	黒曜石	B2
第180図	4	30住	3		30住	五領ヶ台	中	I B2	2	1.1	0.6	1	黒曜石	B2
第180図	5	K'-29-4	1		46住	五領ヶ台	上	I C	2.8	0.6	0.5	1	黒曜石	A2
第180図	6	45住		32018	45住	猪沢	中	I A1	2.6	1.9	0.5	2.7	黒曜石	G
第180図	7	D'-32-2	3		19住	猪沢	中	I B1	3	1.5	0.62	2.8	黒曜石	A1
第180図	8	D'-29-4	2		16住	猪沢	上	I C	1.7	0.6	0.5	0.7	黒曜石	B1
第180図	9	E'-29-1	2		16住	猪沢	上	II B2	2.5	1	0.38	1.6	黒曜石	B2
第180図	10	M'-31			44住	猪沢	上	III A1	2.9	0	0.61	1.4	黒曜石	E
第180図	11	D'-29-4			16住	猪沢	上	III B1	2.5	1.4	0.7		黒曜石	A1
第181図	1	C'-27-4	2		17住	猪沢	上	I B1	3.2	2	0.7	3.2	黒曜石	H
第181図	2	A-30-1	2		1住	五領ヶ台	上	I B2	2.7	1.3	1.1	2.9	黒曜石	D
第181図	3	A'-31-2			1住	五領ヶ台	上	I C	2.9	1.1	0.8	2.3	黒曜石	B2
第181図	4	A-30-3	3		1住	五領ヶ台	上	II B1	3	1.3	0.7	2.3	黒曜石	A2
第181図	5	F'-30-4	4	18991	32住	新道	中	III A2	1.7	1.4	0.5	0.9	黒曜石	D
第181図	6	A'-30-1	1		1住	五領ヶ台	上	III B1	2.2	1.2	0.7	1.7	チャート	緑灰色
第181図	7	J'-29-2	2		51住	五領ヶ台	上	I A1	3.7	1.5	1.3	4	黒曜石	D
第181図	8	A'-32-1	3		10住	藤内	中	I A2	3.4	1.6	1.1	3	黒曜石	B2
第181図	9	C'-27-3	1		18住	諸磯b	上	I B2	2.7	1.8	0.6	2.6	黒曜石	D
第181図	10	J'-28-2	3		53住	藤内	上	I C	2.4	0.8	0.5	1	黒曜石	D
第181図	11	住		19530	20住	藤内	中	II A1	3.2	1.2	0.4	1.5	チャート	赤色
第181図	12	D'-31-1	4		5住	藤内	中	II A2	2.4	2.6	0.6	2.8	黒曜石	B1



第182図	1	F'-27-2	1		28住	諸磯b	中	ⅢB2	2.2	1.6	0.3	0.8	黒曜石	C
第182図	2	住		29874	51住	五領ヶ台	中	ⅢA1	3.7	1.4	0.6	2.1	安山岩	灰色
第182図	3	号住	3		33住	藤内	中	ⅢB1	3.1	1.9	1.8	1.2	黒曜石	D
第182図	4	D'-27-2	2		18住	諸磯b	上	ⅢC	2.2	0.8	0.5	0.9	黒曜石	A2
第182図	5	D'-31-2	5		5住	藤内	中	ⅣB2	2.3	1.1	0.35	1.3	黒曜石	E
第182図	6	H'-29-1	2		39住	井戸尻	上	I B2	2.5	1.5	0.8	1.8	黒曜石	D
第182図	7	B'-30	4		3住	井戸尻	中	I C	2.9	0.7	0.45	1	黒曜石	A1
第182図	8	B'-31-3	1		3住	井戸尻	上	ⅡB2	2	2.1	0.4	1.4	黒曜石	A1
第182図	9	B'-31-3	3	4821	3住	井戸尻	上	ⅢA1	2.9	1.4	0.6	1.8	黒曜石	H
第182図	10	C'-26-3	1		21住	曾利	中	I B2	2.4	1.4	0.73	2.2	黒曜石	H
第182図	11	土坑			土坑			ⅢB1	4.4	2.5	1.1	10.3	チャート	緑灰色
第182図	12	B-25-4	2		土坑			I B1	6.1	2.1	1.8	20.1	黒曜石	B1
第182図	13	土坑			土坑	五領ヶ台		I A1	4.8	1.2	1.1	4.1	黒曜石	C
第182図	14	土坑			土坑	藤内		I・ⅡA1	2	2.2	0.6	1.9	チャート	ノ一質
第182図	15	D'-25-2	1		22住	諸磯b	中	抉り入	2.2	1.2	0.6	1.2	黒曜石	A2

Ⅰ区の石匙

図番号	図内番号	出土区	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	帰属遺の時期	出土層	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	石材分類	備考	詳細図番号	図内番号
第191図	1	I	D'-26		143	21住	曾利Ⅱ	中	I Aa	(22.0)	18.5	3.8	0.9	黒曜石	G			
第191図	2	I	I'-27-2 54住		32200	54住	井戸尻	中	I Aa	43.5	30.5	5.9	5.1	黒曜石	A-2			
第191図	3	I	C'-31ハ土坑		6922	土坑	曾利Ⅴ	土坑	I Aa	31.1	28.3	7.5	4.8	黒曜石	B-1		第183図	1
第191図	4	I	B'-32-4	1	8718				I Aa	52.1	41.2	6.9	10.0	黒曜石	A-1		第183図	4
第191図	5	I	C'-31ニ土坑		5235	土坑	曾利Ⅴ	土坑	I Ab	29.0	14.5	3.0	0.9	黒曜石	B-1			
第191図	6	I	A-29-4	2		2住	諸磯b	上	I Ab	22.6	20.6	4.5	1.8	黒曜石	G		第183図	5
第191図	7	I	B'-32-3	1					I Ab	(33.5)	27.5	6.5	4.6	黒曜石	A-2			
第191図	8	I	F'-27-1	2		28住	諸磯b	中	I Ab	47.7	39.0	9.5	9.2	黒曜石	B-2		第184図	1
第191図	9	I	表探						I Ab	45.0	29.5	6.5	6.8	黒曜石	A-1	焼け		
第191図	10	I	51住ベルト	1	41	51住	五領ヶ台	上	I Ba	21.5	12.0	4.5	0.2	黒曜石	B-1		第184図	4
第191図	11	I	C'-25-1	3					I Bb	24.5	15.5	6.0	1.8	黒曜石	B-2		第187図	1
第191図	12	I	B'-24-4	1					I Bb	18.0	26.9	6.1	2.0	黒曜石	B-1			
第191図	13	I	E'-28 20住		20245	20住	藤内	中	I Bb	52.0	35.5	7.1	11.2	黒曜石	A-1		第187図	2
第191図	14	I	A'-31-2	2					ⅡAa	27.0	15.9	6.9	2.3	黒曜石	A-1			
第191図	15	I	A'-26-2	1	4331				ⅡAa	41.0	29.0	7.5	7.5	黒曜石	F	分類ミスプリ	第188図	4
第191図	16	I	F'-31-3	3					ⅡAb	27.0	(19.9)	5.5	2.6	黒曜石	A-2	分類ミスプリ		
第191図	17	I	D'-27 18住			18住	諸磯b	中	I Aa	15.9	15.5	5.3	1.1	チャート				
第191図	18	I	A'-24-3	3	8286	11住	諸磯b	上	I Ab	32.5	32.0	7.4	6.0	チャート			第183図	6
第191図	19	I	K'-31-4	2	29522				I Ab	52.9	39.6	6.5	7.6	チャート			第184図	3
第191図	20	I	D'-24-3	2	14706	24住	諸磯b	中	ⅡAb	34.5	28.6	7.5	5.4	チャート				
第191図	21	I	E'-30-3	1	16920	25住	井戸尻	中	ⅡAb	47.2	31.5	7.6	9.1	チャート				
第191図	22	I	C'-25-2	1					ⅢBb	64.0	49.0	12.0	30.6	チャート			第190図	2
第191図	23	I	A'-31-2	1	629				I Aa	(41.5)	39.0	9.3	9.2	下呂石			第183図	3
第191図	24	I	J'-31-2	2	27885				I Ab	(43.3)	42.0	11.3	16.8	下呂石			第184図	2
第192図	1	I	B-29-3	1		4住	藤内	上	I Aa	37.5	28.6	6.9	6.0	赤色・赤緑色チャート				
第192図	2	I	I'-28-3	1	31446	53住	藤内	上	I Aa	(33.0)	27.9	7.5	5.2	赤色・赤緑色チャート				
第192図	3	I	G'-31 34住		22353	34住	五領ヶ台	中	I Ba	26.5	22.5	5.8	2.8	赤色・赤緑色チャート				
第192図	4	I	A'-23-4		9313	11住	諸磯b	上	ⅡAa	36.5	27.7	6.5	5.2	赤色・赤緑色チャート			第188図	3
第192図	5	I	K'-28-4	2	32603	49住	藤内	上	ⅡAa	38.9	35.0	8.0	10.4	赤色・赤緑色チャート			第188図	6
第192図	6	I	D'-27-3	1	13200	27住	諸磯b	中	ⅡBa	(43.0)	36.0	7.5	9.6	赤色・赤緑色チャート			第189図	3
第192図	7	I	A'-26-1	2	2440	6住	五領ヶ台	中	ⅡBa	40.5	30.1	7.0	6.4	赤色・赤緑色チャート			第189図	2
第192図	8	I	A'-32-1	3		10住	藤内	中	ⅡBa	(45.5)	32.2	4.8	7.4	赤色・赤緑色チャート				
第192図	9	I	B'-31-3 31住			31住	諸磯b	中	ⅡBb	(36.0)	29.7	7.5	8.4	赤色・赤緑色チャート				
第192図	10	I	I'-29-1	1	26937				I Aa	39.0	31.5	7.5	5.9	白色頁岩			第183図	2
第192図	11	I	C'-25 ホ土坑		14668	土坑	五領ヶ台	土坑	I Bb	(41.7)	32.9	4.9	6.7	白色頁岩				
第192図	12	I	A-26-3 ハ土坑	4		土坑		土坑	ⅡBa	(49.3)	28.1	7.4	8.2	白色頁岩				
第192図	13	I	J'-29 5住ベルト	2		5住	藤内	上	ⅡBa	50.2	28.6	9.0	9.3	白色頁岩				
第192図	14	I	A'-24-3	1		11住	諸磯b	上	ⅡBb	52.2	27.0	9.0	9.5	白色頁岩			第189図	5
第192図	15	I	A-25-2	1	5618				ⅡBb	18.0	18.5	5.1	2.0	白色頁岩			第189図	4
第192図	16	I	E'-29-2	1	13513	16住	猪沢	上	I Aa	27.8	30.3	8.5	4.9	珪質頁岩				
第192図	17	I	E'-29-1	1	13816	16住	猪沢	上	I Bb	73.9	34.0	9.7	19.3	珪質頁岩				
第192図	18	I	K'-28-4	2	32604	49住	藤内	上	ⅡBb	67.5	40.5	7.6	24.4	珪質頁岩			第190図	1
第192図	19	I	K'-32 42住		29020	42住	井戸尻	中	ⅢBa	43.0	42.0	7.6	12.0	珪質頁岩				



I区の打製石斧

図番号	国内番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	時期	帰属層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材
第201図	1	A'-24-3	2	7728	11住	諸磯b	上	12	5.7	2.4	144	泥岩ホルンフェルス
第201図	2	B'-24-2	1	7478	11住	諸磯b	上	9.5	4.8	1	67	泥岩ホルンフェルス
第201図	3	A'-24-4	1	6227	11住	諸磯b	上	12.2	5.1	1.7	96	粘板岩
第201図	4	L'-29 46住		33769	46住	五領ヶ台	中	12.1	5.2	1.8	142	泥岩ホルンフェルス
第201図	5	L'-29-1 46住		32775	46住	五領ヶ台	中	10.1	4.2	1.7	98	緑灰色粘板岩
第201図	6	L'-29-1	3	31783	46住	五領ヶ台	上	12	4.1	1.4	91	黄灰色粘板岩
第202図	1	D'-29-4 16住	1	17113	16住	狹沢	中	13.7	5	1.7	139	灰色粘板岩
第202図	2	D'-29 16住		13555	16住	狹沢	中	10.7	5.9	1.6	142	結晶片岩
第202図	3	D'-29-4 I	2	11015	16住	狹沢	上	11.7	5.2	1.5	105	白灰色砂岩
第202図	4	F'-30 32住		21396	32住	新道	中	14	6.4	1.5	150	泥岩ホルンフェルス
第202図	5	F'-30 32住		22278	32住	新道	中	10.1	5.3	2.3	85	泥岩ホルンフェルス
第202図	6	F'-30-3 32住		21611	32住	新道	中	13.5	5.5	2.1	213	白灰色砂岩
第203図	1	L'-28-1	1	29154	49住	藤内	上	12.8	5.3	1.5	136	灰色砂岩
第203図	2	L'-28-1	1	29152	49住	藤内	上	9.3	5.5	1.8	110	灰色砂岩
第203図	3	K'-28 49住		33429	49住	藤内	中	10.5	5.9	2.4	150	灰色砂岩
第203図	4	A'-31-4	2	5424	3住	井戸尻	上	12.7	5.2	2	156	黒灰色砂岩
第203図	5	B'-31-2	3	3663	3住	井戸尻	上	10	4.3	1	53	灰色粘板岩
第203図	6	A'-31-4	2	5426	3住	井戸尻	上	11.2	5.9	1.5	132	白灰色砂岩
第204図	1	I'-28 53住		33827	53住	藤内	中	20.5	7	3.3	559	白灰色砂岩
第204図	2	D'-32-2	1	9218				23	7	3	440	灰色砂岩

I区の横刃形石器

図番号	国内番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	時期	帰属層	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材
第205図	1	K'-29-3 49住		32661	49住	藤内	中	I	10.3	6.8	2.7	114	白灰色砂岩
第205図	2	J'-29 51住		30909	51住	五領ヶ台	中	I	14.1	4.5	1.3	55	黒灰色粘板岩
第205図	3	J'-28 53住		33171	53住	藤内	中	II	7.0	4.8	0.8	38	黒灰色粘板岩
第205図	4	E'-26-3	3	18763	35住	藤内	上	II	8.2	6.3	1.0	89	白灰色砂岩
第206図	1	J'-28 53住		33087	53住	藤内	中	IIIa	11.0	5.3	1.2	91	灰色砂岩
第206図	2	L'-26-4		29316	50住	藤内	上	IIIa	10.8	5.6	1.1	100	灰色砂岩
第206図	3	A-31-4	2	260				IIIb	10.5	5.3	1.5	86	灰色砂岩
第206図	4	K'-28-4 49住		32595	49住	藤内	中	IIIc	8.6	7.8	2.2	148	石英斑岩

I区その他の石器

図番号	国内番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	時期	帰属層	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	石材分類
第207図	1	E'-31-4	2	14772				トトロ石器	4.7	2.0	0.8	8.5	チャート	緑灰色
第207図	2	A-30-4	3	1309	1住	五領ヶ台	上	異形石器	(4.6)	(2.6)	0.7	7.4	黒曜石	A-1
第207図	3	G'-26						石刃	5.6	2.2	0.8		安山岩	黒味強い灰色
第207図	4	A'-31-2	2	3319				楔形石器	6.3	3.4	0.7		砂岩	白灰色
第207図	5	E'-29-1	2	17059	16住	狹沢	上	挟入横刃形石器	6.8	5.3	0.7		粘板岩	黒灰色
第207図	6	J'-29-1		28211	51住	五領ヶ台	上	つまみ付横刃形石器	9.2	4.3	0.5		砂岩	黒灰色
第207図	7	L'-26-1	1	30163	50住	藤内	上	挟入横刃形石器	11.7	5.6	0.8		粘板岩	黒灰色

I区の磨製石斧

図番号	国内番号	出土区	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	帰属遺構の時期	出土層	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	備考
第208図	1	I	E'-28 20住又土坑		20436	20住	藤内	住居内土坑	I	(14.5)	4.8	4.0	490.1	緑色凝灰岩	焼け
第208図	2	I	A-32-4	4	6264	10住	藤内	中	I	(11.8)	4.9	4.2	406.7	緑色凝灰岩	
第208図	3	I	A'-31-3 3住		5305	3住	井戸尻	周溝上層	I	14.5	4.2	2.7	246.3	緑色凝灰岩	
第208図	4	I	E'-32-1 12住		11672	12住	新道	中	I	9.3	3.6	2.0	111.4	砂質凝灰岩	
第209図	1	I	F'-30-2		20617	38住	井戸尻	上	I	16.7	3.3	2.4	230.1	緑色凝灰岩	黒色付着物
第209図	2	I	F'-27-3	1	20252				II	13.9	6.4	3.1	333.4	緑色凝灰岩	
第209図	3	I	B'-30-1	1	1617	3住	井戸尻	上	II	12.0	5.1	2.7	229.5	緑色凝灰岩	一部焼
第210図	1	I	G'-30 32住		23134	32住	新道	中	III	16.8	5.3	3.7	449.0	砂質凝灰岩	
第210図	2	I	E'-31 12住		12269	12住	新道	中	IV	11.1	2.4	1.5	55.4	凝灰岩	焼け・黒色付着物
第210図	3	I	E'-31 12住		12455	12住	新道	中	IV	12.1	4.4	2.1	151.4	凝灰岩	焼け・黒色付着物
第211図	1	I	D'-27-2	1	15967	21住	曾利II	中	V	(10.9)	7.6	2.9	356.1	蛇紋岩	焼け
第211図	2	I	C'-31-1	1	1338				V	(8.2)	4.7	1.6	97.8	緑色凝灰岩	焼け
第211図	3	I	G'-30-2	3	21829				V	8.1	2.8	1.3	45.8	蛇紋岩	
第211図	4	I	I'-33-2	1	23333				V	4.1	1.1	0.5	4.1	緑色粘板岩	
第211図	5	I	L'-32-1	1	27765	42住	井戸尻	上	V	4.6	2.9	0.9	21.4	白色碧玉	
第211図	6	I	K'-30-1	2	26597				V	3.6	2.1	0.8	12.0	白色碧玉	
第211図	7	I	B'-31-2	3~4	19771	3住	井戸尻	中	VI	(6.4)	2.8	0.8	25.6	ピッチストーン	濃緑色
第212図	1	I	E'-29-2 16住		15669	16住	狹沢	中	VII	6.5	2.9	1.0	28.6	緑色凝灰岩	
第212図	2	I	C'-31		2867				VIII	14.5	5.5	3.7	473.2	緑色凝灰岩	
第212図	3	I	K'-31-2	1	27019				VIII	(10.1)	5.9	4.4	470.0	不明変成岩	

I区の石鉢

第212図	4	I	K'-31-2	2	25926				石鉢	(7.7)	(5.6)	2.3	77.9	軟質凝灰岩	内面黒色。39.5gの底部破片あり
-------	---	---	---------	---	-------	--	--	--	----	-------	-------	-----	------	-------	-------------------

## I区の礫器

図番号	図内 番号	取上地点	層位	取上 番号	帰属 遺構	時期	帰属 層	形態	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
第213図	1	B'-27-1	1	10914				両刃	I	9.8	7.0	3.7	439	安山岩	
第213図	2	H'-31-4	1	26986				両刃	I	12.8	8.5	4.5	748	安山岩	
第213図	3	B'-25-1	1	9260				両刃	I	20.0	12.5	5.4	1737	安山岩	
第213図	4	A'-24-3 11住	3	11605	11住	諸磯b	上	両刃	I	17.2	9.7	5.7	1100	安山岩	
第214図	1	C'-29 ホ土		12475	土坑	五領ヶ台		両刃	I	10.7	8.2	3.2	480	安山岩	
第214図	2	H'-30 39住		26186	39住	井戸尻	中	両刃	I	10.5	10.0	3.5	551	泥岩ホルンフェルス	
第214図	3	B'-27-2	1	10904				両刃	I	14.5	8.8	4.2	1228	砂岩	稜ズリ石
第214図	4	B'-28-4	1	11265	14住	諸磯b	上	両刃	C-1	7.3	4.5	1.5	71	黒灰色砂岩	
第215図	1	B'-28-2	2	10061				片刃	I	18.0	18.0	5.7	2338	安山岩	
第215図	2	G'-27-3	1	32311				片刃	I	8.0	8.0	3.0	250	安山岩	
第215図	3	H'-30-3	1	26335				片刃	I	13.5	9.2	6.0	1074	安山岩	
第215図	4	A'-31-1		7497				片刃	I	14.2	12.0	5.7	1100	花崗岩	石核か
第216図	1	D'-30-1	3	3962				両刃	A-1	9.8	8.0	2.8	228	安山岩	
第216図	2	J'-30-2		28147				両刃	A-1	8.1	7.1	1.5	95	安山岩	
第216図	3	E'-29-2	3	14458	16住	狹沢	上	両刃	A-1	5.8	5.0	1.5	82	安山岩	
第216図	4	B'-31-2	3	2253	3住	井戸尻	上	両刃	A-1	9.8	6.6	1.9	218	安山岩	
第216図	5	B'-24-3	1	8417				両刃	A-1	6.0	8.7	1.0	91	安山岩	
第216図	6	H'-30-1	2	25716	39住	井戸尻	上	両刃	A-1	8.0	6.7	2.4	178	安山岩	
第216図	7	F'-29 32住		22134	32住	新道	中	片刃	A-1	8.0	7.9	3.2	197	安山岩	
第216図	8	I'-31-3		25026				両刃	A-1	9.8	8.3	2.0	239	安山岩	
第216図	9	K'-29-3 49住		32653	49住	藤内	中	両刃	A-1	7.6	6.8	1.8	130	安山岩	複刃
第216図	10	H'-32 イ土		101	土坑	藤内		両刃	A-1	7.9	6.2	1.8	112	安山岩	鏡面スリ面付
第216図	11	E'-26 35住		21449	35住	藤内	中	両刃	A-1	9.8	7.4	2.6	188	安山岩	
第216図	12	C'-24-3	3	16765				片刃	A-1	9.3	6.0	2.3	149	安山岩	
第217図	1	B'-31-3	3	4751	7住	藤内	上	片刃	B-2	6.1	5.8	2.3	116	安山岩	
第217図	2	C'-24-2 23住	2	16420	23住	諸磯b	上	片刃	B-2	9.5	6.8	2.9	212	安山岩	
第217図	3	G'-28-2		24308	33住	藤内	上	片刃	B-2	8.0	7.9	2.4	261	安山岩	
第217図	4	A'-32-1	1	7900	10住	藤内	上	片刃	D	7.2	5.9	2.1	141	安山岩	鉄平石
第217図	5	B'-31-3 2配		2369	2配	曾利		片刃	D	10.0	6.7	2.0	266	安山岩	鉄平石
第217図	6	G'-27 33住		24793	33住	藤内	上	線状敲打と剥離痕	H-1a	11.1	8.0	3.2	431	安山岩	
第217図	7	A'-25-3	1	6792				線状敲打と剥離痕	H-1a	6.0	5.7	2.0	116	安山岩	
第217図	8	G'-29 32住		23440	32住	新道	中	礫片素材両刃	C-2	11.3	8.5	2.2	194	安山岩	
第217図	9	D'-31-2	5	4000	5住	藤内	上	礫片素材両刃	C-2	7.1	5.8	2.8	149	安山岩	
第217図	10	G'-28 33住		24371	33住	藤内	中	礫片素材片刃	C-1	8.6	6.2	1.8	139	安山岩	
第217図	11	D'-29-4 16住	1	17107	16住	狹沢	中	礫片素材片刃	C-1	7.5	7.3	2.3	131	安山岩	
第217図	12	D'-31-3	6	3645	5住	藤内	中	板状礫素材両刃	E	8.2	6.4	2.3	120	安山岩	鉄平石
第217図	13	D'-31-3 5住		12357	5住	藤内	中	板状礫素材両刃	E	8.3	5.4	2.2	150	安山岩	鉄平石

## I区のタタキ石

第218図	1	B'-30-4	1	1238					タタキA	8.5	4.0	2.8	158	砂岩	
第218図	2	D'-27 18住		15341	18住	諸磯b	中		タタキA	11.2	9.8	5.8	734	安山岩	
第218図	3	H'-32-1	1	23788				敲打痕ある礫器	I	19.2	9.0	3.0	700	安山岩	
第218図	4	J'-26 56住		34177	56住	藤内	中	敲打痕ある礫器	I	15.6	15.0	4.1	930	安山岩	
第218図	5	F'-27 イ土		19982	土坑			敲打痕ある礫器	I	15.6	11.0	5.5	1291	安山岩	
第218図	6	M'-32-1	1	27276				敲打痕ある礫器	I	14.1	9.0	3.5	642	安山岩	

## I区のクボミ石

図番号	図内番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	時期	帰属層	形態	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考	
第219図	1	A-29-3		3	1480	2住	諸磯b	中	クボミ石	クボミA	9.5	6.3	4.6	327	安山岩	
第219図	2	L'-29-3		1	27164	45住	猪沢	上	クボミ石	クボミA	11.5	7.0	3.1	340	安山岩	黒色付着物
第219図	3	F'-30-2		1	20364	25住	井戸尻	中	クボミ石	クボミA	8.6	6.0	5.7	374	安山岩	
第219図	4	K'-32-3		1	27967	42住	井戸尻	上	クボミ石	クボミA	12.0	6.7	3.0	394	安山岩	
第219図	5	M'-29-2 45住			31901	45住	猪沢	中	クボミ石	クボミA	10.5	8.2	5.5	700	安山岩	
第219図	6	G'-26-4		1	32075				クボミ石	クボミA	8.5	7.5	4.7	447	安山岩	凹痕3類
第219図	7	D'-28 20住			19267	20住	藤内	中	クボミ石	クボミB	8.5	7.0	5.0	241	安山岩	2面クボミ
第219図	8	L'-23 イ土			34926	土坑			クボミ石	クボミB	11.0	6.0	5.0	467	安山岩	4面クボミ
第219図	9	A'-24-4 イ土			10343				クボミ石	クボミB	8.5	8.2	5.0	289	安山岩	2面クボミ
第220図	1	F'-27-1		1	18718	28住	諸磯b	中	クボミ石	クボミB	10.0	6.5	3.2	262	安山岩	凹痕3類
第220図	2	A'-24-3		1	5871				クボミ石	クボミB	10.0	8.7	5.0	363	安山岩	凹痕3類・黒色付着物
第220図	3	E'-30-2		1	15106				クボミ石	クボミC	14.8	7.8	9.6	1000	安山岩	
第220図	4	I'-28-3 53住			32049	53住	藤内	中	クボミ石	クボミH	9.5	6.4	3.3	309	安山岩	片面曲面スリ・スリ面クボミなし
第220図	5	D'-31-1		6	4076	5住	藤内	中	クボミ石	クボミH	9.0	6.3	3.0	296	安山岩	片面曲面スリ・スリ面クボミあり
第220図	6	K'-28 49住			33654	49住	藤内	中	クボミ石	クボミH	9.7	7.0	3.9	286	安山岩	凹痕3類・片面曲面スリ・スリ面クボミあり
第220図	7	B'-29-4		1	13477				クボミ石	クボミH	8.9	6.3	3.6	186	安山岩	凹痕3類・片面曲面スリ・スリ面クボミあり
第221図	1	G'-32-2			19222				クボミ石	クボミL	10.7	5.5	4.8	363	安山岩	角礫素材
第221図	2	L'-30-3		1	30493	47住	五領ヶ台	中	クボミ石	クボミL	9.0	6.0	4.5	422	安山岩	角礫素材
第221図	3	B'-29-3		1	7464				クボミ石	クボミL	11.2	6.5	3.5	413	安山岩	断面四角
第221図	4	C'-31 4号配石			3031	配石	曾利		クボミ石	クボミF	12.6	6.6	7.0	840	安山岩	
第221図	5	C'-24-2 ニ土坑			17285	土坑	諸磯b		クボミ石	クボミF	10.0	9.0	5.0	719	安山岩	
第221図	6	K'-32 42住			29018	42住	井戸尻	中	クボミ石	クボミF	9.8	7.2	3.0	388	安山岩	
第221図	7	M'-29-4		1	24149				クボミ石	クボミF	11.5	8.0	5.3	603	砂岩	
第222図	1	D'-26-2		1	15980	21住	曾利	中	クボミ石	クボミN	14.2	8.0	7.0	900	安山岩	
第222図	2	D'-28-4		1	15284	31住	諸磯b	中	クボミ石	クボミN	11.5	6.0	6.0	677	安山岩	
第222図	3	A'-29-3			2779				クボミ石	クボミN	11.5	5.6	5.8	608	安山岩	断面四角
第222図	4	M'-29 45住			30502	45住	猪沢	中	クボミ石	クボミN	13.6	7.0	3.6	543	安山岩	断面四角
第222図	5	D'-23 20住			19272	20住	藤内	中	クボミ石	クボミN	9.7	9.0	6.8	836	安山岩	円形
第222図	6	B'-31-2 3住ピット17			6554	3住	井戸尻	ピット内	クボミ石	クボミG	9.8	5.4	3.7	367	安山岩	
第222図	7	D'-29 16住			13609	16住	猪沢	中	クボミ石	クボミG	12.7	6.8	3.7	453	砂岩	
第223図	1	B'-26-3		1	4902				クボミ石	クボミK	11.6	7.4	4.7	670	砂岩	
第223図	2	D'-25 22住			16527	22住	諸磯b	中	クボミ石	クボミK	12.5	6.5	5.0	755	安山岩	断面四角
第223図	3	J'-31-1		1	24605				クボミ石	クボミK	10.5	6.5	4.5	584	安山岩	断面四角
第223図	4	H'-28-1		1	24985				クボミ石	クボミK	9.5	7.5	4.1	542	安山岩	片面曲面スリ・スリ面弱い敲打
第223図	5	L'-28-1 口土			31410	土坑			クボミ石	クボミK	9.0	7.0	3.3	428	安山岩	片面曲面スリ
第224図	1	B'-26-1		2	10414				クボミ石	クボミH	9.2	7.3	3.8	310	安山岩	凹痕4類
第224図	2	D'-27 リ土			17513	土坑	諸磯b		クボミ石	クボミK	10.6	7.0	4.0	520	砂岩	凹痕4類
第224図	3	I'-26-1		1	32154				クボミ石	クボミL	7.5	6.5	5.9	418	安山岩	
第224図	4	C'-24-1		1	13293	23住	諸磯b	上	スリ石	スリ石Hb	9.6	6.8	6.4	620	安山岩	
第224図	5	H'-26-1		1	32115				スリ石	スリ石I	9.5	6.2	4.0	319	石英斑岩	
第224図	6	L'-26-1 55住			32336	55住	五領ヶ台	中	スリ石	稜ズリC	9.0	6.0	3.8	341	安山岩	

## I区のスリ石

図番号	図内番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	時期	帰属層	形態	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
第225図	1	M'-29-1 47住			31998	47住	台	中	スリ石B	11.7	6.0	5.2	600	安山岩	
第225図	2	D'-27-2 18住			16294	18住	諸磯b	中	スリ石B	13.4	6.5	4.2	707	安山岩	
第225図	3	M'-27-3			32184				擦F	8.5	4.8	3.4	536	安山岩	
第225図	4	C'-30-4 イ土			2133	土坑	台		擦F	14.8	12.2	11.0	2180	安山岩	
第225図	5	K'-28-2			30116	49住	藤内	上	擦F	8.5	6.8	4.6	210	安山岩	
第225図	6	H'-33-4 イ土坑			24963	土坑			スリ石	9.5	8.9	3.3	290	花崗岩	剥片利用
第225図	7	E'-29-2 16住		1	15689	16住	猪沢	上	スリ石	7.4	5.5	2.1	85	花崗岩	剥片利用
第225図	8	M'-33-1		1	26633				スリ石	12.3	11.6	7.5	1228	花崗岩	割礫
第226図	1	K'-32-4		1	27144	42住	井戸尻	上	稜ズリA	17.0	10.2	7.5	1550	安山岩	
第226図	2	H'-32 ニ土			25535	土坑			稜ズリA	13.5	7.5	8.3	1300	安山岩	
第226図	3	K'-26 56住			34163	56住	藤内	中	稜ズリB	13.6	7.5	6.0	1056	安山岩	
第226図	4	K'-30			27571				スリ石H	14.3	9.0	5.9	1290	安山岩	
第226図	5	D'-29-3		2	11794	16住	猪沢	上	稜ズリA	10.5	7.8	4.0	535	石英斑岩	
第226図	6	B'-24 11住ピット8			15532	11住		ピット内	稜ズリA	6.1	6.0	5.5	325	安山岩	

## I区の石皿・台石・石棒

図番号	図内番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	時期	帰属層	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
第227図	1	A'-32-イ土		7758	土坑	新道		石皿	43.6	30.0	11.4	19000	安山岩	全体敲打・上面整形
		B'-28-1	3	10470	13住	曾利	中							
第227図	2	J'-26 56住		34183	56住	藤内	中	石皿	20.0	12.2	12.0	4200	安山岩	全体敲打・文様あり
第228図	1	C'-31 44住		30398	44住	猪沢	中	石皿	30.0	27.0	11.8	11200	安山岩	全体敲打
第228図	2	M'-24 59住		34929	59住	五領ヶ台	中	石皿	35.0	25.0	10.0	11200	安山岩	全体敲打
第229図	1	B'-31-2 2号配石		2352	配石	曾利		石皿	26.0	24.5	7.7	6000	安山岩	全体敲打
第229図	2	I'-27-3	1	32072				石皿	33.0	32.4	10.4	15800	安山岩	一部自然面
第230図	1	K'-30-3 又土		32709	土坑			石皿	30.0	26.8	9.8	10600	安山岩	上面敲打
第230図	2	E'-32 イ土		20411				石皿	33.0	28.3	10.0	12500	安山岩	製作途上
第231図	1	I'-31-3	2	26484				石皿	20.0	16.5	7.8	2600	安山岩	全体敲打
第231図	2	F'-27-1 子土坑		27946				小形石皿	9.7	8.2	2.5	214	安山岩	
第231図	3	D'-27-4-2	2	11628	27住	諸磯b	中	礫石皿	39.0	26.0	10.0	14000	安山岩	1面スリ
第232図	1	D'-32-1	3	11430				台石	35.3	18.4	11.6	1130	安山岩	2面クボミ
第232図	2	G'-33-1 土土坑		21056				台石	27.5	24.2	11.0	10400	安山岩	
第232図	3	K'-28-4 49住		33661	49住	藤内	中	石棒	16.2	13.8	14.5	5380	デイスait	
第232図	4	D'-27-1	1	10788				石棒	24.0	16.2	15.2	7400	デイスait	

## 石製装飾品

図番号	図内番号	出土区	資料番号	取上地点	層位	取上番号	帰属遺構	帰属遺の時期	出土層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
第233図	1	A	11	2住		264	2住	諸磯		22.6	27.0	6.6	5.9	状耳飾
第233図	2	B	5	5住		283	5住	諸磯b		14.2	14.0	6.6	1.4	丸玉
第233図	3	C	4	93住			93住	諸磯		24.6	(21.3)	10.1	5.4	状耳飾
第233図	4	C	14	41住		S9	41住	諸磯		41.3	(17.2)	7.4	13.4	状耳飾
第233図	5	C	16	75住			75住	猪沢		(60.4)	19.8	9.3	13.7	土製腕輪
第233図	6	D	10	16土			16土	諸磯b		53.8	(26.3)	5.6	8.4	状耳飾り
第233図	7	C	21	14土			14土	五領ヶ台II		33.5	67.3	5.5	13.9	耳飾り(ペンダント転用)
第234図	1	C	18	56土			56土	前末		59.0	(26.4)	6.9	19.0	状耳飾
第234図	2	C	12	C'39G				諸磯		(38.6)	(23.9)	8.6	10.3	状耳飾
第234図	3	D	2	1住		S3	1住	諸磯b		(16.2)	(12.1)	4.3	0.7	丸玉
第234図	4	A	3	D'3G		S15				(15.9)	(13.3)	6.1	2.4	状耳飾
第234図	5	E	13	29土		S1	29土	諸磯b		31.9	(15.4)	1.7	7.3	状耳飾
第234図	6	B	15	6住		S60	6住	諸磯a		24.2	15.0	(15.0)	4.8	管玉
第234図	7	C	9	14住		S1	14住	井戸尻Ⅲ		27.8	16.9	16.9	7.8	管玉
第234図	8	C	1	74住		S2	74住	猪沢		47.4	15.4	(7.2)	8.1	管玉
第234図	9	A	19	215土		S1	215土	曾利		49.8	25.6	14.7	41.3	垂飾(ヒスイ製)
第235図	1	C	7	7住		Pit10	7住	曾利V		27.1	16.7	5.7	2.3	垂飾(未製品)
第235図	2	C	8	19住		S9	19住	井戸尻Ⅲ		31.2	(40.9)	8.1	10.5	絞歯状垂飾
第235図	3	A	6			No.51				23.9	(13.6)	9.6	4.8	垂飾
第235図	4	C	20	99住			99住	井戸尻Ⅲ		63.0	49.9	41.8	210.1	原石(ヒスイ)
第235図	5	B	17	9住			9住	曾利Ⅲ		69.3	36.2	17.1	99.2	翡翠製大珠(未製品)
第235図	6	C	9	1住			1住	井戸尻		58.2	12.4	12.3	12.1	石製品
第236図	1	I		E'-31-4	3					40.0	13.5	2.8	3.0	「の」字形石製品
第236図	2	I		D'-29-4	1	10630	16住	猪沢	上	35.6	(25.0)	5.5	8.3	状耳飾
第236図	3	I		L'-32-3						32.5	13.0	(5.8)	3.4	管玉
第236図	4	I		B'-23-1	4		11住	諸磯b	上	21.0	(16.6)	(6.3)	2.9	管玉未製欠損品
第236図	5	I		E'-31-4 12住	4	15023	12住	新道	上	47.8	38.0	8.1	15.1	安山岩穿孔礫
第236図	6	I		A'-31-2	2	3893				26.2	17.0	13.3	2.4	コハク玉

## 本文編掲載石製装飾品

第14 図	1	I		B'-30		141	15住	諸磯b		40.6	(22.3)	5.2	7.3	状耳飾再加工
第14 図	2	I		A'-29-3	1	502	15住	諸磯b	上	40.8	22.4	4.8	6.4	状耳飾再加工
第14 図	3	I		K'-30 子土坑		29971				46.6	16.3	3.8	3.6	状耳飾再加工
第14 図	4	I		H'-27-4	1	26242	51住	五領ヶ台	上	24.8	22.4	7.3	5.2	状耳飾再加工
第14 図	5	I		B'-24-4	1	7861	23住	諸磯b	上	25.3	12.1	8.3	3.7	状耳飾再加工
第14 図	6	I		C'-24-2	1		23住	諸磯b	上	21.1	22.2	12.0	8.5	玉
第14 図	7	I		B'-27-1	2	9281				14.4	13.2	6.6	2.2	玉
第14 図	8	I		H'-32-4	1	23834				11.9	11.5	7.0	1.3	玉
第14 図	9	I		A'-24-3	2	7670	11住	諸磯b	上	9.5	9.5	10.4	1.3	玉

弥生-古墳時代出土土器類群表(1)

図番号	出土地点	注記番号	種別	器形	量量 (cm) [推定値] (貯存地)		調整		胎土	焼成	色調	残存率	備考	時期
					口径	器高	外径	内径						
101 1	C区103号住居	C区K-1住	弥生土器	壺	条痕		条痕→ナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	灰黄褐色(10YR5/2)	頸部破片		中期初頭	
101 2	C区103号住居	C区K-1住	弥生土器	甕	条痕		ヘラナデ	白・赤色粘土、石英、角閃石	良	にぶい黄褐色(10YR7/4)	胴下半部破片		中期初頭	
101 3	C区103号住居	C区K-1住	弥生土器	壺	条痕		ヘラナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	灰黄褐色(10YR5/2)	胴下半部破片		中期初頭	
101 4	C区103号住居	C区K-1住	弥生土器	甕	条痕		ヘラナデ	白・赤色粘土、石英、角閃石	良	にぶい黄褐色(10YR7/3)	胴下半部破片		中期初頭	
101 5	C区103号住居	C区K-1住	弥生土器	壺	条痕		ヘラナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	明黄褐色(10YR6/6)	胴下半部破片		中期初頭	
101 6	C区17号住居	C区17住P-19,20,22	土師器	壺		(15.0)	胴部上半ハケ→ヘラミガキ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	やや良	浅黄褐色(10YR8/4)	胴上半部1/4のみ	内面煤付着	前期初頭	
101 7	C区17号住居	C区17住P-24	土師器	小型広口壺		8.3	口縁部指頭圧痕、ハケ→ナデ	白・赤色粘土、石英、角閃石	やや良	橙(7.5YR7/6)	完形	外面接合部粘土塊貼り付け	前期初頭	
101 8	C区17号住居	C区17住炉	土師器	甕		(9.8)	口縁部ハケ→ナデ、頸部～胴部上半ハケ→ナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄褐色(10YR7/3)	口縁部～胴上半部破片		前期初頭	
101 9	C区17号住居	C区17住P-10	土師器	S字甕		(19.0)	口縁部ヨコナデ、胴部上半ハケ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	橙(7.5YR7/6)	口縁部～胴上半部破片	外面煤付着	前期初頭	
101 10	C区17号住居	C区17住P-13	土師器	甕		(5.4)	脚部ハケ→ナデ、脚部ハケ→ナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄褐色(7.5YR5/4)	脚部のみ		前期初頭	
101 11	C区17号住居	C区17住P-1	土師器	器台		10.0	器受部ナデ、脚部ハケ→ナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄褐色(10YR6/4)	器受部～脚部上半のみ	脚部3分の穿孔孔	前期初頭	
101 12	C区17号住居	C区17住P-18	土師器	甕		(4.8)	脚部ハケ→ナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄褐色(10YR6/4)	脚部1/8のみ	外面煤付着	前期初頭	
101 13	C区17号住居	C区17住P-7	土師器	甕		13.9	ハケ→ナデ、下ハケ→ナデ、口縁部指頭圧痕→ヨコナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	橙(7.5YR7/6)	完形		前期初頭	
101 14	C区17号住居	C区17住P-15	土師器	鉢		13.0	ハケ→口縁部ヨコナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄褐色(10YR7/4)	完形		前期初頭	
101 15	C区17号住居	C区17住P-5	土師器	坏		(11.3)	胴部ヘラミガキ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	橙(5YR6/6)	全体1/3欠損		前期初頭	
101 16	C区33号住居	C区33住P-4,5,6	土師器	壺		(10.6)	胴部下半ハケ→ナデ、胴部下半ハケ→ナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	明黄褐色(10YR6/6)	胴部下半部、底部のみ	二次焼成による黒斑	前期初頭	
101 17	C区33号住居	C区33住	土師器	小型壺		(6.5)	胴部下半ハケ→ナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄褐色(10YR7/4)	底部～胴部下半1/2のみ	二次焼成による黒斑	前期初頭	
101 18	C区103号住居	C区K-1住P-17	土師器	S字甕		(11.8)	胴部上半ハケ、口縁部ヨコナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	黒褐色(10YR3/1)	口縁部～胴上半部破片	外面頸部煤部	前期初頭	
101 19	C区33号住居	C区33住	土師器	鉢		12.6	ハケ→ヘラミガキ、底部ヘラミガキ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄褐色(10YR6/3)	口縁部一部欠損		前期初頭	
101 20	C区103号住居	C区K-1住P-11,12	土師器	小型壺		(5.7)	胴部上半ヘラミガキ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	黒褐色(10YR3/1)	胴部上半3/4のみ	二次焼成による黒斑	前期初頭	
101 21	C区103号住居	C区K-1住P-8	土師器	高坏		(12.7)	坏部ヘラミガキ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	橙(5YR6/8)	坏部破片		前期初頭	
101 22	C区103号住居	C区K-1住P-10,13	土師器	高坏		(9.8)	口縁部ヨコナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄褐色(7.5YR5/4)	坏部1/2のみ		前期初頭	
101 23	C区103号住居	C区K-1住P-31	土師器	高坏		(5.7)	坏部下半ヘラミガキ、脚部ミガキ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	明褐色(7.5YR3/6)	坏部～脚部1/3のみ	脚部の穿孔孔	前期初頭	
101 24	C区103号住居	C区K-1住P-20	土師器	高坏		(4.3)	胴部ヘラミガキ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	明赤褐色(5YR5/8)	脚部上半破片	脚部の穿孔孔	前期初頭	
101 25	C区103号住居	C区K-1住P-16	土師器	高坏		(5.7)	脚部ヘラミガキ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	橙(5YR6/8)	脚部1/4のみ	脚部の穿孔孔	前期初頭	
101 26	C区103号住居	C区K-1住P-24,25	土師器	高坏		(4.3)	脚部ヘラミガキ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	橙(5YR6/8)	脚部下半破片	脚部の穿孔孔	前期初頭	
101 27	C区103号住居	C区K-1住P-1	土師器	S字甕		(17.9)	胴部下半ハケ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	黒褐色(10YR3/2)	脚部下半破片	外面煤付着	前期初頭	
101 28	C区104号住居	C区K-2住P-2	土師器	小型壺		(9.9)	胴部ハケ→ナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄褐色(10YR6/4)	脚部破片		前期初頭	
101 29	C区104号住居	C区K-2住P-1	土師器	高坏		(16.0)	坏部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	橙(7.5YR6/6)	坏部破片		前期初頭	
101 30	C区105号住居	C区K-3住	土師器	S字甕		(7.3)	脚部ナデ→脚部上半ハケ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄褐色(10YR7/4)	脚部1/2のみ		前期初頭	
101 31	C区105号住居	C区K-3住	土師器	S字甕		(6.1)	脚部ナデ→脚部上半ハケ	白・赤色粘土、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄褐色(7.5YR5/4)	脚部1/3のみ		前期初頭	

弥生・古墳時代出土土器観察表(2)

図番号	出土地点	注記番号	種別	器形	法量(cm)	口径	器高	底径	調整	内面	胎土	焼成	色調	残存率	備考	時期
101 32	C区106号住居	C区K-3住	土師器	S字壺	(11.4)	(7.6)	(11.4)		脚部ヘラケズリ、指頭圧痕、脚部折り返し	白色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	橙(7.5YR6/6)	脚部1/2のみ		前期初頭	
101 33	C区106号住居	C区K-3住	土師器	S字壺	9.8	(6.5)			脚部ヘラケズリ、指頭圧痕、脚部折り返し	白色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	橙(7.5YR6/6)	脚部のみ	外面煤付着	前期初頭	
102 34	C区106号住居	C区K-4住	土師器	壺	(4.1)	(4.1)			脚部上半ハケナーナ	白・赤色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	橙(7.5YR7/6)	脚部上半破片		前期初頭	
102 35	C区106号住居	C区K-4住P-22	土師器	鉢	(4.7)	(4.7)			口縁部ヘラミガキ	白・赤色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	明赤褐(5YR5/6)	口縁部破片		前期初頭	
102 36	C区106号住居	C区K-4住	土師器	高坏	(3.7)	(3.7)	(17.0)		脚部下半ヘラミガキ	白・赤色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	橙(7.5YR6/6)	脚部破片		前期初頭	
102 37	C区106号住居	C区K-4住	土師器	鉢	(8.6)	(8.6)			ナデ、口縁部沈線巡る	白・赤色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部～脚部上半破片		前期初頭 (編文?)	
102 38	C区106号住居	C区K-4住P-1	土師器	S字壺	13.4	24.7	13.4		脚部ナデ、指頭圧痕、口縁部ヨコナデ、脚部ヘラケズリ、指頭圧痕、脚部折り返し	白・赤色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	橙(5YR6/6)	全体1/2のみ	外面周部下半煤付着	前期初頭	
102 39	C区106号住居	C区K-4住P-1	土師器	碗	16.8	(5.3)			脚部ヘラケズリ、指頭圧痕、脚部ヨコナデ	白色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄橙(10YR5/3)	全体1/3のみ		前期初頭	
102 40	C区106号住居	C区K-4住P-20	土師器	ミニチュア	(3.7)	(3.7)	3.0		ナデ	白・赤色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	明黄褐(10YR7/6)	底部～脚部下半1/2のみ		前期初頭	
102 41	C区106号住居	C区K-4住P-18	土師器	ミニチュア	(2.2)	(2.2)	(3.6)		ナデ	白・赤色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄橙(10YR5/3)	底部～脚部下半1/3のみ		前期初頭 (編文?)	
102 42	C区107号住居	C区K-5住P-1	土師器	高坏	(13.0)	9.7	(15.6)		坏部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ、脚部折り返し	白・赤色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	全体1/2のみ	脚部3カ所穿孔	前期初頭	
102 43	C区108号住居	C区K-6住P-37	土師器	鉢	(3.1)	(3.1)	1.8		脚部底部ヘラミガキ	白・赤色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	明赤褐(5YR5/6)	脚部下半～底部破片		前期初頭	
102 44	C区108号住居	C区K-6住P-12.30	土師器	鉢	(10.5)	6.7	2.8		不明瞭、脚部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	白・赤色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	明赤褐(5YR5/6)	口縁部～脚部一部欠損	襷染による外面割離	前期初頭	
102 45	C区108号住居	C区K-6住P-18	土師器	S字壺	(14.5)	(11.0)			脚部ナデ、指頭圧痕、口縁部ヨコナデ	白色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい橙(7.5YR6/4)	口縁部～脚部破片		前期初頭	
102 46	C区108号住居	C区K-6住P-11.12	土師器	S字壺	(13.4)	(13.4)	(8.0)		脚部下半ハケ、脚部ナデ、脚部上半ハケ	白色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	橙(7.5YR6/6)	脚部下半～脚部破片	襷染による外面割離	前期初頭	
102 47	C区108号住居	C区K-6住P-24.33	土師器	S字壺	(7.9)	(7.9)	9.2		脚部下半ハケ、脚部ナデ、脚部上半ハケ	白色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい橙(7.5YR5/4)	脚部下半～脚部破片	襷染による外面割離	前期初頭	
102 48	C区108号住居	C区K-6住	土師器	S字壺	(8.0)	(8.0)	(9.2)		脚部下半ハケ、脚部ナデ、脚部上半ハケ	白色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい橙(7.5YR5/4)	脚部下半～脚部破片	襷染による外面割離	前期初頭	
102 49	C区108号住居	C区K-6住P-15.17	土師器	S字壺	(5.7)	(5.7)	(8.0)		脚部ヘラケズリ、指頭圧痕、脚部折り返し	白色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	明赤褐(5YR5/6)	脚部のみ		前期初頭	
102 50	C区108号住居	C区K-6住	土師器	ミニチュア	(5.8)	(5.8)	3.4		脚部ヘラケズリ、底部ナデ	白・赤色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部欠損		前期初頭	
102 51	C区108号住居	C区K-6住P-1	土師器	ミニチュア	2.7	3.8	丸底		ナデ	白・赤色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	淡黄(2.5Y8/4)	完形		前期初頭	
102 52	D区2号住居	D区2住P-2	土師器	鉢	(4.1)	(4.1)	丸底		脚部ヘラミガキナーナ	白・赤色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	橙(5YR6/8)	口縁部欠損	襷染による外面割離	前期初頭	
102 53	D区2号住居	D区2住	土師器	S字壺	(13.9)	(13.9)	(3.9)		脚部上半ハケ、口縁部ヨコナデ	白色粒子、金雲母、石英	良	明赤褐(2.5YR5/6)	口縁部～脚部上半破片		前期初頭	
102 54	D区2号住居	D区2住P-1	土師器	高坏	(8.5)	(8.5)	15.3		脚部ヘラミガキ	白色粒子	良	明赤褐(2.5YR5/6)	脚部1/4のみ	蓋として転用(坏部との接合部研磨、脚部内面煤付着)、脚部3カ所穿孔	前期初頭	
102 55	D区9号住居	D区9住P-5	土師器	小型壺	(7.7)	(7.7)	4.0		脚部ハケ	白色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	にぶい黄橙(10YR6/4)	口縁部欠損		前期初頭	
102 56	D区10号住居	D区10住P-2	土師器	広口壺	(15.6)	(12.5)			口縁部、脚部ハケナーナ	白色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	明赤褐(2.5YR5/6)	口縁部～脚部下半破片		前期初頭	
102 57	D区10号住居	D区10住P-3	土師器	S字壺	(7.8)	(7.8)	9.2		脚部下半ハケ、脚部ナデ、脚部上半ハケ	白色粒子、金雲母、石英、角閃石	良	明赤褐(2.5YR5/6)	脚部、脚部下半一部	蓋底部と脚部の接合部明瞭(指頭圧痕)	前期初頭	
102 58	E区1号住居	E区1住	土師器	直口壺	(11.0)	(3.5)			口縁部ヘラミガキ	白・赤色粒子、金雲母	良	橙(5YR6/6)	口縁部破片		前期初頭	



報告書抄録	
ふりがな	さけのみばいせき (だいいちからさんじ)
書名	酒呑場遺跡 (第1～3次)
副題	酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書 (遺物編)
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター第216集
編著者名	網倉 邦夫・池谷 勝典・河西 学・小林 広和・新山 雅広・野代 和幸・保坂 和博 保坂 康夫・正木 季洋・望月 明彦
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 055-266-3016
印刷所	株式会社 ヨネヤ
発行日	2005年3月31日
所在地	山梨県北杜市長坂町長坂上条621-2 他
	25,000分の1地形図 長坂上条
	位置 東経138° 22' 4" 北緯 35° 49' 9" (世界測地系) 標高 712m
	市町村コード 19405
調査原因	酪農試験場増・改築工事
調査期間	第1次調査 1994年9月1日～1995年1月10日
	第2次調査 1995年4月14日～12月6日
	第3次調査 1996年4月15日～11月13日
調査面積	第1次調査 1,500㎡
	第2次調査 5,600㎡
	第3次調査 3,000㎡
縄文時代	
主な遺構	第1次調査 竪穴住居跡39軒、土坑650基
	第2次調査 竪穴住居跡124軒、土坑3,500基
	第3次調査 竪穴住居跡59軒、土坑1,700基
主な遺物	土器・石器コンテナ2,500箱、土器大形個体700点、小形土器、台形土器、土偶、土鈴、耳栓、杓子形土器、焼成粘土塊、棒状土製品、蓋、土製円盤、石鎌、石錐、石匙、打製石斧、横刃形石器、磨製石斧、礫器、クボミ石、スリ石、タタキ石、稜ズリ石、石皿、石棒、装飾品など
弥生時代	
主な遺物	条痕文土器片
古墳時代	
主な遺構	第2次調査 竪穴住居跡15軒、掘立柱建物跡4棟
	第3次調査 掘立柱建物跡1棟
主な遺物	S次状口縁台付甕、高坏、器台、甑、坏形土器

---

---

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第216集

## 酒呑場遺跡 (第1～3次)

—酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書—  
(遺物編—本文編)

印刷 2005年 3月25日  
発行 2005年 3月31日  
編集 山梨県埋蔵文化財センター  
発行 山梨県教育委員会  
印刷 株式会社 ヨネヤ

---

---

